

三原田城遺跡 八崎城址・八崎塚 上青梨子古墳

— 關越自動車道(新潟線)地域埋藏
文化財発掘調査報告書 第13集 —

台帳番号 検案用

普及資料課

資料整理室

1987

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋藏文化財調査事業団

三原田城遺跡正誤表

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

頁	行	誤	正
例	言	上から14行目調査担当	囃託員 反町公己(上青梨子古墳)を追加
"	上から21行目	第Ⅵ章 第1節	第Ⅳ章 第1節
"	下から5行目	茂木 允	茂木允規
"	下から4行目	田口一郎	田口一郎
42 P	下から16行目	1号墳の周堀に	1号墳の周堀に
"	下から2行目	掘り込みは垂直に	掘り込みは垂直に
45 P	上から16行目	出土器物は	出土遺物は
103 P	下から10行目	479は平縁に	478は平縁に
109 P	上から20行目	極めて特徴的	極めて特徴的
136 P	上から2行目	古墳周堀の	古墳周堀の
212 P	下から3行目	周堀は見られない	周堀は見られない
218 P	下から6行目	積極的な傍証は	積極的な傍証は
225 P	下から4行目	清野・陣場遺跡	清里・陣場遺跡
226 P	下から2行目	整作当所	製作当初
233 P	下から9行目	南側に口縁部	南側に口縁部
245 P	下から3行目	茂木 允	茂木允規

(遺物数)

三原田城	1644
八崎城址	74
八崎塚	31
上青梨子古墳	2

三原田城遺跡 八崎城址・八崎塚 上青梨子古墳

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書 第13集—

1987

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



7号住居址出土土器



67号土壙出土土器

序

関越自動車道新潟線は、首都圏と新潟を結ぶ交通の大動脈として、多くの人々に利用されています。この関越自動車道建設事業に伴って多くの埋蔵文化財を発掘調査してまいりました。現在、調査によって発見、出土した資料は貴重な国民的な遺産として、その活用を図るために、整理、報告書の刊行に向けて努力しています。

ここに報告します三原田城遺跡・八崎城址・八崎塚・上青梨子古墳は関越自動車道新潟線にかかわる遺跡として、昭和56年から58年にかけて調査を実施しました。

赤城山西麓裾部に位置する三原田城遺跡では、縄文前期の集落跡、古墳時代住居跡、城堀などが発見されました。特に縄文前期の集落跡は北関東地方では初めての発見例として貴重な遺跡として知られました。利根川左岸の崖地を利用した八崎城では新曲輪と東堀を検出し、調査例の少ない中世末の城跡の一端を明らかにしました。八崎塚は、古墳と考えられてきましたが、主体部が発見されず古墳でないことが明らかになりました。中世以降のものと考えられますが、その性格については今後の研究課題です。榛名山東麓の上青梨子古墳では、陣馬泥流による残丘を利用して造られた横穴式石室をもつ山寄せの古墳であることが明らかになりました。

これらの貴重な資料の活用を図るため、昭和60年61年の2ヵ年にわたり整理事業を進め、ここに関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第13集として刊行する運びとなりました。発掘調査から整理、刊行に至るまで、日本道路公団東京第二建設局を始めとして、関係各市町村、直接に発掘調査、整理事業を進めて頂いた方々等、多方面にわたる関係者の御指導、御協力を頂きました。ここに厚く感謝の意を表するとともに、本報告書が学界をはじめとして、多くの人々に広く活用されることを念じて序といたします。

昭和62年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 清水一郎

例 言

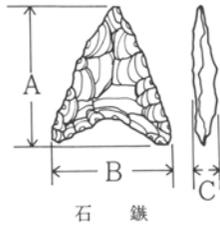
1. 本書は関越自動車道建設工事に伴い事前調査された、勢多郡赤城村大字三原田字観音前(825—1、826—3.4、827—830、834、835—1.2)に所在する三原田城遺跡および同郡北橋村大字分郷八崎に所在する八崎城址および同八崎に所在する八崎塚および前橋市池端町に所在する上青梨子古墳の発掘調査報告書である。
2. 事業主体 日本道路公団東京第二建設局
3. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
4. 調査期間 三原田城遺跡 試掘調査 昭和56年7月16日～7月18日
本調査 昭和57年2月8日～7月20日
八崎城址 昭和56年6月8日～7月13日
八崎塚 昭和56年8月27日～9月13日
上青梨子古墳 昭和56年4月22日～5月9日
5. 調査組織
事務担当 小林喜久治、沢井良之助、井上唯雄、近藤平志、平野進一、国定均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、野島のお江、吉田恵子、吉田笑子、並木綾子、今井もと子
調査担当 平野進一、真下高幸、小野和之、谷藤保彦
6. 発掘調査後の遺物、図面の整理は昭和60年度に行い、昭和61年度に編集した。
7. 本書作成の組織は以下の通りである。
事務担当 白石保三郎、梅沢重昭、井上唯雄、上原啓己、大沢秋良、平野進一、定方隆史、国定均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、野島のお江、吉田恵子、並木綾子、今井もと子、石田智子
8. 本文執筆 第Ⅰ章 第4節3、第Ⅴ章 第1節1 谷藤保彦
第Ⅵ章 第1節 平野進一
上記以外 小野和之
編集 小野和之
9. 三原田城、八崎城の古文書関係の考察(第Ⅰ章 第6節、第Ⅱ章 第5節)は山崎一氏にお願いした。
10. 本書の作成および資料整理の担当は以下の通りである。
長沼久美子、高橋美津子、桑原恵美子、高橋とし子、高橋裕美、串淵すみ江、茂木範子
遺物写真撮影 佐藤元彦
遺物保存処理 関邦一、北爪健二
11. 石材鑑定は飯島静男氏(群馬地質研究会)にお願いした。
12. 土器の展開写真は小川忠博氏による。
13. 調査、整理にあたっては以下の方々に御協力、御助言いただいた。記して感謝いたします。(敬称略)
麻生 優、新井房夫、上野佳也、渋谷昌彦、山田昌久、都丸 肇、茂木 允、山田八重子、戸田哲也、土肥 孝、先崎忠衛、石岡憲雄、原川雄二、中東耕志、田口一朗、大工原豊、新井順二、千田幸生、肥田順一
14. 出土遺物は現在群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。
15. 本遺跡を含む一連の赤城村地内の発掘調査を行っていた中、昭和57年8月1日に来襲した台風による

強風のために調査事務所の倒壊という思わぬ被害を受けた。このため一部ではあるが遺物の破壊、喪失という極めて残念な事態を生じてしまった。本遺跡をまとめるにあたり破壊を受ける前の状態を示すことができるものについては写真等でできる限り補うことに努めた。

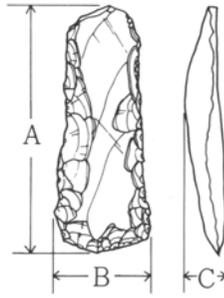
なお復旧作業にあたり援助を頂いた県文化財保護課、赤城村教育委員会、赤城村立見溜井遺跡の担当者並びに作業員の方々には深く感謝を申し上げたい。

凡 例

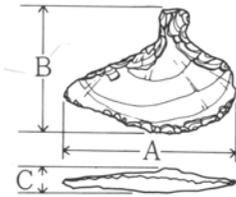
1. 遺構実測図の縮尺は住居址1/60、土壇1/40、1/80、とした。
土器の実測図は1/3、1/4とした。
石器の実測図は1/1、1/3、1/4とした。
上記以外のものについては図中に記した。
2. 挿図中の方位は座標北を示す。
3. 遺構図中のスクリーン・トーンは次のことを表す。なお、図中に表示したものはこの限りではない。
遺構図  は地山を、  は灰、焼土を表す。
土 器  は繊維土器を表す。
4. 写真図版の縮尺は土器1/3、1/4。石器3/4、1/3、1/4である。遺構については任意である。
5. 本書の記述は調査時に付した遺構番号を使用した。
6. 住居址遺物出土状態の図中、●は土器、○は石器を表す。
7. 石器の計測方法は下記の通りである。



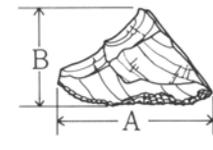
石 鏃



石 斧



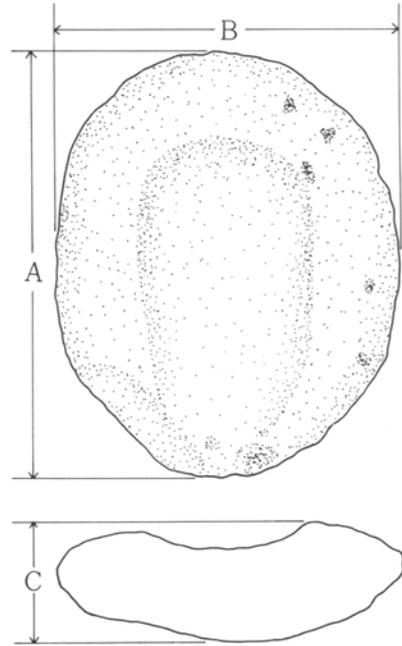
石 匙



スクレイパー

A 最大長 (長さ)
B 最大幅 (幅)
C 厚 さ

石器計測部位



石皿・磨石・敲石・凹石

8. 石器観察表中の数値は長さ×幅×厚さおよび重さを示す。

目 次

序
例 言
凡 例

第Ⅰ章 三原田城遺跡……………	1	3. 溝……………	200
第1節 調査に至る経過……………	1	4. 柱 穴 列……………	201
第2節 立地と周辺の遺跡……………	7	5. 暗 渠……………	201
第3節 基本土層……………	12	6. 出土遺物……………	203
第4節 遺構と遺物……………	13	第5節 八崎城考 山崎 一 ……	208
1. 遺跡の概要……………	13	第Ⅲ章 八崎塚……………	211
2. 先土器時代……………	14	第1節 調査に至る経過……………	211
3. 縄文時代……………	15	第2節 立地と概要……………	211
(1) 住 居 址……………	15	第3節 調査の方法と経過……………	212
(2) 土 壙……………	32	第4節 調査の結果……………	213
(3) 出土土器……………	61	第5節 ま と め……………	218
(4) 出土石器・石製品……………	108	第Ⅳ章 上青梨子古墳……………	219
4. 古墳時代……………	172	第1節 調査に至る経過……………	219
(1) 住 居 址……………	173	第2節 立地と周辺の遺跡……………	219
(2) 古 墳……………	181	第3節 調査方法……………	221
第5節 三原田城址……………	186	第4節 調査の結果……………	223
1. 外 堀……………	186	第5節 ま と め……………	225
2. 掘立柱建物址……………	192	第Ⅴ章 三原田城遺跡のまとめ……………	226
3. 土 壙……………	194	第1節 出土遺物……………	226
4. 溝……………	194	1. 土器について……………	226
第6節 三原田城考 山崎 一 ……	194	2. 花積下層式土器の口縁・底部形態と器形 ……	230
第Ⅱ章 八崎城址……………	197	3. 撚糸圧痕文土器について……………	233
第1節 調査に至る経過……………	197	4. 石器について……………	237
第2節 遺跡の立地と概要……………	197	第2節 遺 構……………	241
第3節 調査の方法と経過……………	198	1. 住居址について……………	241
第4節 検出された遺構と遺物……………	200	2. 三原田城遺跡の変遷……………	247
1. 外 堀……………	200	結 び……………	255
2. 土 居……………	200		

挿図目次

第 1 図	周辺の地形	1	第 56 図	1号住居址出土土器(3)	64
第 2 図	三原田城址	2	第 57 図	2号住居址出土土器	65
第 3 図	試掘トレンチ配置図	2	第 58 図	3号住居址出土土器(1)	66
第 4 図	三原田城遺跡地形図	3	第 59 図	3号住居址出土土器(2)	67
第 5 図	グリッド図	6	第 60 図	3号住居址出土土器(3)	68
第 6 図	赤城村の河川と湧水点	7	第 61 図	4号住居址出土土器(1)	69
第 7 図	地形断面図	8	第 62 図	4号住居址出土土器(2)	70
第 8 図	周辺の遺跡	9	第 63 図	6号住居址出土土器(1)	72
第 9 図	基本土層図	12	第 64 図	6号住居址出土土器(2)	73
三原田城遺跡					
第 10 図	先土器時代遺物	14	第 65 図	6号住居址出土土器(3)	74
第 11 図	遺構全体図	14	第 66 図	6号住居址出土土器(4)	75
第 12 図	1号住居址	15	第 67 図	6号住居址出土土器(5)	76
第 13 図	1号住居址遺物出土状態	16	第 68 図	7号住居址出土土器(1)	77
第 14 図	2号住居址	17	第 69 図	7号住居址出土土器(2)	78
第 15 図	2号住居址遺物出土状態	17	第 70 図	8号住居址出土土器(1)	79
第 16 図	3号住居址	18	第 71 図	8号住居址出土土器(2)	80
第 17 図	3号住居址	19	第 72 図	9号住居址出土土器(1)	82
第 18 図	3号住居址遺物出土状態	19	第 73 図	9号住居址出土土器(2)	83
第 19 図	4号住居址	20	第 74 図	9号住居址出土土器(3)	84
第 20 図	4号住居址遺物出土状態	21	第 75 図	10号住居址出土土器(1)	85
第 21 図	6号住居址	22	第 76 図	10号住居址出土土器(2)	86
第 22 図	6号住居址・埋甕	23	第 77 図	土壇出土土器(1)	87
第 23 図	6号住居址遺物出土状態	23	第 78 図	土壇出土土器(2)	88
第 24 図	7号住居址	24	第 79 図	土壇出土土器(3)	折り込み
第 25 図	7号住居址	25	第 80 図	土壇出土土器(4)	90
第 26 図	7号住居址遺物出土状態	25	第 81 図	土壇出土土器(5)	92
第 27 図	8号住居址	26	第 82 図	土壇出土土器(6)	94
第 28 図	8号住居址	27	第 83 図	土壇出土土器(7)	96
第 29 図	8号住居址遺物出土状態	27	第 84 図	土壇出土土器(8)	98
第 30 図	9号住居址	28	第 85 図	土壇出土土器(9)	100
第 31 図	9号住居址遺物出土状態	29	第 86 図	土壇出土土器(10)	102
第 32 図	10号住居址	30	第 87 図	土壇出土土器(11)	104
第 33 図	10号住居址遺物出土状態	31	第 88 図	土壇出土土器(12)	105
第 34 図	土壇分類模式図	32	第 89 図	遺構外出土土器(1)	106
第 35 図	土壇分布図	33	第 90 図	遺構外出土土器(2)	107
第 36 図	土壇(1)	34	第 91 図	石鏃分類図	108
第 37 図	土壇(2)	35	第 92 図	石錐分類図	109
第 38 図	土壇(3)	37	第 93 図	石匙分類図	109
第 39 図	土壇(4)	38	第 94 図	スクレイパー分類図	110
第 40 図	土壇(5)	40	第 95 図	打製石斧分類図	110
第 41 図	土壇(6)	41	第 96 図	磨石・凹石分類図	110
第 42 図	土壇(7)	43	第 97 図	石皿分類図	111
第 43 図	土壇(8)	44	第 98 図	1号住居址出土石器(1)	112
第 44 図	土壇(9)	46	第 99 図	1号住居址出土石器(2)	113
第 45 図	土壇(10)	47	第 100 図	2号住居址出土石器(1)	114
第 46 図	67号土壇遺物出土状態	48	第 101 図	2号住居址出土石器(2)	115
第 47 図	土壇(11)	49	第 102 図	3号住居址出土石器(1)	116
第 48 図	土壇(12)	50	第 103 図	3号住居址出土石器(2)	117
第 49 図	101号土壇遺物出土状態	52	第 104 図	4号住居址出土石器	118
第 50 図	土壇(13)	53	第 105 図	6号住居址出土石器(1)	119
第 51 図	土壇(14)	54	第 106 図	6号住居址出土石器(2)	120
第 52 図	土壇(15)	56	第 107 図	6号住居址出土石器(3)	121
第 53 図	土壇(16)	57	第 108 図	6号住居址出土石器(4)	122
第 54 図	1号住居址出土土器(1)	62	第 109 図	6号住居址出土石器(5)	123
第 55 図	1号住居址出土土器(2)	63	第 110 図	6号住居址出土石器(6)	124
			第 111 図	7号住居址出土石器	126
			第 112 図	8号住居址出土石器(1)	127
			第 113 図	8号住居址出土石器(2)	128

第114図	8号住居址出土石器(3)	129
第115図	9号住居址出土石器(1)	130
第116図	9号住居址出土石器(2)	132
第117図	10号住居址出土石器(1)	133
第118図	10号住居址出土石器(2)	134
第119図	土壙出土石器(1)	135
第120図	土壙出土石器(2)	137
第121図	土壙出土石器(3)	138
第122図	土壙出土石器(4)	140
第123図	土壙出土石器(5)	141
第124図	土壙出土石器(6)	142
第125図	土壙出土石器(7)	144
第126図	土壙出土石器(8)	145
第127図	土壙出土石器(9)	146
第128図	土壙出土石器00	147
第129図	土壙出土石器01	148
第130図	土壙出土石器02	149
第131図	土壙出土石器03	151
第132図	土壙出土石器04	152
第133図	土壙出土石器05	153
第134図	土壙出土石器06	154
第135図	溝出土石器(1)	156
第136図	溝出土石器(2)	157
第137図	遺構外出土石器(1)	159
第138図	遺構外出土石器(2)	160
第139図	遺構外出土石器(3)	161
第140図	遺構外出土石器(4)	162
第141図	遺構外出土石器(5)	163
第142図	遺構外出土石器(6)	164
第143図	遺構外出土石器(7)	165
第144図	古墳時代の遺構	172
第145図	5号住居址	174
第146図	5号住居址エレベーション	175
第147図	5号住居址出土石器(1)	176
第148図	5号住居址出土石器(2)	177
第149図	5号住居址出土石器(3)	178
第150図	1号墳	181
第151図	1号墳遺物出土状態	182
第152図	1号墳出土石器(1)	183
第153図	1号墳出土石器(2)	184
第154図	古墳内土壙・平面・セクション図・出土遺物	185
第155図	三原田城地形図	187
第156図	三原田城外堀全体図	188
第157図	外堀・セクション・エレベーション	189
第158図	外堀内出土石器	190
第159図	遺構外出土遺物	191
第160図	1号掘立住居址	192
第161図	45・46・47・48・49号土壙	193

八崎城址

第162図	遺跡位置図	197
第163図	地形図	198
第164図	基本土層図	199
第165図	八崎城址	199
第166図	調査区域図	200
第167図	調査区全体図	折り込み
第168図	外堀出土木製品	201
第169図	暗渠出土杭	202
第170図	溝出土遺物状態	203
第171図	溝出土遺物	204
第172図	遺構外出土遺物	205
第173図	グリッド出土石器	206
第174図	グリッド出土石器	207

八崎塚

第175図	地形図	211
第176図	八崎塚実測図	212
第177図	トレンチ図	213
第178図	断ち割りセクション	214
第179図	出土遺物	215
第180図	調査区域図	216
第181図	トレンチ内出土石器	217
第182図	トレンチ内出土石器	218

上青梨子古墳

第183図	遺跡位置図	219
第184図	グリッド図	220
第185図	長久保古墳群分布図	220
第186図	地形図	221
第187図	トレンチ・土層図	222
第188図	主体部・墓坑群	223
第189図	主体部掘り方実測図	224
第190図	出土石器	225

まとめ

第191図	口縁形態と器形	232
第192図	捺糸圧痕文を持つ土器	235
第193図	石材別・器種別組成図	237
第194図	石材別重量分布	238
第195図	住居址出土石器組成図	239
第196図	時期別炉址形態	242
第197図	炉址平面図	243
第198図	住居址変遷図	246
第199図	時代別遺構図	248
第200図	縄文時代出土遺物平面分布図	折り込み

表目次

三原田城遺跡

表1	調査行程表	5
表2	周辺の遺跡一覧表	10
表3	住居址一覧表	31
表4	土壙一覧表	58
表5	遺構別出土石器数	108

表6	石器一覧表	166
表7	出土石器器種別一覧表	171
表8	5号住居址出土石器観察表	178
表9	1号墳出土石器観察表	184
表10	外堀内出土石器観察表	190
表11	遺構外出土遺物観察表	191
表12	東海・相模・関東地方における早期～前期の編年表(案)	229

写真図版目次

三原田城遺跡

- 図版 1 三原田城址航空写真
- 図版 2 調査区航空写真
- 図版 3 調査区遠景
- 図版 4 1号住居址
- 図版 5 2号住居址
- 図版 6 3号住居址
- 図版 7 4号住居址
- 図版 8 6号住居址
- 図版 9 7号住居址
- 図版10 8号住居址
- 図版11 9号住居址
- 図版12 10号住居址
- 図版13 1～9号土壇
- 図版14 10～19号土壇
- 図版15 20～25号土壇
- 図版16 26～37号土壇
- 図版17 44～56号土壇
- 図版18 57～63号土壇
- 図版19 64～67号土壇
- 図版20 68～75号土壇
- 図版21 76～84号土壇
- 図版22 85～91号土壇
- 図版23 93～101号土壇
- 図版24 101～105号土壇
- 図版25 106～116号土壇
- 図版26 117～124号土壇
- 図版27 125～137号土壇
- 図版28 1号住居址出土土器
- 図版29 1・2号住居址出土土器
- 図版30 2・3号住居址出土土器
- 図版31 3号住居址出土土器
- 図版32 4号住居址出土土器
- 図版33 4・6号住居址出土土器
- 図版34 6号住居址出土土器
- 図版35 6号住居址出土土器
- 図版36 6号住居址出土土器
- 図版37 7号住居址出土土器
- 図版38 7・8号住居址出土土器
- 図版39 8号住居址出土土器
- 図版40 9号住居址出土土器
- 図版41 9号住居址出土土器
- 図版42 10号住居址出土土器
- 図版43 土壇出土土器(1)
- 図版44 土壇出土土器(2)
- 図版45 土壇出土土器(3)
- 図版46 土壇出土土器(4)
- 図版47 土壇出土土器(5)
- 図版48 土壇出土土器(6)
- 図版49 土壇出土土器(7)
- 図版50 土壇出土土器(8)
- 図版51 遺構外出土土器
- 図版52 部分写真(7号住居址出土土器)
- 図版53 部分写真(9号住居址出土土器)
- 図版54 部分写真(67号土壇出土土器)

- 図版55 部分写真(5・136号土壇出土土器)
- 図版56 1・2号住居址出土土器
- 図版57 3号住居址出土土器
- 図版58 4・6号住居址出土土器
- 図版59 6号住居址出土土器
- 図版60 6・7・8号住居址出土土器
- 図版61 8号住居址出土土器
- 図版62 8・9号住居址出土土器
- 図版63 9・10号住居址出土土器
- 図版64 10号住居址・土壇出土土器(1)
- 図版65 土壇出土土器(2)
- 図版66 土壇出土土器(3)
- 図版67 土壇出土土器(4)
- 図版68 土壇出土土器(5)
- 図版69 土壇出土土器(6)
- 図版70 土壇出土土器(7)
- 図版71 土壇出土土器(8)
- 図版72 溝出土土器
- 図版73 遺構外出土土器(1)
- 図版74 遺構外出土土器(2)
- 図版75 遺構外出土土器(3)
- 図版76 遺構外出土土器(4)
- 図版77 遺構外出土土器(5)
- 図版78 遺構外出土土器(6)・先土器時代出土土器
- 図版79 5号住居址
- 図版80 5号住居址出土土器(1)
- 図版81 5号住居址出土土器(2)
- 図版82 1号墳
- 図版83 1号墳出土遺物
- 図版84 1号墳・1号墳内土壇出土遺物
- 図版85 薬研堀セクション、箱堀
- 図版86 薬研堀底部、1号掘立柱建物址、1・2号溝、45・46・47・48号土壇
- 図版87 外堀内・遺構外出土遺物

八崎城址・八崎塚

- 図版88 八崎城址航空写真
- 図版89 調査前風景、堀
- 図版90 堀、曲輪内遠景、暗渠
- 図版91 土居断面、溝検出状況、堀及び暗渠、柱穴
- 図版92 八崎塚全景、トレンチ
- 図版93 八崎塚全景、盛土断面、土壇、遺物出土状態
- 図版94 八崎城址外堀出土土器、八崎城溝出土遺物
- 図版95 八崎城址遺構外出土遺物、グリッド出土土器
- 図版96 八崎城址出土土器、八崎塚出土遺物・トレンチ内出土土器・トレンチ内出土土器

上青梨子古墳

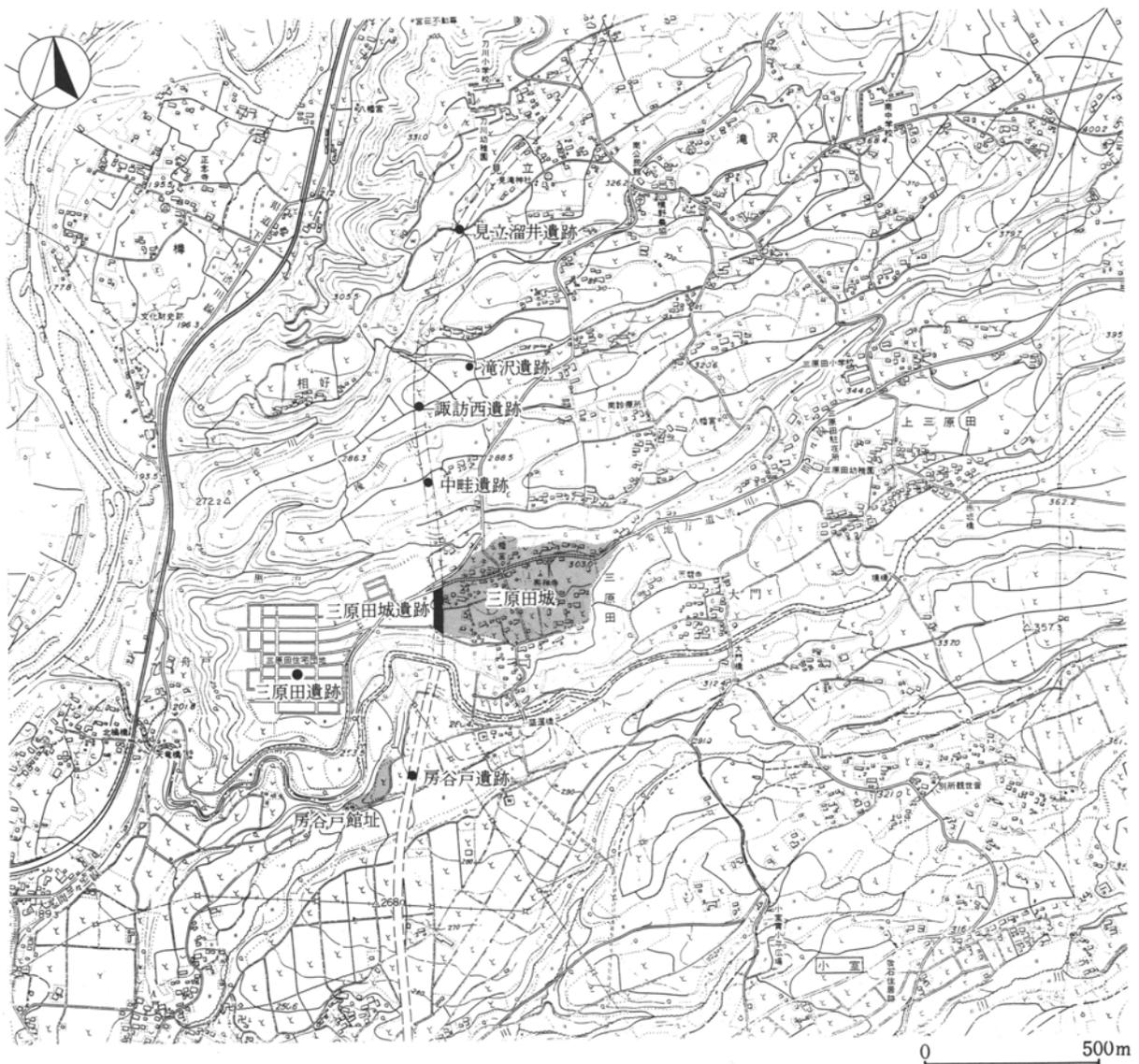
- 図版97 全景、B・D・Fトレンチ
- 図版98 主体部、セクション、前庭部、墓坑、出土遺物

第I章 三原田城遺跡

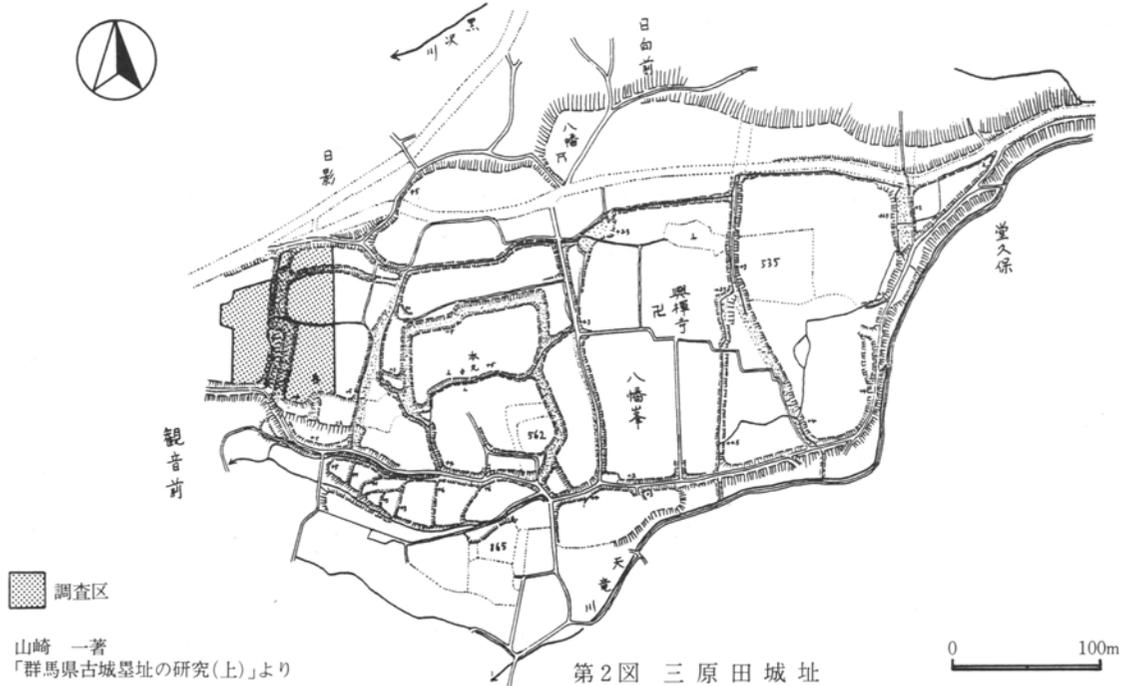
第1節 調査に至る経過

昭和48年より発掘調査が開始された関越自動車道新潟線昭和60年度の供用開始が間近に迫り、未調査区である北橋・赤城地区において、本調査に先行して試掘調査が行われることとなった。本遺跡を含む赤城山西麓一帯は、榛名山二ツ岳を給源とする火山灰（FA）、および軽石（FP）により10cmから厚い所では1m近くもの厚さで覆われているために、踏査による分布調査では遺構、遺物の確認は極めて難しく、遺跡の存在、広がりについては周辺の地形から判断せざるを得ない部分が多かった。このため、より正確な遺跡の有無、範囲、性格等をより確実に把握すべく、本調査計画の立案にむけての試掘調査が行われることとなった。

試掘の対象地区は、先述した赤城山西麓の勢多郡北橋村および同郡赤城村、さらに北麓の利根郡昭和村地内である。なお、用地買収の関係上、赤城村から昭和村中棚までの約13kmの山林部分は試掘調査の対象範囲内である。

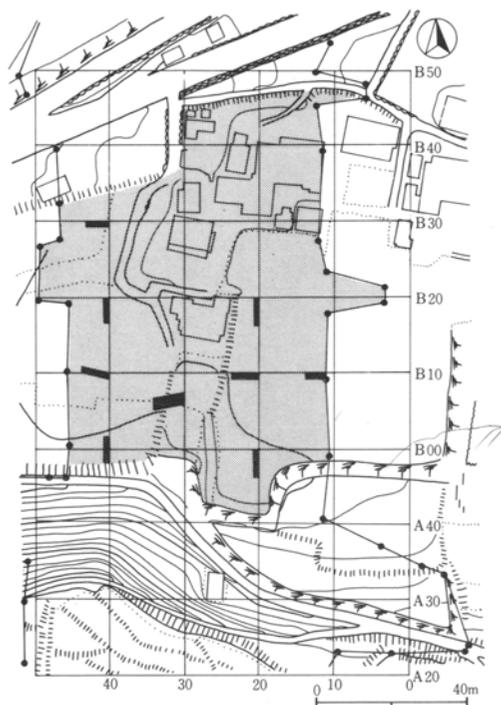


第1図 周辺の地形



から外された。また、片品川以北の利根郡沼田地区・月夜野地区については昭和55年度に試掘調査が行われ、一部本調査が行われていた。

今回、実施した試掘調査の遺跡数は12遺跡で、昭和56年5月14日より10月27日までの間行われた。(註1) 赤城村地内においては、本遺跡を含め6カ所の調査を実施、内4カ所において縄文時代を中心とした遺跡地であることが確認された。



第3図 試掘トレンチ配置図

1 試掘調査の結果

本遺跡については、当初より三原田城址関係の外堀の存在と、それに関連する遺構、および若干の縄文土器が採集されており、対象地ほぼ全面が要調査範囲となることが予想されていたが、より正確な資料を得るために試掘調査を実施した。

調査方法は、道路センター杭を基準に設定した20m方眼の交点部分に縦、あるいは横に、幅1.5m、長さ7.5~8.5mのトレンチを開けた。各トレンチは基本的にローム面まで掘り下げ、断面から遺構の状況等をつかむと共に旧地形の復元に努めた。その結果、現状地形からも存在が窺えた外堀については、深さ4m以上になることが確認された。また、ほぼ南北に走ると思われる堀の東側において古墳時代の住居址、南側においては縄文時代の住居址、土壌が確認された、この西側部分については表土がかなり削平されてはいるものの、全体的に良好な状態で遺構が存在すること

が予想された。

この結果をもとに、道路公団と協議を行い、路線内ほぼ全面、6400平方メートルが本調査の対象面積となり、翌年2月より全面発掘を開始した。

2 調査の経過

試掘調査の結果から、本遺跡については全面的に調査が必要と判断されたために、昭和57年2月より担当



第I章 三原田城遺跡

者2名により発掘調査が開始された。調査は遅れていた調査区内の家屋の撤去を待ち、調査事務所の設置を行うと同時に道路公団と調査区内の排土置き場についての調整等を図り調査の開始となった。

発掘は、三原田城址の外堀西側、試掘調査によって上面が削平されていることが判明していた部分より開始した。その結果縄文時代の住居址3軒、土壙を検出、さらに外堀の東側については、城に関する施設の検出に努めたが検出されなかったため、二ツ岳降下軽石（FP）面を露呈させた。その結果、円墳の周堀および近接して同時期の住居址（試掘調査時に存在を確認していた）を検出した。その他周堀中央に掘られた土壙の中より石と供に古墳の副葬品と思われる大刀が2次的な廃棄状態で出土した。

古墳面終了後、堀および縄文面の調査に移り、縄文時代の遺構は最終的に住居址9軒、土壙130基余りを検出した。

（日誌抄）

2月8日	晴	現地立ち合い。道路公団との協議、調査事務所の設置。
22日	晴	三原田城址外堀の西側部分より表土の掘削作業に入る。
23日	晴	調査区の北側にて近代の溝（1・2号）および土壙を確認。10mのグリッド杭を設定。
3月3日		1・2号溝のセクション、平面図作成。外堀の調査開始。古墳周堀検出、FPの混土層。
6日		縄文時代の土壙（2～6号）を調査、1号墳周堀にて須恵器（甕2、長頸壺2、蓋1）出土。
10日		調査区北西にて検出した1号住居址の調査を開始。上面より阿玉台式土器の半完形品出土。
16日	晴	1・2・3号住居址調査、3号住居址は削平が著るしく、特に南側について形状確認に困難をきたす。1号墳調査。周堀の中央より大形の礫の入った長方形の土壙を検出。
18日	晴	4号住居址調査開始。覆土中に多量の礫を含む。3号住居址の平面図作成。城内部分の遺構検出作業。
23日	晴	3号住居址部分、床面よりほぼ1個体分の深鉢出土、1号墳内土壙より、石とともに投げ込まれたと思われる大刀出土。
26日	晴	風強し。1号墳調査、土壙の平面実測、本日をもって56年度の調査を終る。
4月19日	晴	本日より57年度調査開始。担当者一名増の3名となる。
20日	晴	1・4号住居址平面図作成、5号住居址（古墳時代）調査、石組炉を持つ。
23日	晴	4号住居址調査終了、1号墳内土壙平面図、堀セクション実測、薬研堀を拡張して作られていることが確認される。薬研堀中に浅間山B軽石(?)を認める。
27日	曇	3号住居址平面作成、および全景写真。1号墳内土壙エレベーション図作成。
5月4日	晴	4号住居址、炉のセクション図作成。5号住居址平面図作成。
8日	晴	外堀調査、5号住居址、1号墳全景写真、空撮準備。
11日	晴	城外、縄文面、城内FA面での空撮を行なう。午後遺物洗浄。
14日	雨	5号住居址補足調査、一部土壙の平面図作成。現地説明会準備。三原田小より見学。
15日	晴	現地説明会を行なう。10時より4時まで、見学者約500名となる。
22日	晴	城内縄文面検出、作業。6・7・8・9・10号住居址検出。
24日	晴	6・7・8・9号住居址調査開始。土壙調査。
26日	晴	6号住居址遺物出土状態写真、7号住居址セクション図作成、8・9号住居址調査。
28日	晴	7号住居址炉平面図作成。8・9・10号は住居址調査。土壙52～66号調査、67号土壙にてほぼ完形の深鉢出土。
6月4日	雨	土壙調査。50～58号土壙全景写真、67号土壙遺物出土状態写真。
7日	晴	71～89号土壙調査、6号住居址セクションベルト除去。7号住居址、8号住居址セクションベルト除去。86号土壙より玉篋出土。
9日		110～125号土壙セクション図作成、8号住居址全景写真撮影、遺物取り上げ。
11日	晴	97～118号土壙調査、6号住居址（埋甕セクション実測）。9号住居址より完形の深鉢出土。
12日		8号住居址エレベーション図作成。9号住居址床面調査。55・101号土壙平面図作成。76～81号土壙写真撮影。
6月15日	晴	8号住居址炉セクション図作成。9号住居址床面調査。10号住居址遺物取り上げ。
16日	晴	9号住居址平面図、エレベーション図作成して終了。北より遺構の全景写真。
18日	晴	7・8・9・10号住居址の全景写真撮影、一部土壙の平面図作成。
21日	晴	6号住居址セクション図作成。120～133号土壙写真撮影。一部縄文面残し終了。先土器時代試掘トレンチ設定。
22日	晴	135号土壙、セクション、平面図作成。
23日	曇	37・135・136号土壙調査。136号土壙中より木鳥式土器。37号土壙より諸磯B式土器出土。
25日	晴	先土器時代試掘調査。BP下層より炭化物多く見られる層を確認する。
29日	晴	先土器時代試掘調査。BP上層を除去する。6号住居址補足調査。
7月6日	晴	先土器時代試掘調査、炭化物は、霜降り状に厚さ30cmにわたって検出されたが、見立溜井および、中畦、諏訪西遺跡の台地にて同様の状況が窺われたことから人為的なものでないことが判明。
13日		ローム層断面図作成、写真撮影、37号土壙平面図作成。
15日		6号住居址全景写真、遺物取り上げ終了。
20日		本日を以て三原田城遺跡の調査を終了する。なお10号住居址の未掘部分については10月13日より19日まで行なった。

表1 調査行程表

	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月
表土掘削	[調査]					
外堀		[調査]	[記録]			
古墳						
1号住居址		[調査]	[記録]			
2号住居址		[調査]	[記録]			
3号住居址		[調査]	[記録]			
4号住居址		[調査]	[記録]			
5号住居址			[調査]	[記録]		
6号住居址				[調査]	[記録]	
7号住居址				[調査]	[記録]	
8号住居址				[調査]	[記録]	
9号住居址				[調査]	[記録]	
10号住居址				[調査]	[記録]	
土坑		[調査]	[記録]			
先土器時代試掘					[調査]	[記録]



調査風景

3 調査の方法

調査区グリッドは、試掘時のものを踏襲した。すなわち、100m間隔にて打たれている道路センター基本杭の内本遺跡地内にあるS T A 32+00と33+00を結び基本ラインとし、S T A 32+00を基点とし南側をA区、北側をB区と呼称した。また、S T A 32+00と基本ラインを中心に左右、前後に20mの方眼を区切り、さらにその中を小単位2mの方眼を設定した。各グリッドの呼称は基本ラインを30ラインとし、右方向へは2m毎に29、28と減じ、左方向へは31、32と増えることになる。また、S T A 32+00を基点に横ラインB00を設定し、北へ2m進む毎にB01、B02とした。そして調査区全体を網羅できるような形でグリッドの設定を行った。

小グリッドの呼称については北へ向かって右下の交点を呼んでそのグリッドを指すことになる。(第5図)調査は試掘調査によって基本層位が判明していた調査区中央をほぼ南北に走ると思われる。外堀を境に西側についてはかなり削平されており、古墳時代以降の遺構が検出できる可能性は乏しかったため、おもに縄文時代の遺構検出を主眼に表土の除去を行った。外堀の東側は、F P面までの表土除去を行い、外堀に関して

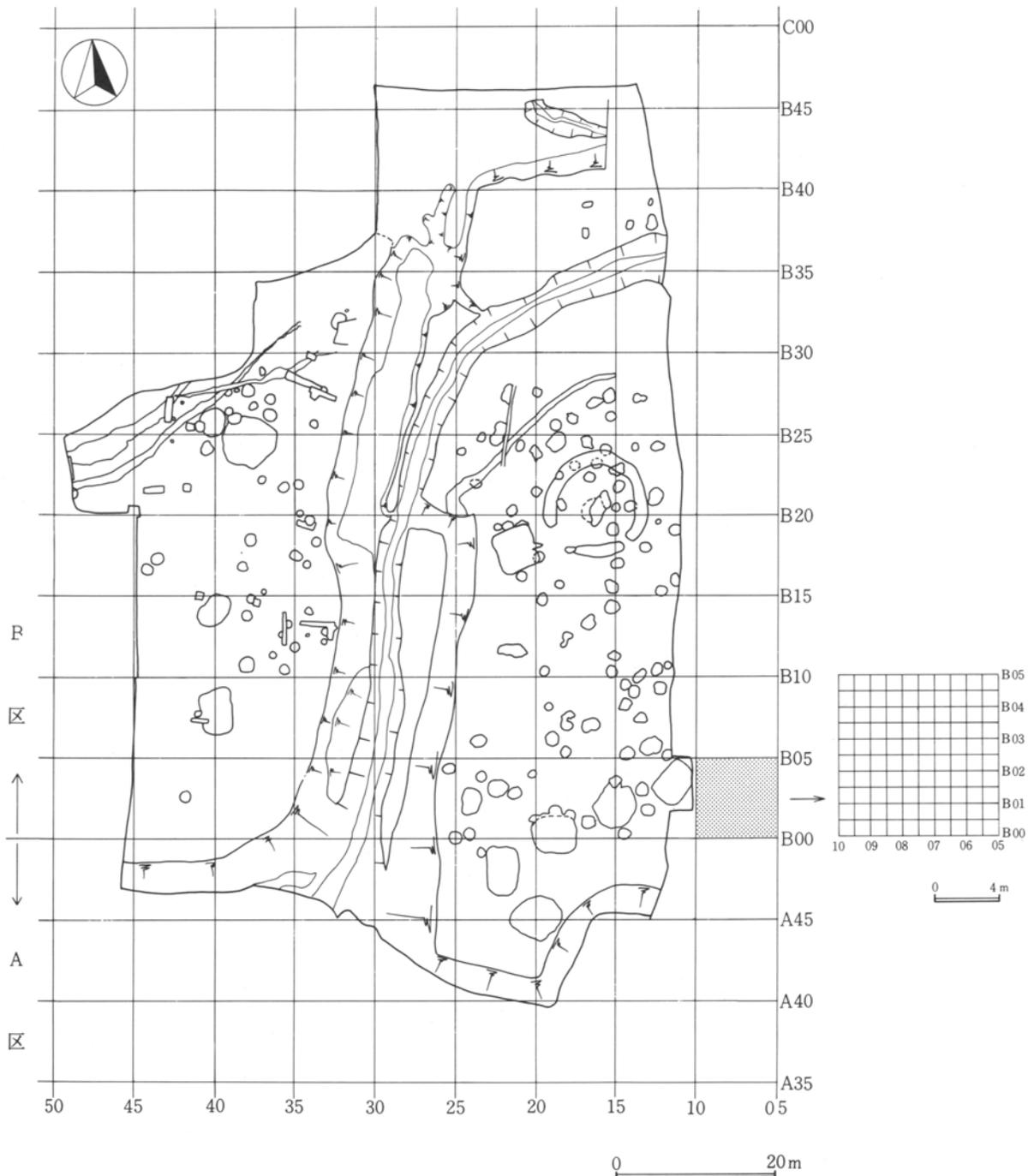
第I章 三原田城遺跡

は南側が深くなっているために通路用ベルトを残して北側から調査を開始した。

遺構図は原則として20分の1で作成したが、一部10分の1で作成したものもある。外堀に関しては100分の1の遺構等高線図を業者に委託を行い作成した。

調査は行程上東壁側に掛かっていた10号住居址の半分が後日調査となった。また、外堀中より先土器時代のものと思われる石器1点が出土したため、縄文面終了後に調査区の南側を中心として、グリッドを設定し試掘トレンチを入れた。

(註) S T A 32+00の国家座標値はX=55845.384, Y=71478.449. である。



第5図 グリッド図

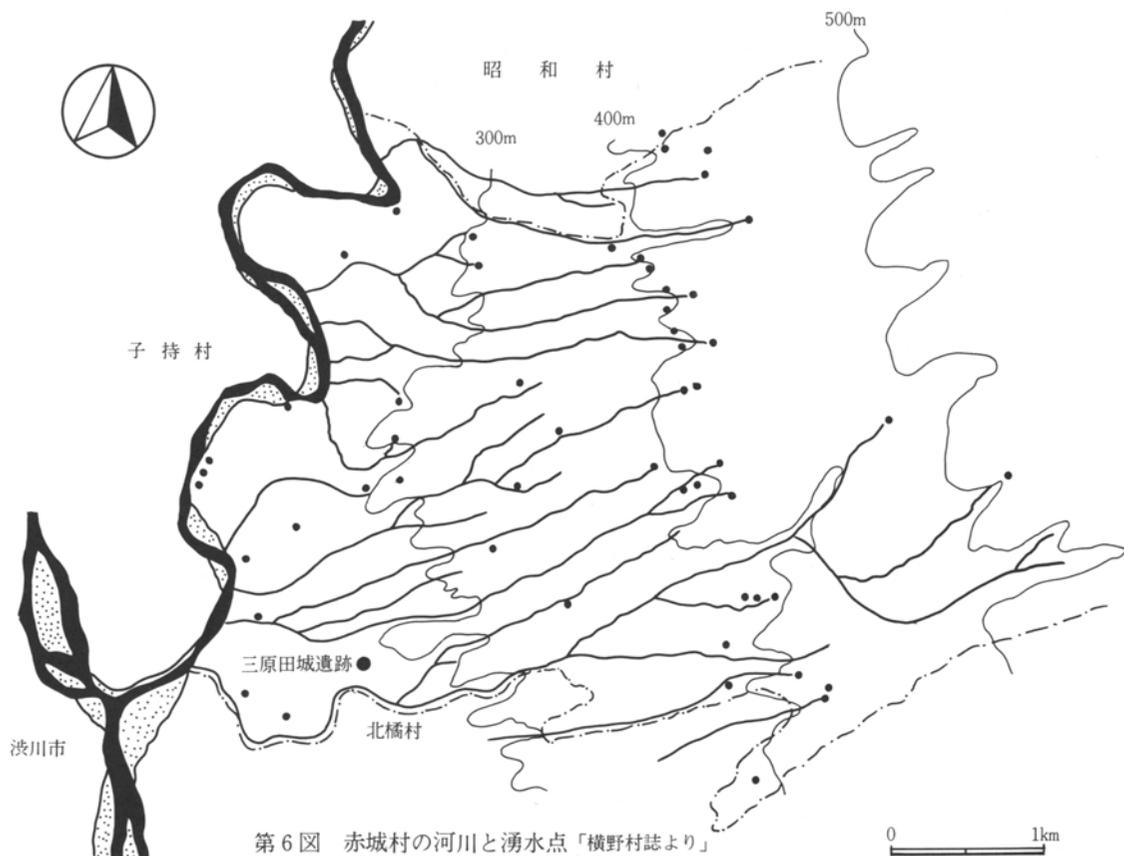
第2節 立地と周辺の遺跡

1 自然的環境

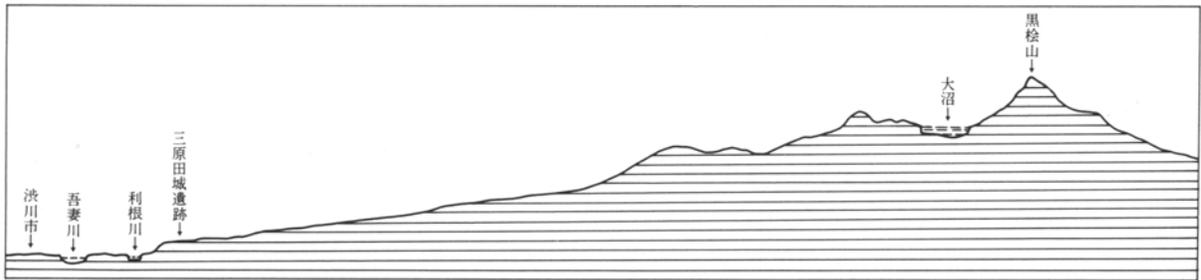
三原田城遺跡は勢多郡赤城村大字三原田地内にあり、標高1828mの赤城山西麓に在る。遺跡地の標高は約290mである。赤城山は群馬県のほぼ中央に位置しており、広い裾野を持つ山であるが、南側に比べて、西側は利根川に向かって河岸段丘が発達し、また多くの谷によって形成された東西に延びる狭長な台地が発達している。そしてこうした台地上には特に縄文時代を中心に多くの遺跡が存在している。三原田城遺跡もこうした台地上に営まれた遺跡の一つである。南側を深い谷となって流れる天竜川は赤城山山麓に湧き出す“わくたま”と呼ばれる湧水源を源としている。こうした“わくたま”は村内のあちこちで見ることができ、懇々と湧き出す清水は飲料水としても利用されている。このような水源を臨む周辺の台地上には往々にして土器、石器の出土を見ることができ、古代より人々の居住域として占地されて来たことが窺われる。本遺跡の北東1.5km程のところにある滝沢遺跡(註2)は好例である。

2 周辺の遺跡

赤城村において、現在までに知られている遺跡は100を越えていると思われるが、その内容が発掘調査等によって明らかにされているものは数少ない。しかし、そうした調査が行われたものの中には、考古学史上において重要なものもある。昭和2年国の指定史跡となった滝沢遺跡は縄文時代から古墳時代にかけての複合遺跡であり、本遺跡から西へ通称とんび坂を下った右側には昭和10年杉原荘介によって、北関東における後期弥生式土器の樽式土器の提唱を行わせた樽遺跡(註3)がある。また内陸における縄文時代中期から後期



第I章 三原田城遺跡



第7図 地形断面図

にかけての大環状集落が発見された三原田遺跡（註4）は西へ200m程離れているが、本遺跡と同じ台地上に営まれた遺跡であり、現在は住宅団地となっている。

以下、周辺における遺跡の内近年の発掘調査でその内容が明らかになったものについて各時代毎に概観しておきたい。

先土器時代

昭和56年以降、利根川以北、北橋・赤城村地内においても関越道関連の発掘調査が開始され、赤城山西麓部における該期の遺跡の発見が相次いだ。本遺跡の調査開始時点では、赤城村における調査例は無かったが引き続いて行われた中畦、諏訪西遺跡（註5）、さらには見立溜井遺跡（註6）、勝保沢中ノ山遺跡（註7）、と近接した場所での調査が続いた。また天竜川を挟んで対岸の房谷戸遺跡（註8）においては4000点もの遺物が、分郷八崎遺跡（註9）においても287点の資料が発見されている。

縄文時代

草創期の資料については見立溜井遺跡において有舌尖頭器が出土しているが断片的にしか発見されていないため詳細は不明である。早期の遺跡としては諏訪西遺跡、見立溜井遺跡、勝保沢中ノ山遺跡等で若干の撚糸文、沈線文、押形文土器が出土している。また分郷八崎遺跡でも撚糸文、沈線文系土器が検出されている。

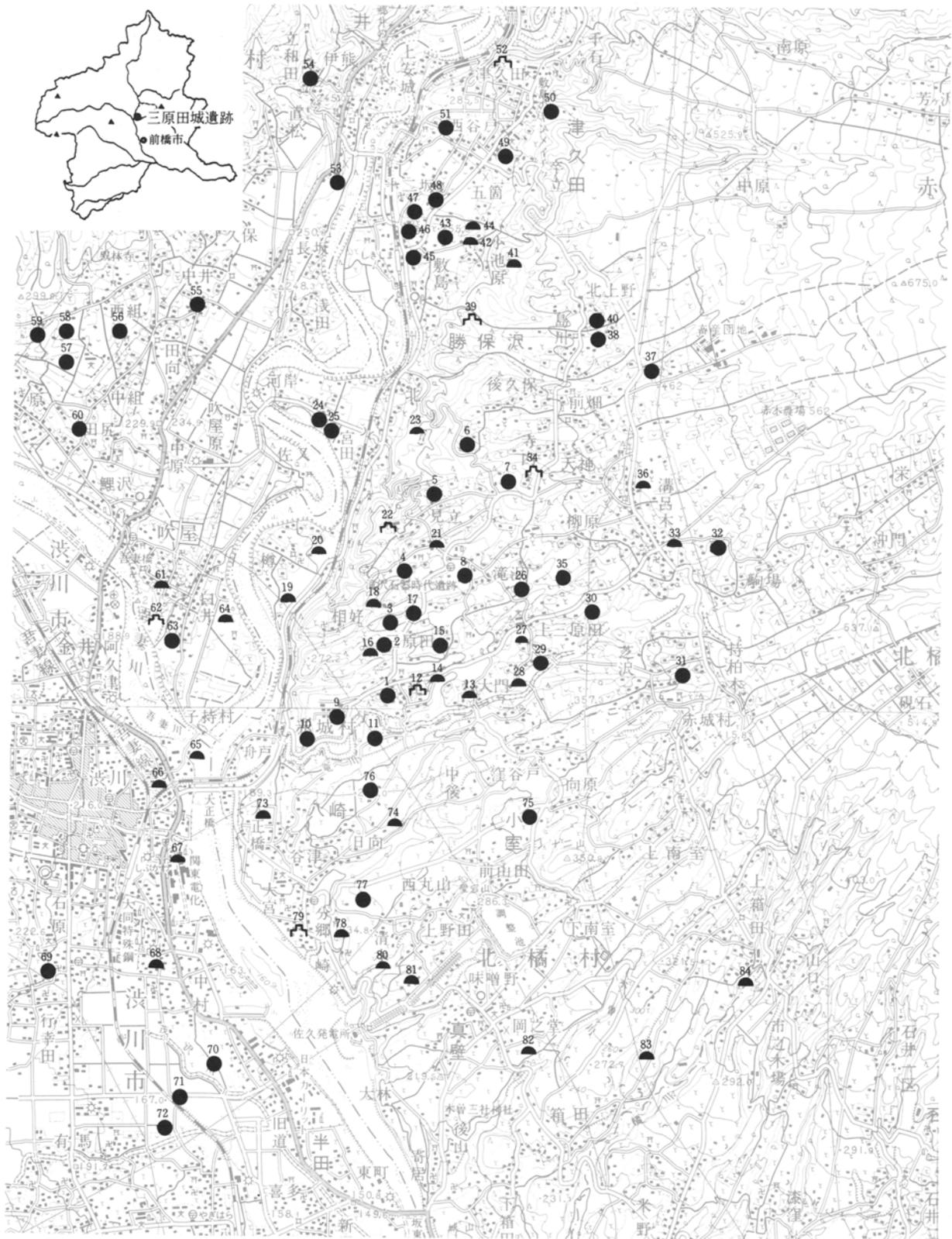
前期になると上記の各遺跡において、集落が営まれるようになり数軒から10軒程度の住居址が検出されている。関山式期のものとしては、関山Ⅰ式期を中心としたものが諏訪西遺跡、勝保沢中ノ山遺跡で検出されている。また分郷八崎遺跡では関山Ⅱ式期を中心に4軒が検出されている。次期の黒浜式期になると、中畦遺跡、見立溜井遺跡、分郷八崎遺跡、森山遺跡（註10）において住居址、および土壙が検出されている。特に見立溜井遺跡、分郷八崎遺跡ではいわゆる有尾式土器と呼ばれている一群（櫛歯状工具による刺突文や半截竹管工具による連続爪形文で菱形のモチーフを主文様とする土器）がまとまって出土しており注目される。

後半の諸磯式期になると、a式期の住居址は諏訪西遺跡で1軒と少なく、b式期のものは中畦、見立溜井、勝保沢中ノ山、分郷八崎遺跡で1～3軒が検出されている。諸磯c式期の遺構は少なく、比定されるのは本遺跡の1号住居址のみであろうか、出土土器についても量的に少なく、各遺跡5～10点程度の破片が見られるのみである。中期になると、初頭に位置付けられる一群が若干、土壙等に伴って中畦、見立溜井、分郷八崎遺跡で検出されている。前半から中葉になると台地の中央部に占地された集落が出現してくる。著名な三原田遺跡は、最たるものと言える。このほか房谷戸遺跡、諏訪西遺跡でも住居址、土壙が検出されているが、房谷戸遺跡では、700を越える該期の土壙を伴い興味ある資料を提供している。

後期になると、三原田遺跡では引き続き集落が営まれ、多くの柄鏡型敷石住居を出現させている。また、滝沢遺跡でもこの時期の住居に伴うと思われる石組炉が検出されているが、詳細は不明である。この滝沢遺跡の西方500mに位置する見立大久保遺跡（註11）でも4軒の住居址と土壙が調査されている。

第2節 立地と周辺の遺跡

後期に入ると遺跡数が減少し、三原田遺跡でもこの時期の住居数は前代に比べかなり減っている。その他周辺では遺構に伴う調査例は無いが滝沢遺跡では相当量の該期の土器片が採集されており、遺構の存在を予想させる。また、晩期の遺跡は現在のところ見付かっていない。



第8図 周辺の遺跡 (国土地理院・5万分の1・「前橋」「沼田」使用)

第I章 三原田城遺跡

弥生時代

見立溜井遺跡で中期前半に比定される壺形土器の口縁部片が1点採集されているのみである。この時期の遺跡としては、利根川を隔てた対岸の子持村押手遺跡(註12)や渋川市南大塚遺跡(註13)が知られるがその数は少ない。中期後半についても赤城、北橋村内では検出されていないが、渋川市中村遺跡(註14)、有馬条里遺跡(註15)、では住居址が検出されている。後期になると北関東西部にその分布域を持つ樽式土器で著名な樽遺跡が本遺跡の西方500mに位置しているのをはじめ、諏訪上遺跡、また滝沢遺跡でも土器片が出土している。さらに、北橋村分郷八崎遺跡では住居址5軒が検出されている。同地内で昭和45年に行われた群馬用水の工事に伴う調査でも住居址が検出された。(註16) 渋川市に目を向けると先述した中村遺跡、有馬条里遺跡、有馬遺跡(註17)では、住居址が検出されており、さらにこれらの遺跡では主体部に多量の礫を使用した礫床墓も検出されている。

表2 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	主な時期	番号	遺跡名	所在地	主な時期
1	三原田城遺跡	赤城村三原田観音前	縄・古・戦	44	五箇塚3号墳	赤城村津久田五箇	古
2	中畦遺跡	赤城村三原田中畦	先・縄	45	新屋遺跡	赤城村敷島新屋	縄・弥・古
3	諏訪西遺跡	赤城村三原田諏訪西	先・縄	46	猫寄居跡	赤城村敷島寄居	戦
4	見立溜井遺跡	赤城村見立溜井	先・縄・古	47	羽黒塚	赤城村津久田華蔵寺	古
5	見立大久保遺跡	赤城村見立大久保	縄	48	六兵衛屋敷跡	赤城村津久田華蔵寺	江
6	勝保沢中ノ山遺跡	赤城村勝保沢中ノ山	先・縄・古	49	六万遺跡	赤城村津久田東田・下宿	縄・弥・古
7	寺内遺跡	赤城村寺内	古	50	三間入遺跡	赤城村津久田三間入	縄
8	滝沢遺跡	赤城村滝沢	縄・弥	51	庚申塚	赤城村津久田西原	古
9	三原田遺跡	赤城村三原田西原	縄	52	津久田城址	赤城村津久田寄居	古
10	樽遺跡	赤城村樽山田	弥	53	白郷井小学校遺跡	子持村上白井梅木	古
11	房谷戸遺跡	北橋村房谷戸	縄・古・室	54	立和田遺跡	子持村中郷立和田	古
12	三原田城址	赤城村三原田観音前	戦	55	中井遺跡	子持村中郷中井	古
13	大門塚古墳	赤城村上三原田大門	古	56	館野遺跡	子持村中郷	古
14	旧横野村10号墳	赤城村三原田堂久保	古	57	黒井峯遺跡	子持村黒井峯	古
15	若宮八幡塚	赤城村上三原田日向	古	58	西組遺跡	子持村西組	古
16	十二塚古墳	赤城村三原田中畦・十二塚	古	59	押手遺跡	子持村北牧	縄・弥・古
17	諏訪上遺跡	赤城村三原田諏訪上	縄・平	60	田尻遺跡	子持村中郷田尻	古
18	浅間塚古墳	赤城村見立相好	古	61	不動塚古墳	子持村白井北廊	古
19	イナリ塚古墳	赤城村樽野本・南原	古	62	白井城址	子持村白井	戦
20	弁天塚古墳	赤城村樽清水・新井	古	63	白井城北廊中世墓	子持村白井北廊	戦
21	庚申塚古墳	赤城村見立八幡	古	63	カトウ塚古墳	子持村白井玉椿	古
22	見立城址	赤城村見立二城	戦	65	坂下町古墳群	渋川市坂下町	古
23	久保地古墳群	赤城村宮田熊野・久保地	古	66	東町古墳	渋川市東町	古
24	宮田畦畔遺跡	赤城村宮田中島	古	67	大崎古墳	渋川市大崎	古
25	宮田寄居跡	赤城村宮田中島	戦	68	十二山古墳	渋川市中村	古
26	滝沢御所跡	赤城村滝沢御所谷戸	江	69	空沢遺跡	渋川市行幸田	縄・古
27	地藏塚古墳	赤城村上三原田蟹谷戸	古	70	中村遺跡	渋川市中村	弥・古・江
28	稲荷塚古墳	赤城村上三原田東田	古	71	有馬条里遺跡	渋川市八木原	弥・古
29	十二塚	赤城村上三原田蟹谷戸	古	72	有馬遺跡	渋川市八木原	弥・古
30	庚塚	赤城村上三原田庚塚	古	73	北ノ寺古墳群	北橋村八崎北ノ寺	古
31	出雲遺跡	赤城村持柏木出雲	縄	74	中竹原古墳群	北橋村八崎中竹原	古
32	大師堂遺跡	赤城村溝呂木辻替戸	縄・弥	75	小室遺跡	北橋村大字小室	縄
33	行人塚古墳	赤城村溝呂木天神上	古	76	羽場遺跡	北橋村八崎	奈
34	勝保沢城址	赤城村勝保沢寺内	室	77	分郷八崎遺跡	北橋村分郷八崎	先・弥・古
35	見立十三塚	赤城村見立蟹沢・十三塚	古	78	分郷八崎古墳	北橋村分郷八崎	古
36	大塚古墳	赤城村溝呂木大塚	古	79	八崎城址	北橋村分郷八崎	戦
37	六本木の十三塚	赤城村勝保沢六本木・上原西	古	80	塚原古墳群	北橋村分郷八崎塚原	古
38	水上北井戸遺跡	赤城村北上野水上・北井戸	縄	81	真壁古墳群	北橋村真壁上遠原	古
39	猫城址	赤城村敷島城山	戦	82	下山田原古墳群	北橋村八崎越後坂	古
40	北井戸の寺屋敷跡	赤城村北上野井戸	不明	83	箱田古墳群	北橋村箱田八幡山	古
41	甲子塚古墳	赤城村津久田前小池原	古	84	米野古墳群	富士見村山口中組	古
42	五箇塚1号墳	赤城村津久田五箇	古				
43	小池原遺跡	赤城村津久田栗木沢後小池原	古				

先(先土器) 縄(縄文) 弥(弥生) 古(古墳) 奈(奈良)
平(平安) 室(室町) 戦(戦国) 江(江戸) 時代を表わす。

古墳時代

集落址の本格的な調査としては、赤城村歴史資料館の南側にある運動場の造成に伴い調査された、寺内遺跡(註18)が上げられる。この遺跡では古墳時代中ごろの住居址11軒および祭祀跡が二ツ岳降下軽石(FP)下より検出されている。さらに、西側、坂を下った利根川段丘上にある津久田遺跡(註19)においてもやはりFP下の住居址が調査されている。関越道関連の遺跡では見立溜井遺跡、勝保沢遺跡においてFPで埋没した住居が検出されており、特に溜井の土器は弥生時代から古墳時代移行期のものとして興味あるものである。さらに同時期の生産址としては、宮田中島の畦畔遺跡(註20)がある。

古墳に関しては、付近には大型のものは見られず、利根川段丘上のいなり塚を中心に、弁天塚などが見られるが、消滅してしまったものも少なくない。また、三原田地区には地蔵塚(旧横野村14号墳)、塔ヶ峯(旧横野村10号墳)、十二塚、五輪塚、若宮八幡塚、庚(かね)塚、稲荷塚、諏訪原の古墳等が知られるが、現況を留めて置いているものは少ない。

奈良・平安時代

奈良時代の遺跡で調査が行われたものはごく少なく、周辺で北橋村の羽場遺跡(註21)、分郷八崎遺跡で住居址が検出されている。また、勝保沢遺跡では墓坑が調査されている。

平安時代については、中畦遺跡において住居址が、房谷戸遺跡、分郷八崎遺跡では住居址および製鉄遺構が検出されている。また、諏訪上遺跡では布目瓦、瓦塔片が出土している。

中・近世

今回の調査で西堀の一部を調査することとなった三原田城は、東西500m、南北200mの範囲に築かれた城郭である。赤城村内にはこうした戦国時代の城郭址として他に数カ所が知られる、三原田城の北方、刀川小学校の西に近接する見立城(二城)(註22)は利根川の方向へ長く突き出た尾根に数条の堀を切って造った城郭で、東西300m、南北約150mの規模を有す。勝保沢城(註23)は、勝保沢快中山宗玄寺の境内を含む西方300mの範囲にある。室町時代の築城か。津久田城(註24)は、赤城山の山崖と利根川との間の河岸段丘上にあり、北側は沼尾川が深い谷をつくっており天然の要害となるいわゆる崖端城で、並郭式の城郭である。猫城(註25)は山崖の頂上に築かれた山城である、南北を深い谷によって挟まれている。

(註1) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 年報1 1982(昭56)年「関越自動車道地域北橋・赤城および昭和村地区試掘」の項に詳しい

(註2) 横野村誌 1956(昭31)年 大正末年に発見され昭和2年国の指定史跡となる

(註3) 杉原荘介 上野樽遺跡調査概要 考古学10—10 1939(昭14)年

(註4) 赤山容三 三原田遺跡(住居編)群馬県企業局 1980(昭55)年

(註5) 真下、小野、谷藤 中畦・諏訪西遺跡 1986(昭61)年

(註6) 茂木・都丸 見立溜井遺跡・見立大久保遺跡 1985(昭60)年

(註7) 年報2 1983(昭57)年

(註8) 註7 および

(註9) 柿沼恵介・右島和夫・分郷八崎遺跡 北橋村教育委員会 1986(昭61)年

(註10) 1984年県教育委員会調査 住居址、土壙を検出

(註11) 註6に同じ

(註12) 第20回企画展 弥生文化と日高遺跡 1985(昭60)年

(註13) 註12に同じ

(註14) 横沢・五十嵐・南雲 中村遺跡 渋川市教育委員会 1986(昭61)年

(註15) 註8、また渋川市で同遺跡内の一部を調査している。有馬桑里遺跡 渋川市教育委員会 1983(昭59)年

(註16) 註2に同じ

(註17) 註8に同じ

(註18) 井上唯雄他 寺内遺跡 赤城村教育委員会 1975(昭50)年

(註19) 敷島村誌 敷島村誌編纂委員会 1955(昭30)年

(註20) 山本良知 宮田畦畔遺跡調査概要 時報第25号 群馬大学史学会 1961(昭36)年

(註21) 註9に同じ

(註22) 山崎一 群馬県古城址の研究 上巻 群馬県文化事業振興会 1971(昭46)年

(註23) 註22に同じ

(註24) 註22に同じ

(註25) 註22に同じ

第3節 基本土層

本遺跡の基本層位は、上よりⅠ耕作土（黒色土）、Ⅱ榛名山二ツ岳降下軽石（F P）、Ⅲ暗褐色土、Ⅳ榛名山二ツ岳降下灰層（F A）、Ⅴ黒色土、Ⅵ黒褐色土、Ⅶローム層、ⅧAS-SP層となるが、調査区内の地目は現状が宅地、畑地となっており、建物部分についてはF A下まで削平がおよんでおり、畑地についても深耕されている部分については、やはりF Aまでが削られていた。また中央部については三原田城址に伴う堀が幅20mで南北に走る。このため、比較的堆積状態の良かったのは調査区南東の約4分の1程の部分と、北西部であった。ここでは、約30cmの耕作土下に10cmのF P、F Aの堆積が見られ、両者の間に暗褐色の薄い間層が認められた。赤城村内についてはF A、F Pの状況は北に行くほどF Aが薄くなり、逆にF Pが厚くなるが、台地上での基本的な層位は変化ない。三原田城遺跡における基本土層の模式図を示すと（第9図）の通りである。

※A S—S P下における各層の個々の説明については、中畦・諏訪西遺跡（関越自動車道新潟線発掘調査報告書第9集）1986 第IV章 基本土層の項を参照されたい。



第9図 基本土層図



基本土層

第4節 遺構と遺物

1 遺跡の概要

検出した遺構は縄文時代の住居址9軒、土壙126基、古墳時代の住居址1軒、円墳の周堀1基、三原田城址に関する堀、および掘立柱建物址1棟、土坑墓4基、その他時期不詳の溝6条、近世の溝、土壙等であった。

縄文時代の住居址については、前期初頭花積下層式期のものが8軒、諸磯b式期が1軒である。土壙については、出土土器から判断して花積下層式期のものが約8割を占める、その他諸磯式期、中期初頭、不明のものが若干ある。花積下層式期の住居址8軒の内4軒が台地の縁辺部分で横に並んで検出されている。

石組炉を持つものが3軒、埋甕を伴うものが2軒みられる。出土土器は、花積下層式の他に東海地方の木島式や、東北南部の大木式に比定されるものも見られ注目される。また、出土土器は早期撚糸文土器から中期阿玉台式土器が出土している。

古墳時代の住居址は、やや大形の方形を呈す、東壁中央に偏平な石を用いた石組みの竈を付設している。東に近接して径14m程の古墳の周堀が検出されており、その南部分において須恵器大甕2点、長頸壺2点、蓋坏1点が上層より出土している。

三原田城址に関してはほぼ中央を南北に走る外堀が検出された、この堀は中央での幅は15m程であるが南端部では幅30m近く、深さ20mにもなる。底のほうは水流による影響か、凹凸が顕著であった。

堀はいわゆる薬研堀と箱堀が重複するかたちで存在することが確認された、調査区北東部より左に曲がりながら南へ抜けている薬研堀が古く、これがやや埋まった時点で南北に箱堀が造られている。箱堀は薬研堀を拡幅する形で、中央に「折り」を持つ。

その他の遺構としては、2間×2間で西側に庇を持つ掘立柱建物址が1棟検出されているが、城との関連は確定できない。土居については南辺部にてその1部かと思われるロームの堆積を認めたとすぎない。薬研堀の北に接して隅丸長方形の土壙5基を検出した。この内3基は焼土、石を伴っており中世の火葬墓と見られる。溝は6条検出した、時期については古墳時代以降と言えるだけで、1、2号溝については多分に自然流路の可能性はある。

さらに、古墳周堀のほぼ中央部において、長方形の土壙が検出され、中から石と共に古墳の副葬品と思われる大刀が投げ込まれた状態で出土している。

以上述べたように、本遺跡は縄文時代から中、近世まで営まれた遺跡であり、特に縄文時代については、北関東では数少ない花積下層式期の集落が検出されたことは注目されることである。

古墳時代に関しては、台地の上いくつかの小古墳が存在し、また消滅したものも考えるとむしろ墓域としての性格が強かったのであろう。このことは5号住居址の在り方を考える上でも一考する必要がある。

奈良・平安時代に遺構は検出されていないが、外堀の中からは須恵器の破片等が出土しており、調査区外に遺構が存在するものと考えられる。

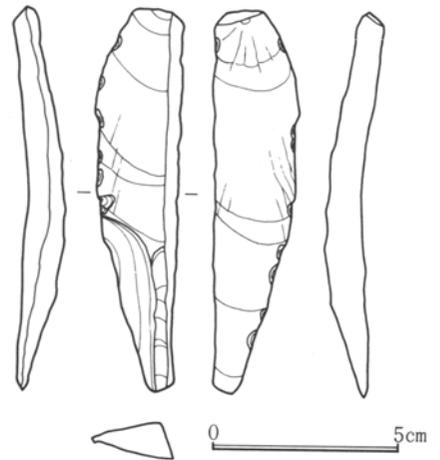
戦国時代には、この地形を利用して城郭が築かれ、幾度かの改修が行われ現在に至っている。

以下、本遺跡における検出遺構、遺物について各時代毎に分け記述を行う。なお、各遺構に付した番号は調査時のものをそのまま用いているために、一部土壙については欠番としたものがある。

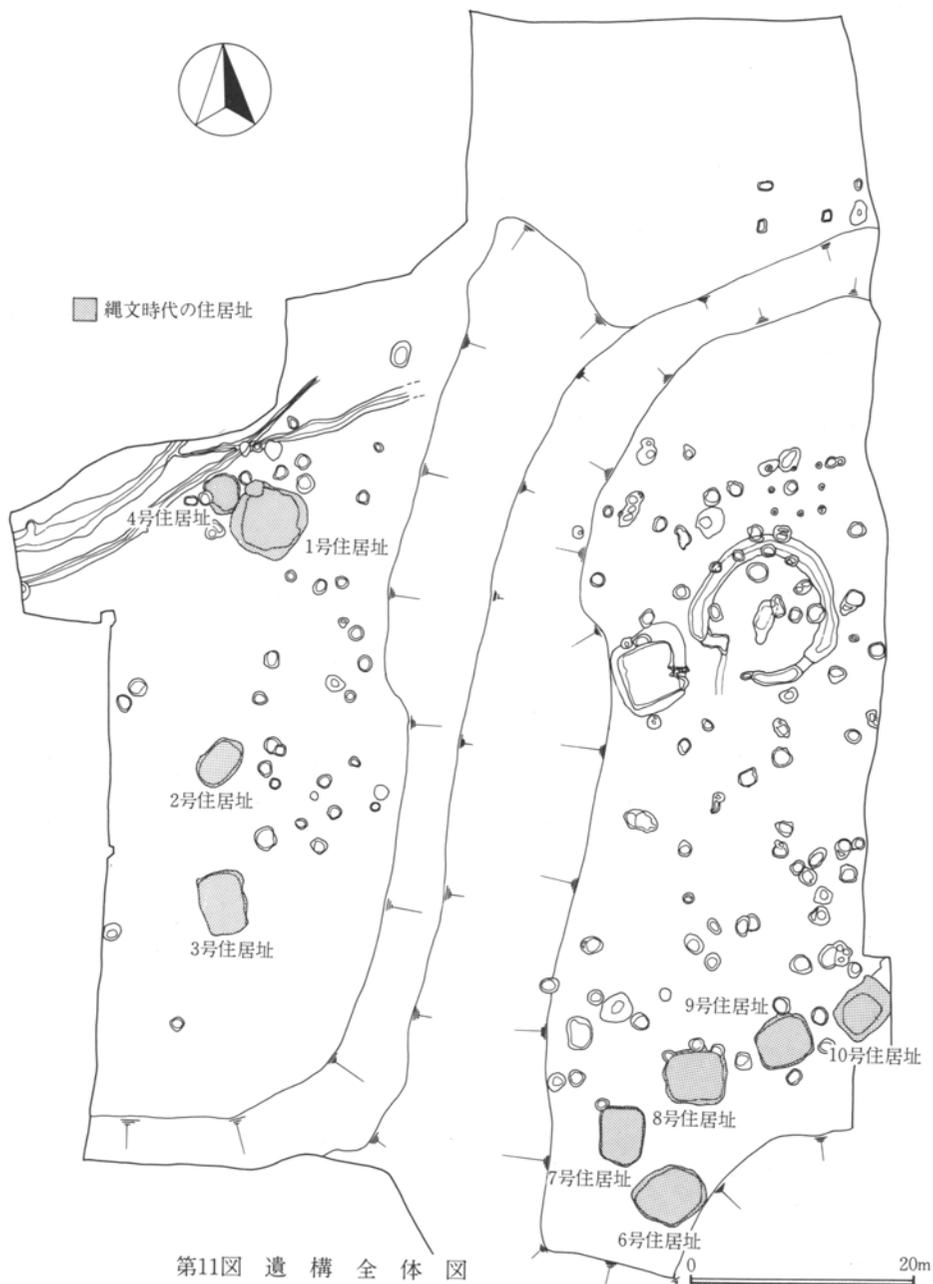
2 先土器時代

1. 遺物 三原田城の外堀内下層にて出土した石器の中にナイフ形石器と思われるもの1点が検出された。(第10図)長さ10.1cm、幅2.3cm、厚さ1.0cmで重さ25.5gである。かなり摩滅している。素材に縦長の剥片を用い、片側縁に刃部加工が見られる、加工は刃部先端にまで及んでいると思われるが、摩滅しているために観察できない。石材は珪質頁岩である。

遺物の出土によって縄文面終了後、調査区南部分を中心に先土器時代の確認調査を実施したが、他に遺物の出土は無かった。



第10図 先土器時代遺物



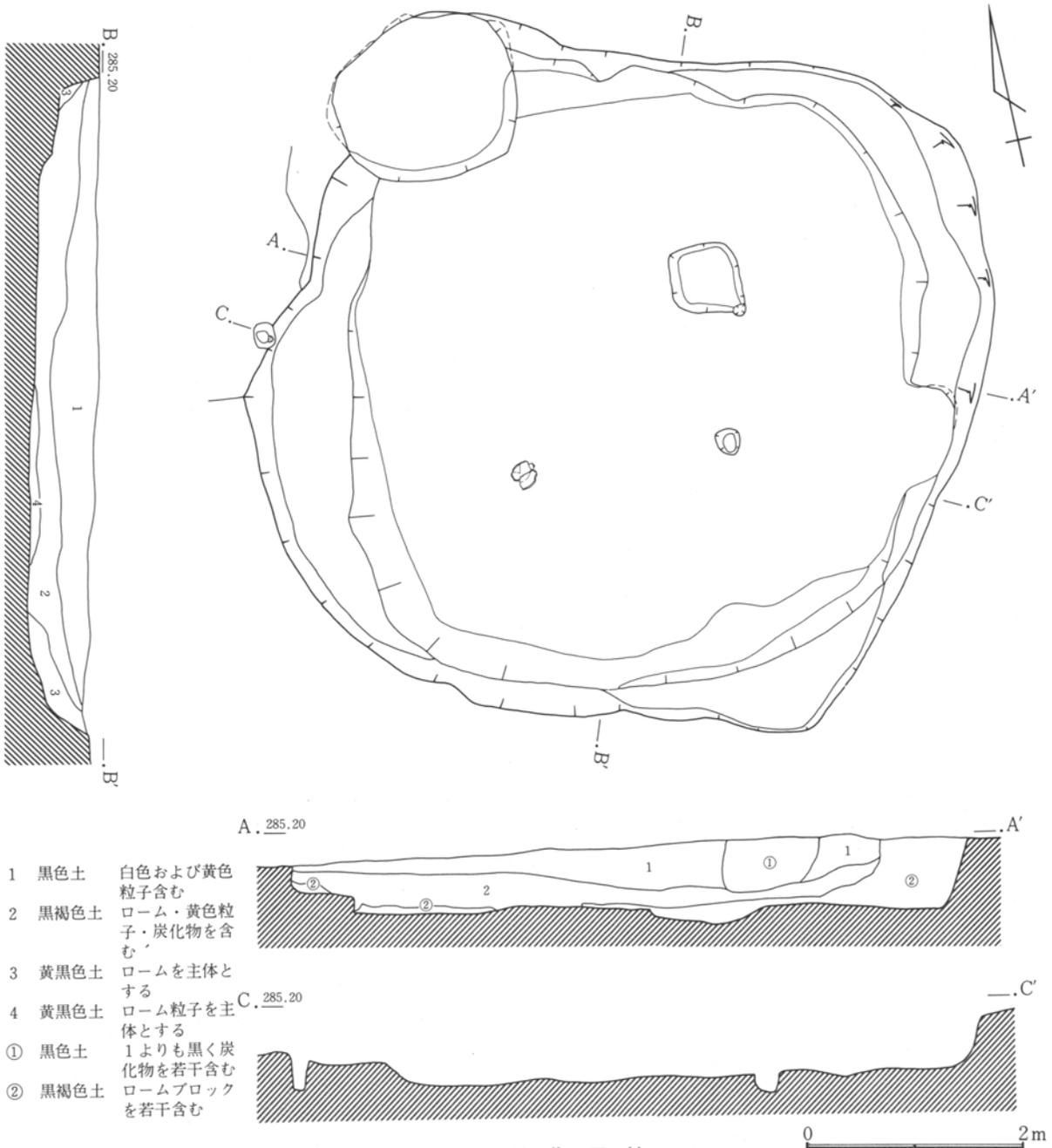
第11図 遺構全体図

3 縄文時代

(1) 住居址

1号住居址 (第12図)

調査区の北西寄り、36~39-B24~26グリッドに位置する。西辺部で4号住居址と一部重複している。今回の調査において最初に検出した住居址である。主軸方向はN-23°-Eである。平面形状は隅丸方形を呈すが、各辺はやや外側へ張り出す形となる。規模は620×600cmである。掘り込みは比較的深く、床面まで深いところでは50cm程あり、中央部がかなり深くなっている。また壁際に一段高くなったテラス状に廻る部分



第12図 1号住居址

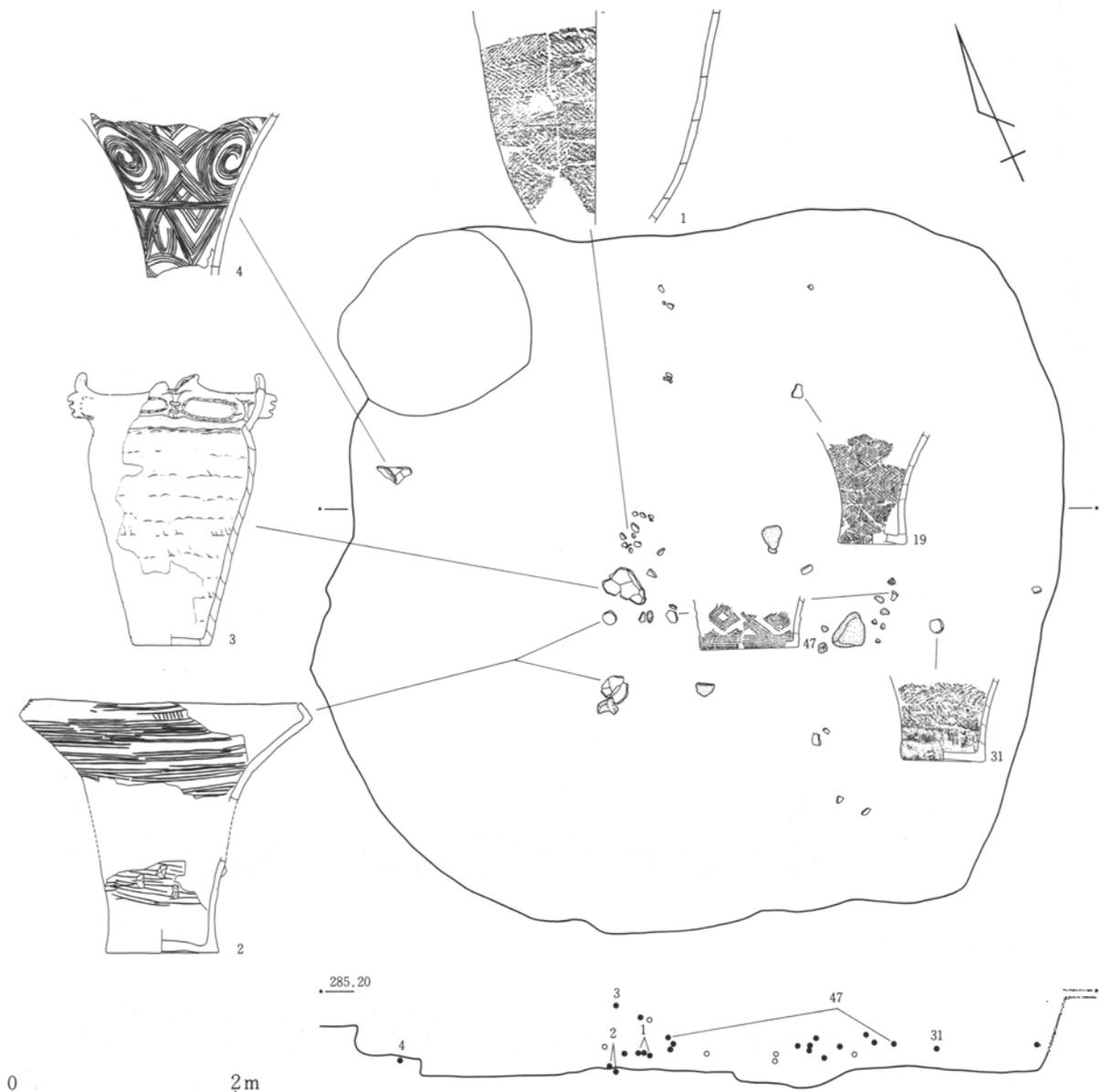
第I章 三原田城遺跡

が見られたが、南壁中央部はなだらかになっており、入り口部分が想定される。北西隅に径90cm、深さ約80cmの土壇が重複しており先後関係は確定できず、住居の付属施設かとも考えられる。

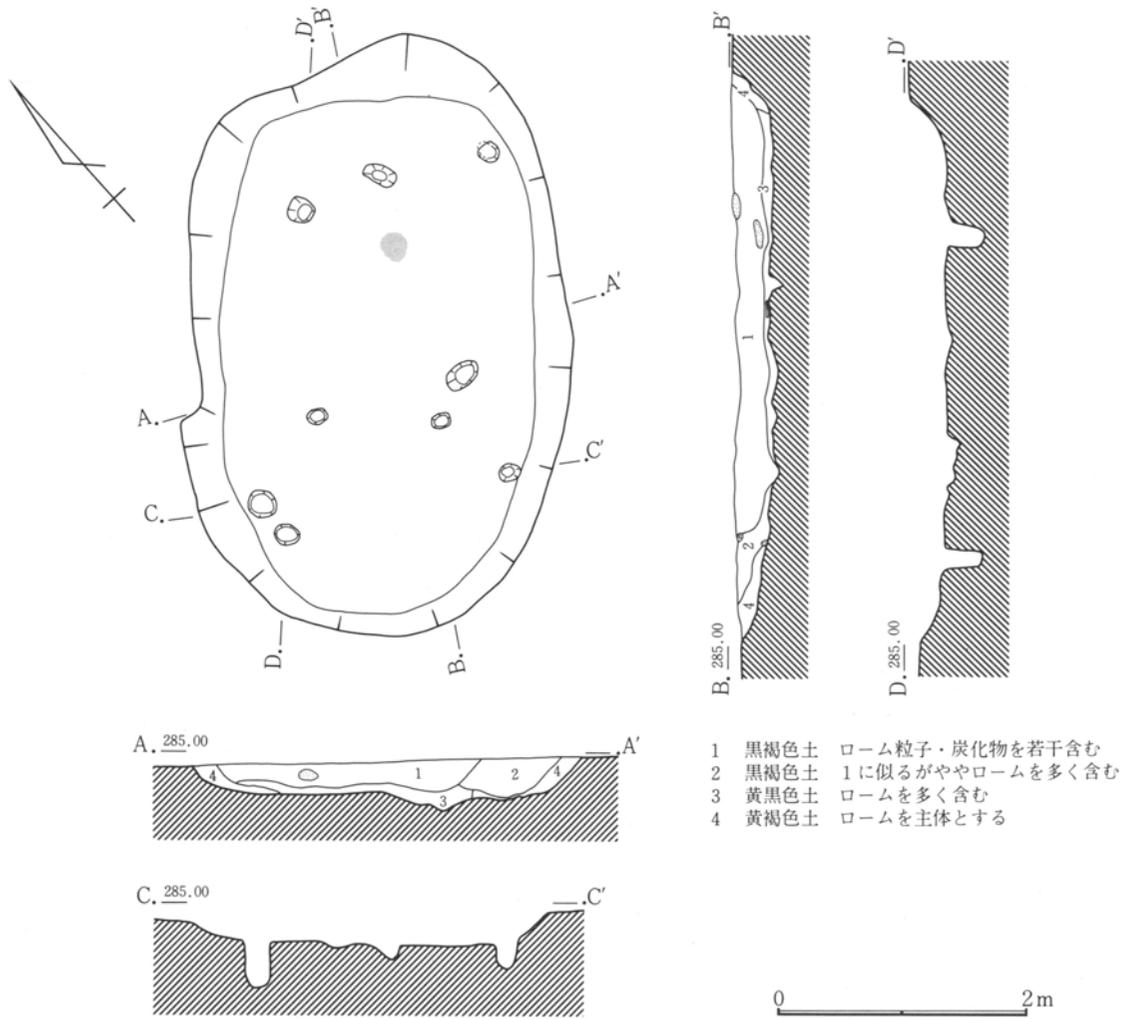
床面の状態はかなりの凹凸が見られ、あまり踏み締められた様子もなく貼り床の形跡も見られなかった。柱穴は、明確なものは確認されず中央やや北東寄りに64×64cmの方形を呈す落ち込みと、北東寄りに径20cm、深さ17cmの小ピットが検出されている。

炉は中央南西寄りに検出された、キャリパー形の深鉢土器の口縁部分を半分程埋め込んで転用している。周囲には若干の焼土が見られ、また傍らに長さ20cm程の礫が据えられている。

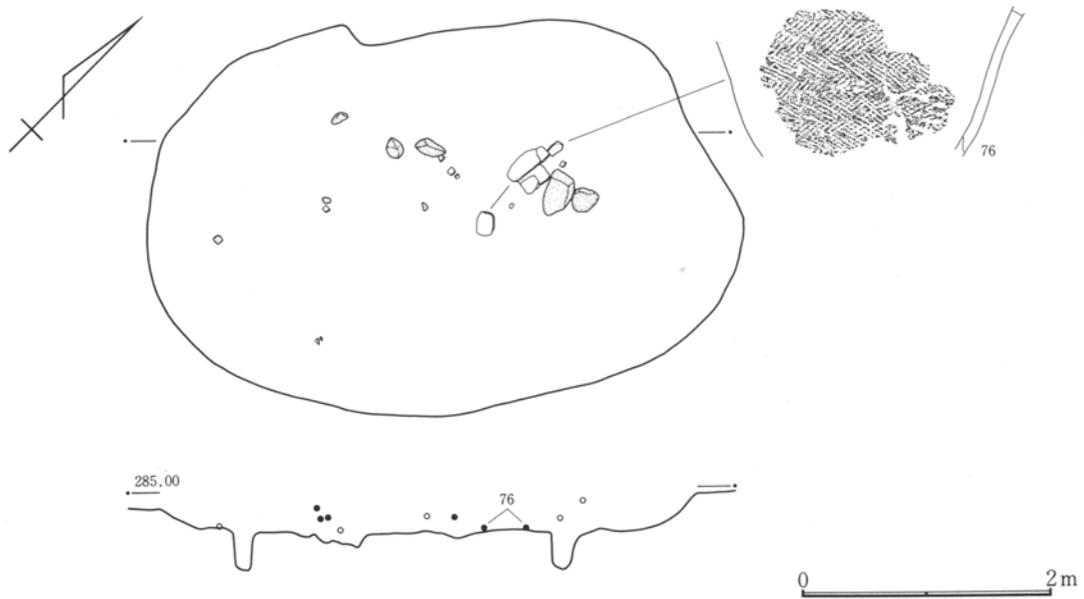
遺物出土状態（第13図） 本住居址より出土した遺物は土器96点、石器および剥片343点であった。土器については器形を復元しうるようなものは少なく、3が覆土上層より出土した外4が西側壁際で寄り掛かったような状態で出土した。また埋設されていた土器の底部が床面に密着した状態で出土している。石器はほとんどが覆土中よりの出土である。



第13図 1号住居址遺物出土状態



第14図 2号住居址



第15図 2号住居址遺物出土状態

第I章 三原田城遺跡

2号住居址 (第14図)

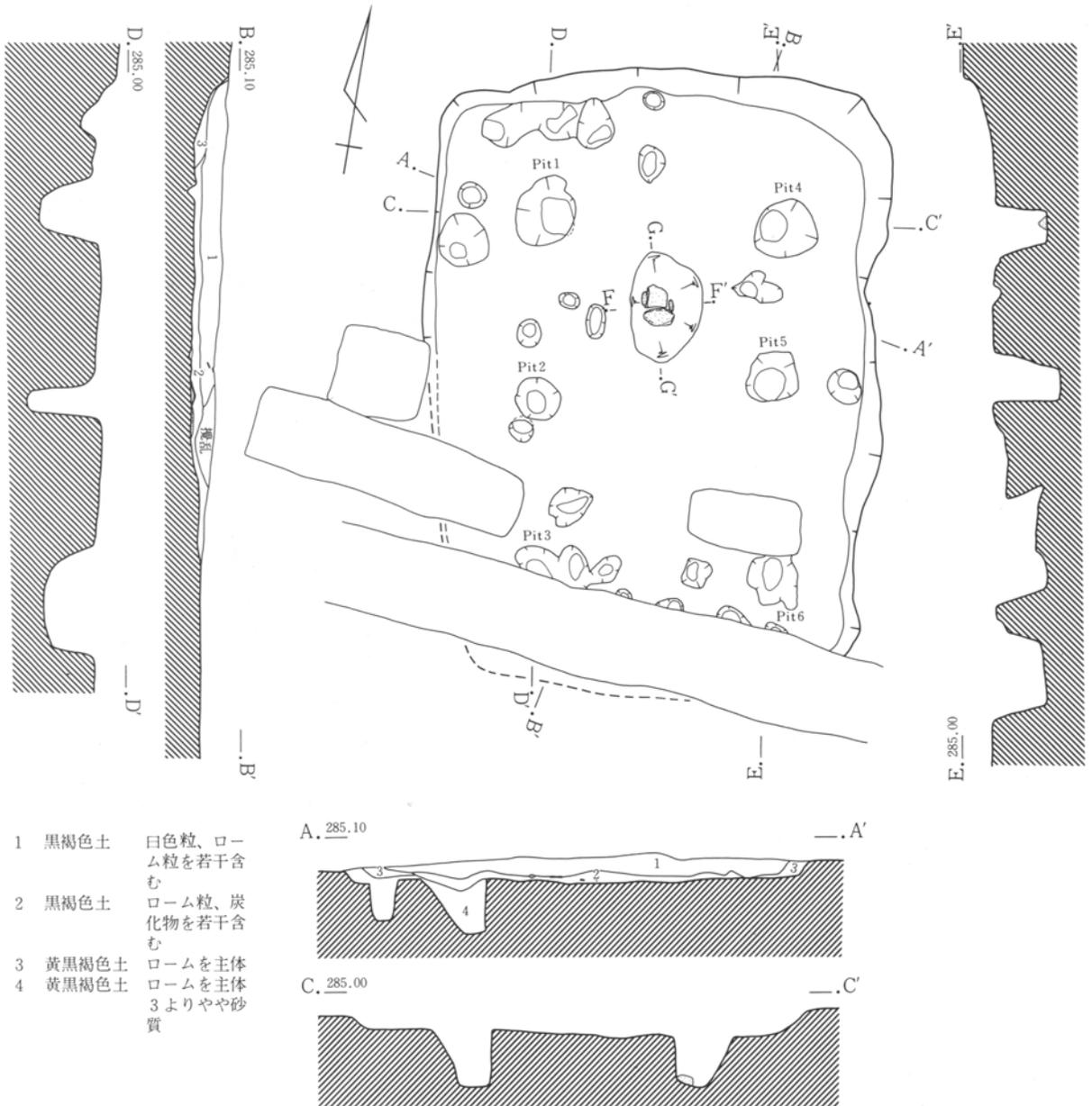
調査区の中央やや西寄りで検出した。39~40-B 12~14グリッドに位置している。形状は長円形を呈しその規模は460×300cmで壁の高さは20~30cmを測り立ち上がりは緩やかである。主軸方向はN-3°-Eである。

柱穴は図に見られるように計9ヶ所を検出した。いずれも径20~30cm、深さは30cm内外でほとんどが垂直に近い角度で掘り込まれているが、位置的には不規則である。

床面の状態は、凹凸が顕著でローム地山を掘り込んでそのまま床面としている。

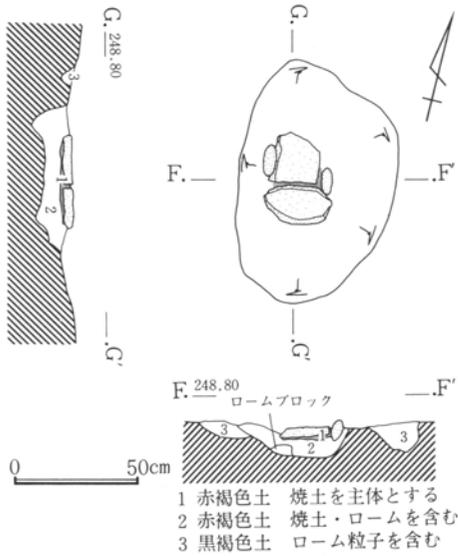
炉址 住居址の中央やや北寄りに設けられた地床炉である。径30cm程の範囲に焼土が認められたが、非常に薄い堆積状況であった。周辺部は踏み固められており、比較的堅緻な感じがあった。

遺物出土状態 (第15図) 出土遺物は少なく、土器に関しては深鉢の胴部が炉の西側に大形の石を伴い潰れた状態で出土した外約50片程が出土したが、その多くが小破片であった。石器については28点が出土しており、管玉が1点出土している。



第16図 3号住居址

0 2m



第17図 3号住居炉址

3号住居址 (第16図)

調査区の南西部、38～40—B06～08グリッドに位置している。本住居址のある部分は、表土がかなりの削平を受けていたために、地表下20cm程で確認された。近・現代の耕作溝等により南側は壊された部分はかなり見られたが、比較的住居の掘形がしっかりしていたため、平面形状はかなり明瞭に把握することができた住居址である。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-11°-Wである。規模は560×400cmで壁高は最も残りの良い北壁で約20cm、西および東壁では約10cmである。各壁の立ち上がりはかなり緩やかである。

柱穴はPit 1～Pit 6が主柱穴と思われ、各壁際には用途不明のPitが見られる。また住居南より、耕作溝によって半分失われたPitが2本並んでおり、入り口部の施設に関連するものか

も知れない。各Pitの規模はPit 1が60×52cm、Pit 2が40×37cm、深さ56cm、Pit 3が(45)×(30)cm、深さ29cm、Pit 4が55×54cm、深さ45cm、Pit 5が51×45cm、深さ57cm、Pit 6が50×46cm、深さ37cmである。床面の状態はほぼ平坦であったが、若干中央部がくぼんでおり、硬く締まっていた。特に貼り床は認められず、地山を掘って床としている。

炉址 (第17図) 中央やや北寄りに位置する。偏平な石を南北に2個並べ、北側の石の両側に長さ10cm

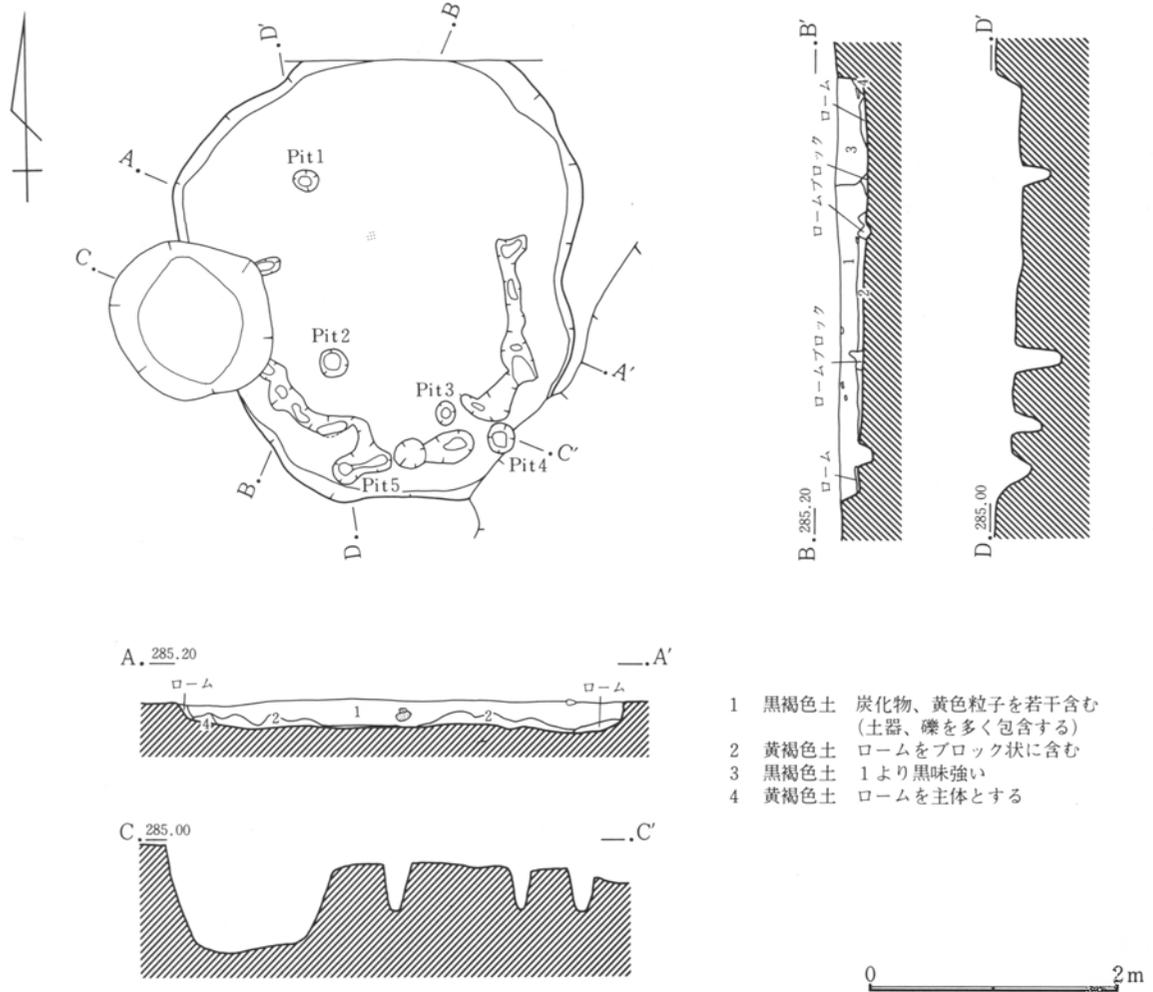


第18図 3号住居址遺物出土状態

第I章 三原田城遺跡

程の川原石を据えた石敷炉である。それぞれの石は床面にしっかりと埋め込まれている。焼土は炉の南側前面に見られた。

遺物出土状態（第18図） 土器98点、石器31点出土している。両者ともに床面直上、ないしはやや浮いた状態で出土しており特に深鉢78は炉の南側で一個体分が潰れた状況で床面直上より出土している。石器は31点が出土しており、石鏃、石匙類の出土が目立つ。

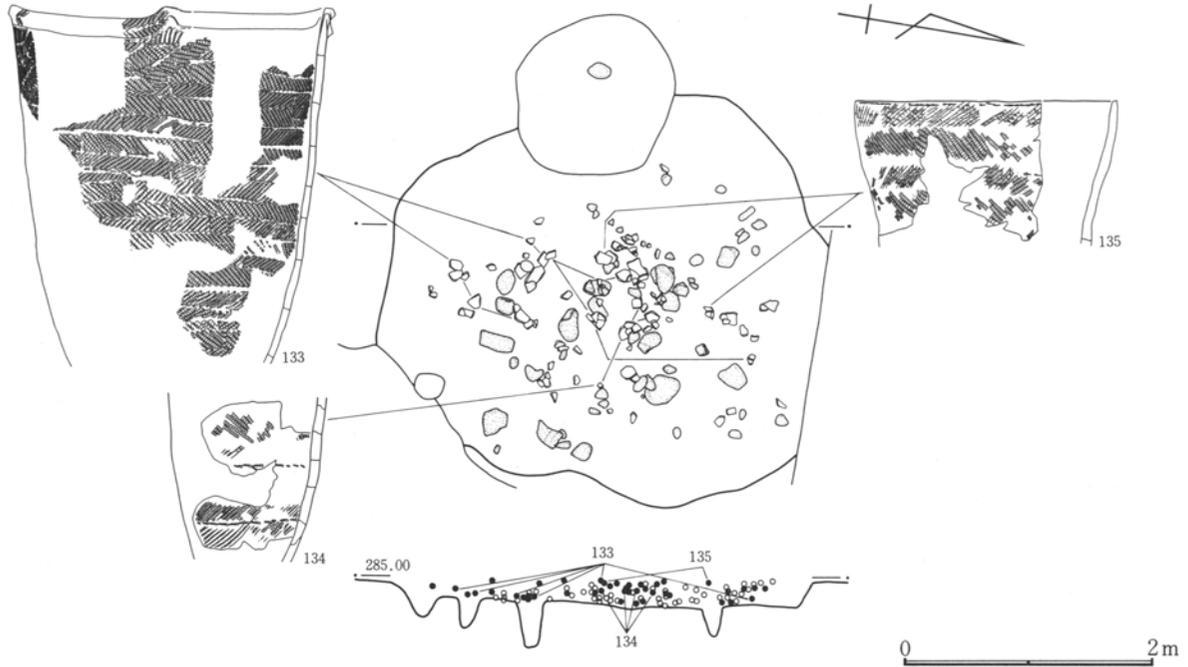


第19図 4号住居址

4号住居址（第19図）

調査区西寄り、1号住居址の西に一部重複して検出された小形の住居址である。39～40—B24～26グリッドに位置する。平面形状はやや南北に長い不正円形を呈す。西側には径120cm程の土塙が重複する、さらに北側部分は東西に走る1号溝によって壁の一部を削られている。

住居址の規模は長軸370×320cmで、壁の高さは平均20cm程である。床面は比較的平坦でかなり強く踏み締められている。柱穴と思われるものはPit 1～Pit 4が検出されている。それぞれの規模はPit 1が径20cm Pit 2が径24cm、深さ38cm、Pit 3が径18cm、深さ32cm、Pit 4が径25cm、深さ30cmである。また南側から東側の壁に沿って「U」字状にPitが溝のように連なっていた。さらに南側入口部と考えられる場所にはPit 4、Pit 5が120cmの間隔を置いて掘り込まれている。



第20図 4号住居址遺物出土状態

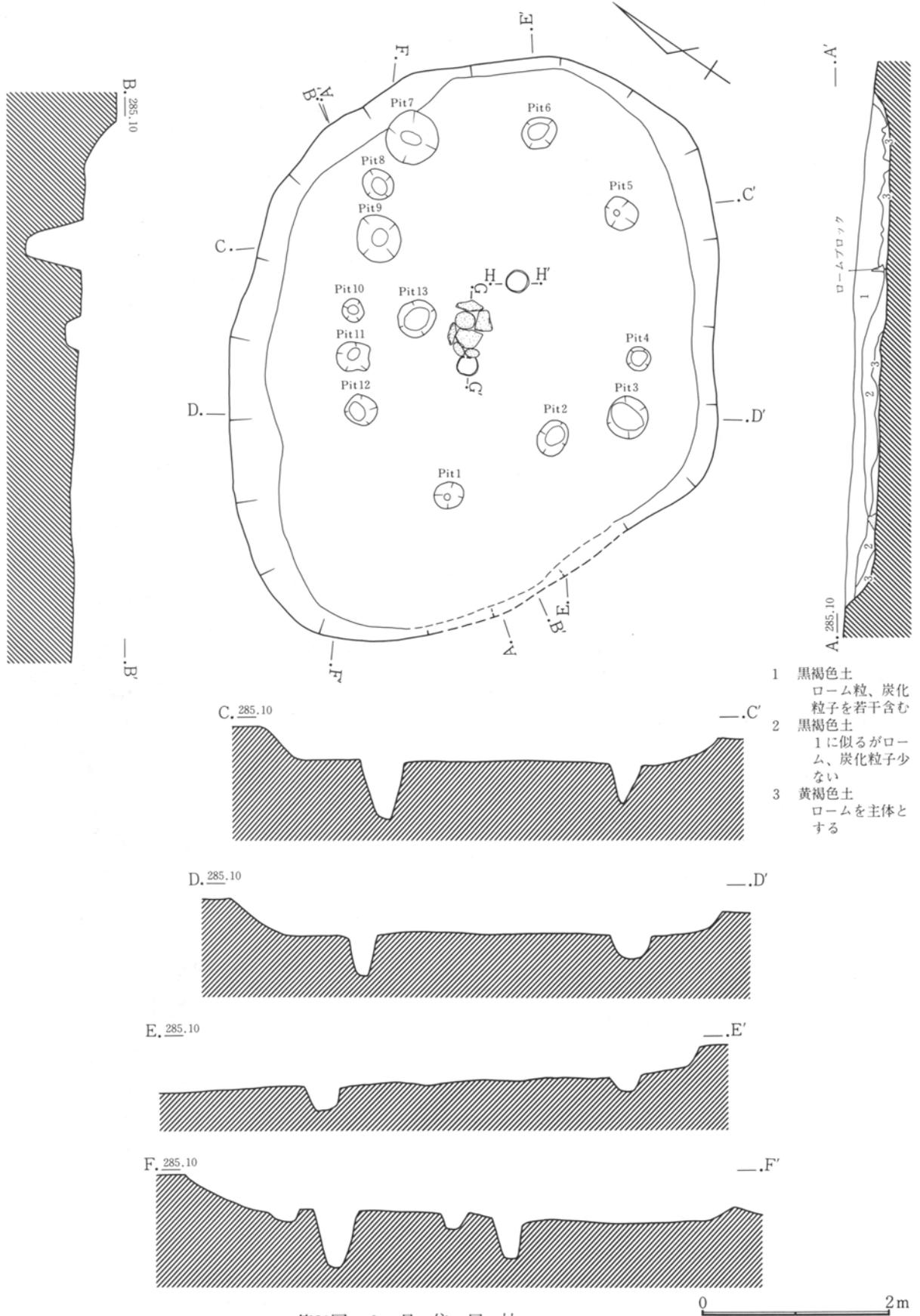
炉址 地床炉である、住居のほぼ中央に僅かではあったが焼土が認められた。周りからは拳大の礫が出土している。

遺物出土状態（第20図） 出土遺物は土器片、石器20点、剥片、礫等であるが、多くは覆土の上層から出土している。住居址の中央部分を中心に礫、特に径3～5cm内外のものが目立ち、多くは床面との間に間層を挟んだ状況であった。深鉢133は炉の南側で床面直上よりの出土である。

6号住居址（第21図）

調査区最南端18～21—A43～45グリッドにて検出した。平面形状は不正長円形を呈し、南側部分は上部が削平されていることもあり不明瞭であるが、かなり直線的になるようである。規模は600×500cmである。各壁の立ち上がりは緩やかで、ことに北西、南東側が顕著である。壁高は20～30cm程であるが、南側については削平によりほとんど確認できなかった。主軸方向はN—53°—Eである。柱穴は計13カ所を認めたが规格的な対応関係は無く、壁に沿うようにほぼ一周する。それぞれの規模はPit 1が径30cm、深さ11cm、Pit 2が径35cm、深さ30cm、Pit 3が径43cm、深さ27cm、Pit 4が径25cm、深さ23cm、Pit 5が径35cm、深さ41cm、Pit 6が径39cm、深さ25cm、Pit 7が径54cm、深さ41cm、Pit 8が径30cm、深さ13cm、Pit 9が径46cm、深さ62cm、Pit10が径25cm、深さ25cm、Pit11が径30cm、深さ25cm、Pit12が径35cm、深さ38cm、Pit13は径40cm、深さ13cmである。床面はほぼ平坦であるが、南へ向かって緩く傾斜する。掘り込みの面のロームをそのまま地床としており、中央部から壁に向かって緩く立ち上がる。

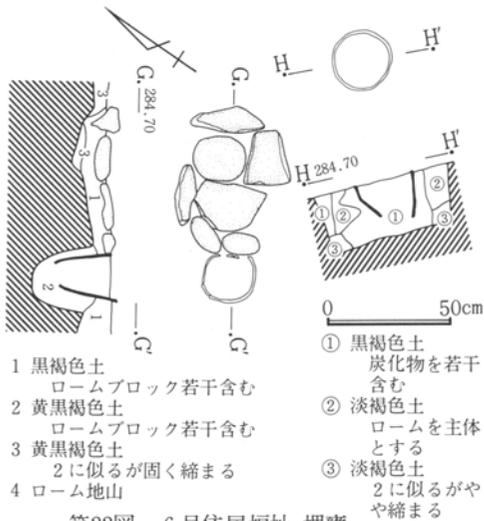
炉址（第22図） 中央部に設けられた石組炉である。径20cm程の丸く偏平な石とやや角張った石を敷き、北側、西および東側を大きめな礫で囲み、南側に2個の小判状の川原石を置いている。さらにその前面に深鉢を埋設している。なおこの炉の東側50cmの所にも埋設土器が検出されており、周辺部に若干の炭化物が見られた。



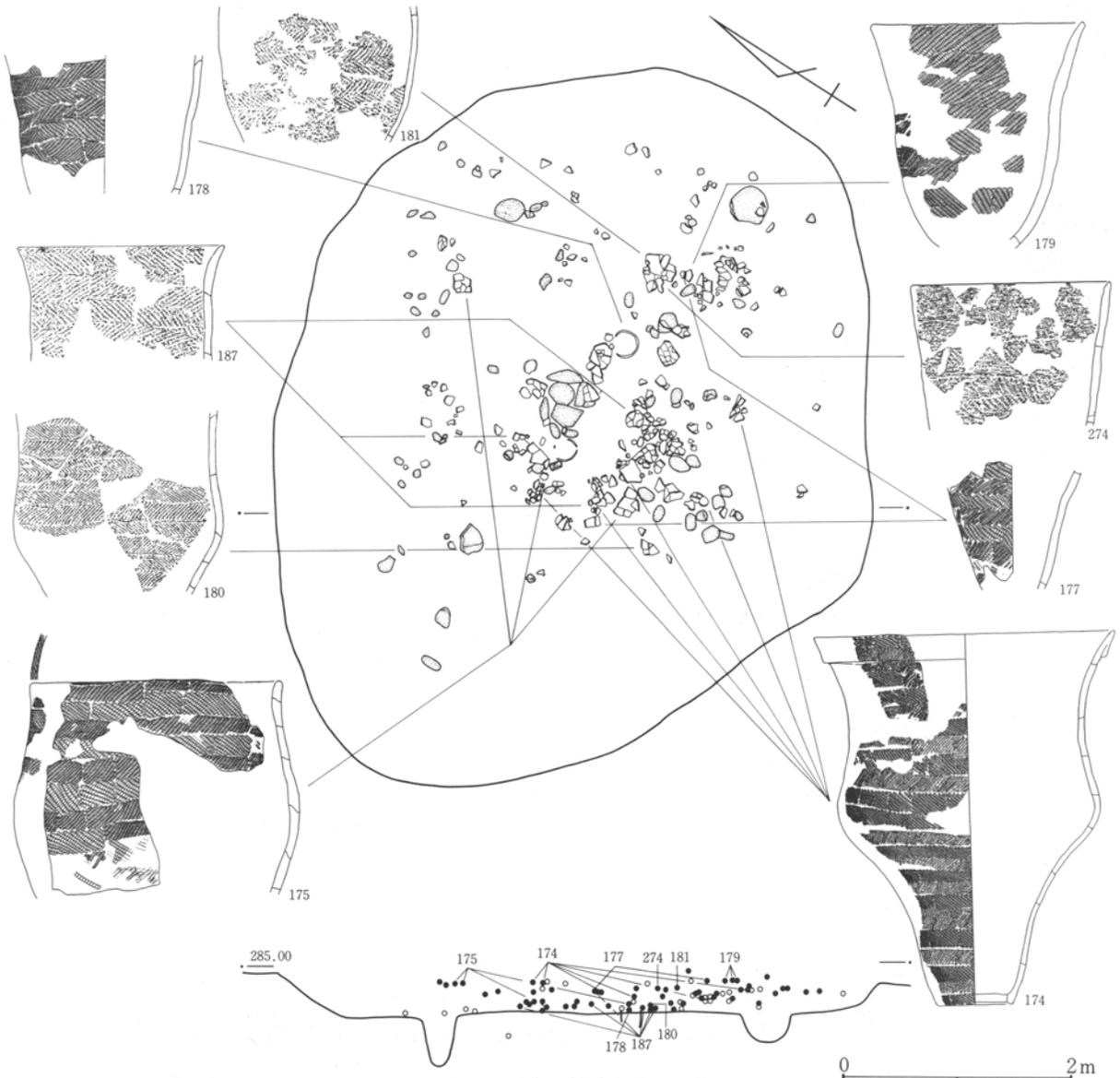
第21図 6号住居址

第4節 遺構と遺物

遺物出土状態（第23図） 本址は確認時点で表土からの掘り残された部分に掛かって検出されたため住居址の覆土が厚く、出土した土器、石器の量は多かった。土器に関しては総数500点が覆土内、床面より出土している。床面近くでは中央に設けられた炉の周辺を中心に集中して破片が出土している。石器は総点数97点である、主な器種は打製石斧、スクレイパー、石匙、石鏃、磨石等である。なお本址より出土した埋甕のうち、炉址の南側に検出されたものは残念ながら遺失してしまった。（写真図版）



第22図 6号住居炉址・埋甕



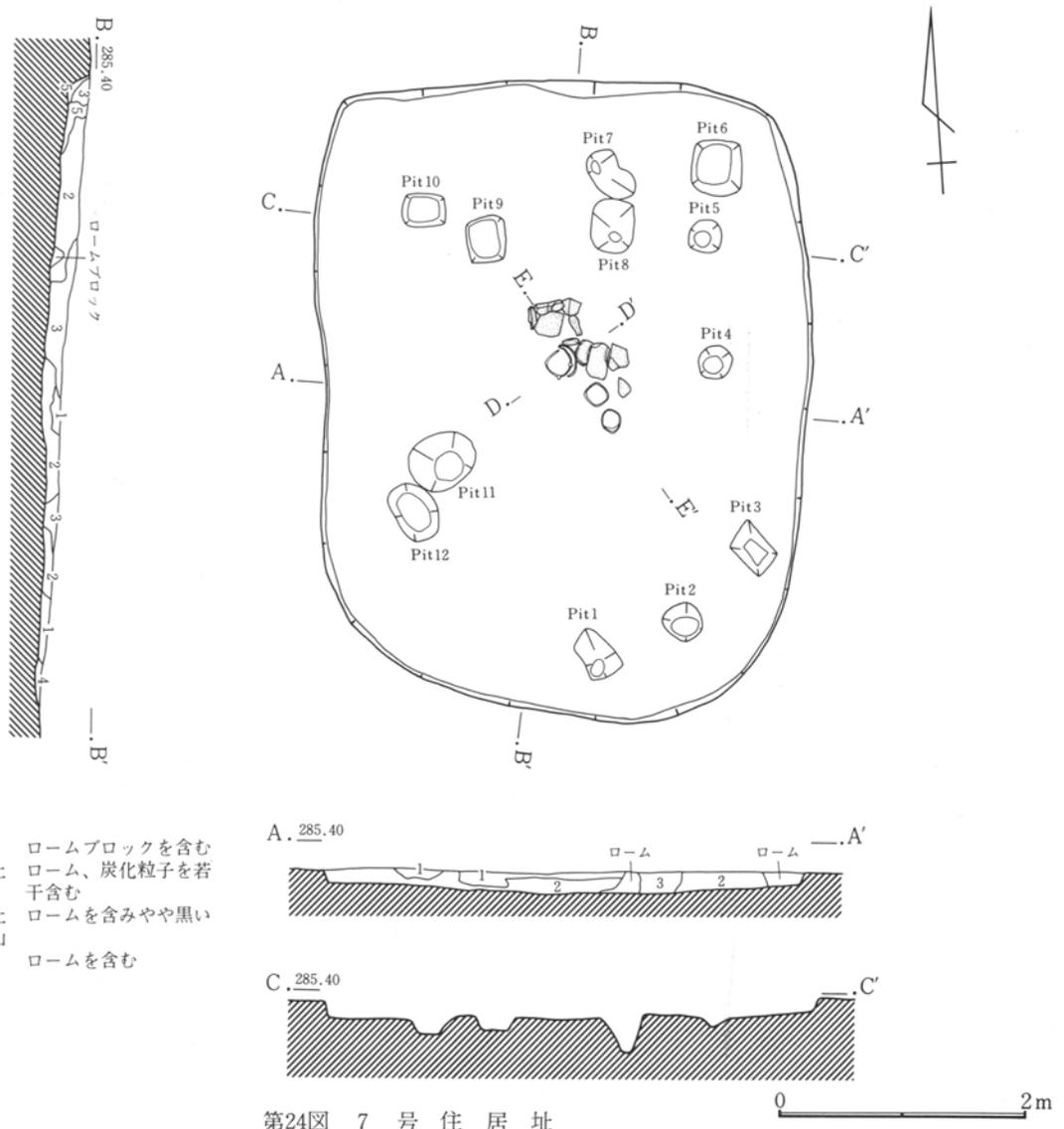
第23図 6号住居址遺物出土状態

7号住居址 (第24図)

調査区南寄り、21~22-A46~48グリッド6号住居址の北西1m程のところに位置する。平面形状は隅丸長方形であるが、南辺がやや膨らむ。規模は510×399cmで主軸方向はN-5°-Eである。確認された掘り込みはかなり浅く、ことに南側については推定部分もある。全体的に壁の高さは5~10cmと余り高くない。

柱穴はPit1~Pit12を検出した。それぞれの規模はPit1が42×28cm、深さ28cm、Pit2が径32cm、深さ35cm、Pit3が40×25cm、深さ27cm、Pit4が径28cm、深さ13cm、Pit5が径26cm、深さ10cm、Pit6が46×40cm、深さ11cm、Pit7が47×28cm、深さ29cm、Pit8が44×35cm、深さ42cm、Pit9が38×31cm、深さ23cm、Pit10が35×29cm、深さ27cm、Pit11が55×48cm、深さ6cm、Pit12は50×34cm、深さ13cmである。床面の検出は一部に止どまったが、かなり平坦を為す。

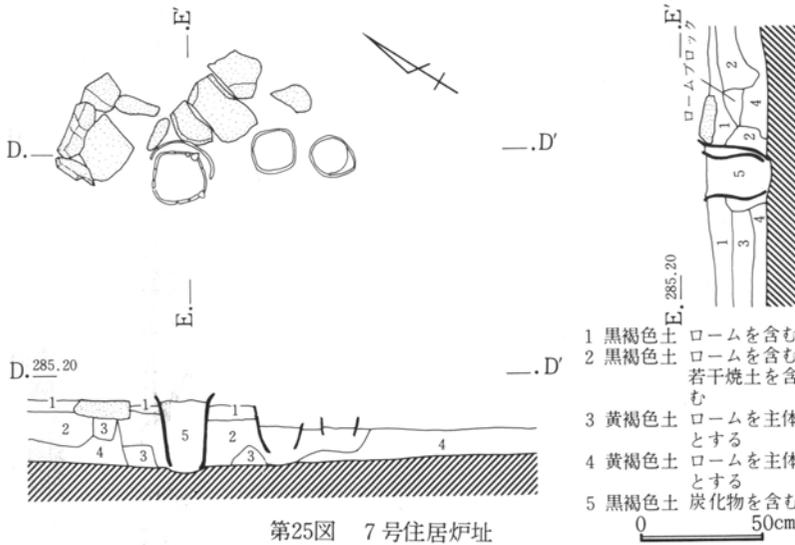
炉址 (第25図) 住居址のほぼ中央に検出した。石組炉である、偏平な角礫を中央に置き、その周囲を「コ」の字状に囲んだものと、3個の礫を並べたものとが接して作られている。さらにその間には埋甕が見られる。中央に4箇所の把手を持つ深鉢と、これに添えられるように3分の1周程廻る深鉢、その南に2個の深鉢の胴部が並ぶ。これら埋設土器の内部、周囲からは若干の焼土、炭化粒子が認められた。



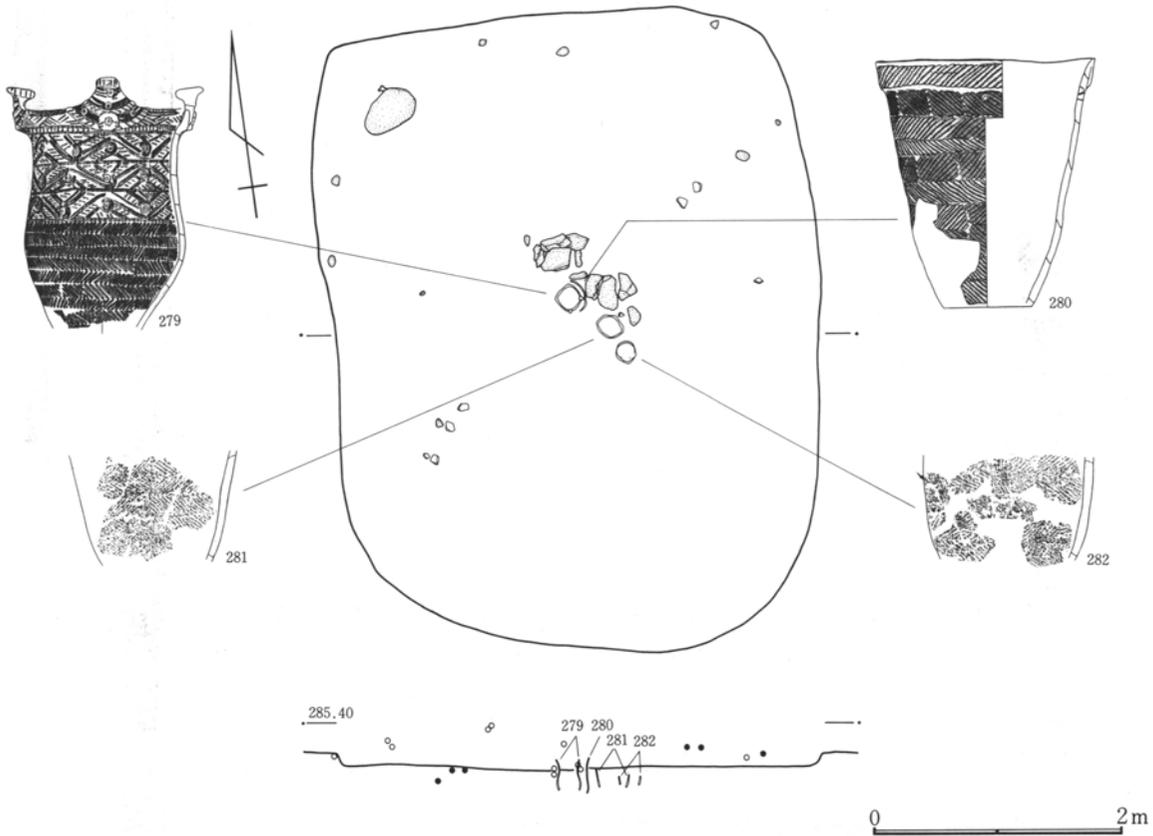
第4節 遺構と遺物

遺物出土状態 (第26図)

本址より出土した土器に関しては、4個体分の埋設土器の他は、破片が僅かに見られたのみである。石器も15点と少なく、石鏃、石匙が目立つ。



第25図 7号住居炉址



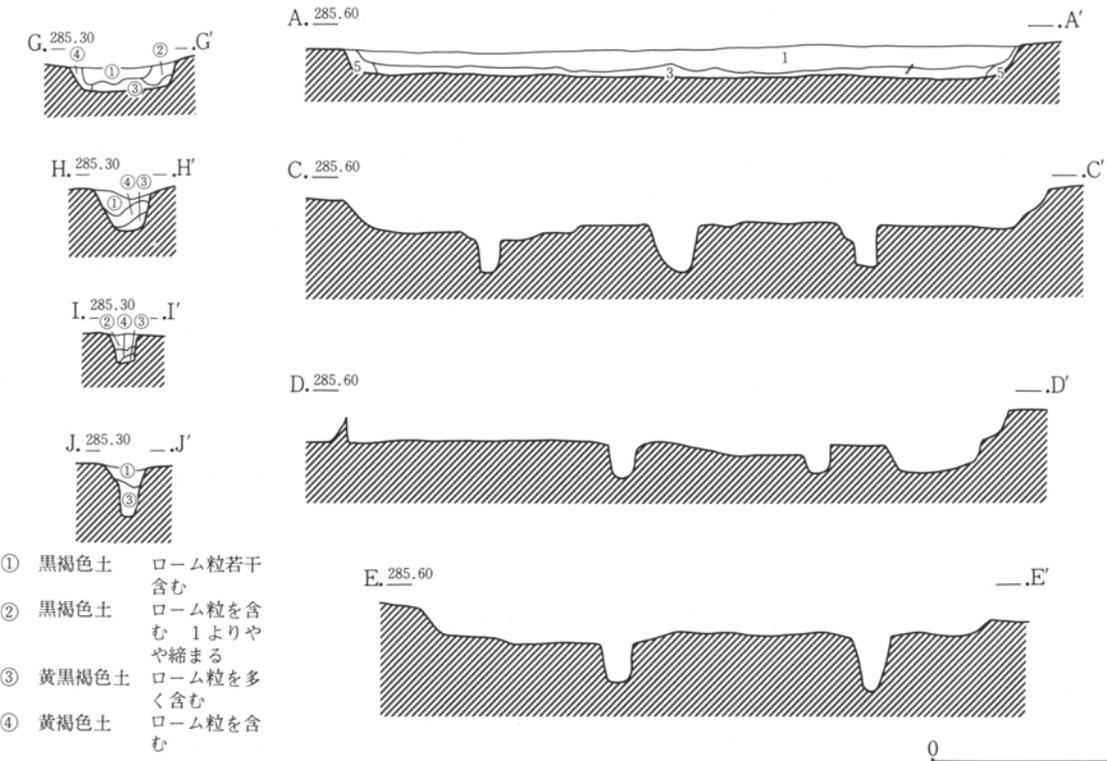
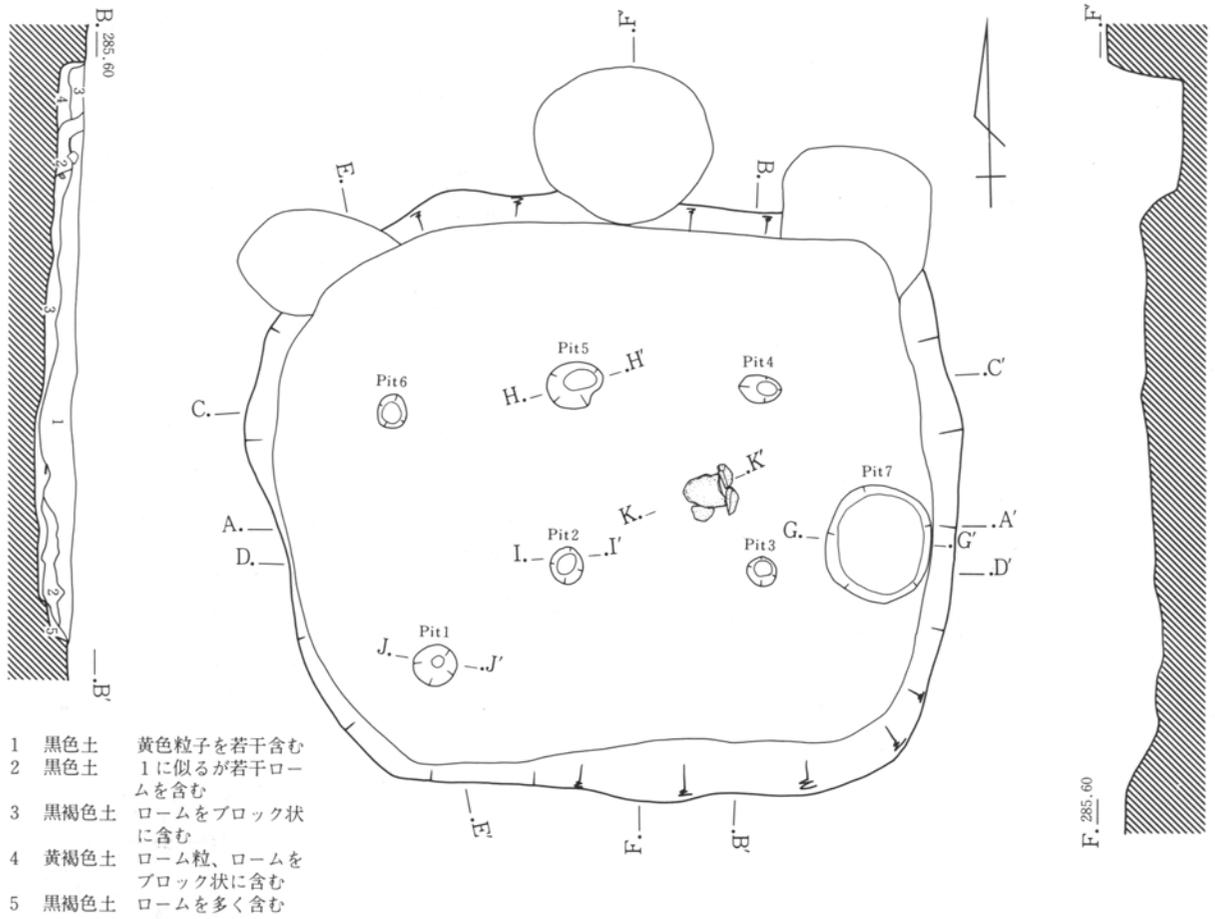
第26図 7号住居址遺物出土状態

8号住居址 (第27図)

調査区南寄り、7号住居址と9号住居址の間、17~19-A49~B00グリッドに位置する。隅丸長方形を呈し北壁部分に128・129・130号土壌が並んで重複する。住居址の規模は550×470cmで、主軸方向はN-91°-Eである。壁高は30cm程であるが、各壁の立ち上がり状況は緩やかで特に北辺については土壌が重複している関係もあり不明瞭である。床面は緩やかな凹凸を持ち、南側がやや低くなっている。

柱穴はPit 1 ~ Pit 6 の計6本を検出した。それぞれの規模はPit 1 が径35cm、深さ45cm、Pit 2 が径30cm、深

第I章 三原田城遺跡



第27図 8号住居址

0 2m

さ24cm、Pit 3 が径24cm、深さ18cm、Pit 4 が径23cm、深さ34cm、Pit 5 が径44cm、深さ38cm、Pit 6 は径24cm、深さ30cmである。Pit 7 は東壁際に掘り込まれており、規模は93×84cm、深さ22cmである。

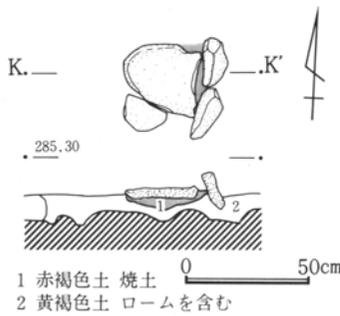
炉址（第28図） 中央やや東寄りに設けられている。破損したやや大形の石皿を据え、その東側に2個の礫を、南にやや偏平な石を据えている。

遺物出土状態（第29図） 出土した土器の総点数は73点、石器は32点であった。炉の周辺、および住居址の北側に多く散在する傾向が見られたが、多くは床面との間に間層を挟む。

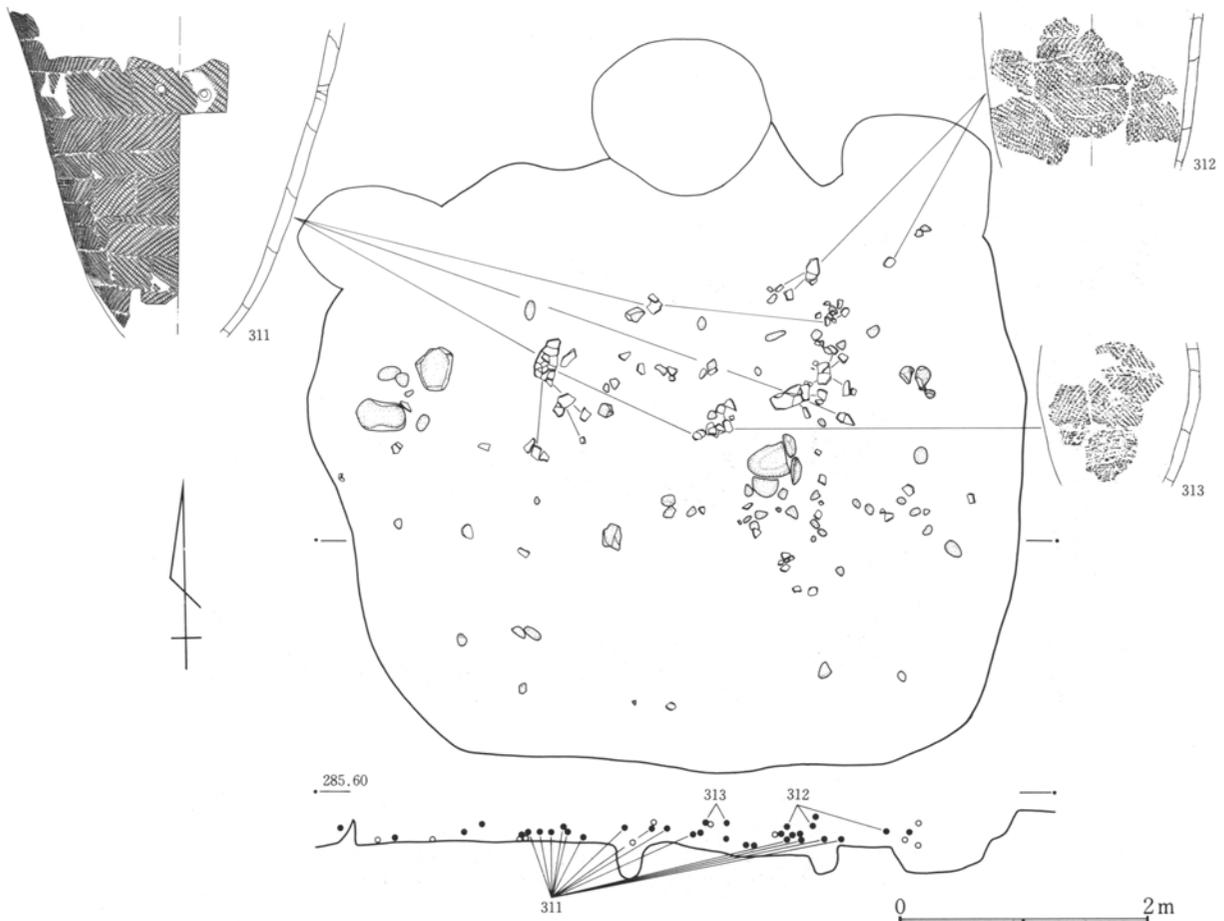
9号住居址（第30図）

調査区南東部、13～15—B00～02グリッドに位置する。平面形状は隅丸長方形を呈すが、長辺部がやや外側へ膨らむ。主軸方向はN-66°-Eである。各壁の立ち上がりは緩やかで、特に北側部分については明確な立ち上がりの線は捉えられなかった。また50・52・53・70号土壌が周囲1m内外に近接して掘り込まれている。住居址の規模は、490×450cmで、壁高は平均30cmである。床面はかなり軟弱で、若干の凹凸が見られ、特に住居址北側部分が顕著であった。

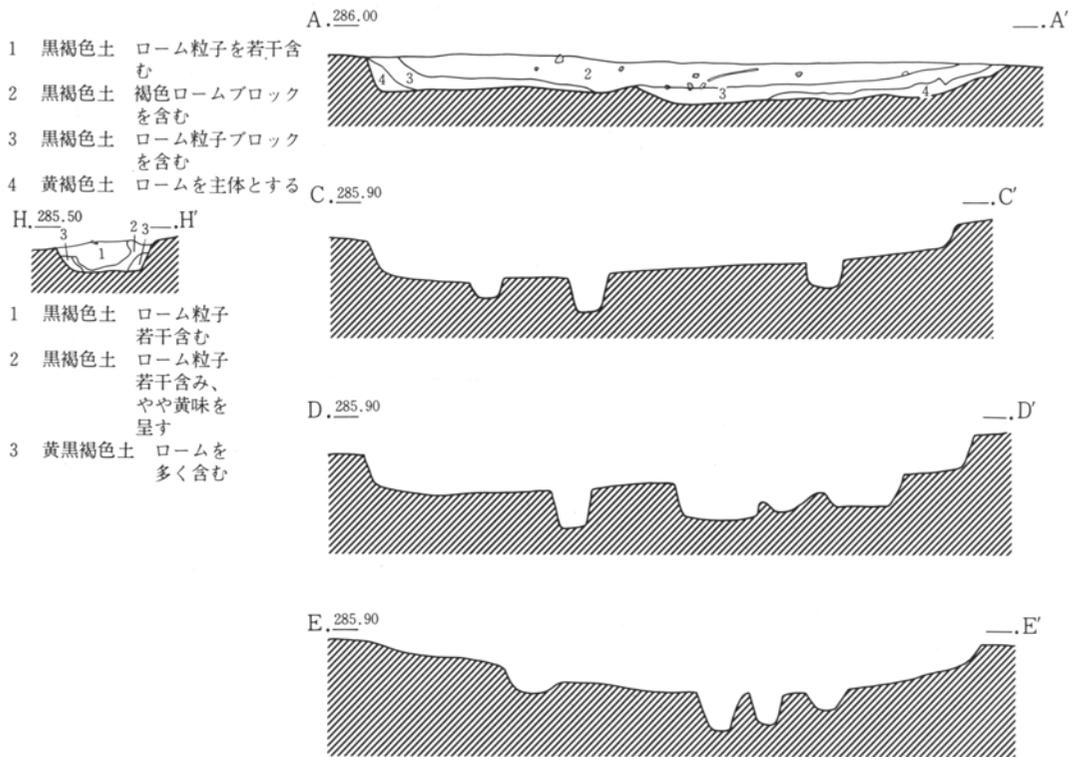
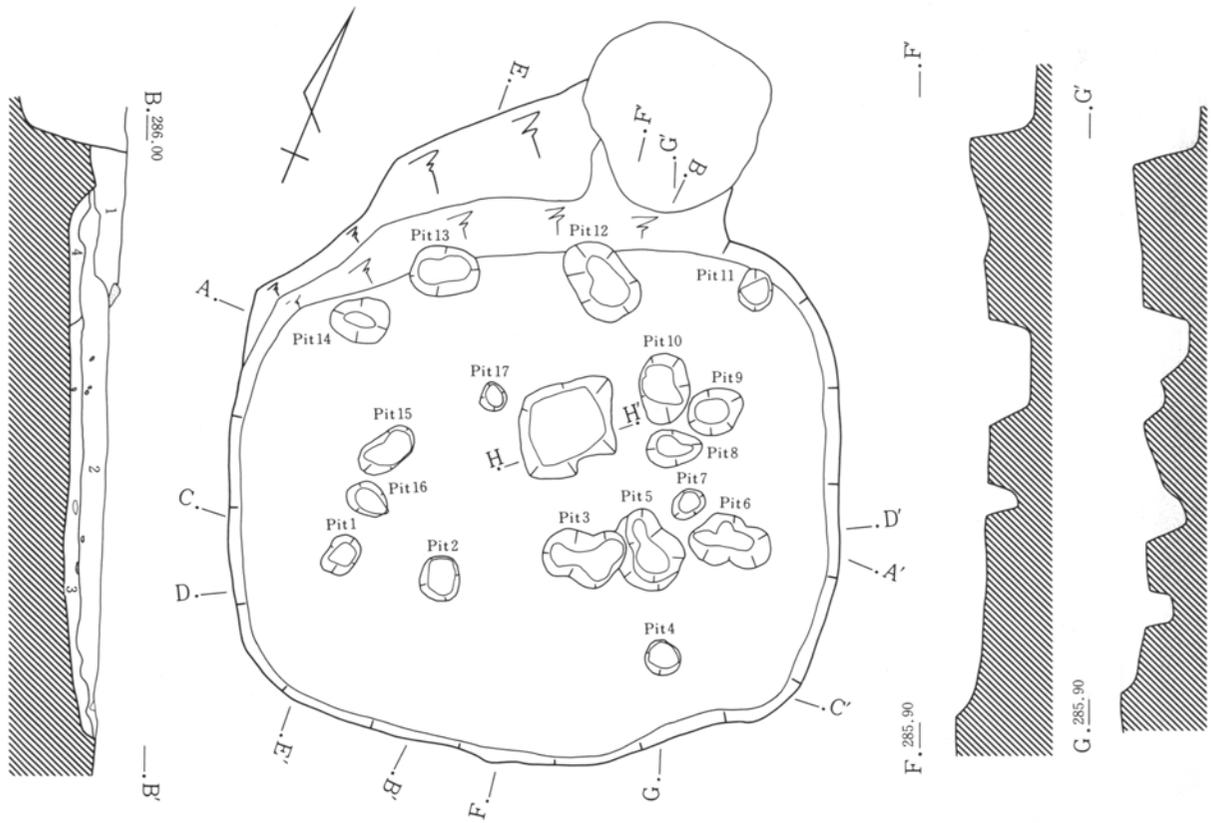
柱穴はPit 2、Pit 5、Pit 10、Pit 15の4本を主柱穴とし、他のものは補助的なものと思われる。それぞれの規模はPit 1 が34×26cm、深さ20cm、Pit 2 が38×33cm、深さ32cm、Pit 3 が68×44cm、深さ27cm、Pit 4 が径29cm、



第28図 8号住居炉址



第29図 8号住居址遺物出土状態



0 2m

第30図 9号住居址

第4節 遺構と遺物

深さ22cm、Pit 5が67×50cm、深さ25cm、Pit 6が67×39cm、深さ28cm、Pit 7が30×22cm、深さ37cm、Pit 8が46×32cm、深さ23cm、Pit 9が48×39cm、深さ37cm、Pit10が58×42cm、深さ36cm、Pit11が34×29cm、深さ19cm、Pit12が72×48cm、深さ26cm、Pit13が54×40cm、深さ25cm、Pit14が49×38cm、深さ11cm、Pit15が50×26cm、深さ30cm、Pit16が36×26cm、深さ24cm、Pit17が24×18cm、深さ25cmである。

炉址 明確なものは検出できなかった。住居址のほぼ中央に若干の炭化物が見られ、他の部分に比べ僅かにくぼんだ状況を示した。

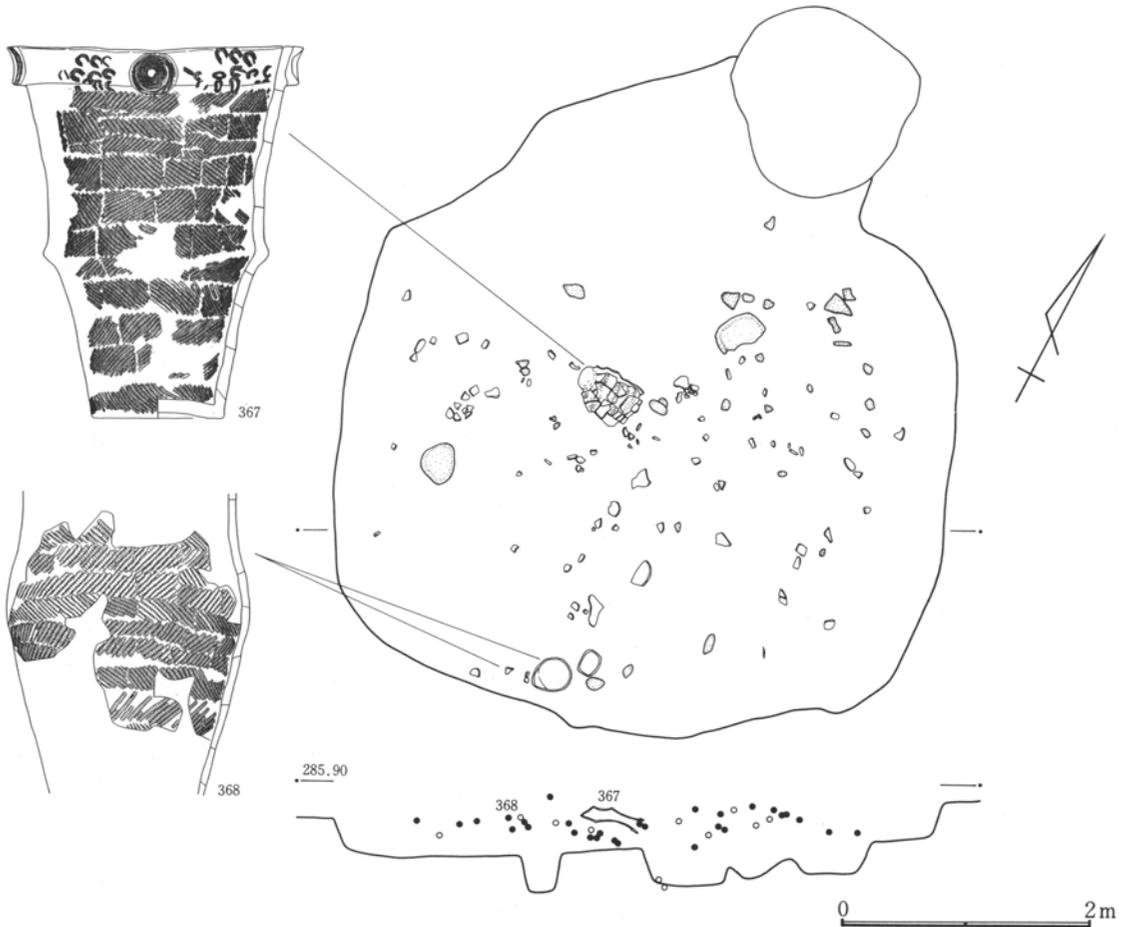
遺物出土状態 (第31図) 住居址の北側に多く出土している。土器49点、石器は32点で石鏃、石匙類が目立った。土器については、367が中央やや北寄りで床面より約20cm程浮いて、横倒しに押し潰された状態で出土した。

10号住居址 (第32図)

調査区南東の壁際、10-12-B01-04グリッドにて検出した。平面形状は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-46°-Eである。北東側の壁は不明確で重複があるものと考えられるが、拡張の可能性もある。規模は520×410cmで壁高は10cm内外であるが、北東側は残っていない。

床面は比較的平坦をなすが中央部が緩やかに低くなっており、北側はやや高まっている。

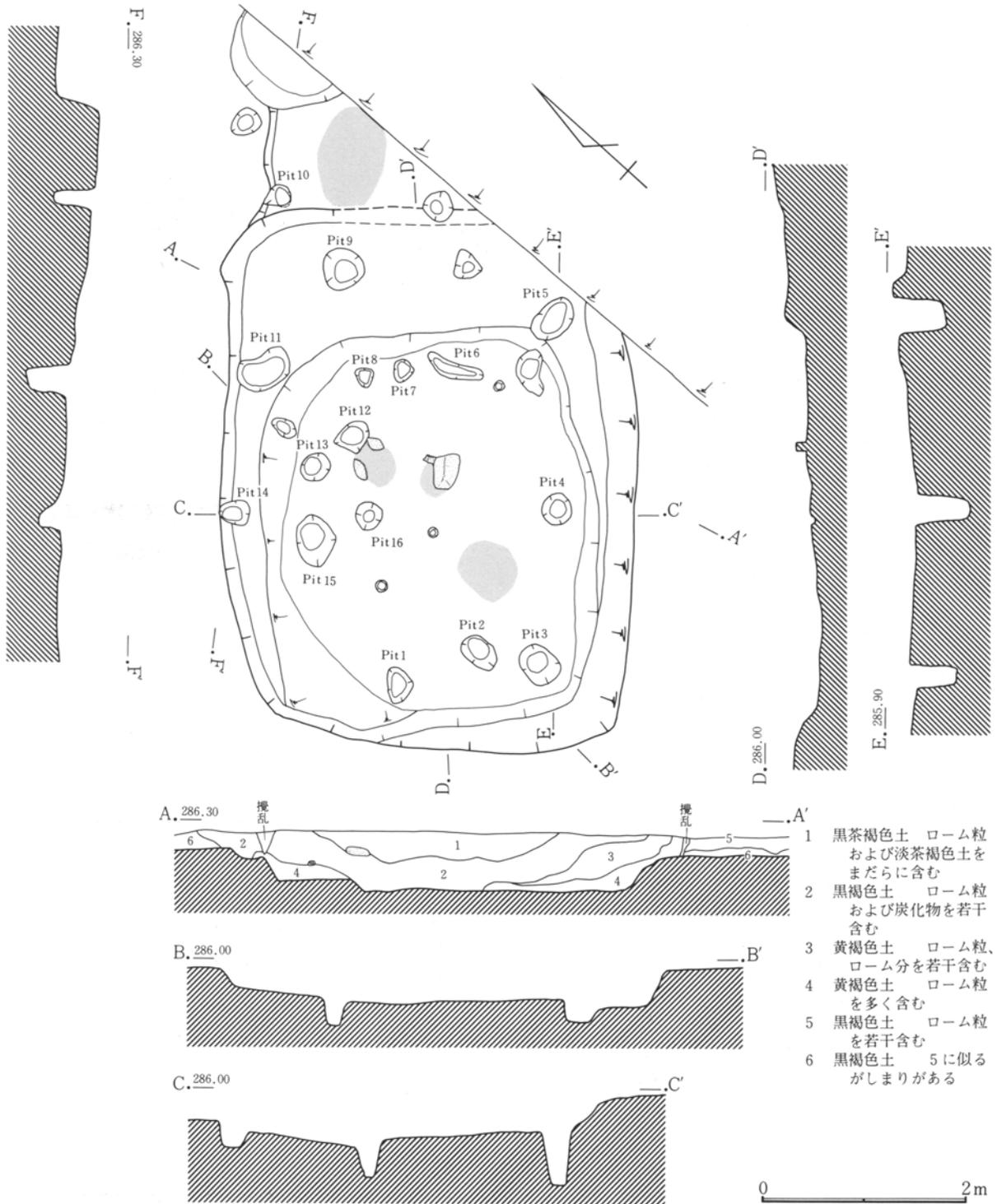
Pitは総数16カ所が検出されたが、主柱穴はPit 4、Pit 5、Pit 9、Pit15、の4本であると思われる。それ



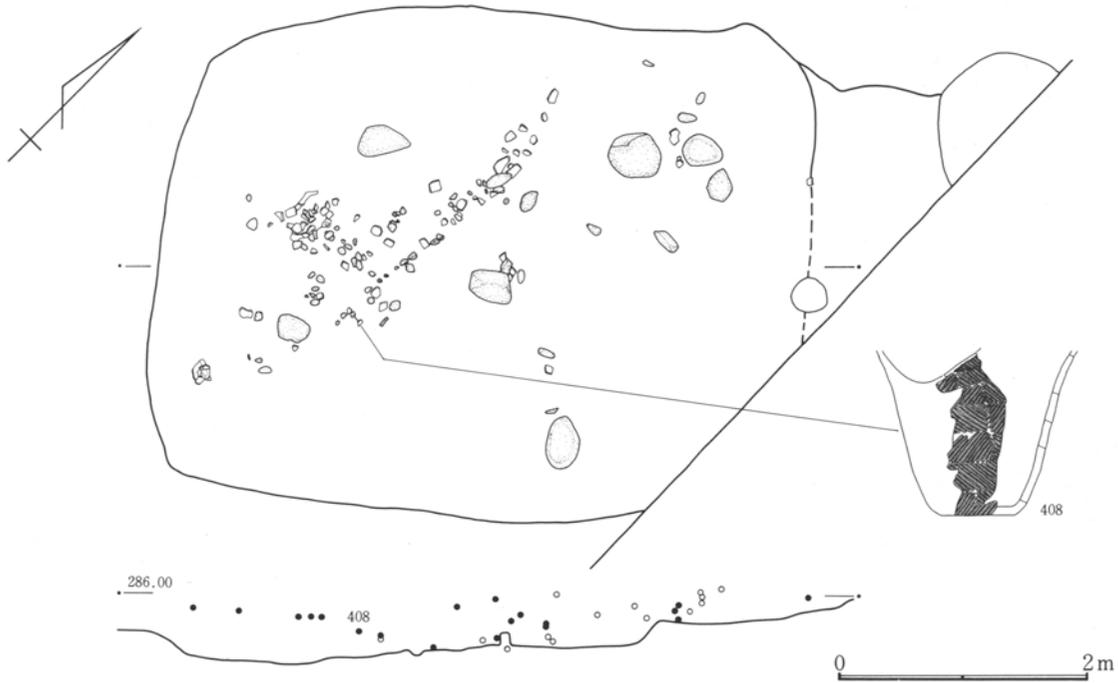
第31図 9号住居址遺物出土状態

第I章 三原田城遺跡

それぞれの規模はPit 1が35×26cm、深さ16cm、Pit 2が40×25cm、深さ11cm、Pit 3が42×33cm、深さ41cm、Pit 4が32×30cm、深さ54cm、Pit 5が47×32cm、深さ48cm、Pit 6が59×14cm、深さ25cm、Pit 7が22×20cm、深さ12cm、Pit 8が20×17cm、深さ20cm、Pit 9が42×40cm、深さ20cm、Pit10が29×22cm、深さ38cm、Pit11が55×32cm、深さ39cm、Pit12が36×30cm、深さ20cm、Pit13が30×28cm、深さ25cm、Pit14が30×24cm、深さ19cm、Pit15が50×38cm、深さ42cm、Pit16が28×27cm、深さ37cmである。



第32図 10号住居址



第33図 10号住居址遺物出土状態

炉址 中央のやや低くなった所に3ヶ所の焼土を検出した。中央のものは径39cm程で北側に礫を据えている。その西にあるものは径40cm程でやはり2個の川原石が据えられている。南側のものは径60cm程の広がりを持つ。なお、北東部他の遺構との重複部分において96×60cmの範囲に焼土を認めた。

遺物出土状態(第33図) 土器の出土はあまり多くはなく、破片類が中央部に散在した状態で出土した。石器は33点出土している。北東部で石皿、台石が、北西隅で磨製石斧が出土している。

表3 住居址一覧表

住居址	時期	形状	長軸(m)	短軸(m)	面積(m ²)	周溝	柱穴	炉形式	備考
1号住居址	諸磯b	隅丸方形	6.2	6.0	37.2	無	0	地床炉・埋甕	
2号住居址	花積下層	長円形	4.6	3.0	13.8	無	0	地床炉	
3号住居址	花積下層	隅丸長方形	5.6	4.0	22.5	無	6	石組炉	
4号住居址	花積下層	円形	3.7	3.2	11.8	有	4	地床炉	小形である。
6号住居址	花積下層	長円形	6.0	5.0	30.0	無	13	石組炉・埋甕	
7号住居址	花積下層	隅丸長方形	5.1	3.9	19.9	無	12	石組炉・埋甕	握り込み少ない。
8号住居址	花積下層	隅丸長方形	5.5	4.7	25.8	無	5	石組炉	
9号住居址	花積下層	隅丸長方形	4.9	4.5	22.1	無	14	石組炉	
10号住居址	花積下層	隅丸長方形	5.2	4.1	21.3	無	4	地床炉	

※5号住居址は古墳時代

第I章 三原田城遺跡

(2) 土 壙

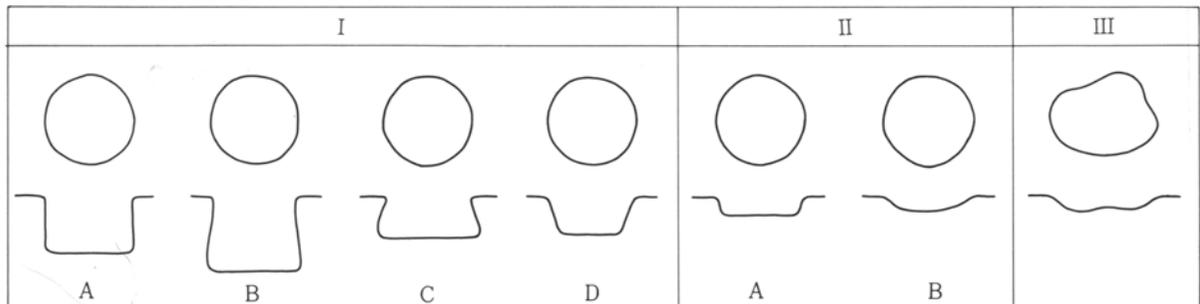
本遺跡で検出した縄文時代における総数は126基であった。これらの分布状況は、住居址が台地の南側縁辺部に位置しているのに対して、中央部から南にかけて広がりを見せており、B30ライン以北には1基見られるのみである。調査区東側、調査区外へはさらに広がって行くものと推定される。

現況では三原田城址の外堀により中央部分は削り取られているが、その部分にもかなりの数存在していたものと思われる。

土器の出土は全体の約7割に見られ、これら出土土器により判断される時期を見ると、花積下層式期のものが全体を占めており、縁辺に作られた住居址に取り囲まれるように検出されている、諸磯式期のものが1号住居址の周辺に4基と調査区東寄りに点在するが数は少ない。その他の時期のものは検出されておらず、住居址の時期と一致している。遺物の出土量は多いとは言えないが、ほぼ完形に近い土器を出土したものや、石器についても磨石、石皿が目立つものや、玦状耳飾り、玉篋などの出土が見られる。

各土壙の形態を見ると、多くは径1m内外の円形を呈している、深さは0.5～1m程のものが主体を占めている。断面形は円筒状、フラスコ状、浅くレンズ状、フライパン状を呈するものがある。また人為的なものとは思われないものも若干含まれている。いわゆる落とし穴状土壙と呼ばれる長円形を呈し、底にピットを持つものは検出されなかった。

平面、断面形の違いから以下のように分類を行い一覧表中に記した。



第34図 土壙分類模式図

Iは平面形が円形を基本とするものをまとめた。本遺跡内で最も多く見られ、大きさについてはかなりのばらつきが見られる。出土遺物は比較的多い。

Aはほぼ垂直に掘り込まれ、底は平坦となる。出土遺物多い。

Bは掘り込みが深く、壁がややオーバーハングしたものもある。

Cは断面フラスコ状となる。

Dは壁がやや斜めに掘り込まれ、底がやや狭くなる。

IIは平面形が円、または長円形を呈し、掘り込みがかなり浅いものをまとめた。

A断面フライパン状で底は比較的平坦である。

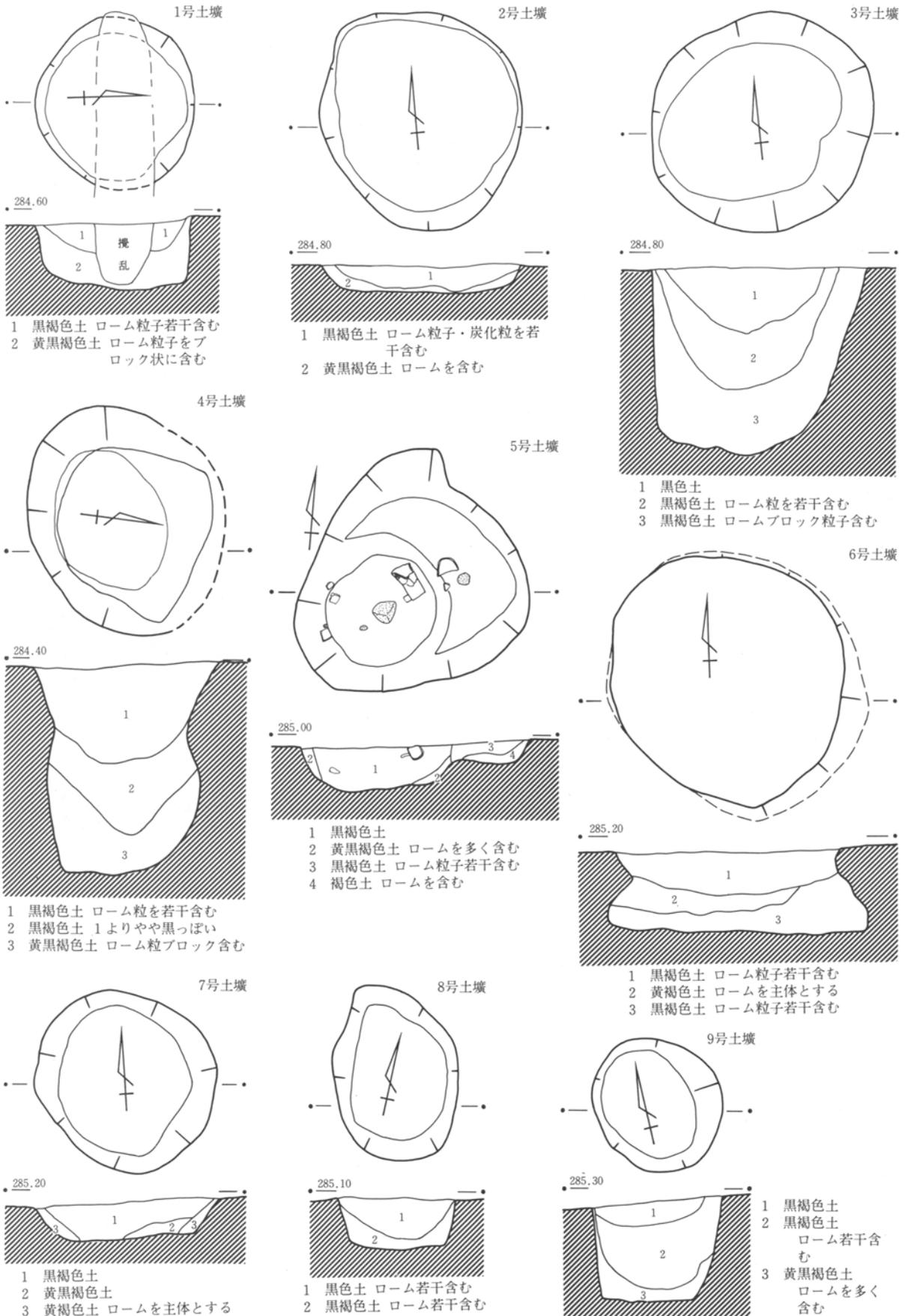
Bはなだらかに掘り込まれており、底は丸みを持つ。

IIIは平面形が不定形で掘り込みも浅い、底は凹凸が目立つ。自然の落ち込みと思われるものもある。



第35図 土城分布図

第I章 三原田城遺跡

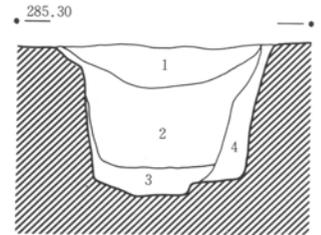
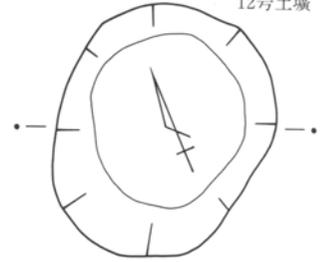


第36図 土 坑 (1)

0 1m

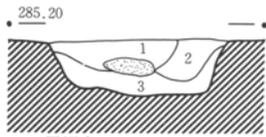
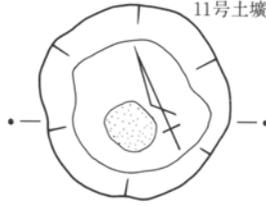
第4節 遺構と遺物

12号土壇



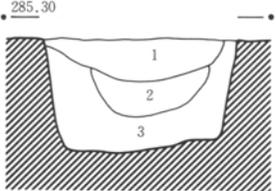
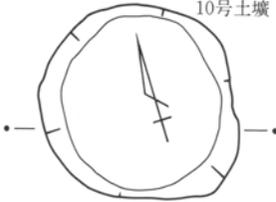
- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土 ローム粒含む
- 3 淡褐色土 粘質ローム含む
- 4 黄黒褐色土 ローム粒子を多く含む

11号土壇



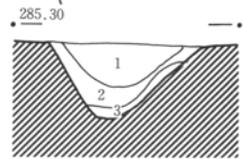
- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土 ローム若干含む
- 3 黄黒褐色土 ロームを多く含む

10号土壇



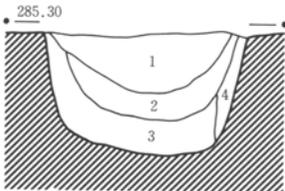
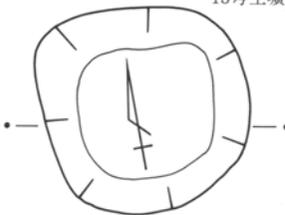
- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土 ローム若干含む
- 3 黄黒褐色土 ロームを多く含む

14号土壇



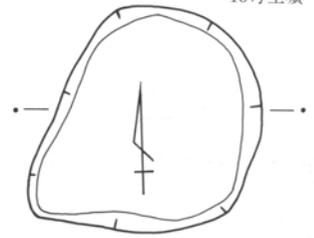
- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土 ローム粒子若干含む
- 3 黒褐色土 ロームを主体とする

13号土壇

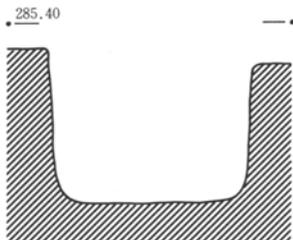
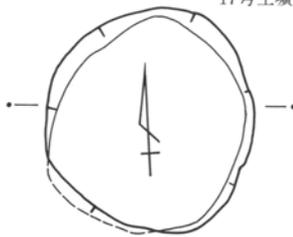


- 1 黒色土 ローム粒若干含む
- 2 黒褐色土 ローム粒含む
- 3 黄黒褐色土 ローム粒含む
- 4 黄褐色土 ロームブロック含む

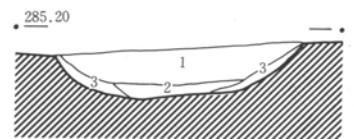
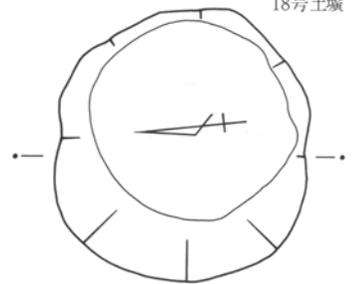
15号土壇



17号土壇

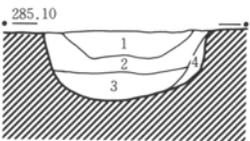
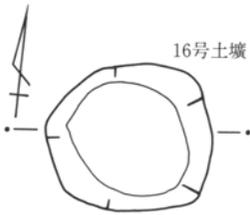


18号土壇



- 1 黒褐色土 ローム若干含む
- 2 黄黒褐色土 ローム多量に含む
- 3 黄褐色土 ロームを主体とする

16号土壇



- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土 ローム含む
- 3 黄黒褐色土 ローム・白色粒子含む
- 4 黒褐色土 ロームを主体とする

第37図 土 壇 (2)

0 1m

第I章 三原田城遺跡

1号土壙 41～42—B01～02グリッドに位置する。調査区南西部、他の土壙とやや離れている。ほぼ中央部を幅40cm程の耕作溝が切る。円形を呈し、垂直に掘り込まれ、底は平らである。規模は120×115、深さ45cmである。土器数片と打製石斧1点が出土している。

2号土壙 西壁際。43～44—B15～16グリッドに位置する。不正円形を呈し、規模は154×143、深さ17cm掘り込みは浅く、底は平らである。出土遺物は土器片と、石鏃が1点出土している。

3号土壙 43～44—B16～17グリッド、2号土壙の北に近接する。平面形はほぼ円形を呈す。規模は158×156、深さ133cm、立ち上がりはほぼ垂直に近く、底はやや丸くなる。出土遺物は土器片、および打製石斧、石匙、スクレイパー、不明、それぞれ1点ずつ出土している。

4号土壙 44～45—B05～06グリッド、西壁に接して位置する。平面形はやや長円形を呈し、規模は153×145、深さ144cmである。壁の下方がややオーバーハングしていたが、崩落によるものと考えられる。出土遺物は土器片、および打製石斧1、スクレイパー2点が出土している。

5号土壙 1号住居地の西側、40—B23～24グリッドに位置する。不正円形を呈し、規模は170×164、深さ32cm、東側に一部中段を持つ。底面にやや凹凸が目立つ。出土遺物は、ほぼ完形の深鉢1点（第77図469）および破片が出土している。

6号土壙 1号住居地の北2m、37～38—B27グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、断面フラスコ状となる。底は平らである。規模は185×185、深さ56cmで底面径は200cmを計る。出土遺物は土器片、およびスクレイパーが2点出土している。

7号土壙 36—B26～27グリッド、1号住居地の北側、15・37号土壙が近接する。平面形は円形を呈し、掘り込みは浅く、底は平らである。規模は130×127、深さ25cm。出土遺物は見られなかった。

8号土壙 36～37—B28～29グリッド、6号土壙の北に接する。形状は不正長円形で規模は120×89、深さ38cmで、底は平らである。出土遺物は土器が数片出土している。

9号土壙 32～33—B27グリッドに位置する。平面は円形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれている。底は平らである。規模は94×92、深さ72cmである。出土遺物は土器数片、石器、打製石斧2点、石匙2点が出土、底より石が1点出土している。

10号土壙 1号住居地の東、33—B25グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、断面はL字状となる。底は平らで、壁は直に立ち上がる。土器片若干およびスクレイパー1点が出土している。覆土上部より礫が出土している。

11号土壙 36～37—B21～22グリッド、1号住居地の南に近接する。平面円形で、規模は102×100、深さ30cmである。底は平らである。覆土中に偏平な石が出土している他、出土遺物は見られない。

12号土壙 1号住居地の南東、35—B21グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、底面形もほぼ同様である。掘り込みは垂直に近い。規模は134×115、深さ78cmである。覆土中より土器片約20片と石槍1点、打製石斧2点が出土している。

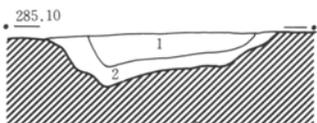
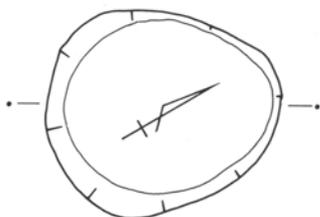
13号土壙 12号土壙の東に位置する34—B21グリッドにある。平面形はやや方円形を呈し、底面形も同様である。断面はU字状を呈し、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。規模は110×108、深さ64cmである。出土遺物は土器片と凹石が1点出土している。

14号土壙 34—B19～20グリッドに位置する。平面形は円形で、断面V字状となる。規模は92×85、深さ42cmである。出土遺物は土器6片、打製石斧1点である。

15号土壙 1号住居地の北に近接、37—B26グリッドに位置する。不正形を呈し、規模は120×112、深さ

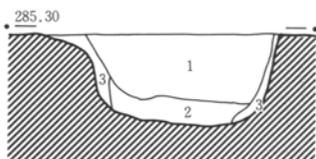
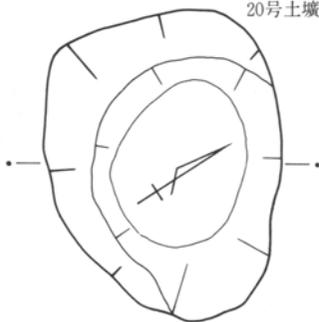
第4節 遺構と遺物

19号土坑



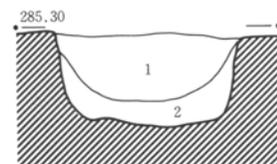
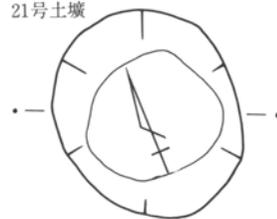
- 1 黒褐色土 ローム若干含む
- 2 黄褐色土 ローム多量に含む

20号土坑



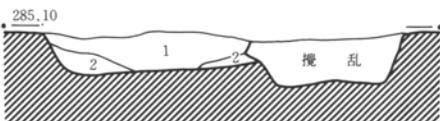
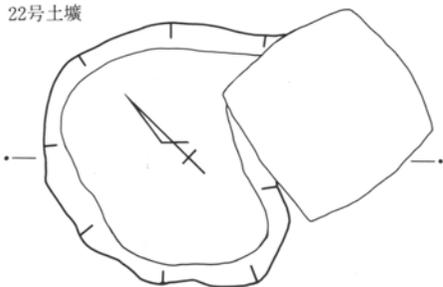
- 1 黒褐色土 ローム粒子若干含む
- 2 黄黒褐色土 ローム粒子多く含む
- 3 黄褐色土 ロームを主体とする

21号土坑



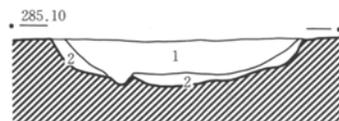
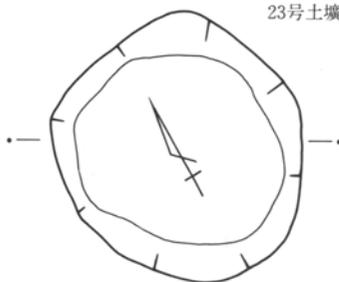
- 1 黒褐色土 ローム粒子若干含む
- 2 黄褐色土 ローム粒子を多量に含む

22号土坑



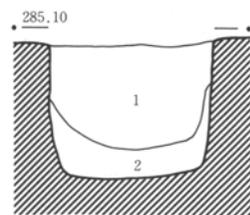
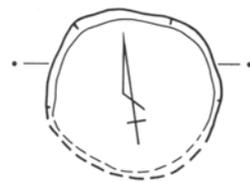
- 1 黄黒褐色土 ローム若干含む
- 2 ローム

23号土坑



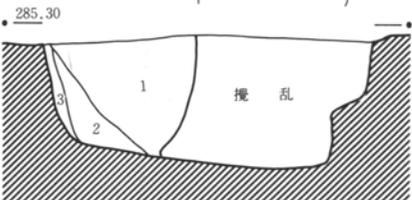
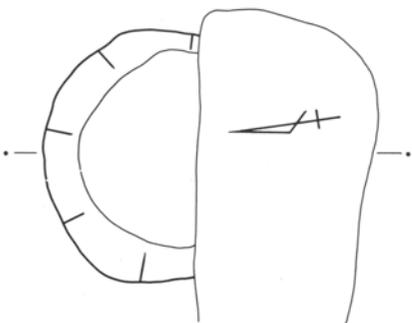
- 1 黒褐色土 ローム若干含む
- 2 黄黒褐色土 ロームを主体とする

24号土坑



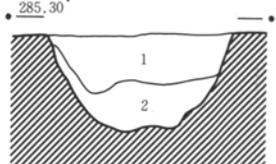
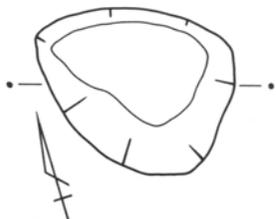
- 1 黒色土 ローム粒子若干含む
- 2 黄黒褐色土 ローム粒を多量に含む

25号土坑



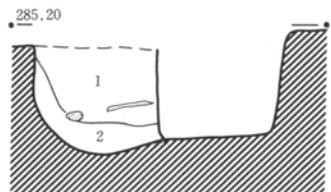
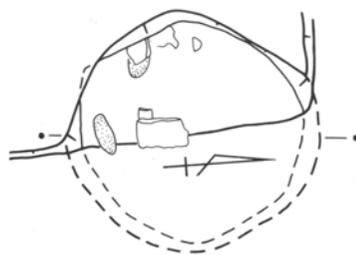
- 1 黒色土 ローム若干含む
- 2 黄黒褐色土 ローム粒子を多く含む
- 3 黄褐色土 ロームを主体とする

26号土坑



- 1 黒褐色土 ローム若干含む
- 2 黒褐色土 ロームを主体とする

27号土坑

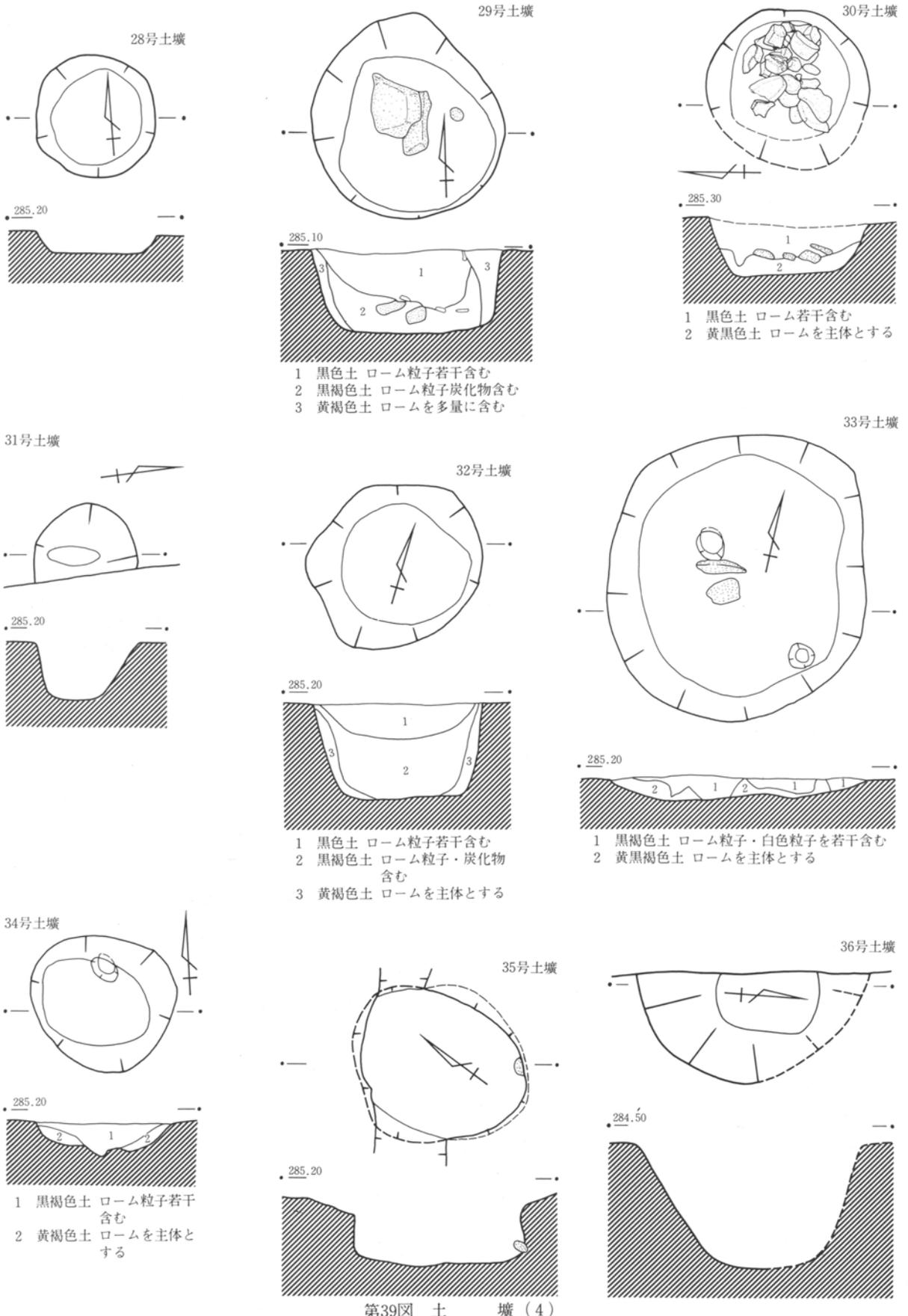


- 1 黒色土 ローム粒若干含む
- 2 黒褐色土 ローム粒子多量に含む



第38図 土 坑 (3)

第I章 三原田城遺跡



第39図 土 壇 (4)

28cmである。底は平らである。出土遺物は無く、自然の落ち込みと思われる。

16号土壙 38-B27グリッド。6号土壙の西に近接する。ほぼ円形を呈し、断面鍋底状となる。規模は78×78、深さ37cm。出土遺物は、土器口縁部片1点である。

17号土壙 調査区中央やや西寄り、33-B17~18グリッドに位置する。平面形は円形で、ほぼ垂直に掘り込まれている。底は平らである。規模は120×112、深さ78cmである。出土遺物は土器片、打製石斧1点、スクレイパー1点が出土している。

18号土壙 37-B17~18グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、断面は浅く鍋底状を呈す。規模は144×133、深さ25cmである。出土遺物は無い。

19号土壙 37~38-B16グリッドに位置する。平面形は卵形を呈し、掘り込みは浅く、底は凹凸を持つ。規模は125×111、深さ22cmである。出土遺物は無い。

20号土壙 34-B16~17グリッドに位置する。不正長円形を呈し、底面も長円形である。規模は160×127、深さ48cmである。南側に近世土壙が重複する。出土遺物は土器片1点が出土している。

21号土壙 20号土壙の南東に近接する。平面形はやや長円を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれている。規模は107×100、深さ47cmである。出土遺物は土器片が若干出土しているのみである。

22号土壙 2号住居址の東に近接する。37-B14グリッドにあり、南部分に方形の近世土壙が重複する。平面形は不正円形で、規模は138×125、深さ21cmである。掘り方は浅い、出土遺物は、土器片4点、石鏃、石錐各1点ずつ出土している。

23号土壙 2号住居址の東、37~38-B13グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、断面は浅い鍋底状を呈すが、底は凹凸が見られる。規模は140×133、深さ23cmである。出土遺物は土器片、スクレイパー1点。

24号土壙 23号土壙に近接。37-B12~13グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈すと思われるが、南側は一部近世の掘り込みによって欠失している。規模は(94)×88、深さ70cmでほぼ垂直に掘り込まれており底は平らである。出土遺物は土器片7点とスクレイパー1点が出土している。

25号土壙 14号土壙の南東に近接、33-B19グリッドに位置する。南側約半分を近世土壙により切られる。平面形は円形を呈すと思われる。規模は134×(130)で深さ68cmである。出土遺物は土器片数点、打製石斧2点の他、玦状耳飾が2点出土している。

26号土壙 33~34-B13~14グリッドに位置する。平面形は卵形を呈し、断面は丸底となる。規模は105×85、深さ50cmである。出土遺物は土器片2点である。

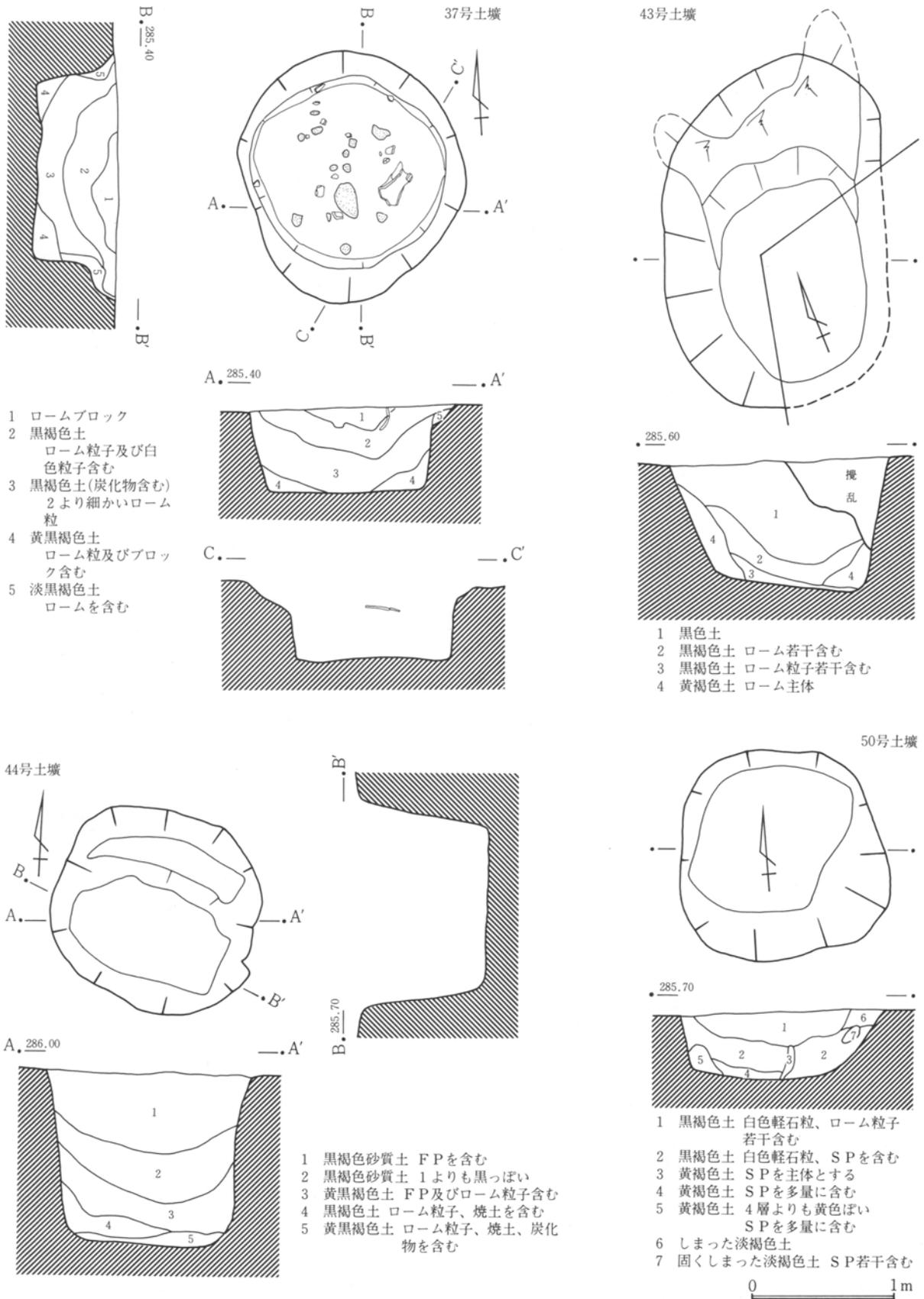
27号土壙 32~33-B12グリッドに位置する。東側半分を近世の耕作溝によって切られている。規模は135×(129)、深さ57cmの円形を呈すと思われ、壁は垂直に掘り込まれている。出土遺物は、覆土中位より深鉢胴部片の他数点の土器片、磨石1点が出土している。

28号土壙 27号土壙の南に近接、32~33-B11~12グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、掘り込みは浅く断面フライパン状を呈す。規模は87×85、深さ15cmである。石匙が1点出土している。

29号土壙 35-B9~10グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、壁はほぼ垂直に掘られている。底は平らである。規模は147×138、深さ58cmである。覆土下層に若干の炭化物を含む。出土遺物はやや大形の自然礫の他、土器片約20片、石器は打製石斧1点、スクレイパー3点、凹石1点、磨石1点出土している。

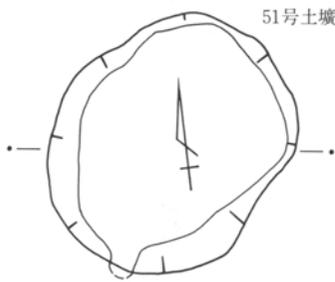
30号土壙 35-B12~13グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、壁はやや斜めに立ち上がる。底は平らである。規模は117×(112)、深さ33cmであるが、西側部を耕作溝により欠失している。覆土中位に石皿片2点を含む30個程の礫と土器片、打製石斧1点、磨石2点、石皿2点が出土している。

第I章 三原田城遺跡

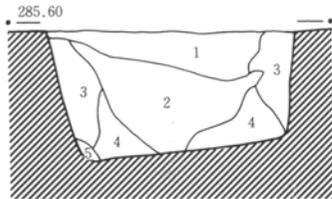


第40図 土 壙 (5)

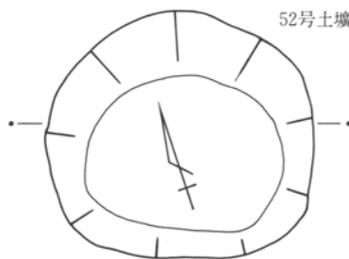
第4節 遺構と遺物



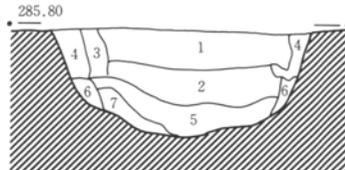
51号土坑



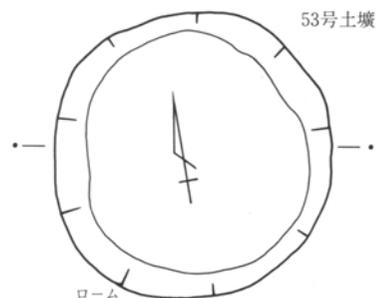
- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 黄黒褐色土 ローム粒子含む
- 4 黄黒褐色土 SP粒子含む
- 5 SPブロック



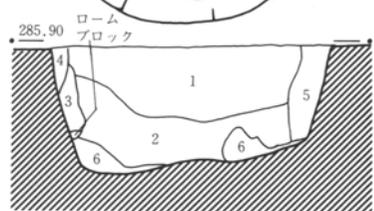
52号土坑



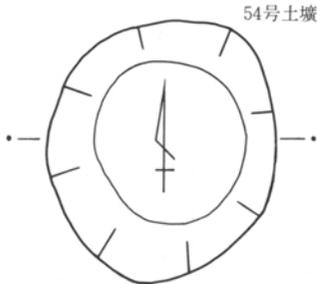
- 1 黒褐色土 白色軽石粒及びローム粒子を若干含む
- 2 黒褐色土 1層よりもローム粒子が目立つ
- 3 黄褐色土 ローム含む
- 4 淡褐色土 ロームを主体とする
- 5 茶褐色土 ローム含む
- 6 明褐色土 SP粒子を主体とする
- 7 黒褐色土 SPを多く含む



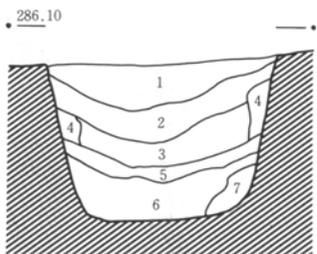
53号土坑



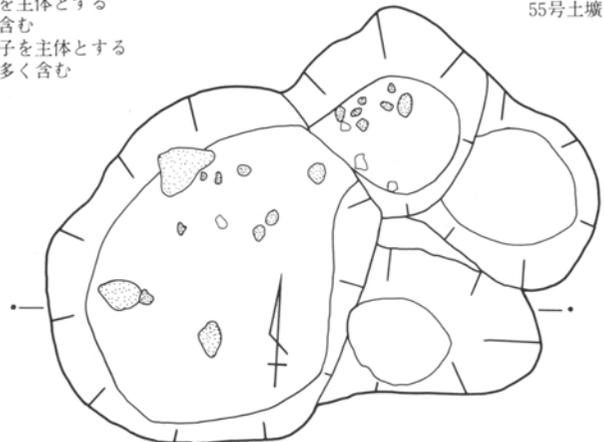
- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 暗褐色土



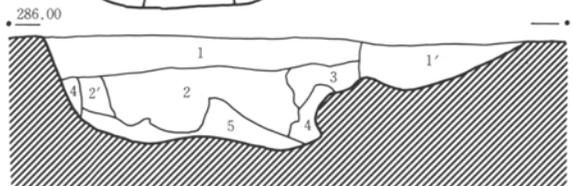
54号土坑



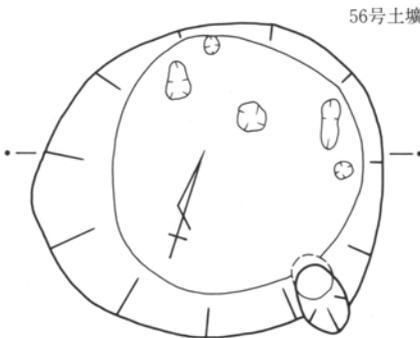
- 1 暗褐色土 SP少量含む
- 2 暗褐色土 SP少量含む 1よりやや暗い
- 3 暗褐色土 SP・ローム粒少量含む
- 4 暗褐色土 SP多量に含む
- 5 明暗褐色土 3・6が混在
- 6 明褐色土 ローム粒子多量に含む
- 7 明褐色土 6よりも明るくローム粒多く含む



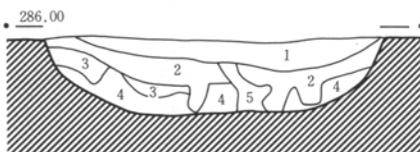
55号土坑



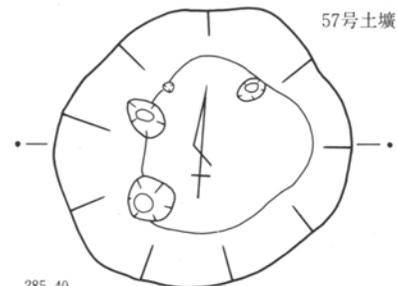
- 1 暗褐色土 ローム粒子ブロックを混在(1'はやや明るい)
- 2 暗褐色土 SP・ローム粒を若干混在(2'はSP無)
- 3 明暗褐色土 ローム粒ブロック
- 4 明暗褐色土 ローム粒・SPを多く含む
- 5 明暗褐色土 ローム粒ブロックを多量に混在



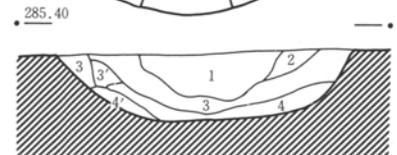
56号土坑



- 1 暗褐色土 ローム粒子ブロック(明褐色土)を混入
- 2 暗褐色土 1よりも暗く、SPを少量含む
- 3 暗褐色土 2と類似するが、SPを多く含む
- 4 暗褐色土 暗褐色土とSP混在
- 5 明褐色土 SP・ローム粒子を多量に含む



57号土坑



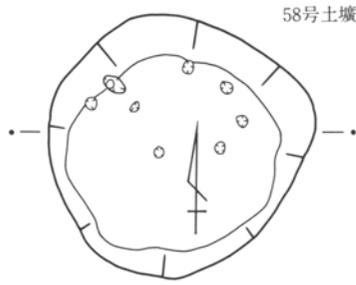
- 1 暗黒褐色土 SP含む
- 2 暗褐色土 1よりも明るく、SPを含む
- 3 暗褐色土 ローム粒子・SP含む
- 4 暗褐色土 ローム粒子・SP多量含む

0 1m

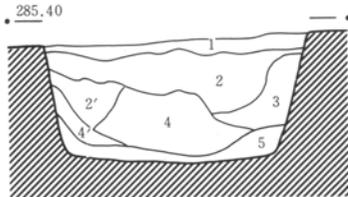
第41図 土坑(6)

第I章 三原田城遺跡

- 31号土壙 30号土壙の南、35—B12グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈すと思われ、底面は狭くなる。東側部分を耕作溝によって切られている。規模は73×(50)、深さ(42)cmである。出土遺物は無い。
- 32号土壙 34—35—B11グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、掘り込みも垂直に近い。底は平らである。規模は117×126、深さ67cm。覆土下層に若干の炭化物を含んでいた。出土遺物は土器片5点、石錐2点が出土している。
- 33号土壙 37—38—B9～10グリッド、3号住居址の北側に近接する。平面形はやや南北に長い長円形で掘り込みは浅い。規模は203×185、深さ17cmである。中央に出土した自然礫2個の他、土器片7点、打製石斧1、石鏃1、磨石2点が出土している。
- 34号土壙 36—B10～11グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、規模は100×96、深さ22cmである。底は凹凸があり、掘り込み面も不明瞭であった。出土遺物は無い。
- 35号土壙 38—39—B27グリッドに位置する。16号土壙の西に近接、北側上面を近世の溝によって削られている。平面形はやや長円形を呈すと思われる。断面はフラスコ状を呈し、底は平らである。規模は125×110、深さ50cm、底面の径は135×120である。出土遺物は自然礫1個が底より出土していた他は無い。
- 36号土壙 48—49—B20～21グリッド、調査区西壁に約半分掛かって検出した。北側半分を1号溝によって削られている。規模は径160cm、深さ90cmと推定され、断面形はやや底が狭くなる。出土遺物は見られ無い。
- 37号土壙 1号住居址の北に近接、36—B25～26グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、掘り込みも垂直である。底面形は円形で平らである。上端は崩落によりやや広がっている。規模は175×155、深さ59cmである。出土遺物は、覆土上部より口縁、底部を欠いた深鉢の他、破片およびスクレイパー1点が出土。
- 43号土壙 31—32—B31～32グリッドに位置する。南北約 $\frac{1}{2}$ 程を、ゴミ穴によって削られている。形状は不正長円形を呈し、壁はかなりの急角度で掘り込まれている。北側中段に横穴が見られる。規模は243×(155)、深さ86cmである。出土遺物は覆土中位より下位にかけて、土器片7点、石鏃2点、石匙1点、磨石1点が出土している。
- 44号土壙 14—15—B23～24グリッドに位置する。南側上部を1号墳の周掘によって斜めに削られている。平面形は長円形で底面形も同様である。規模は145×143、深さ120cmである。壁の掘り込みは垂直に近く、底は平らである。出土遺物は無い。
- 50号土壙 8号、9号住居址の間、16—B00グリッドに位置する。形状はほぼ円形を呈し、底面形は隅丸方形を呈す。掘り込みは西側が直で東側はやや緩やかである。規模は148×143、深さ48cmである。出土遺物は無かった。
- 51号土壙 13—14—A49～B00グリッド。9号住居址の南側に近接している。平面形はほぼ円形で、掘り込みも垂直に近い、底は平らである。規模は135×132、深さ64cmである。出土遺物は土器片約20片と、石匙が1点出土している。
- 52号土壙 9号住居址の東に近接。12—13—B01グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、断面は鍋底状となる。底は中央部分がやや凹む。規模は145×130、深さ56cm。出土遺物は無い。
- 53号土壙 12—13—B02～03グリッド、9号と10号住居址に挟まれて位置する。円形で、掘り込みは垂直に近い。底は比較的平らである。出土遺物は、打製石斧が1点出土している。
- 54号土壙 10号住居址の北側に近接。11—B04～05グリッドに位置する。規模は148×128、深さ83cmである。やや長円形を呈し、掘り込みは垂直に近く、底は平らである。出土遺物は、土器7片、と石皿の破片が1点出土している。

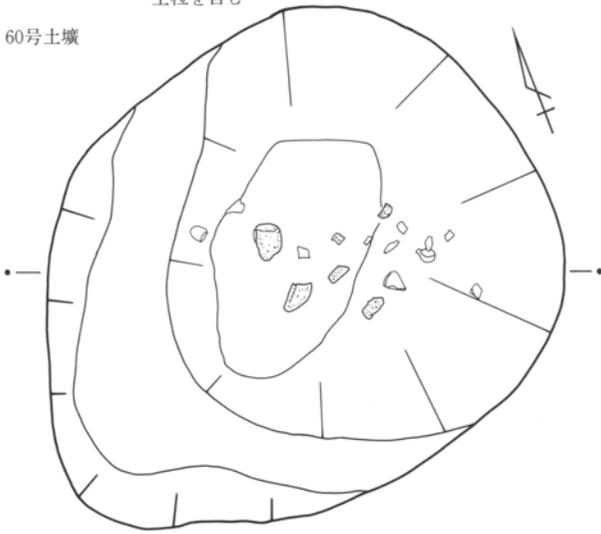


58号土坑

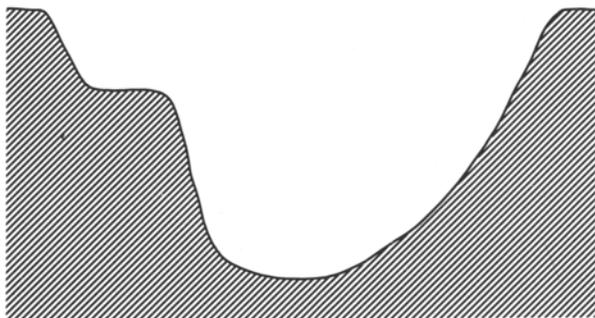


- 1 暗褐色土 バサバサしている
- 2 暗黒褐色土 SPを少量含み、ローム粒子ブロックを混入
- 2' 暗黒褐色土 SPを多く含むが、2と同様である
- 3 明暗褐色土 ローム粒子及びSPを多量に含む
- 4 暗黄褐色土 SPをあまり含まず、ローム粒子多量に含む
- 4' 暗黄褐色土 4よりややローム粒子が多い
- 5 黄褐色土 ローム粒を主とし、黒色土粒を含む

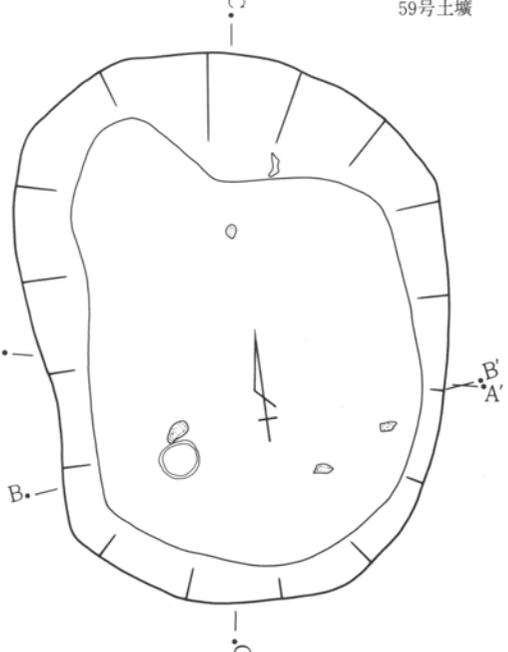
60号土坑



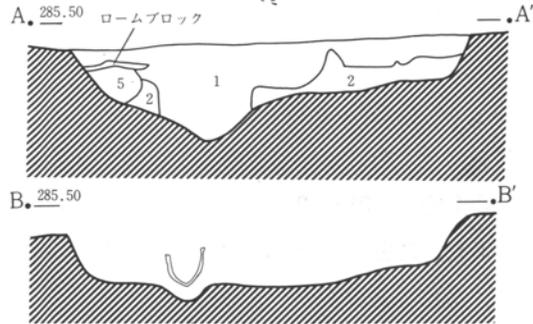
285.70



C. 285.50
SPブロック
A.
B.
C.

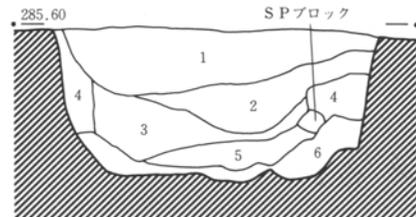
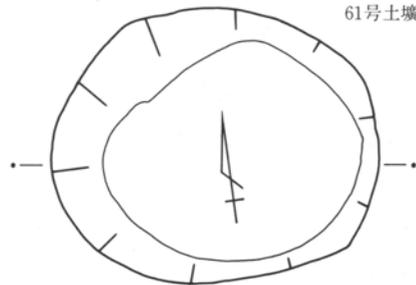


59号土坑



- 1 暗褐色土 SP・ローム粒ブロックを混入
- 2 暗褐色土 SPを多く混入
- 3 暗褐色土 SPを多量に混入
- 4 暗褐色土 SPを若干含み、ローム粒を混入、やや明るい
- 5 暗褐色土 SPを若干、ローム粒を少量含み2よりやや明るい

61号土坑



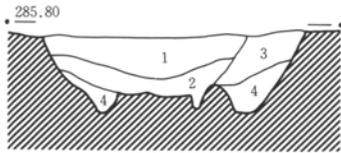
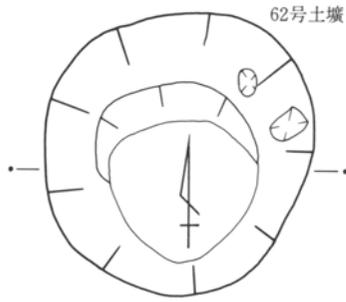
- 1 暗褐色土 汚れた褐色土ブロックを多量混在
- 2 暗褐色土 1に類似するが、混入物が少ない
- 3 暗褐色土 1・2に類似するが、SPを少量混入する
- 4 明暗褐色土 暗褐色土を主とし、ローム粒子SPを多量に混入
- 5 暗褐色土 2と同様であるが、ローム粒子を含み、やや明るい
- 6 明褐色土 ローム粒を主とするが、黒色化し汚れ乱れている

第42図 土

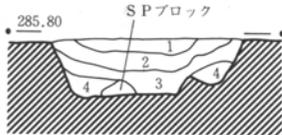
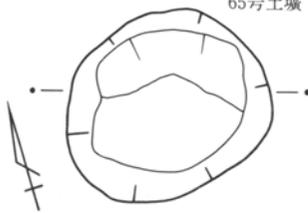
坑 (7)

0 1m

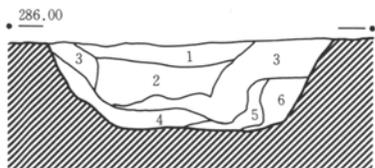
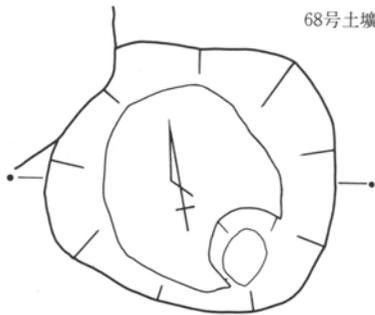
第I章 三原田城遺跡



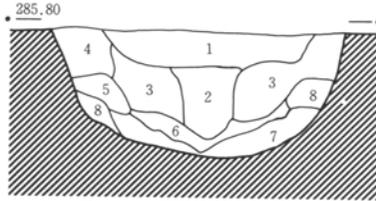
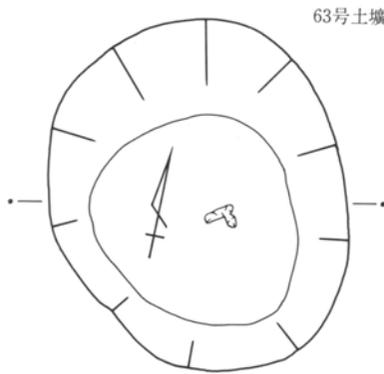
- 1 暗褐色土 SPを含む
- 2 暗褐色土 1よりもSPを多く含む
- 3 暗褐色土 ローム粒を多量に含む
- 4 明褐色土 SP・ローム粒子多量に含む



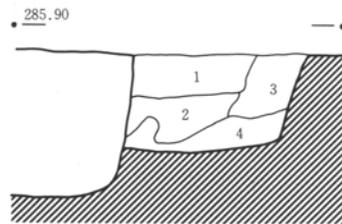
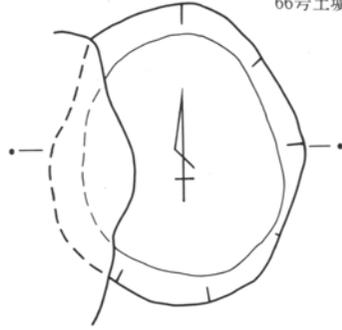
- 1 暗褐色土 SPを少量含む
- 2 暗褐色土 SPを含む
- 3 暗褐色土 SPを多く含む
- 4 暗褐色土 3より多くSP含む



- 1 黒褐色土 SPを少量含む
- 2 黒褐色土 1に似るが、混入物やや多し
- 3 暗褐色土 ローム粒子含み、やや明るい
- 4 暗褐色土 ローム粒ブロックを混入
- 5 暗褐色土 3に似るが、SP粒多量に含む
- 6 暗褐色土 ローム粒とSP粒の混土である



- 1 明褐色土 粒子が細かくバサついている
- 2 暗褐色土 1と類似するが暗い
- 3 暗褐色土 SPを多く含む
- 4 明褐色土 ローム粒を主としたブロック状のもの
- 5 明褐色土 4にSPを多量に含んだもの
- 6 暗褐色土 ローム粒子を少し含む
- 7 黄褐色土 汚れたローム粒子を主とする
- 8 SPブロック

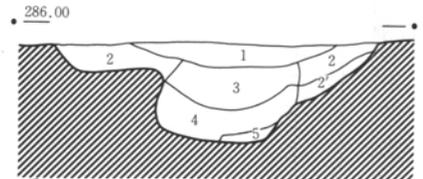
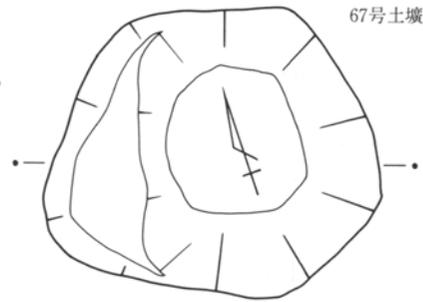


- 1 暗褐色土 SP少量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒を少量混入
- 3 暗褐色土 SPを多量に含む
- 4 暗黄褐色土 2にローム粒が混入

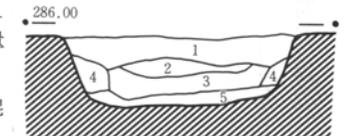
- 1 明褐色土 SP粒、ローム粒子を含む
- 2 明褐色土 1よりやや暗い
- 3 明褐色土 1よりやや明るくSPは含まない
- 4 明褐色土 SP粒、ローム粒子を多量に含む
- 5 明褐色土 ローム粒子、ブロックを混入



- 1 暗褐色土 SPを少量、ローム粒ブロックを含む
- 1' 暗褐色土 SPを多量に含む
- 2 暗褐色土 SP・ローム粒ブロックを含む
- 3 明褐色土 SP・ローム粒子を多量に含む
- 4 明褐色土 3に類似
- 5 明褐色土 3に類似するが、やや暗い
- 6 明褐色土 SPを主とする



- 1 暗褐色土 SPを少量含む
- 2 明褐色土 SP・ローム粒子を多量に含む
- 2' 明褐色土 2と同様であるが、粒子が細かい
- 3 暗褐色土 1と類似するが、SPの粒子が細かい
- 4 暗褐色土 3と類似するが、ローム粒を含みやや明るい
- 5 暗褐色土 ローム粒ブロック、SPブロックを含む



第43図 土 壙 (8)

0 1m

第4節 遺構と遺物

55号土壙 10号住居址の北、54号土壙と近接、11～13—B04～05グリッドに位置する。東側に何基かの浅い掘り込みが重複し、平面形がやや不正形となる。規模は260×190、深さ55cmである。底はやや凹凸を持つ。出土遺物は、深鉢の胴上半部1点の他、破片約20点、石器は、石匙、スクレイパー、石皿、磨石が各1点ずつ出土している。

56号土壙 13—14～B04～05グリッド、55号土壙の西に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、断面は浅い鍋底状となる。1ヶ所壁に沿って径20cm程のピットが掘り込まれている。規模は168×167、深さ40cmである。出土遺物は、土器片2点が出土している。

57号土壙 24～25—A49～B00グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、断面は浅い鍋底状となる。規模は158×148、深さ33cmである。底面に3ヶ所の小ピットが見られる。出土遺物は、土器片18点、石鏃、石錐、スクレイパー各1点が出土している。

58号土壙 57号土壙の東、23～24—A49～B00グリッドに位置する。平面はほぼ円形で、掘り込みは垂直に近い。底面形は円形で、底は平らである。規模は142×140、深さ65cm。出土遺物は、土器数片、打製石斧1点、スクレイパー2点、礫器1点が出土している。

59号土壙 23～24—B01～02グリッド。58号土壙の北に位置するやや大形の土壙である。平面形は南北に長い不正長円形を呈し、北側の壁がやや緩やかに立ち上がる。底は凹凸があり北側半分がやや下がる。規模は290×122、深さ54cmである。出土器物は南西寄り、尖底の深鉢胴下半部分が、底面から10cm程上で直立した状態で出土している。石器は打製石斧1点、スクレイパー3点、磨石1点が出土している。

60号土壙 21～22—B02～03グリッドに位置する。平面形は不正円形を呈し、西側部分にテラス状の中段を持つ、底は狭くなっており丸底となっている。規模は277×266、深さ143cmである。出土遺物は、土器片約20点、打製石斧3点、石錐1点、スクレイパー2点、石槍1点、凹石2点が出土している。

61号土壙 20～21—B02グリッド、60号土壙の東に近接。平面形はやや長円形を呈し、掘り込みは垂直に近い。底はやや凹凸を持つ。規模は174×147、深さ80cmである。出土遺物は土器が6片出土している。

62号土壙 17～18—B04～05グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、壁の掘り込みは緩かである。底面は凹凸を持っている。規模は150×142、深さ33cmである。出土遺物は磨石が1点である。

63号土壙 18～19—B05～06グリッド、62号土壙に近接する。やや長円形を呈し、底は丸底状となる。規模は186×158、深さ67cmである。出土遺物は土器が3片出土している。

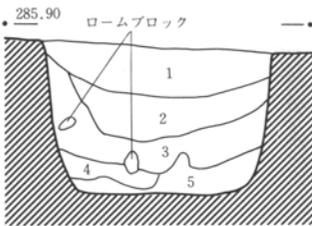
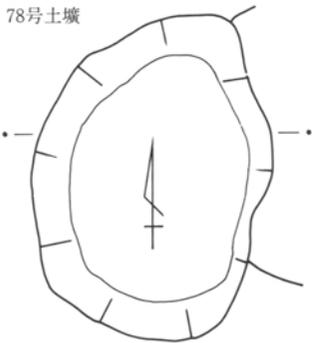
64号土壙 17～18—B06～07グリッドに位置する。不正長円形を呈し、北側に攪乱による落ち込みが重複している。断面は鍋底状を呈す。規模は132×110、深さ29cm。土器片3片が出土している。

65号土壙 18～19—B07～08グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、底は平らであるが、北側はやや高まっている。規模は109×102、深さ30cm、出土遺物は無い。

66号土壙 15～16—B06～07グリッドに位置する。西側 $\frac{1}{3}$ 程を78号土壙によって切られている。平面形はやや長円を呈すと思われる。規模は160×(135)、深さ50cmである。掘り込みは垂直に近く、底は平らである。出土遺物は土器片25点の他に、スクレイパー4点、凹石が1点出土している。

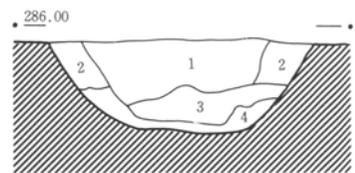
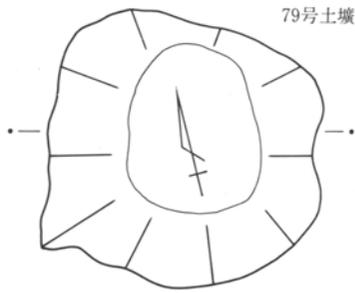
第4節 遺構と遺物

78号土壇



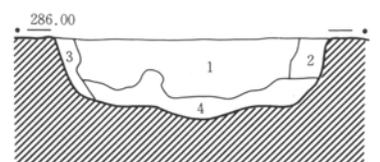
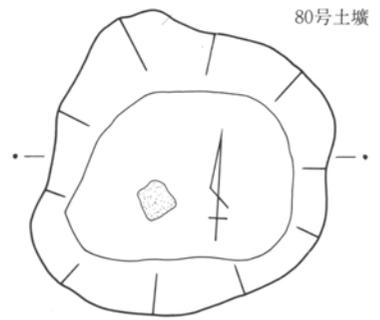
- 1 暗褐色土 バサバサしている
- 2 暗褐色土 SP少量含む
- 3 暗褐色土 SPとローム粒子少量を含む
- 4 暗黄褐色土 3に似るが、ローム粒子が目立つ
- 5 黄褐色土 ローム粒を主体とする

79号土壇



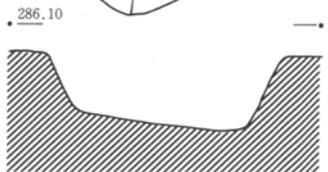
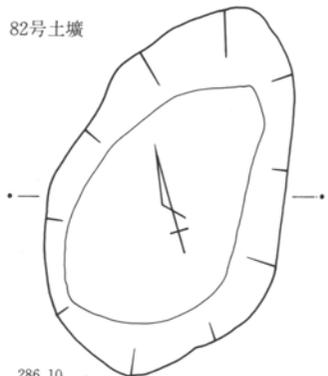
- 1 暗褐色土 SP少量含む
- 2 暗褐色土 SP多量含む
- 3 明暗褐色土 ローム粒子を含む
- 4 明暗褐色土 3に似るが、より明るい

80号土壇

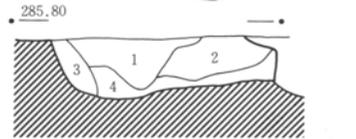
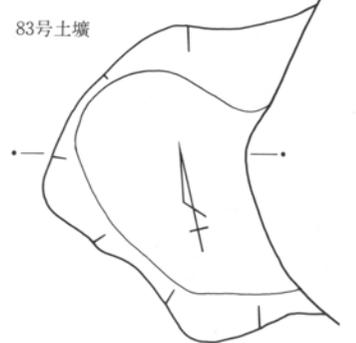


- 1 暗褐色土 SP少量含む
- 2 暗褐色土 SP多量含む
- 3 明暗褐色土 ローム漸移層を多量含む
- 4 明暗褐色土 ローム粒ブロックを含む

82号土壇

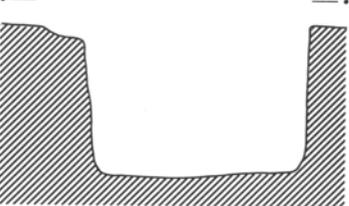
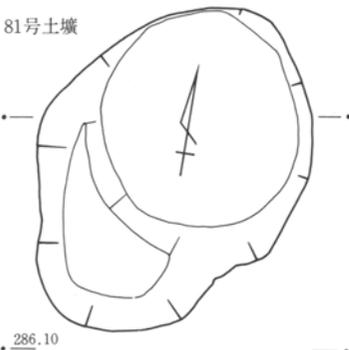


83号土壇

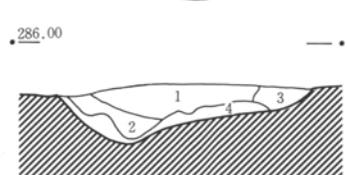


- 1 明暗褐色土 ローム粒を含む
- 2 明暗褐色土 1よりローム粒を多く含む
- 3 明褐色土 ローム粒、SPを主とする
- 4 明褐色土 汚れたローム粒を主とし、SPを多く含む

81号土壇

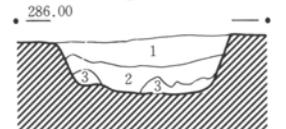
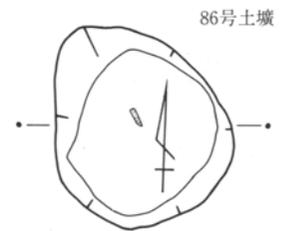


85号土壇



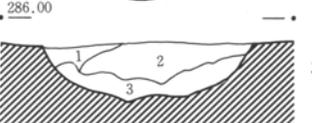
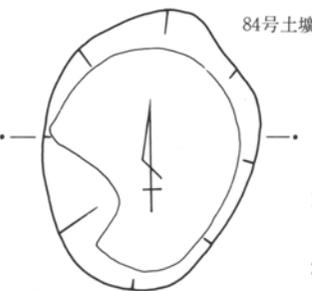
- 1 暗褐色土 SP含む
- 2 暗褐色土 SP粒含む
- 3 暗褐色土 SP含まず
- 4 暗褐色土 SP多量を含む

86号土壇



- 1 暗褐色土 ローム粒、SPを多く含む
- 2 暗褐色土 1に似る
- 3 暗褐色土 SP・ローム粒を多く含む

84号土壇



- 1 明暗褐色土 ローム粒強く SP若干含む
- 2 暗褐色土 ローム粒ブロック、SPを含む
- 3 明褐色土 ローム粒、SP多量を含む

第45図 土 壇 (10)



第I章 三原田城遺跡

67号土壙 12~13—B06~07グリッドにあり、北側に79号土壙が近接する。平面形は不正円形を呈し、西側部分にテラス状の中段を持つ。また南側の立ち上がりもやや斜めとなっている。断面形状はやや底面が小さくなっている摺鉢状で、底は平らである。規模は175×150、深さ53cmである。出土遺物は東寄りに底より若干浮いた状態で、底部を欠いた深鉢形土器(第79図475)が横になった状態で出土している。その他、破片4点が出土している。(第46図)

68号土壙 13~14—B08~09グリッドに位置する北西部に69号土壙が接する。平面形はほぼ円形を呈し、断面は底が平らな鍋底状を呈す。規模は155×140、深さ45cmである。出土遺物は土器13片と石匙1点が出土している。

69号土壙 13~14—B08~09グリッド。68号土壙と南東部で重複する。形状は長円形を呈す。掘り込みは斜めで、底は平らである。規模は126×118、深さ37cmである。出土遺物は、石匙、磨石、敲石、不明が各1点ずつ出土している。

70号土壙 14~15—B02~03グリッド、9号住居址の北に近接して位置する。ほぼ円形を呈し、規模は146×145、深さ93cm。掘り込みは垂直に近く、底は平らである。出土遺物は、土器片12点と玉が1点出土している。

71号土壙 14~15—B09~10グリッドに位置する。形状は不正形を呈し、掘り込みは浅く、底は凹凸がある。北側部分が深く掘り込まれている。規模は140×122、深さ25cmである。出土遺物はスクレイパーが1点出土している。

72号土壙 71号土壙の北に近接。14~15—B10~11グリッドに位置する。平面形状の不正長円形を呈し、底は凹凸、小ピットが見られる。規模は140×120、深さ30cmである。出土遺物は土器2片が出土している。

73号土壙 18~19—B09~10グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、掘り込みは垂直に近い。底は平形を呈す。規模は140×117、深さ65cmで、覆土上層中より、40cm程の川原石で出土している。

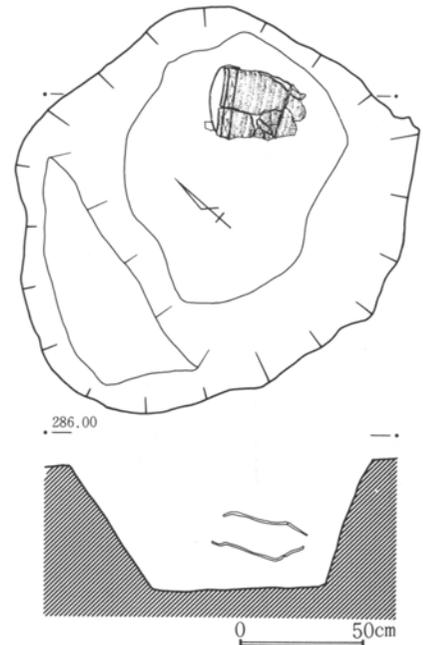
74号土壙 20~21—B10~11グリッド、83号土壙と東側が重複する。不正形で、掘り込みは浅く、底は凹凸が見られる。土器片2点が出土しているが、自然の落ち込みと考えられる。

75号土壙 24~25—B03~04グリッドに位置する。平面形はやや長円を呈し、中央部がやや深くなる。規模は170×135cmである。上層より礫数個出土している他、土器数点、石匙1点、磨石2点が出土している。

76号土壙 15~16—B12~13グリッドに位置する。平面形は不正形を呈し、浅く、底は凹凸が見られる。規模は158×150、深さ25cmである。土器片1点、スクレイパー1点が出土しているが、自然の落ち込みと思われる。

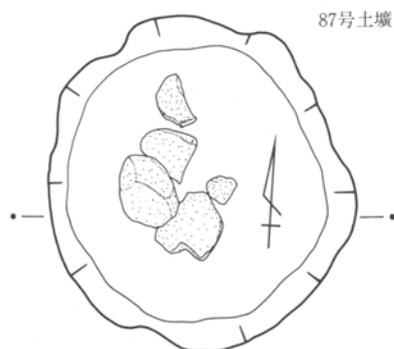
77号土壙 76号土壙の西、17—B11~12グリッドに位置する。南に別の落ち込みが重複し、不正形を呈す。底は丸みを持ち、深さ26cmである。出土遺物は無い。

78号土壙 16—B06~07グリッドに位置し、東側で66号土壙となって掘り込まれている。平面形はやや長円を呈し、掘り込みはかなり垂直に近い。底はほぼ平らである。規模は166×126、深さ77cmである。出土遺物は土器片10数点と敲石が2点出土している。

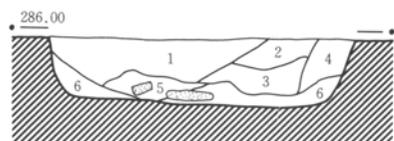


第46図 67号土壙遺物出土状態

第4節 遺構と遺物



87号土坑



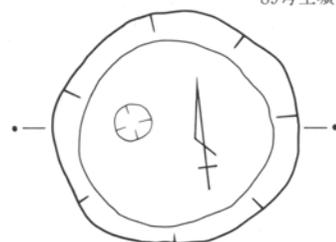
- 1 暗褐色土 SP多量混在
- 2 暗褐色土 SP少量含む
- 3 暗褐色土 ロームブロックを少し含む
- 4 暗褐色土 SP・ロームブロックを含む
- 5 明褐色土 ロームブロックとSPが混在
- 6 明褐色土 汚れたローム粒を主とする



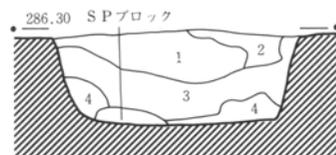
88号土坑



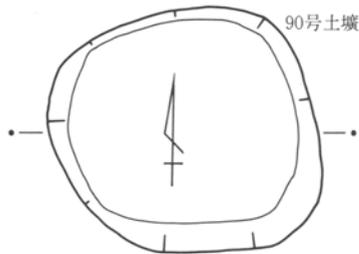
- 1 明暗褐色土 SPを含む
- 2 明褐色土 汚れたローム粒を主とし SPを含む
- 3 明褐色土 2に類似する



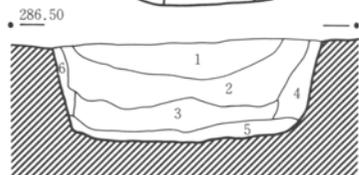
89号土坑



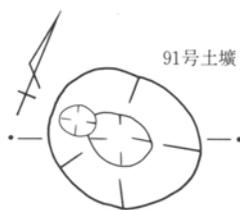
- 1 黒褐色土 SP含む
- 2 暗褐色土 ローム粒を少し含む
- 3 暗褐色土 ローム粒・SP多量に含む
- 4 明褐色土 汚れたローム粒を主とする



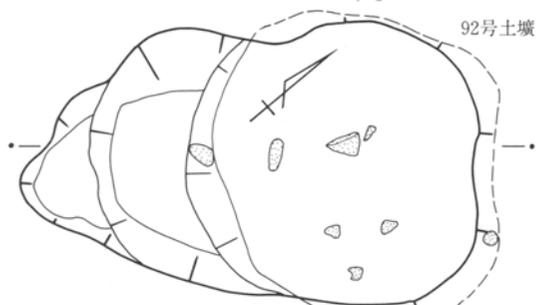
90号土坑



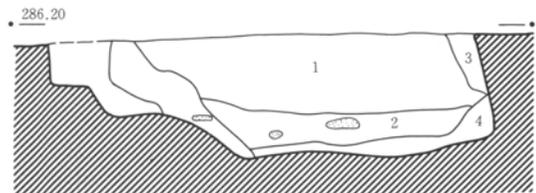
- 1 黒褐色土 混入物少ない
- 2 黒褐色土 1と同様やや明るい
- 3 黒褐色土 2と同様ややローム粒含む
- 4 暗褐色土 SP含む
- 5 明黒褐色土 3にロームブロック混入
- 6 明褐色土 壁が崩れたロームブロック



91号土坑



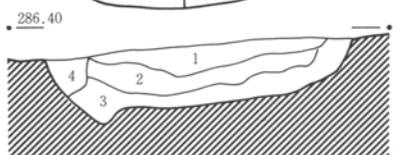
92号土坑



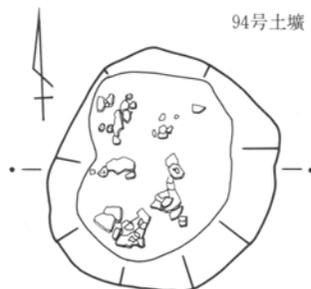
- 1 黒褐色土 SP若干含む
- 2 黒褐色土 混入物なし
- 3 明褐色土 ローム漸移層、壁崩土
- 4 明暗褐色土 3に同様、2層が混在



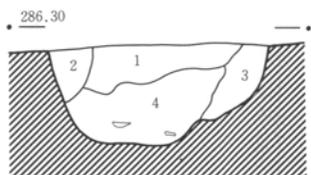
93号土坑



- 1 黒褐色土 混入物少ない
- 2 黒褐色土 SP若干含む
- 3 暗褐色土 SP・ローム粒含む
- 4 暗褐色土 3に似るが、やや明るい



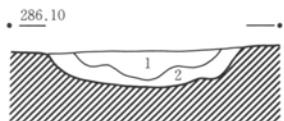
94号土坑



- 1 暗褐色土 ロームブロック含む
- 2 明褐色土 ローム粒含む
- 3 暗褐色土 SP多量に含む
- 4 黒褐色土 混入物少ない



95号土坑

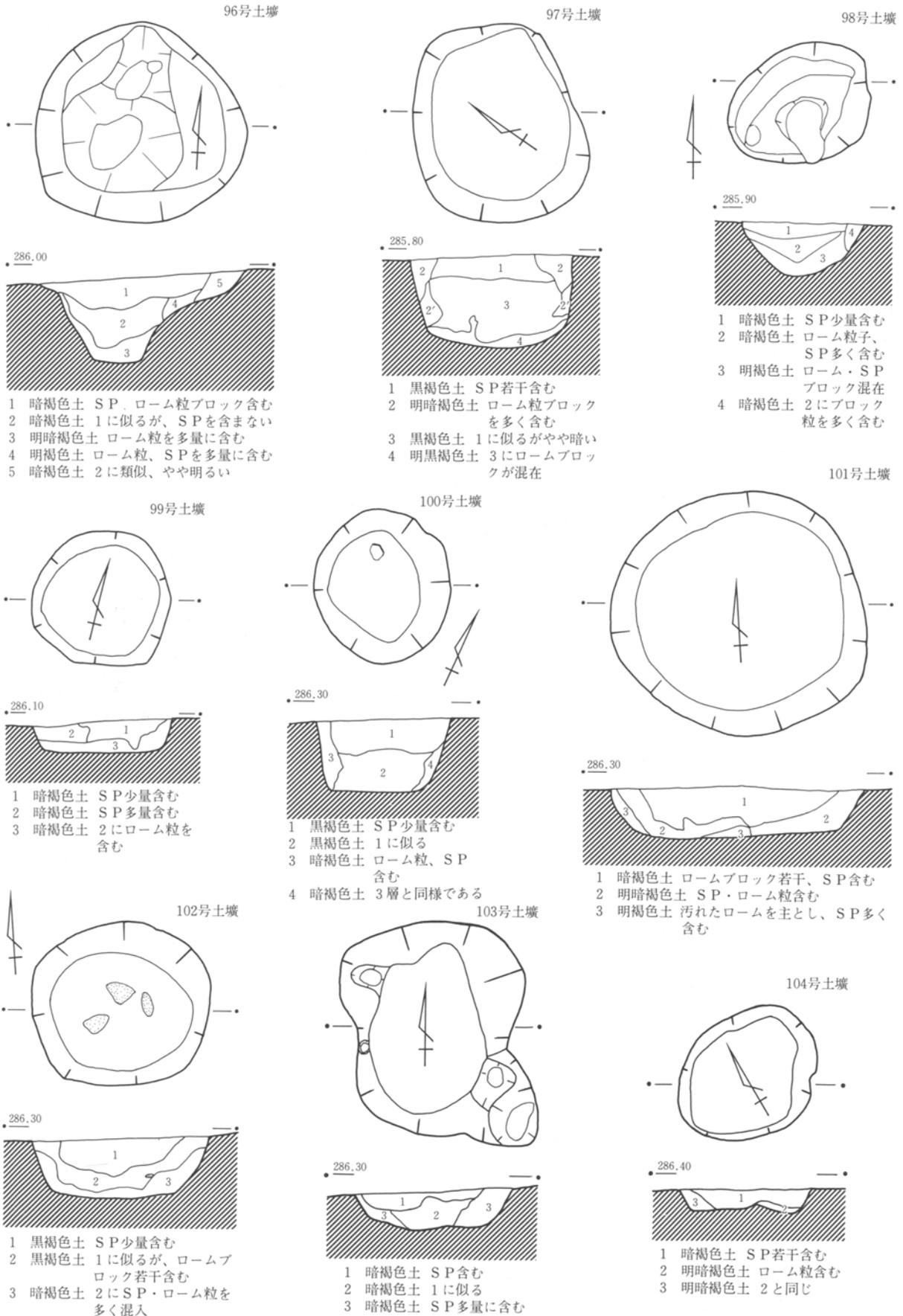


- 1 暗褐色土 SP・ロームブロック含む
- 2 明褐色土 SP・ローム粒多量に含む

第47図 土 坑 (11)

0 1m

第I章 三原田城遺跡



第48図 土 壙 (12)

0 1m

第4節 遺構と遺物

79号土壙 12～13-B07～08グリッド、67号土壙の北に近接している。平面形はほぼ円形を呈し、断面鍋底状となる。壁はやや斜めに立ち上がる。規模は143×143、深さ49cmである。出土遺物は土器7点、石器はスクレイパー2点が出土している。

80号土壙 東壁際11～12-B08～09グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、掘り込みはやや斜めである。規模は162×147、深さ43cmで底はやや凹凸を持つ。出土遺物は土器が1片である。

81号土壙 東壁際、11～12-B09～10グリッドに位置する。上段で南側へやや張り出すが、基本的には円形と思われる。掘り込みはほぼ垂直で、底は平らである。規模は165×145、深さ83cmを測る。出土遺物は土器片10数片の他、スクレイパー、凹石が各1点ずつ出土している。

82号土壙 12～13-B09～10グリッドに位置する。平面形はやや長円となり、壁の掘り込みはやや斜めである。底はほぼ平らで、小ピットが数ヶ所に見られる。規模は180×127、深さ36cmである。出土遺物は無い。

83号土壙 21-B10～11グリッドに位置する。東側を74号土壙に切られる。不正形を呈し、深さは32cmである。出土遺物は無い。

84号土壙 18～19-B14グリッドに位置する。やや長円形を呈し、規模は148×115、深さ30cmである。底は丸くなり、若干の凹凸を持つ。出土遺物は無い。

85号土壙 20-B15グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、掘り込みは浅い。規模は137×128、深さ25cmである。底は凹凸を持つ。出土遺物は無い。

86号土壙 17～18-B15グリッドに位置する。平面形はほぼ円形となり、掘り込みはやや斜めである。底は比較的平らである。規模は105×94、深さ28cmである。中央やや北寄りにて、長さ10cm程の蛇紋岩製玉篋が、底よりやや浮いて出土している。

87号土壙 14～15-B13～14グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、壁の掘り込みはかなり急となる。底は平らで円形である。規模は176×162、深さ35cmである。30cm内外のやや偏平な礫が底面近くより数個出土していた他、土器、石器の出土は無い。

88号土壙 87号土壙の北に近接、14～15-B14～15グリッドに位置する。不正形で、掘り込みは17cmと浅い。出土遺物は無く、いわゆる自然の落ち込みと考えられる。

89号土壙 東壁寄りの、11～12-B14～15グリッドにて検出。平面形は円形を呈し、掘り込みは垂直に近い。底は平らである。規模は132×123、深さ50cmである。出土遺物は、土器片1、石匙1点である。

90号土壙 調査区東壁に接した、10～11-B18～19グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、掘り込みは垂直に近く、底は平らである。規模は144×129、深さ52cm。出土遺物は土器7片、スクレイパー1点が出土している。

91号土壙 11～12-B19グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、緩やかに落ち込み、底はやや狭くなる。径80cm程の円形を呈し、深さ20cmであるが、出土遺物は無く、自然の落ち込みと思われる。

92号土壙 調査区東壁際、11～12-B20～21グリッドに位置する。平面形はほぼ円形であるが、南西にやや張り出した部分が見られる。これは重複しているのかも知れない。断面形は、西部を除いてテラス状となり、底はやや凹みを持つ。規模240×158、深さ62cmである。出土遺物は、土器片数点と、打製石斧5点、スクレイパー3点、石匙3点、磨石が1点出土している。

93号土壙 13-B19～20グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、掘り込みは浅い。規模は167×165、深さ32cmで、底はやや凹凸を持つ。南寄りに径40cmのピットを持つ。出土遺物は土器が5点出土している。

94号土壙 14-B20グリッドに位置する。平面はほぼ円形を呈し、断面はやや丸みを持つ鍋底となる。規

第I章 三原田城遺跡

模は129×123、深さ53cmである。出土遺物は土器が数10片と石鏃2点、石錐1点、スクレイパー4点が出土している。土器は底より浮いた状態でややまとまって出土したが、何れも非常に脆弱で復元し得たものは少ない。

95号土壙 17～18—B20グリッドに位置する。南北に長い長円形を呈し、掘り込みは浅い。規模は155×105、深さ20cmで覆土中にはロームブロック多く含む。出土遺物は土器片3点である。

96号土壙 19—B20～21グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、底はロート状にやや狭くなる。規模は153×144、深さ60cmである。出土遺物は覆土上部より石皿の破片が1点出土している。

97号土壙 20～21—B19～20グリッドに位置する。やや長円形を呈し、壁の掘り込みは垂直に近い。底はやや丸みを持つ。規模は150×120、深さ67cmである。出土遺物は土器片が数点出土している。

98号土壙 21～22—B18～19グリッドに位置する。平面、断面とも不正形を呈し、やや斜めに掘り込まれている。壁、底に凹凸が目立つ。規模は98×87、深さ38cmである。出土遺物も無く、人為的なものとは思われない。

99号土壙 17～18—B22グリッドに位置する。円形を呈し掘り込みは浅い。底は平らである。規模は100×96、深さ23cmである。出土遺物は無い。

100号土壙 16～17—B22～23グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、壁の掘り込みは垂直に近い。底は平らである。規模は107×101、深さ52cm。土器片2点、石匙1点が出土している。

101号土壙 調査区中央やや東寄り、15～16—B21～22グリッドに位置する。平面形状は、ほぼ円形を呈し、壁はやや丸みを持って掘り込まれる。底はほぼ平らで、円形を呈す。規模は181×175、深さ36cmで、平面の大きさに比べてやや浅い感じである。出土遺物は、中央から東部にかけて石皿の破片、大形の深鉢が出土している(第49図)。何れも底面より5～10cm程浮いて出土している。石皿は2点分、土器はほぼ完形品であるが、底部を欠いている。(第79図476)

102号土壙 15—B22～23グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、掘り込みは斜めである。底はやや凹んでいる。規模は128×112、深さ42cmである。出土遺物は石皿の破損品1点、磨石が1点出土している。

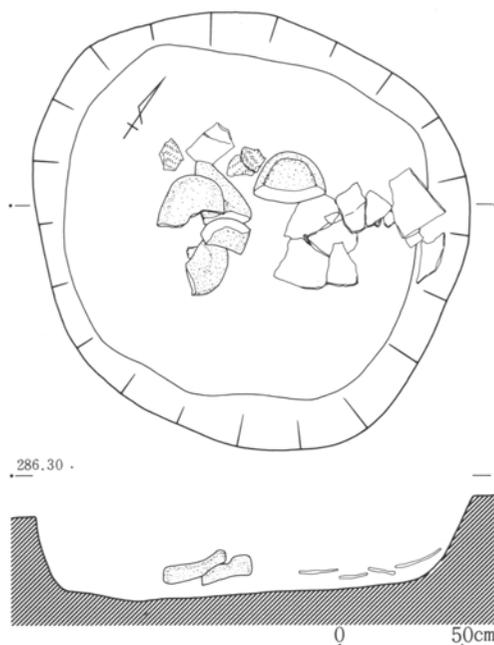
103号土壙 15～16—B23～24グリッドに位置する。不定形を呈し、底には小ピットが見られる。規模は155×112、深さ28cmである。出土遺物は無い。

104号土壙 13～14—B22～23グリッドに位置する。不定形を呈した落ち込みと重複する。掘り込みは浅く、規模は95×93、深さ17cmで底は凹凸を持つ。出土遺物は無い。

105号土壙 13—B24～25グリッドに位置する。1号掘立柱遺構址のピットが重複する。掘り込みは浅く規模は117×100、深さ20cmである。出土遺物は石皿片2点、磨石1点、凹石1点である。

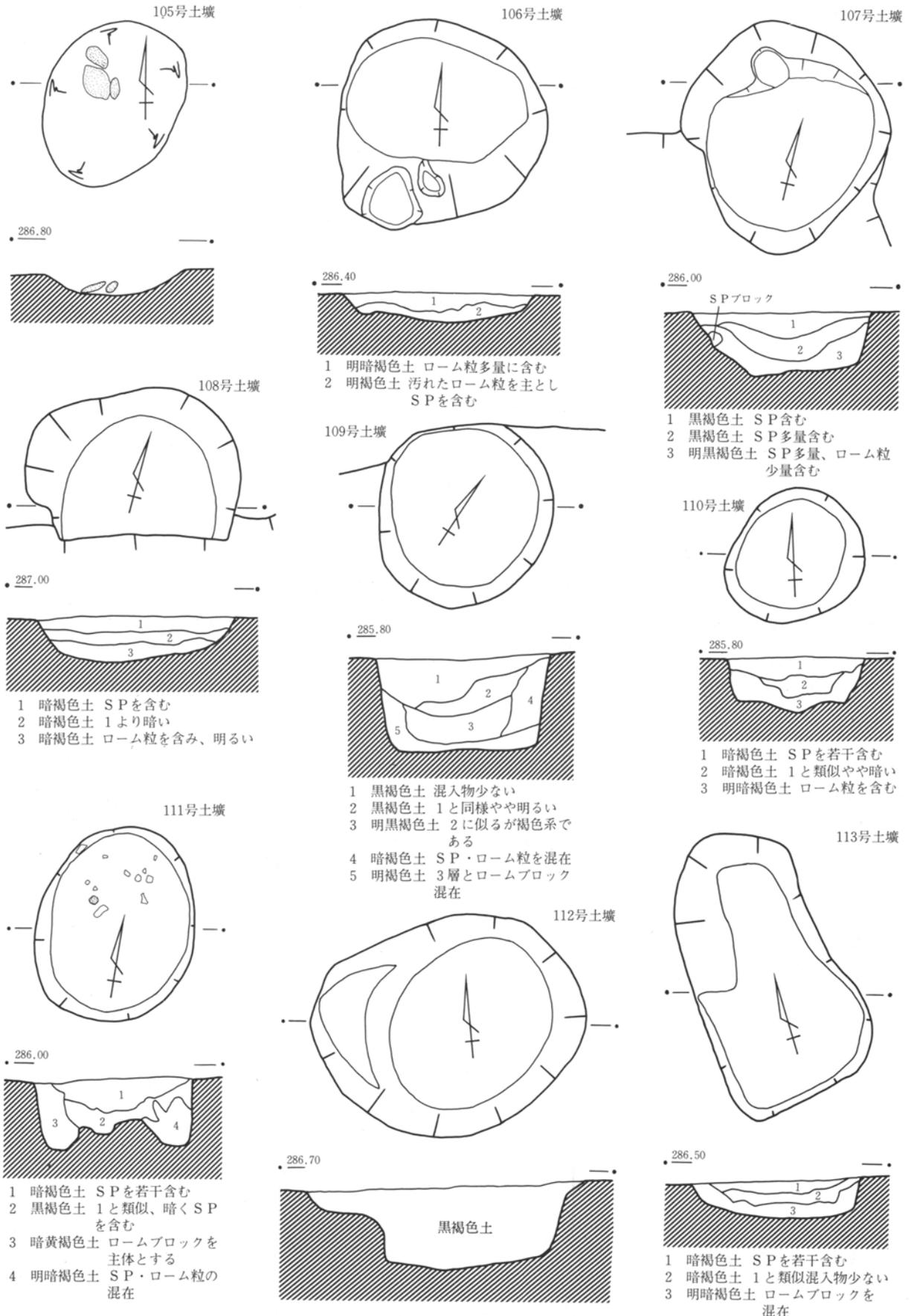
106号土壙 12—B17～18グリッドに位置する。南側がやや張り出した不定形を呈す。規模は150×143、深さ21cmである。出土遺物は無い。

107号土壙 19—B16～17グリッドにあり、南側約半分を5号住居址(古墳時代によって切られる。形状はほ



第49図 101号土壙遺物出土状態

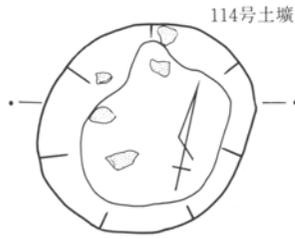
第4節 遺構と遺物



第50図 土 壌 (13)

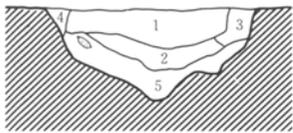
0 1m

第I章 三原田城遺跡

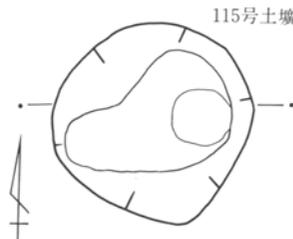


114号土坑

286.10

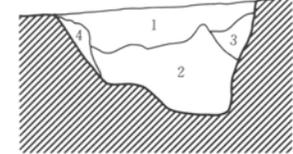


- 1 暗褐色土 混入物ない
- 2 暗褐色土 ローム粒を含み1より明るい
- 3 暗褐色土 SP・ローム粒を含む
- 4 暗褐色土 SPを多量に含む
- 5 明暗褐色土 汚れたローム粒を主とする

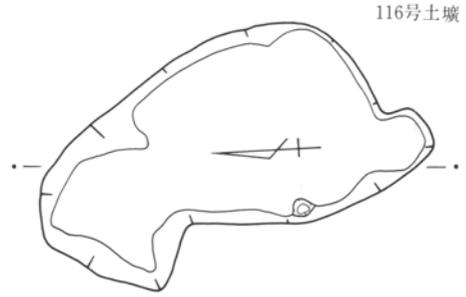


115号土坑

285.80

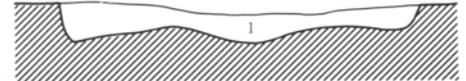


- 1 暗褐色土 ローム粒を含む
- 2 明暗褐色土 ロームブロックとの混土層
- 3 暗褐色土 SPを含む
- 4 明暗褐色土 汚れたローム粒ブロック

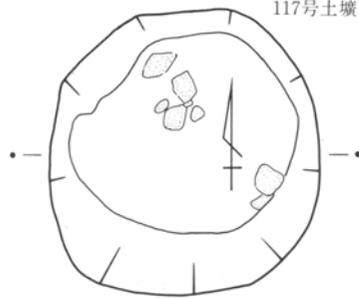


116号土坑

286.00

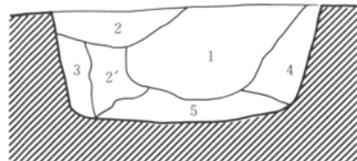


- 1 暗褐色土 SP・ロームローム粒子を少量含む

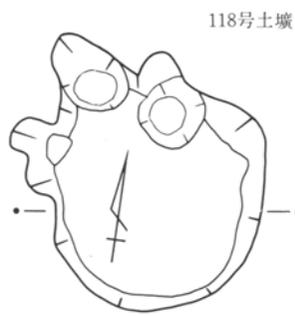


117号土坑

286.20

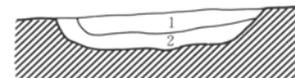


- 1 黒褐色土 SPを若干含む
- 2 暗褐色土 ローム粒子ブロック混在
- 3 明褐色土 壁のくずれ
- 4 暗褐色土 SPを多く含む
- 5 暗褐色土 1層にローム粒ブロック粒子が混在

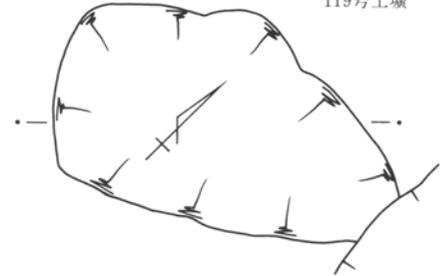


118号土坑

286.30

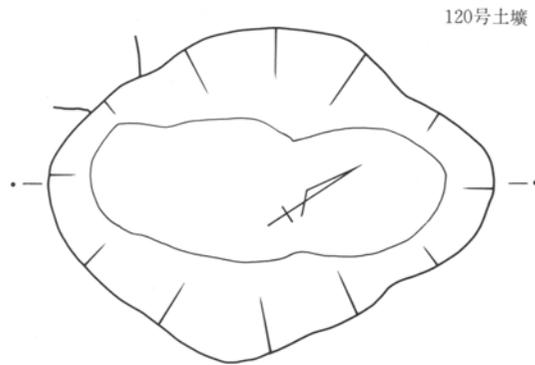


- 1 暗褐色土 ロームブロックを含む
- 2 明暗褐色土 ローム粒、ブロックとの混在



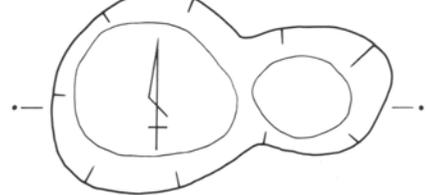
119号土坑

286.50



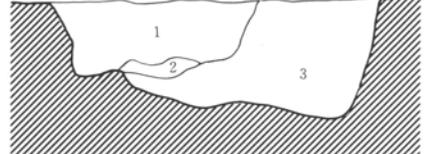
120号土坑

286.50



121号土坑

286.60



- 1 暗褐色土 SP・ローム粒子を若干含む
- 2 暗褐色土 ローム粒ブロックを混在
- 3 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒SPの混土層

第51図 土 坑 (14)

0 1 m

ほぼ円形と思われる。規模は167×150、深さ44cmである。出土遺物は石匙が1点出土している。

108号土壙 やはり5号住居址の北側に接しており、南側半分を欠失している。ほぼ円形を呈していると思われる。底部はやや丸みを持つ。規模は(155)×105、深さ33cmである。出土遺物は土器片4点、スクレイパー1点である。

109号土壙 22～23—B21～22グリッドに位置する。北側に5号溝が接する。平面形状は円形で、掘り込みもほぼ垂直である。底も円形を呈し平らである。規模は147×125、深さ67cmである。出土遺物は、土器片数点と、石錐1点、打製石斧1点、スクレイパー1点である。

110号土壙 22～23—B24～25グリッドに位置する。ほぼ円形を呈す。底は凹凸が見られる。規模は98×95、深さ40cmである。出土遺物は土器片が1点出土しているのみである。

111号土壙 20—B23グリッドに位置する。やや長円形を呈し、掘り込みは垂直に近く、規模は140×115、深さ50cmであるが、底は凹凸が目立つ。土器片数点、石鏃1点、スクレイパー2点が出土している。

112号土壙 22～23—B05～06グリッドに位置する。平面形は長円形を呈し、西側にやや張り出した高まりを持つ。規模は200×160、深さ58cmである。出土遺物は土器片および石鏃1点、スクレイパー2点である。

113号土壙 14～15—B20～21グリッドに位置する。不定形を呈し、掘り込みも浅い。規模は200×120、深さ36cmである。出土遺物は、スクレイパー1点である。

114号土壙 東壁際、11—B10グリッドに位置する。西に81号土壙が近接する。規模は115×111、深さ49cmである。ほぼ円形を呈し、掘り込みは斜めである。底は若干の凹凸を持つ。出土遺物は磨石が1点出土している。

115号土壙 23～24—B23～24グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、底は狭く東側がやや深くなっている。規模は107×107、深さ58cmである。出土遺物は、土器片3片、スクレイパー1点である。

116号土壙 19—B23～24グリッドにある。不定形を呈し、掘り込みは浅い。石鏃が1点出土している。

117号土壙 17～18—B25グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。底は平らである。規模は150×145、深さ61cm、出土遺物は土器片約10片の他、スクレイパー1点、磨石1点、凹石1点、石皿1点、台石2点が出土している。

118号土壙 117号土壙の東に近接。16～17—B25～26グリッドに位置する。不定形を呈し、深さは20cmと浅い。出土遺物は無く、自然の落ち込みと思われる。

119号土壙 15～16—B26～27グリッドに位置し、東に120号土壙が接する。浅く緩やかに凹む。出土遺物は無く、いわゆるしみ状の落ち込みであろう。

120号土壙 14～15—B26～27グリッドにあり、119号土壙と西が接する。不正長円形を呈し、底部は細長くなる。規模は247×176、深さは42cmである。出土遺物は土器片が2点である。

121号土壙 調査区東寄り、12～13—B26～27グリッドに位置する。東側部分に風倒木痕による攪乱抗と重複する。ほぼ円形を呈し、底は凹凸を持つ。規模は180×106、深さ63cmである。出土遺物は、土器片1点とスクレイパー1点である。

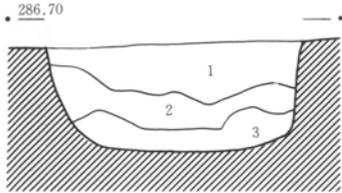
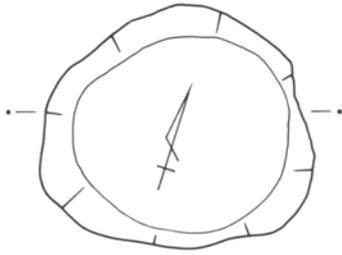
122号土壙 調査区東壁寄り、11～12—B23～24グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し掘り込みも垂直に近い。規模は141×130、深さ57cmである。出土遺物は土器片約10片と石鏃、スクレイパー各1点ずつである。

123号土壙 14～15—B25～26グリッドに位置する。不定形を呈し、底は凹凸を持つ。規模は135×120、深さ30cmである。出土遺物は土器片が若干出土している。

124号土壙 13～14—B21～22グリッドに位置する。不定形を呈し、底面は凹凸が顕著である。規模は147

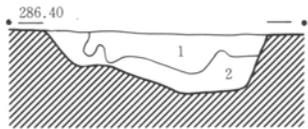
第I章 三原田城遺跡

122号土壇



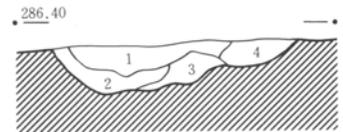
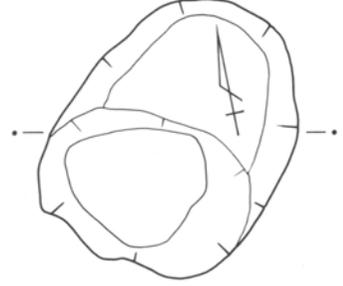
- 1 暗褐色土 ローム粒子、SPを若干含む
- 2 黒褐色土 混入物少ない
- 3 黒褐色土 ロームブロック少量混入

123号土壇



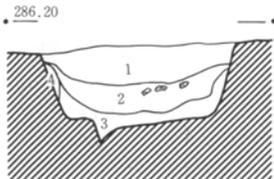
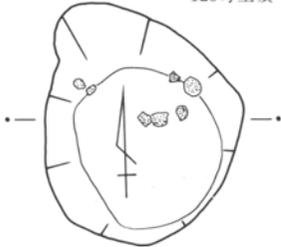
- 1 明暗褐色土 ローム粒、ブロックSPの混入
- 2 明褐色土 ローム粒を多量に含む

124号土壇



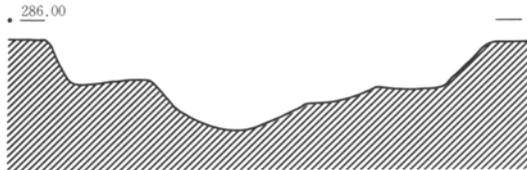
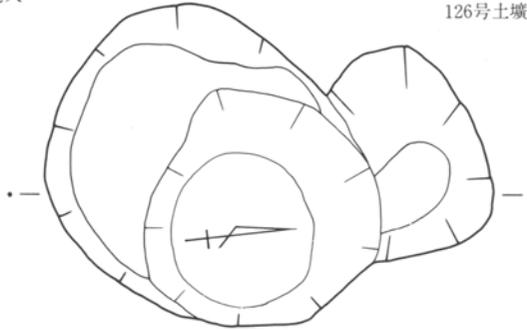
- 1 暗褐色土 SPを含む
- 2 暗褐色土 SP・ロームブロック含む
- 3 暗褐色土 SP・ローム粒を多く含む
- 4 暗褐色土 ローム粒子を多く含む

125号土壇



- 1 黒褐色土 SPを若干含む
- 2 黒褐色土 1と類似、やや明るい
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量含む
- 4 明暗褐色土 汚れたローム粒ブロック

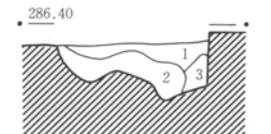
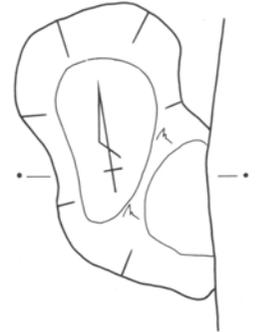
126号土壇



128号土壇

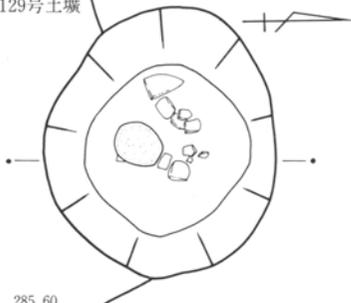


131号土壇

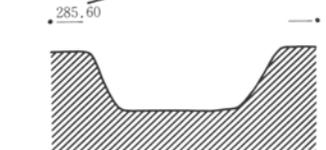
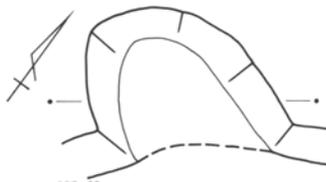


- 1 暗褐色土 SPを若干含む
- 2 暗褐色土 ローム粒子を含む
- 3 暗褐色土 SPを多く含む

129号土壇



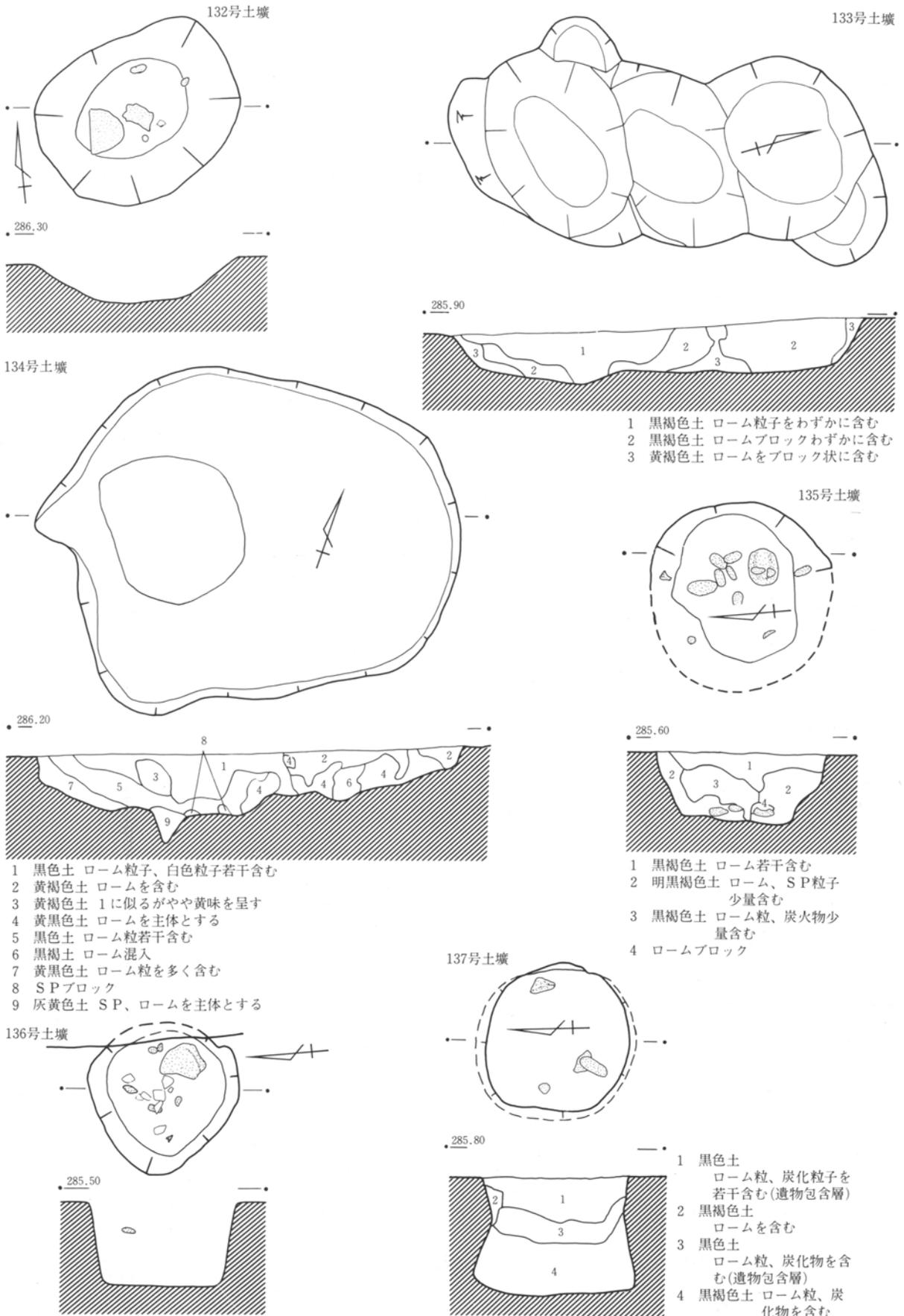
130号土壇



第52図 土 壇 (15)

0 1m

第4節 遺構と遺物



第53図 土 坑 (16)

0 1m

第I章 三原田城遺跡

×134、深さ27cmである。出土遺物は無い。

125号土壙 19-B27グリッドに位置する。北部分がやや張り出すが円形を呈す。壁の掘り込みは垂直に近く、底面は若干の凹凸を持つ。規模は125×107、深さ53cmである。出土遺物は土器片数点、石槍1点、石匙1点、丸石1点である。

126号土壙 20-21-B26-28グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し径1m程であるが、不定形の落ち込みとの重複が見られる。掘り込み面は不明である。出土遺物は土器片2点とスクレイパー1点である。

128号土壙 17-B01グリッド、8号住居址北東コーナー部に重複する。規模は121×(74)、深さ29cmである。出土遺物は無い。

129号土壙 18-B01グリッドにあり、8号住居址北側に重複する。ほぼ円形を呈し、規模は145×124、深さ61cmである。出土遺物は土器片1、スクレイパー1点、敲石1点である。

130号土壙 19-20-B00-01グリッド、8号住居址の北西部に重複する。ほぼ半分以上を欠失して全体形は不明である。出土遺物は無い。

131号土壙 10-11-B15-16グリッドに位置する。東側部分が、東壁に掛る。南北に長い不定形を呈し底の中央が高くなる。出土遺物は無い。

132号土壙 14-B16-17グリッドに位置する。不定形を呈し、掘り込みは浅く、凹凸がある。規模は、150×122、深さ32cmである。出土遺物は土器片若干と台石が1点出土している。

133号土壙 110号土壙の東、21-22-B24-25グリッドに位置する。2-3基の土壙が重複すると思われるが断面では明確に区別できなかったため、1基として処理した。不定形で深さ37cmである。出土遺物は土器片数点と打製石斧1、石鏃1、スクレイパー1、磨石が1点出土している。

134号土壙 117号土壙の南に接する。17-18-B23-25グリッドに在る。やや大型で不定形を呈す。規模は304×288、深さ63cmである。明確な掘り込み面は確認し得なかった。出土遺物は、土器片約10片、スクレイパー2点、ピエス2点、磨石が1点出土している。

135号土壙 23-B03グリッド、60号土壙の西に近接する。先土器時代の試掘トレンチの掘り下げ時点で検出した。平面形はほぼ円形を呈し、壁の掘り込みはやや斜めである。規模は135×130、深さ51cmで底はやや丸みを持つ。出土遺物は、底面近くより打製石斧1、磨石7、凹石1点が出土している。

136号土壙 23-A48-49グリッド、7号住居址の北西際に僅かに重複する。ほぼ円形を定し、壁は垂直に近い状態で掘り込まれている。規模は110×108、深さ約60cmで、底は平らである。出土遺物は、覆土中、上層より大型の礫と共に、東海系の深鉢型土器の半完形品を含む土器片約10点と、打製石斧1、石鏃1、スクレイパー3、礫器1点が出土している

137号土壙 19-20-B03グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、断面はフラスコ状となり、底は平坦となる。規模は117×113、深さ82cmで底面径は約120cmである。出土遺物は土器片約10点、スクレイパー1点、上層より磨石2点、台石1点が出土している。

表4 土壙一覧表

土壙番号	位置	平面形	規模(長軸×短軸×深さ)cm	出土遺物(点)	分類	備考
1	41-42-B01-02	円	120×115×45	土器-4 石器-1	I-A	
2	43-44-B15-16	円	154×143×17	土器-7 石器-2	II-A	
3	43-44-B16-17	円	158×156×133	土器-23 石器-4	I-B	
4	44-45-B05-06	円	153×145×144	土器-2 石器-3	I-B	
5	40-B23-24	不正円	170×164×32	土器-9	III	
6	37-38-B27	円	185×185×56	土器-10 石器-2	I-C	

第4節 遺構と遺物

土壌番号	位置	平面形	規模(長軸×短軸×深さ)cm	出土遺物	分類	備考
7	36-B26~27	円	130×127×25		Ⅱ-A	
8	36~37-B28~29	長円	120×89×38	土器-7	I-D	
9	32~33-B27	円	94×92×72	土器-6 石器-4	I-A	
10	33-B25	円	105×104×60	土器-3 石器-1	I-A	
11	36~37-B21~22	円	102×100×30		I-D	
12	35-B21	円	134×115×78	土器-8 石器-3	I-A	
13	34-B21	円	111×108×64	土器-4 石器-1	I-A	
14	34-B19~20	不正円	92×85×42	土器-6 石器-1	I-D	
15	37-B26	不正円	120×112×28		Ⅱ-A	
16	38-B27	円	78×78×37	土器-1	I-D	
17	33-B17~18	円	120×112×78	土器-11 石器-2	I-A	
18	37-B17~18	円	144×133×25		Ⅱ-B	
19	37~38-B16	円	125×111×22		Ⅲ	
20	34-B16~17	長円	160×127×48	土器-1	I-A	近世土壌と重複
21	33~34-B16	円	107×100×47	土器-3	I-A	
22	37-B14	不正円	138×125×21	土器-4 石器-2	Ⅲ	近世土壌と重複
23	37~38-B13	円	140×133×23	土器-3 石器-1	Ⅱ-B	
24	37-B12~13	円	(94)×88×70	土器-7 石器-1	I-A	
25	33-B19	円	134×(130)×68	土器-6 石器-4	I-A	
26	33~34-B13~14	長円	105×85×50	土器-2	I-D	
27	32~33-B12	円	135×(129)×57	土器-7 石器-1	I-C	近世土壌と重複
28	32~33-B11~12	円	87×85×15	石器-1	Ⅱ-A	
29	35-B09~10	円	147×138×58	土器-11 石器-6	I-A	
30	35-B12~13	円	117×(112)×33	土器-5 石器-5	I-D	
31	35-B12	円	73×(50)×(42)		I-D	近世土壌が重複
32	34~35-B11	円	126×117×67	土器-5 石器-2	I-A	
33	37~38-B09~10	円	203×185×17	土器-7 石器-4	Ⅱ-B	
34	36-B10~11	円	100×96×22		Ⅱ-B	
35	38~39-B27	長円	125×110×50		I-C	
36	48~49-B20~21	円	168×(160)×90		I-D	
37	36-B25~26	円	175×155×59	土器-8 石器-1	I-A	
43	31~32-B31~32	長円	243×(155)×86	土器-7 石器-4	I-A	近世土壌と重複
44	14~15-B23~24	長円	145×143×120		I-B	
45	11~12-B37~38	長円	215×118×48		中世土壌	火葬墓の可能性有
46	11~12-B39	長円	93×63×15		中世土壌	火葬墓の可能性有
47	13-B37~38	長方	103×78×38		中世土壌	火葬墓の可能性有
48	15~16-B37	長方	120×65×33		中世土壌	火葬墓の可能性有
49	15~16-B39	長方	135×75×18		中世土壌	火葬墓の可能性有
50	16-B00	円	148×143×48		I-D	
51	13~14-A49~B00	円	135×132×64	土器-19 石器-1	I-A	
52	12~13-B01	円	145×130×56		I-D	
53	12~13-B02~03	円	152×147×62	石器-1	I-A	
54	11-B04~05	円	148×128×83	土器-7 石器-1	I-A	
55	11~13-B04~05	不正円	260×190×55	土器-21 石器-5	I-D	
56	13~14-B04~05	円	168×167×40	土器-2	I-D	
57	24~25-A49~B00	円	158×148×33	土器-7 石器-3	I-D	
58	23~24-A49~B00	円	142×140×65	土器-5 石器-5	I-A	
59	23~24-B01~02	長円	290×122×54	土器-6 石器-5	I-D	
60	21~22-B02~03	円	277×266×143	土器-21 石器-9	I-B	
61	20~21-B02	長円	174×147×80	土器-6	I-A	
62	17~18-B04~05	円	150×142×33	石器-1	I-D	
63	18~19-B05~06	長円	186×158×67	土器-3	I-D	
64	17~18-B06~07	長円	132×110×29	土器-3	I-D	
65	18~19-B07~08	円	109×102×30		I-D	
66	15~16-B06~07	長円	160×135×50	土器-25 石器-5	I-D	78号土壌と重複
67	12~13-B06~07	円	175×150×53	土器-4	I-D	
68	13~14-B08~09	円	155×140×45	土器-13 石器-1	I-D	69号土壌と重複
69	13~14-B08~09	不正円	126×118×37	石器-4	I-D	68号土壌と重複
70	14~15-B02~03	円	146×145×93	土器-12 玉-1	I-A	9号住居と重複
71	14~15-B09~10	不正円	140×122×25	石器-1	Ⅱ-A	
72	14~15-B10~11	長円	140×120×30	土器-2	Ⅱ-A	
73	18~19-B09~10	円	140×117×65		I-A	
74	20~21-B10~11	不正円	207×163×24	土器-2	Ⅲ	83号土壌と重複

第I章 三原田城遺跡

土壌番号	位置	平面形	規模(長軸×短軸×深さ)cm	出土遺物	分類	備考
75	24~25-B03~04	長円	170×135×35	土器-6 石器-3	II-B	66号土壌と重複
76	15~16-B12~13	不正円	158×150×25	土器-1 石器-1	III	
77	17-B11~12	不正円	177×96×26		III	
78	16-B06~07	長円	166×126×77	土器-16 石器-2	I-A	
79	12~13-B07~08	円	143×143×49	土器-7 石器-2	I-D	74号土壌と重複
80	11~12-B08~09	円	162×147×43	土器-1	I-D	
81	11~12-B09~10	円	165×145×83	土器-12 石器-2	I-A	
82	12~13-B09~10	長円	180×127×36		I-D	
83	21-B10~11	不正円	167×(105)×32		III	74号土壌と重複
84	18~19-B14	長円	148×115×30		II-B	
85	20-B15	円	137×128×25		III	
86	17~18-B15	円	105×94×28	玉-1	I-D	
87	14~15-B13~14	円	176×162×35		I-D	5号住居と重複
88	14~15-B14~15	長円	154×143×17		III	
89	11~12-B14~15	円	132×123×50	土器-1 石器-1	I-A	
90	10~11-B18~19	円	144×129×52	土器-7 石器-1	I-A	
91	11~12-B19	円	82×73×20		II-B	5号住居と重複
92	11~12-B20~21	円	240×158×62	土器-9 石器-12	I-C	
93	13-B19~20	円	167×165×32	土器-5	I-D	
94	14-B20	円	129×123×53	土器-11 石器-7	I-D	
95	17~18-B20	長円	155×105×20	土器-3	II-B	5号住居と重複
96	19-B20~21	円	153×144×60	石器-1	I-D	
97	20~21-B19~20	長円	150×120×67	土器-5	I-A	
98	21~22-B18~19	長円	98×87×38		I-D	
99	17~18-B22	円	100×96×23		II-A	5号住居と重複
100	16~17-B22~23	円	107×101×52	土器-2 石器-1	I-A	
101	15~16-B21~22	円	181×175×36	土器-1 石器-2	I-D	
102	15-B22~23	円	128×112×42	石器-2	I-D	
103	15~16-B23~24	不正円	155×112×28		III	5号住居と重複
104	13~14-B22~23	不正円	95×93×17		III	
105	13-B23~24	長円	117×100×20	土器-2 石器-4	-	
106	12-B17~18	円	150×143×21		III	
107	19-B16~17	円	167×150×44	石器-1	I-D	5号住居と重複
108	20~21-B18~19	円	(155)×105×33	土器-4 石器-1	I-D	
109	22~23-B21~22	円	147×125×67	土器-8 石器-3	I-A	
110	22~23-B24~25	円	98×95×40	土器-1	I-D	
111	20-B23	円	140×115×50	土器-5 石器-3	I-A	120号土壌と重複
112	22~23-B05~06	円	200×160×58	土器-7 石器-3	I-A	
113	14~15-B20~21	長円	200×120×36	石器-1	III	
114	11-B10	円	115×111×49	石器-1	I-D	
115	23~24-B23~24	円	107×107×58	土器-3 石器-1	I-D	119号土壌と重複
116	19-B23~24	不正長	195×105×22	石器-1	III	
117	17~18-B25	円	150×145×61	土器-8 石器-6	I-A	
118	16~17-B25~26	不正	140×140×20		III	
119	15~16-B26~27	不正	135×125×18		III	120号土壌と重複
120	14~15-B26~27	長円	247×176×42	土器-2	I-D	
121	12~13-B26~27	円	180×106×63	土器-1 石器-1	I-D	
122	11~12-B23~24	円	141×130×57	土器-7 石器-2	I-A	
123	14~15-B25~26	円	131×120×30	土器-2	I-D	8号住居と重複
124	13~14-B21~22	長円	147×134×27		III	
125	19-B27	円	125×107×53	土器-3 石器-4	I-A	
126	20~21-B26~28	円	240×166×48	土器-2 石器-1	III	
128	17-B01	不正円	121×(74)×29		I-D	8号住居と重複
129	18-B01	円	145×124×61	土器-1 石器-2	I-A	
130	19~20-B00~01	不正円	102×77×33		I-D	
131	10~11-B15~16	不正	147×97×31		III	
132	14-B16~17	長円	150×122×32	土器-1 石器-1	II-B	8号住居と重複
133	21~22-B24~25	不正	298×160×37	土器-5 石器-4	II-B	
134	17~18-B23~25	長円	304×288×63	土器-9 石器-4	II-B	
135	23-B03	円	135×130×51	石器-10	I-D	
136	23-A48~49	円	110×108×60	土器-9 石器-6	I-A	7号住居と重複
137	19~20-B03	円	117×113×82	土器-9 石器-4	I-B	

(3) 出土土器

1号住居址（第54図～第56図）

1・5～8は胎土に繊維を含む土器である。5は平縁で折り返し口縁となる有段の口縁部に、捺糸側面圧痕による平行・渦状の文様を施したもの。6は平縁で口縁部に平行な数条の隆帯と、捺糸側面圧痕をもち、さらに隆帯上に半截竹管による刺突を施したもの。7・8は平縁で口縁部以下にL R・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもので、口縁部が折り返し口縁となるものもある。1は深鉢形を呈するもので胴部に、L R・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。10・11は屈曲する口縁部に、細い隆帯を数条巡らせ、隆帯上に半截竹管による連続刺突を施したもの。12は胴部に、数条の細い隆帯を巡らせ、隆帯上に刻み目を施したもの。13は平縁で地文にL Rの縄文を施し、口縁部に隆帯を二条巡らせ半截竹管による刺突を施したもの。2は口縁部が屈曲する大形の深鉢形を呈するもので、全面に半截竹管による平行沈線及び口縁部に縦位沈線を施し、胴部にボタン状の点貼文を加えたもの。9は小波状となる口縁で、屈曲した口縁部に半截竹管による平行沈線及び斜位沈線を施し、波頂部下にボタン状の点貼文を加えたもの。14～18は胴部に、半截竹管により平行沈線及び菱形等を描いたもの。19～22・27は胴部に、半截竹管により羽状沈線を描いたもの。24・25は同一個体で、平縁となる口縁部に半截竹管による羽状沈線及び平行沈線、さらに鋸歯状に文様を描くもの。23・26・28は波状となる口縁で、口縁部に半截竹管による平行沈線及び縦位等に沈線を施し、波頂部下にボタン状の点貼文を加えたものもある。29・30は平縁で、口縁部以下にR Lの縄文を施し、ボタン状の点貼文を加えたもの。31・32は胴部にL R・R Lによる羽状縄文を施したもの。33は平縁となる口縁で、口縁部が逆三角形の有段となり地文にL R・R Lによる羽状縄文を施し、鋸歯状に細い隆帯をもつもの。34～37は口縁部に、半截竹管による平行沈線を地文とし縦位の隆帯をもつので、34は裏面にまで隆帯を施している。4は深鉢形を呈するもので、胴部に半截竹管による平行沈線及び渦巻状、山形状に文様を描いたもの。38～41は胴部に、半截竹管により渦巻状に文様を描いたもの。42～47は同一個体で、連歯状工具で全面に刺突し、三角や柳葉形の陰刻を施したもの。48～50は同一個体で、胴部にL Rの縄文を縦位に施したもの。3・51～53は胎土に雲母を多量に含むもので、隆帯や半截竹管等による押し引き文を施したもの。3は波状口縁となり、深鉢形を呈するもの。54は胴部に、隆帯及び半截竹管による押し引き文を施したもの。

2号住居址（第57図）

55～76は胎土に繊維を含むものである。55は口縁部に半截竹管による刺突をもち、胴部にR L（0段多条）の縄文を施したもの。56は口縁部に捺糸側面圧痕及び半截竹管による刺突をもち、胴部にL Rの縄文を施したもの。57は口縁部以下にR L（0段多条）の縄文を施したもの。58～72・74・76は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。73は胴部にL R（0段多条）の縄文を施したもの。75は胴部にL R・R Lによる羽状縄文を施したもの。77は胎土に繊維を含まない薄手のもので、表裏面に指頭圧痕をもつもの。

3号住居址（第58図～第60図）

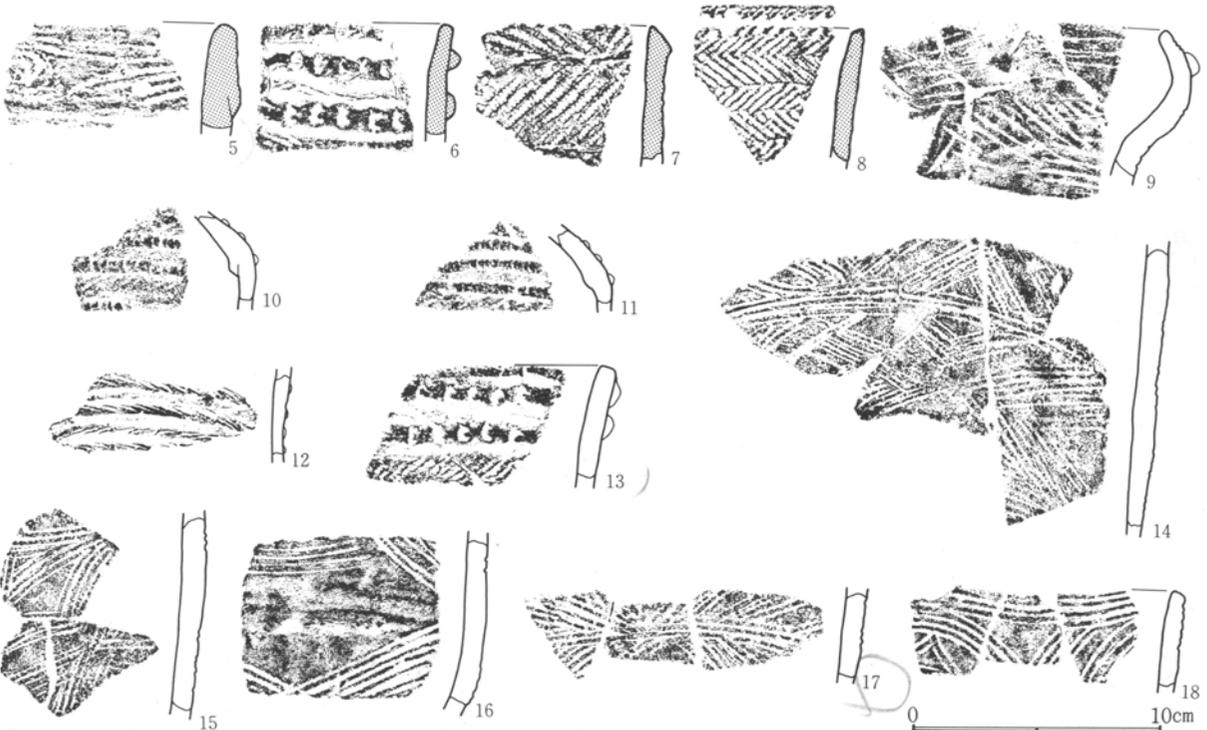
78～130は胎土に繊維を含むものである。82～86・98・99は口縁部に捺糸側面圧痕による平行・渦巻き状・山形ないしは菱形状の文様を施したもので、82は折り返し口縁となり、口縁部に孔を有し竹管具による円形刺突をもつもの。85は胴部にL R（0段多条）の縄文をもつもの。98は文様区画に刻み目をもつ隆帯を用い、胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。99は文様区画に隆帯を用い、胴部にR L（0段多条）の縄文を施したもの。87は口縁部に隆帯をもち、胴部に縄文を施したもの。88は口縁

第I章 三原田城遺跡

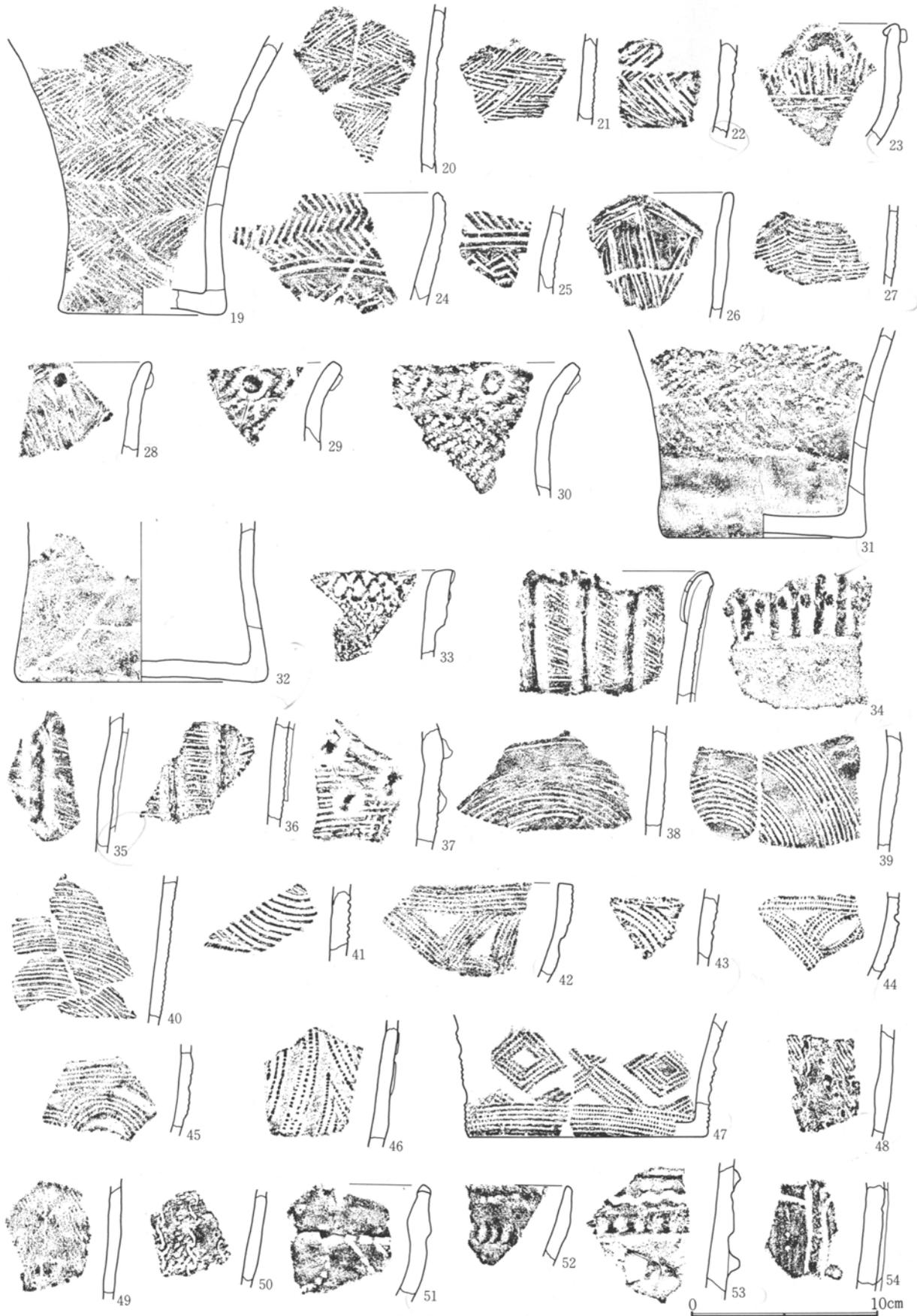
部に半截竹管による刺突を施したもの。89～91は口縁部に、あまい燃りの回転絡条体圧痕による格子目状の文様を施したもので、絡条体の末端処理が見られる。78・92～94は口縁部が折り返し口縁となり、口縁部以下にLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施したもの。78は平縁で、胴部が膨らみ、底部がやや上げ底となる深鉢形を呈し、文様には縄の閉端処理が見られる。80・96・97は口縁部以下にRL（0段多条）・LR（0段多条）による羽状縄文を施したもの。95は口縁部以下にRL（0段多条）の縄文を施したもの。100は平縁で口縁部に孔を有し、口縁部以下にLR（0段多条）の縄文を施したもの。79・81・101～116・118・119・126は胴部にLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施したもの、119には閉端処理が見られる。117は胴部にR・Lによる羽状縄文を施したもの。120・123・128は胴部にLR（0段多条）の縄文を施したもの。121・122・124・125・127は胴部にRL（0段多条）の縄文を施したもの。129は尖底となる底部で、胴部には縄文が施されている。130は上げ底となる底部で、胴部と同様にLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を底面にまで施したもの。131・132は胎土に繊維を含まない薄手のもので、表裏面に指頭圧痕がみられるもの。



第54図 1号住居址出土土器（1）

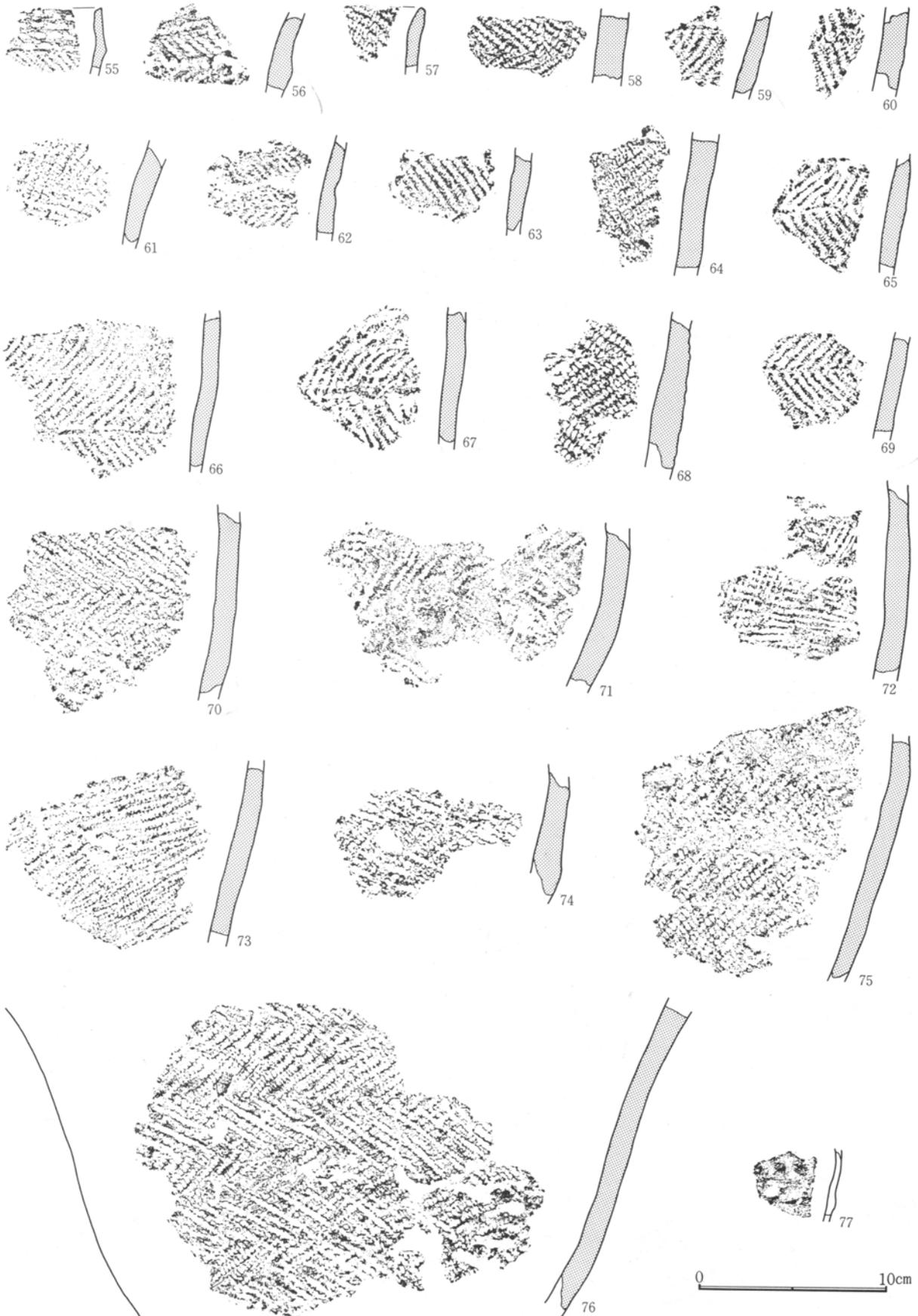


第55図 1号住居址出土土器(2)

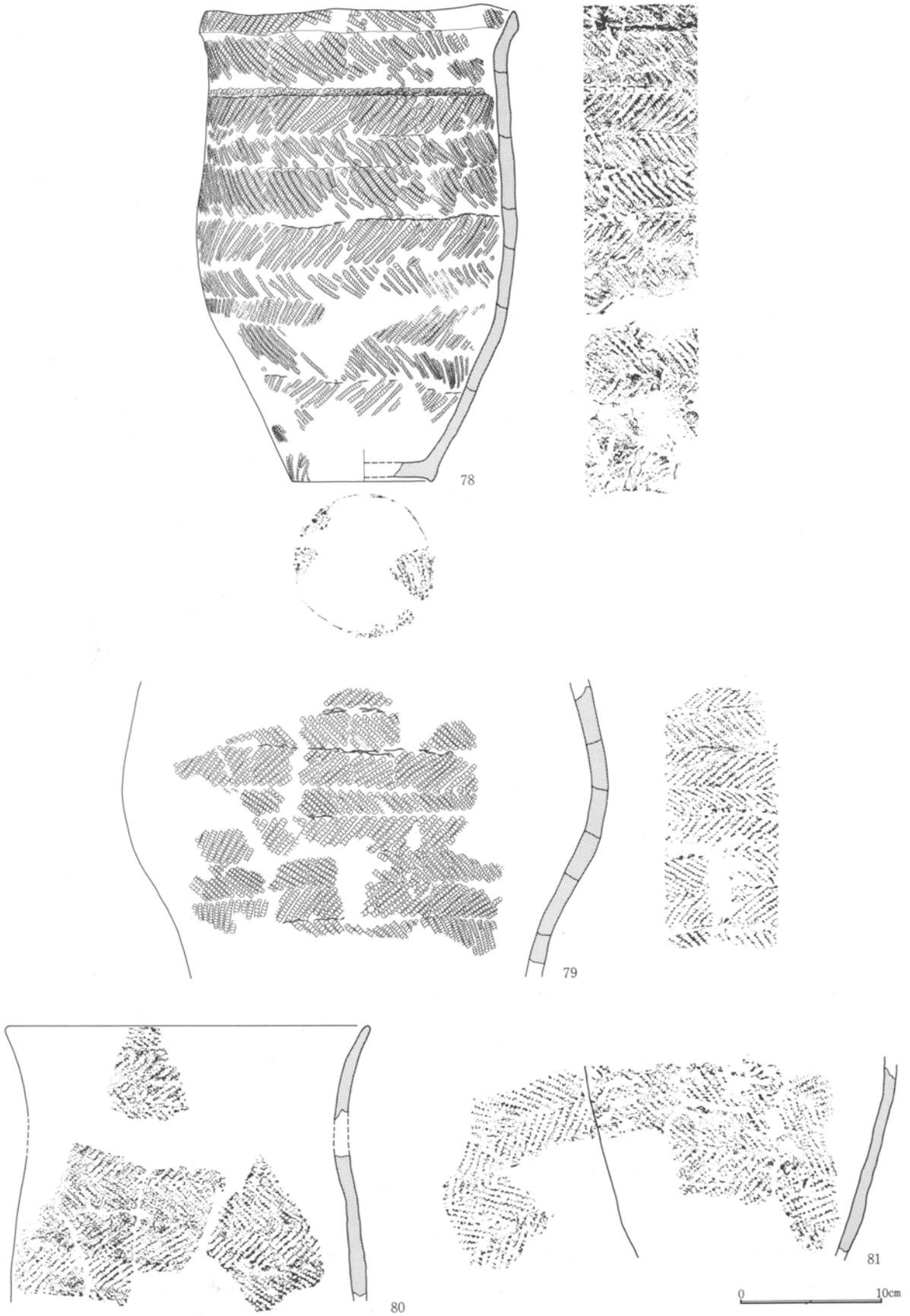


第56图 1号住居址出土土器(3)

第4節 遺構と遺物

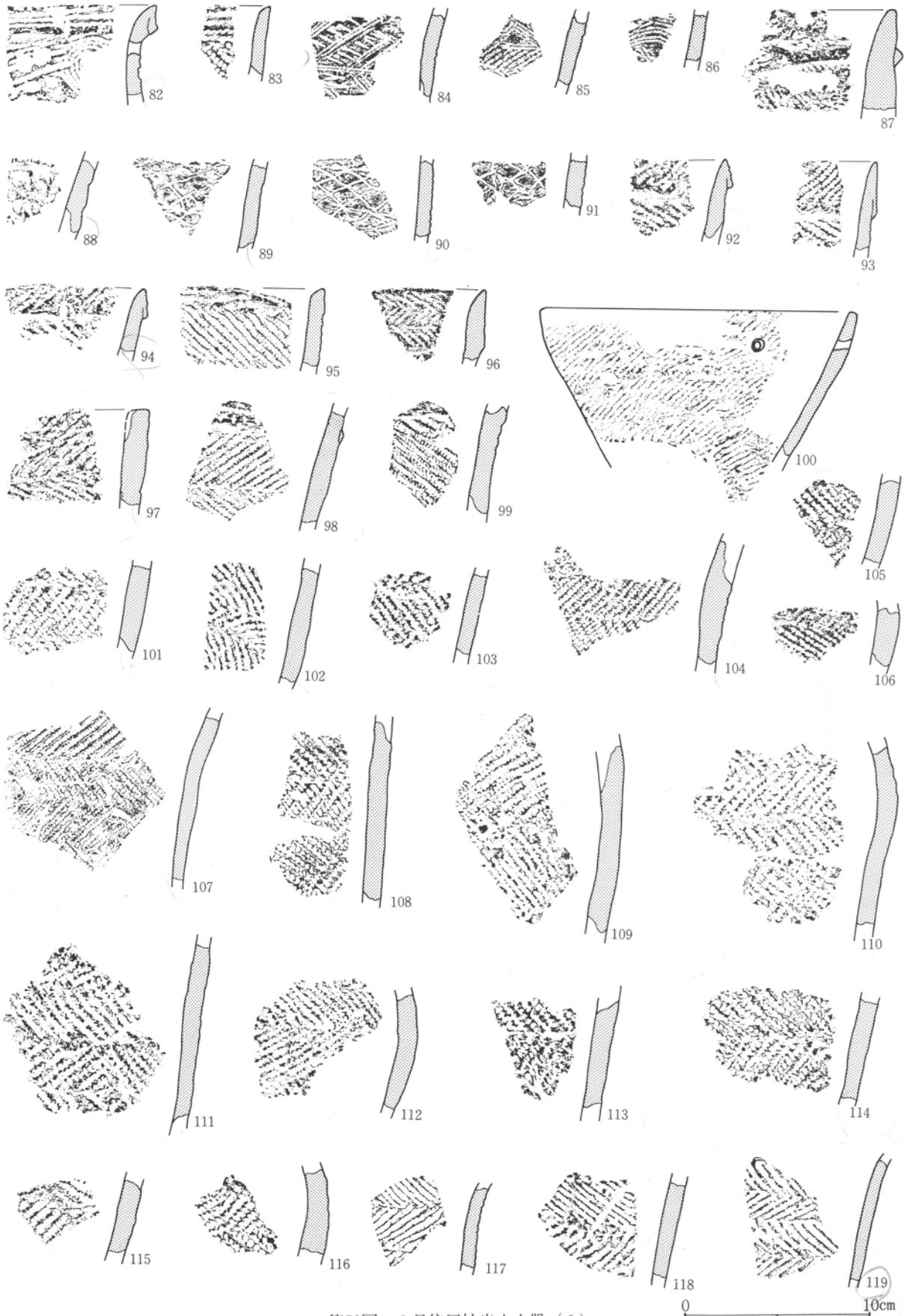


第57図 2号住居址出土土器

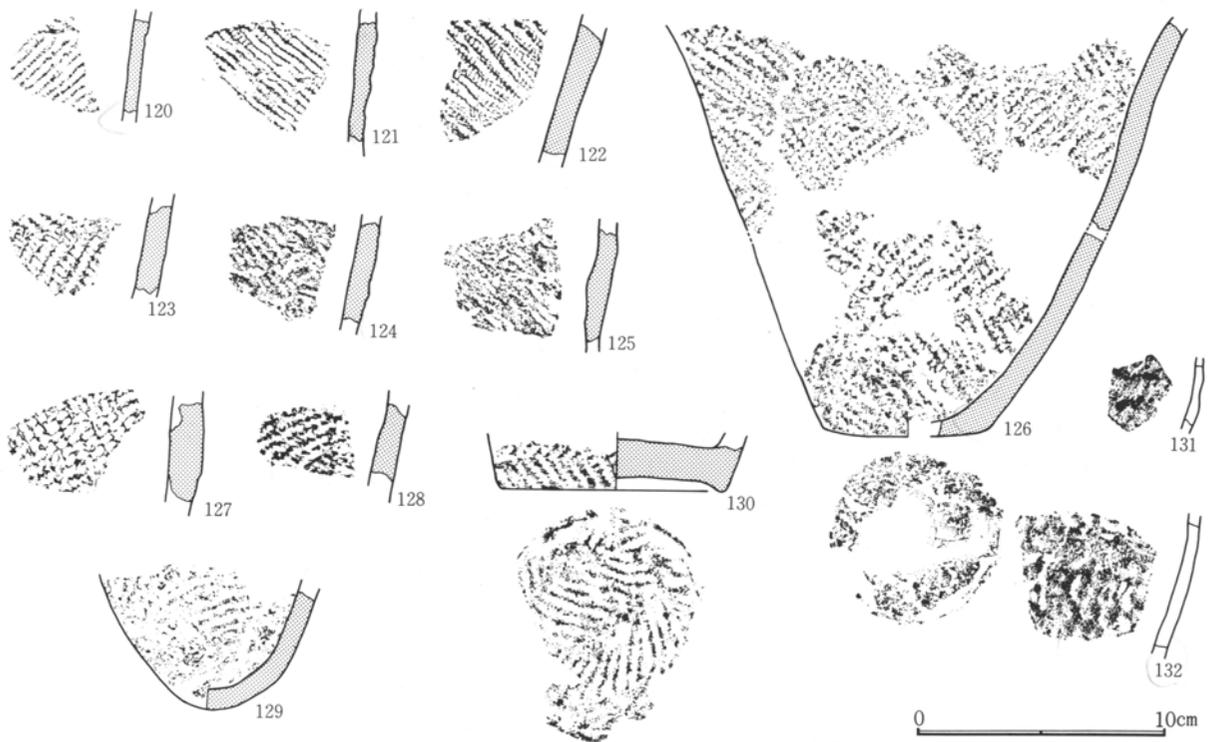


第58図 3号住居址出土土器(1)

第4節 遺構と遺物



第59図 3号住居址出土土器(2)



第60図 3号住居址出土土器(3)

4号住居址(第61図・第62図)

133~167は胎土に繊維を含んでいるもの。136は口縁部に隆帯と撚糸側面圧痕により文様を施したもの。137は折り返し口縁となる口縁部に刺突及び撚糸側面圧痕による弧を描き、胴部にRL(0段多条)の縄文を施したもの。138・139は口縁部に細い撚糸を用いた回転絡条体圧痕による格子目状の文様が施されたもので、139には絡条体の末端処理が見られる。140は口縁部に回転絡条体と思われる細い撚糸が施されたもの。141は口縁部に半截竹管による沈線で菱形文を描き、刻みを持つ隆帯で文様区画をし、胴部にはRL(0段多条)・LR(0段多条)による羽状縄文を施したもので、RLの閉端処理も見られる。142は口縁部に刺突を持つ隆帯、撚糸側面圧痕及び半截竹管による沈線で菱形文を描いたもの。133・143~146は折り返し口縁となるもので、133・144・146には口縁部以下にLR(0段多条)・RL(0段多条)の羽状縄文が施され、143・145にはLR(0段多条)の縄文が施されている。特に133は平縁であるが二対の突起状のものをもつ深鉢形を呈する。147~150は口縁部以下にRL(0段多条)、またLR(0段多条)の縄文を施したもの。135・151・152は口縁部以下にLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施したもの。134・153~160・163は胴部にLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施したもの。161・162は胴部にR・Lによる羽状縄文を施したもの。164~166は胴部にRの縄文を施したもの。167は底部の底面にLR(0段多条)の縄文を施したもの。168~173は胎土に繊維を含まないもの。168は表裏面に指頭圧痕がみられ、表面に突起を有し櫛歯状工具による条痕を施したもの。169~172は器面にLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施したもので、169は平縁で隆帯をもつ有段口縁となるもの。173は表裏面に指頭圧痕がみられ、表面には櫛歯状工具による条痕を施したもの。



133



134



135



0 10cm

第61図 4号住居址出土土器(1)



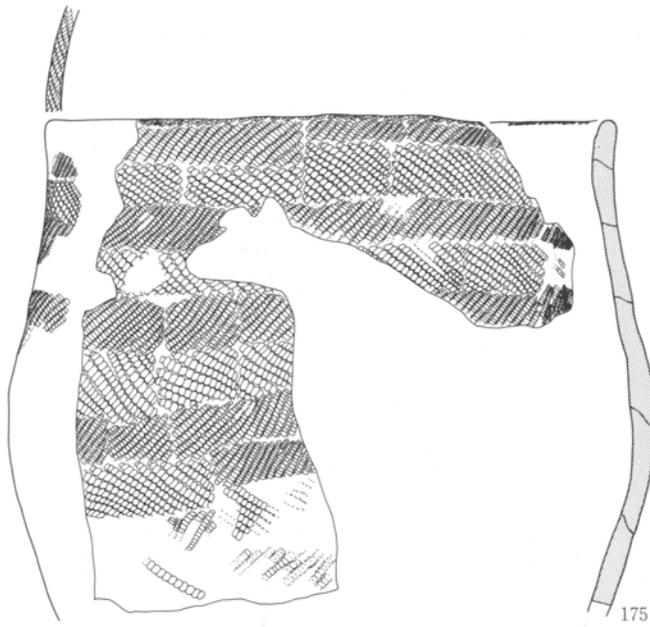
第62図 4号住居址出土土器(2)

6号住居址（第64図～67図）

174～275は胎土に繊維を含むもの。176・182～186・191・194は口縁部に捺糸側面圧痕による文様を描くもので、176は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施した平縁となる小形の深鉢形を呈する。182は平縁の折り返し口縁となる口縁部に捺糸側面圧痕による平行・渦巻き・菱形等の文様を描き、文様区画に太い刻み目をもつ隆帯を巡らせ、胴部にはL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。183・185は平縁口縁の口舌部に刻み目をもち、口縁下に刻み目をもつ隆帯を巡らせ、さらに口縁部文様として捺糸側面圧痕による平行・渦巻き等を描いたもの。184は波状口縁の頂部が瘤状の三頭となり、口舌部に刻み目、口縁部文様に捺糸側面圧痕を施したもの。186は口縁部に捺糸側面圧痕による渦巻き等の文様及び刺突を施し、文様区画に刻み目をもつ隆帯を巡らせる。191は口舌部に刻み目をもつ平縁の口縁部に、捺糸側面圧痕及び羽状に刺突状の沈線を施したもの。194は口舌部に刻み目をもち、口縁部に平行な捺糸側面圧痕、文様区画に指頭圧痕をもつ隆帯を巡らせ、胴部にR L（0段多条）の縄文を施したもの。189・190は口縁部ないし胴部に回転絡条体圧痕による格子目状の文様を施したもの。193は文様区画に刻み目をもつ隆帯を巡らせ、胴部にL R（0段多条）の縄文を施したもの。174・175・179・187・192・195～211は口縁部以下にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもので、174・192・195～199は折り返し口縁となるもの。174は口縁部が大きく外反し、胴部が屈曲、底部がやや上げ底となる深鉢形を呈する。175は口舌部にL R（0段多条）の縄文を施し、口縁部よりも胴部最大径が大きくなる深鉢形を呈する。179は口縁部が外反し、胴部がわずかに膨らむ深鉢形を呈しており、羽状縄文が施されるのは胴部下半となるもの。192・210は口舌部に刻み目をもつもの。212～223は口縁部以下にL R（0段多条）ないしはR L（0段多条）の縄文を施したもの。188は平縁となる口縁が外反し、頸部が大きくくびれる器形を呈した無文のもの。224～250は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。177・178・180・181・251～253・255・256・258・260～265は胴部にL R（0段多条）ないしはR L（0段多条）の縄文を施したもので、255～257・264の胎土には微量の繊維が含まれるのみで、むしろ砂粒が多く含まれている。254は胴部にL Rの縄文を施したもの。257・259は胴部に回転絡条体圧痕による細い捺糸を施したもの。266～272は一応平底となる底部で、胴部にはL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文が施され、底面にまで縄文が施されているものもある。271は上げ底となるものであるが、むしろ元の形はかなり丸底に近いものと思われる。273は尖底となるもので、胴部に縄文を施したもの。274・275は胎土に繊維よりも砂粒が多く含まれるもので、274は平縁口縁となり、口縁部に半截竹管による波状文が描かれ、胴部には一部L R・R Lによる羽状縄文が施されるものの主にR Lのみが施されているもの。275は口縁部に太い沈線を縦位に施し、胴部にR Lの縄文を施したもの。276～278は胎土に繊維を含まないもの。276は沈線を鋸歯状に施し、以下にR L（0段多条）の縄文を施したもの。277・278は薄手の土器で、表裏面に指頭圧痕が見られ、278の表面には薄く条痕が施されている。

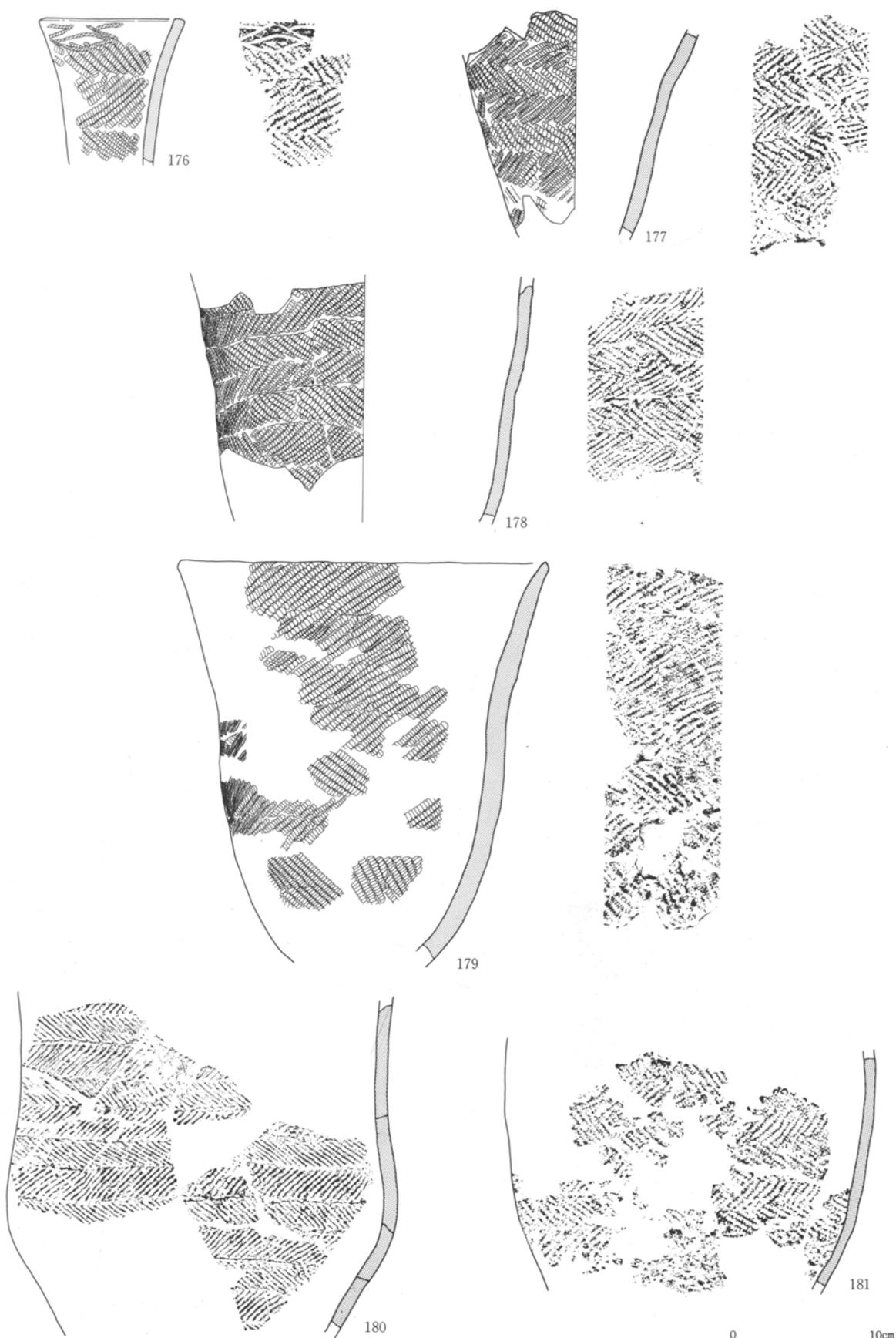
7号住居址（第68図～第69図）

279～296・298～310は胎土に繊維を含むもの。279は波状口縁となる口縁に大きさの異なる二対の把手をもち、口縁部は折り返しによる有段口縁となり、頸部がややくびれ、胴部が膨らむ深鉢形を呈する。口縁部の有段部には隆帯・捺糸側面圧痕・刻み目・沈線状の刺突及び円形刺突を、その下に捺糸側面圧痕によるループを描きながら刺突・円形刺突と共に鋸歯文状にした文様を一段の単位として三段もつ。胴部にはL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文が施されている。283は口縁部に捺糸側面圧痕を施したもの。280は平縁で口縁部が折り返し口縁となる深鉢形を呈するもので、口縁部以下にL R（0段多条）・R L（0



0 10cm

第63図 6号住居址出土土器(1)

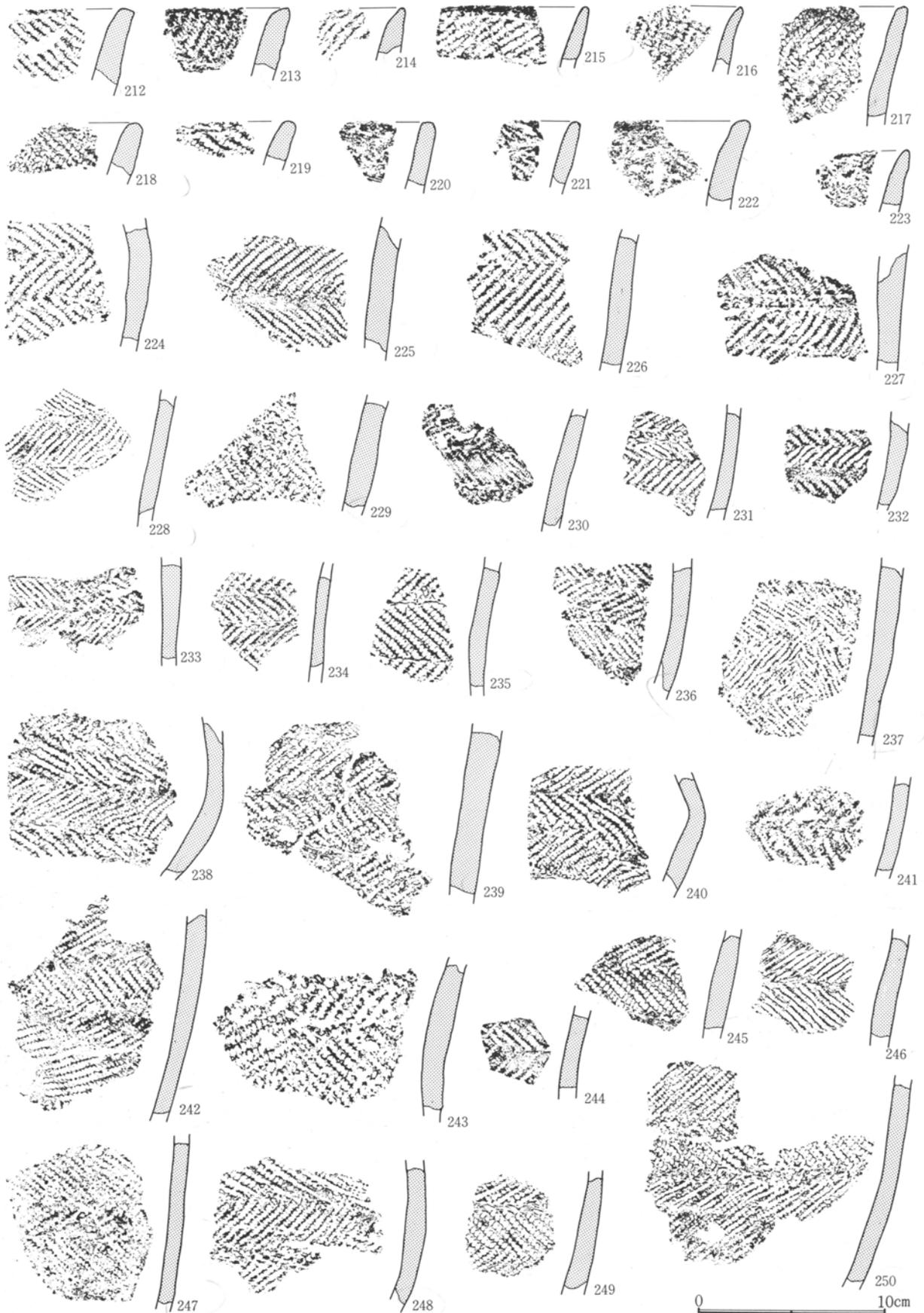


第64図 6号住居址出土土器(2)

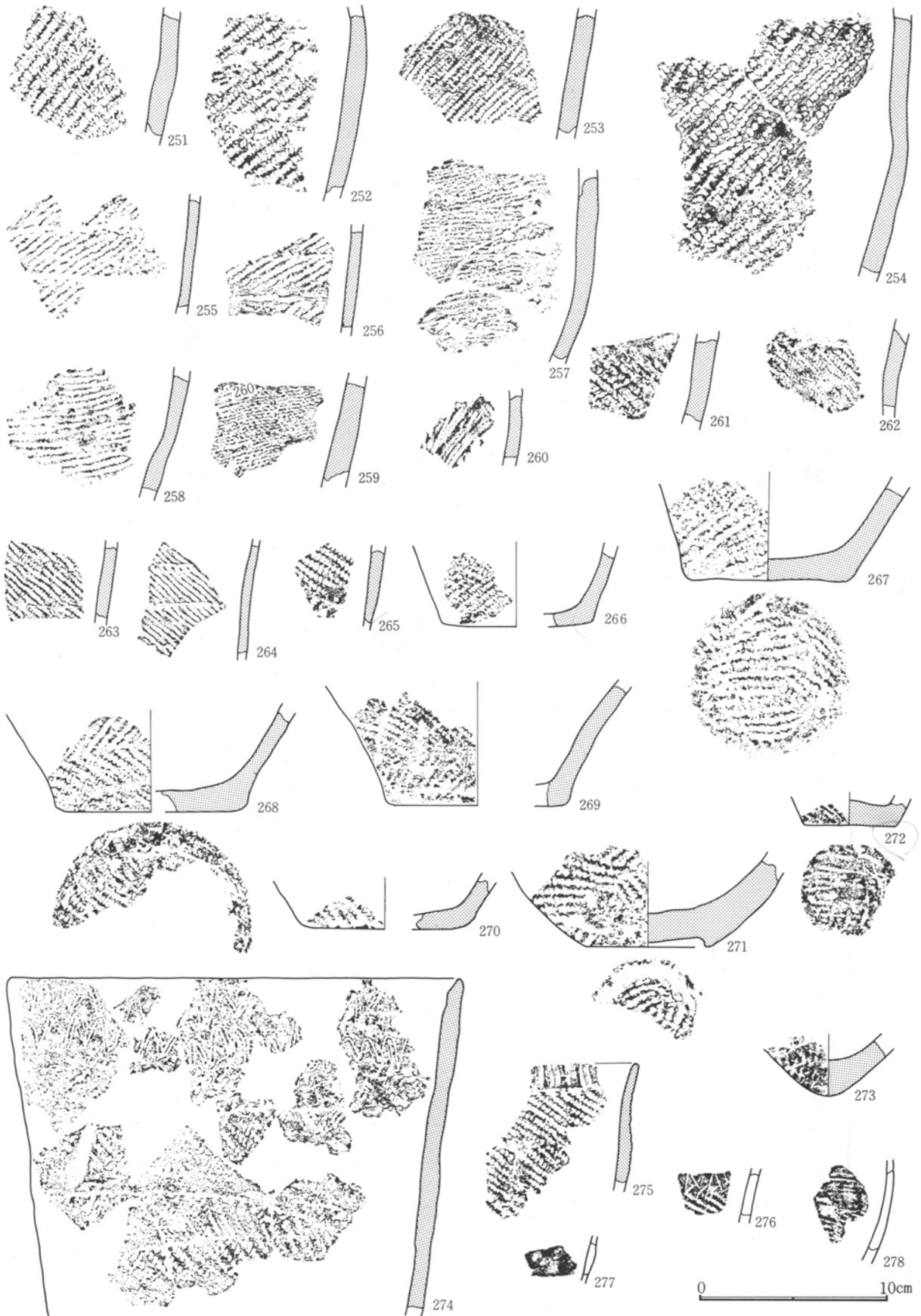


第65図 6号住居址出土土器(3)

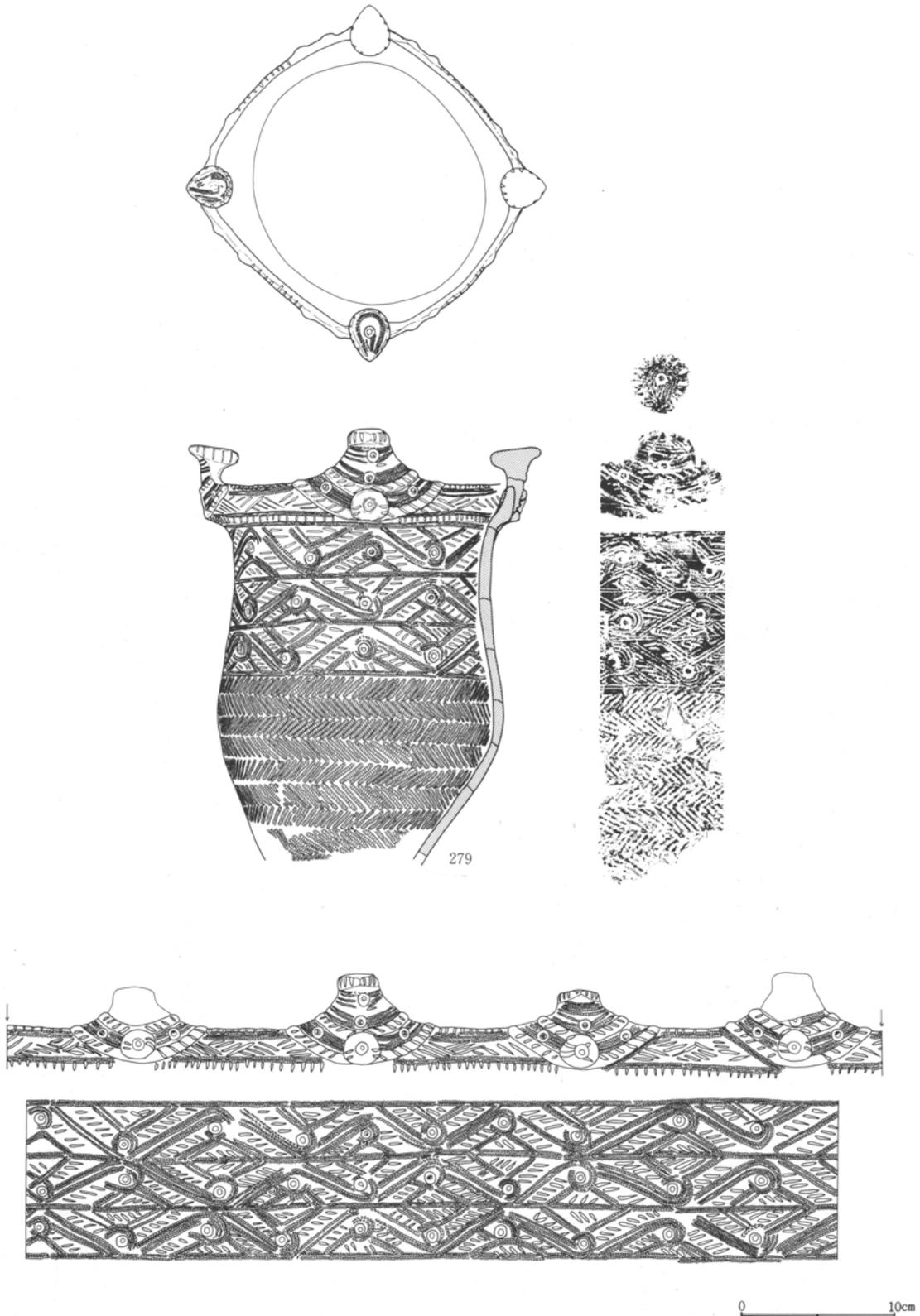
第4節 遺構と遺物



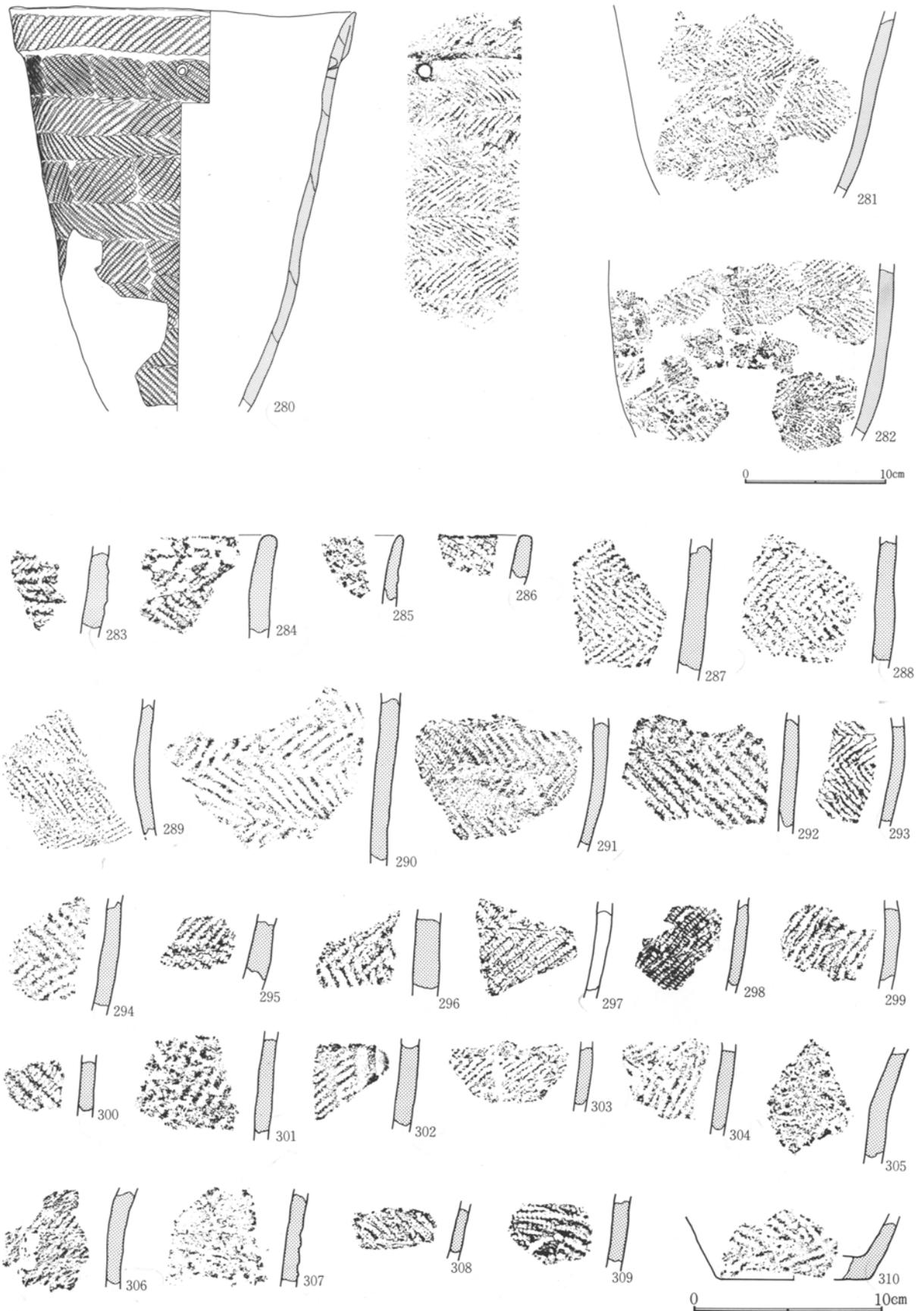
第66図 6号住居址出土土器(4)



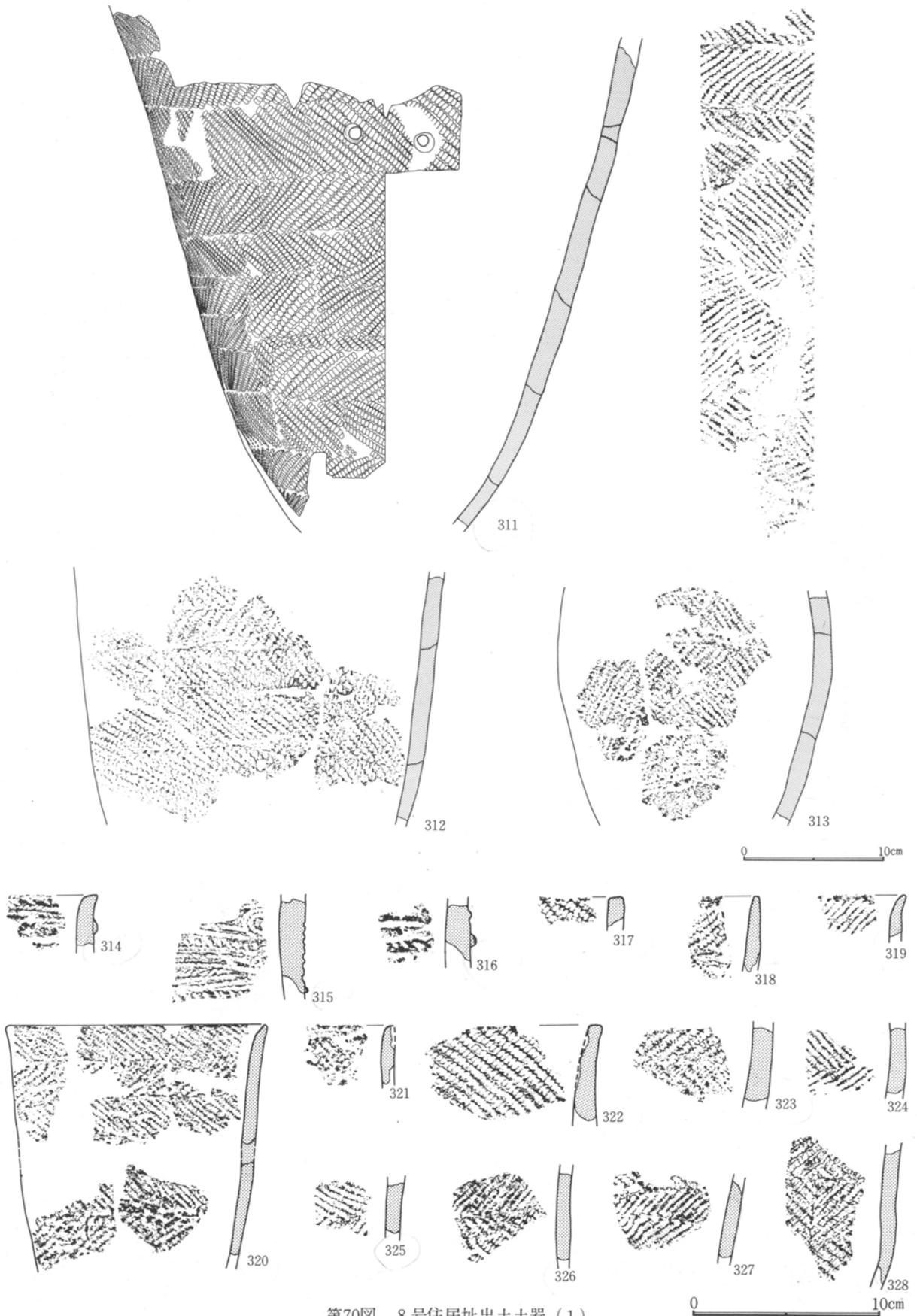
第67図 6号住居址出土土器(5)



第68図 7号住居址出土土器(1)



第69図 7号住居址出土土器(2)



第70図 8号住居址出土土器(1)



第71図 8号住居址出土土器(2)

段多条)による羽状縄文を施したもの。284は口縁部以下にLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施したもの。285・286は口縁部以下にRL(0段多条)の縄文を施したもの。281・282・287~296・298~306は胴部にLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施したもの。307は胴部に横位の連続刺突を施したもの。308・309は胴部にRL(0段多条)の縄文を施したもの。310は平底となる底部で、胴部には羽状縄文が施されている。297は胎土に繊維を含まないもので、胴部にLR(0段多条)・RL(0

段多条)による羽状縄文を施したものの。

8号住居址(第70図・第71図)

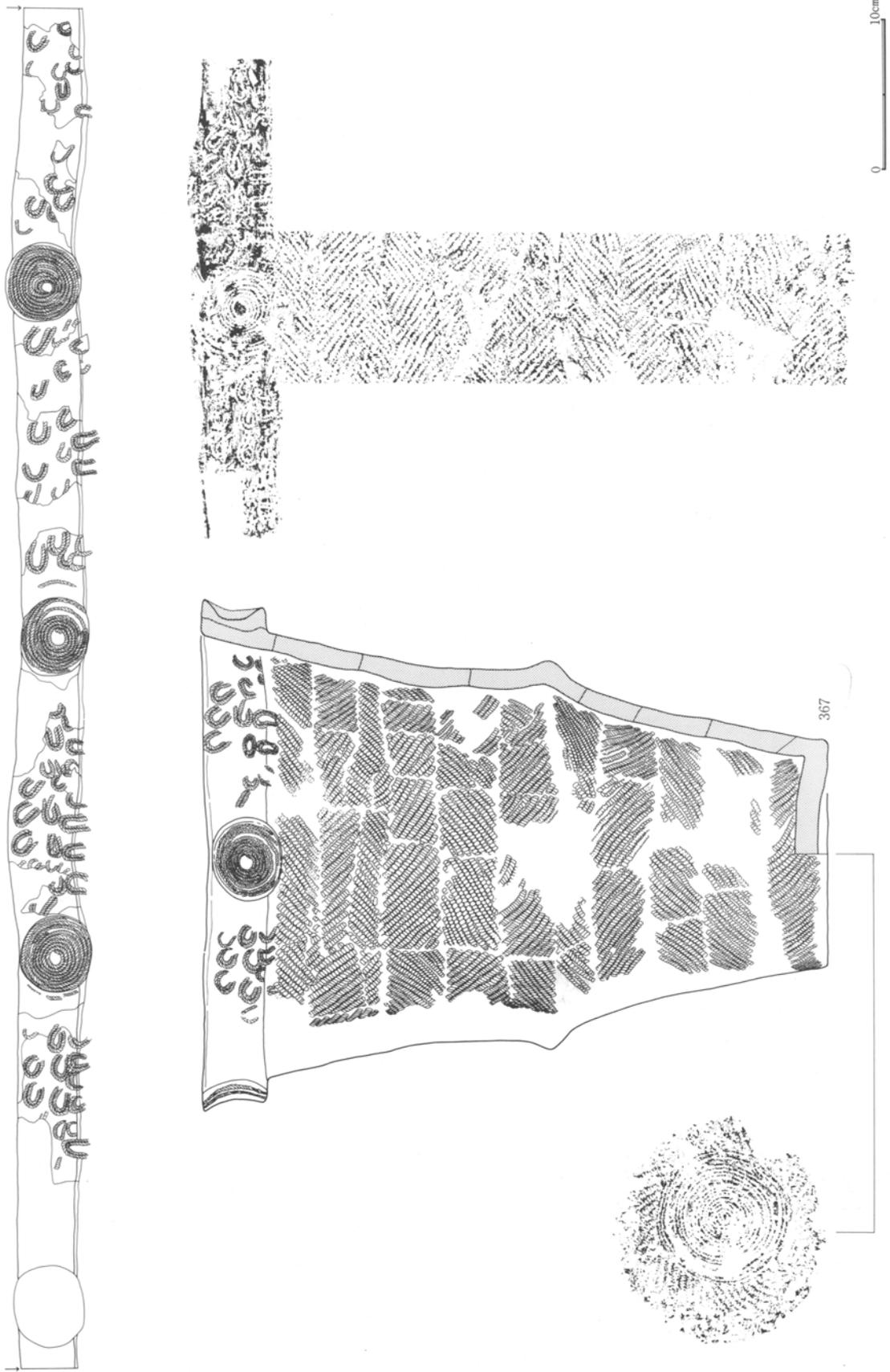
311~366はすべて胎土に繊維を含むものである。314~316は口縁部に刻み目をもつ隆帯並びに撚糸側面圧痕による平行・渦巻き等の文様を描いたもの。317~319・321・322は口縁部以下にLR(0段多条)ないしはRL(0段多条)の縄文を施したものの。320は口縁部以下にLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施したものの。311~313・323~355は胴部にLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施したもので、311は胴部に補修孔をもち、344~366の胎土には微量の繊維が含まれるのみのもの。356~360は胴部にLRの縄文を施したものの。361~363は胴部にRL(0段多条)の縄文を施したものの。364は尖底となる底部で、胴部にLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施したものの。365・366は平底のやや上げ底となる底部で、胴部にLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施し、さらに底面にも縄文を施している。

9号住居址(第72図~第74図)

367~375・377~402・407は胎土に繊維を含むものである。367は平縁で口縁部に円形の隆帯をもち、胴部が屈曲し、平底で上げ底となる深鉢形を呈するもので、口縁部には環状の撚糸側面圧痕文及び円形隆帯内に撚糸側面圧痕による渦巻き文が描かれ、胴部にはLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施し、さらに底部底面にも撚糸側面圧痕による渦巻き文が施されている。369~371は口縁部に刻み目をもつ隆帯・撚糸側面圧痕による平行及び渦巻き等の文様を描いているもの。372~374は同一個体と思われるもので、口縁部に格子目状の回転絡条体圧痕を施し、文様区画に刻み目をもつ隆帯を巡らせ、胴部にはLR(0段多条)の縄文を施したものの。379は口縁部に環状の撚糸側面圧痕文を施したものの。375は折り返し口縁となる口縁部以下にRの縄文を施したものの。377は口縁が外反し、頸部がくびれる無文のもの。378・380~385は口縁部以下にLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施したもので、378の口舌部には刻み目が施されている。386~388は口縁部以下にRL(0段多条)ないしはLR(0段多条)の縄文を施したものの。368・389~399・401は胴部にLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施したものの。400は胴部にLR・RLによる羽状縄文を施したもので、368は胴部が膨らむ深鉢形を呈するもの。402は胴部にLR(0段多条)の縄文を施したものの。407は上げ底となる平底の底面にLR(0段多条)の縄文を施したものの。376・403~406は胎土に繊維を含まないもの。376は折り返し口縁となる口縁部に突起をもち、口縁部以下にはRL(0段多条)の縄文を施したものの。403~406は同一個体と思われるもので、胴部にRL(0段多条)の縄文を施したものの。

10号住居址(第75図・第76図)

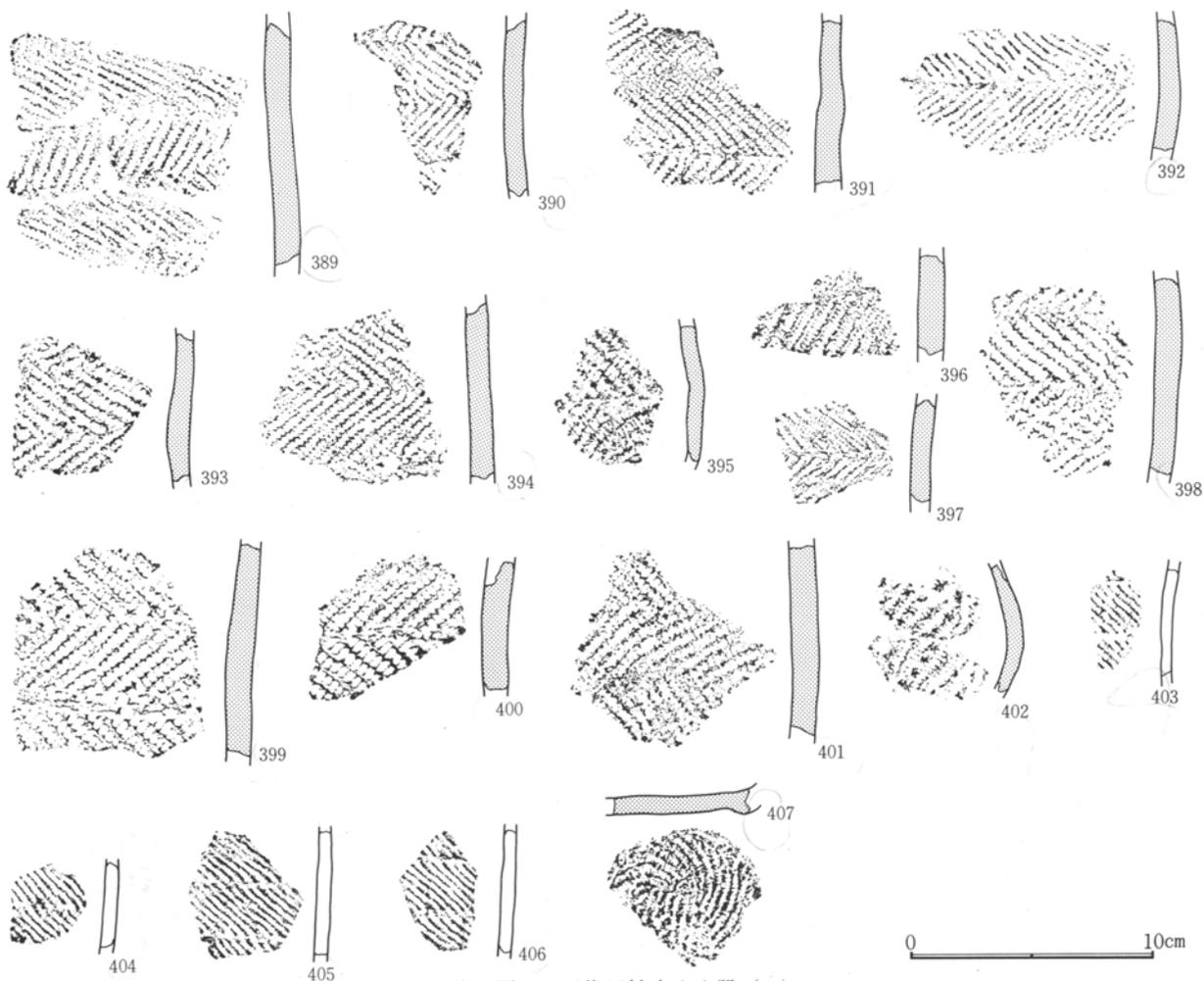
408~460は胎土に繊維を含むもの。409~411・413~415は口縁部に撚糸側面圧痕を施すもので、409は折り返し口縁となる口舌部に刻み目をもち、口縁部に撚糸側面圧痕による菱形文等を描き、胴部にLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施したものの。410は口縁部に撚糸側面圧痕による渦巻き等の文様を描き、文様区画に刻み目をもつ隆帯を巡らせ、胴部にRL(0段多条)の縄文を施したものの。411は口縁部に撚糸側面圧痕による渦巻きを描くもの。412は胎土に繊維を微量に含むのみで、砂粒が多く、文様区画に刻み目をもつ隆帯を巡らせ、胴部に縦位の沈線及びLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施したものの。413は刻み目をもつ隆帯を巡らせているもの。416~420は折り返し口縁となるもので、口縁部以下にLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施したものの。408は波状口縁で平底となる小形の深鉢形を呈するもので、口縁部以下にRL(0段多条)・LR(0段多条)による羽状縄文を施し



第72図 9号住居址出土土器(1)



第73図 9号住居址出土土器(2)



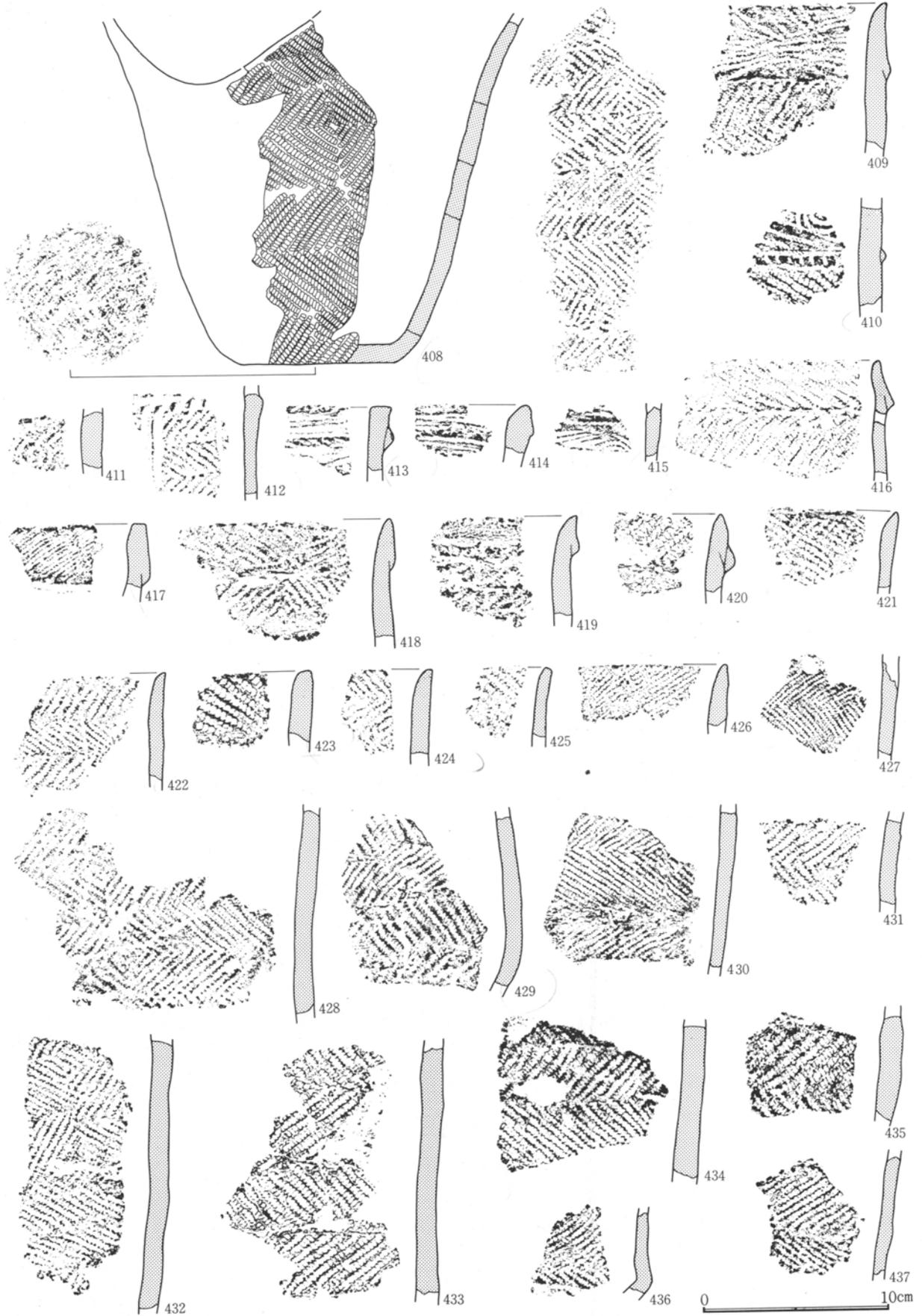
第74図 9号住居址出土土器(3)

たもの。421~424は口縁部以下にLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施したもの。425は口縁部以下にRL(0段多条)の縄文を施したもの。426は口縁部以下にLR(0段多条)の縄文を施したもの。427~446は胴部にLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施したもの。447~449は胴部にRL(0段多条)ないしはLR(0段多条)の縄文を施したもの。450~454は胴部が無文となるもの。455~457は平底となる底部で、胴部にRL(0段多条)ないしはLR(0段多条)の縄文を施したもの。458~460は尖底となる底部で、胴部に0段多条のLR・RLによる羽状縄文等を施したもの。461~468は胎土に繊維を含まないもの。461は波状口縁となる口縁部に縦位の刺突をもつ隆帯、及び半截竹管による平行沈線・円形刺突等の文様を描いたもの。462は折り返し口縁となる口縁部に半截竹管による平行沈線及び刻み目状の刺突をもち、胴部にRL(0段多条)の縄文を施したもの。463は薄手で表裏面に指頭圧痕が見られ、表面には突起及び条痕が施されたもの。464~468は薄手で表裏面に指頭圧痕が見られるもの。

1号土壙(第80図, 479~481)

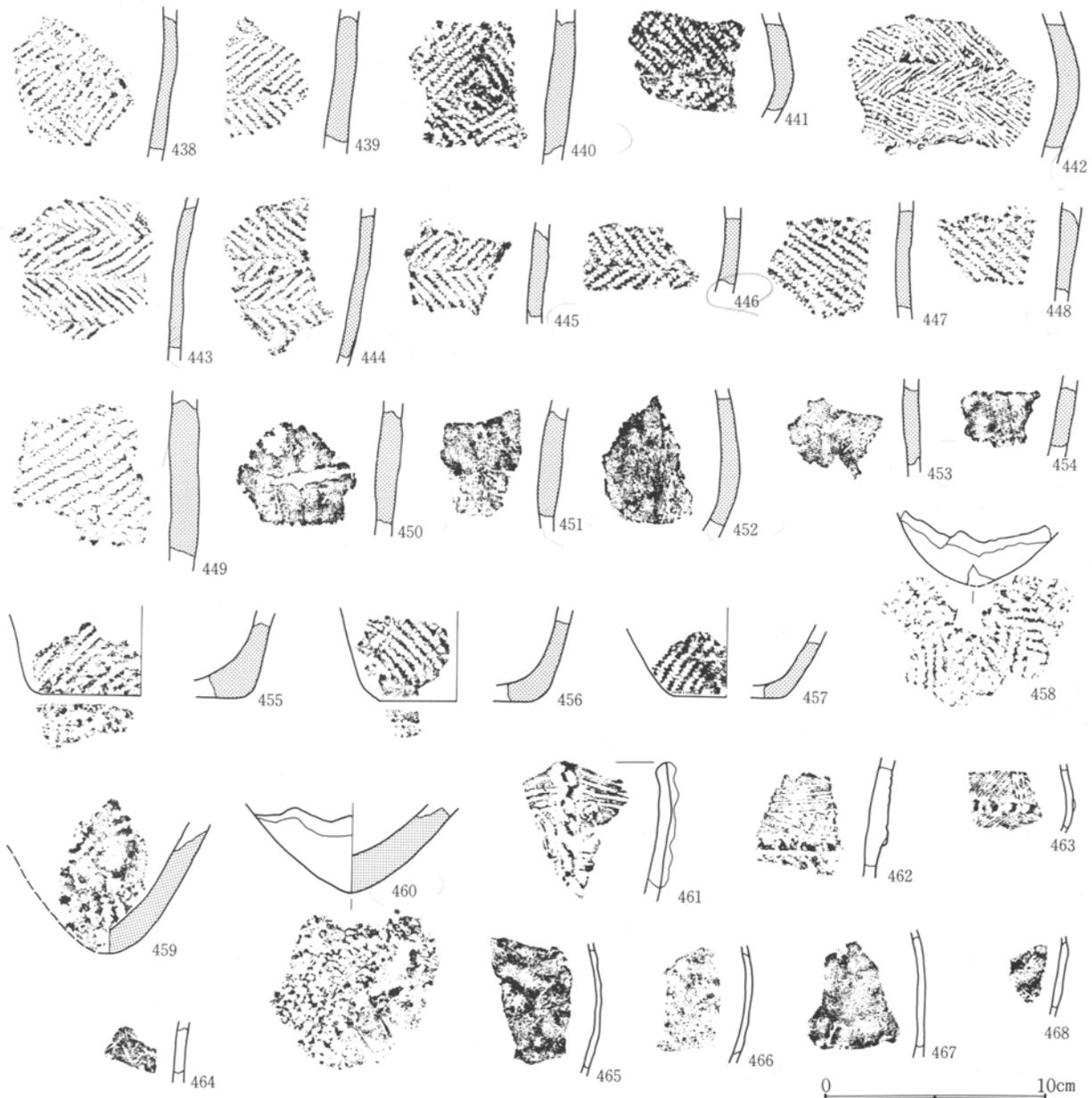
479~481は胎土に繊維を含むもので、胴部にLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施したものの。

2号土壙(第80図, 482~488)



第75図 10号住居址出土土器(1)

第I章 三原田城遺跡

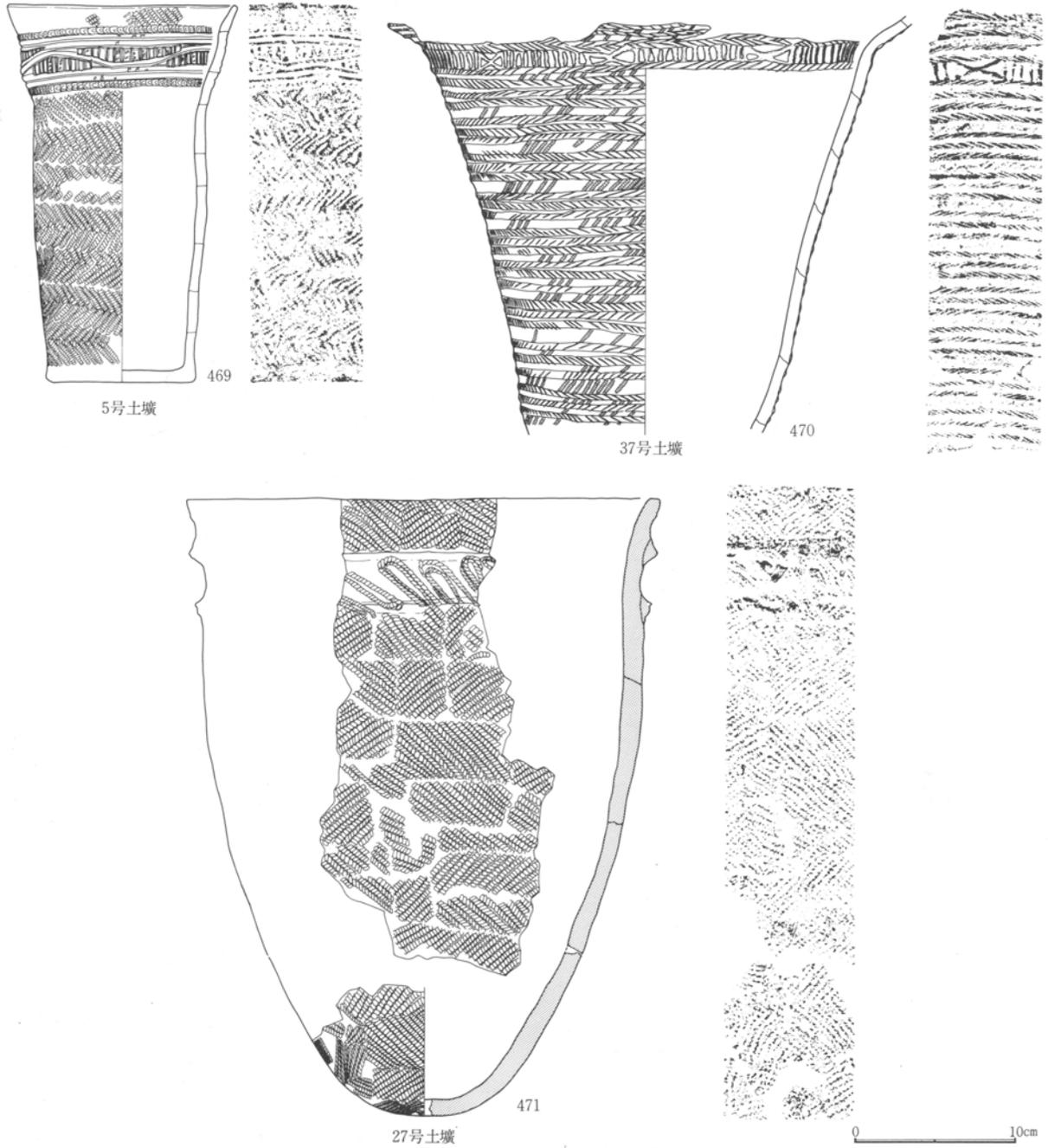


第76図 10号住居址出土土器（2）

482～488は胎土に繊維を含むもので、482は折り返し口縁となる口縁部以下にLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施したもの。483は口縁部以下にRL（0段多条）の縄文を施したもの。484は口縁部に撚糸側面圧痕及び刺突をもち、文様区画に隆帯を巡らせ、胴部にはLR（0段多条）の縄文を施したもの。485は胴部にRL（0段多条）の縄文を施したもの。486～488は胴部にLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施したもの。

3号土壙（第80図，489～494）

490～493は胎土に繊維を含むもので、491～493は胴部にLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施したもの。490は器面に半截竹管ないしは櫛歯状工具により浅く沈線を描いたもの。489・494は胎土に繊維を含まない薄手のもので、489は表裏面に指頭圧痕が見られ、表面には半截竹管による刺突状の沈線及び条痕を施したもの。494は口縁部に半截竹管による平行沈線・円形刺突及び隆帯をもち、文様区画に



第77図 土壙出土土器 (1)

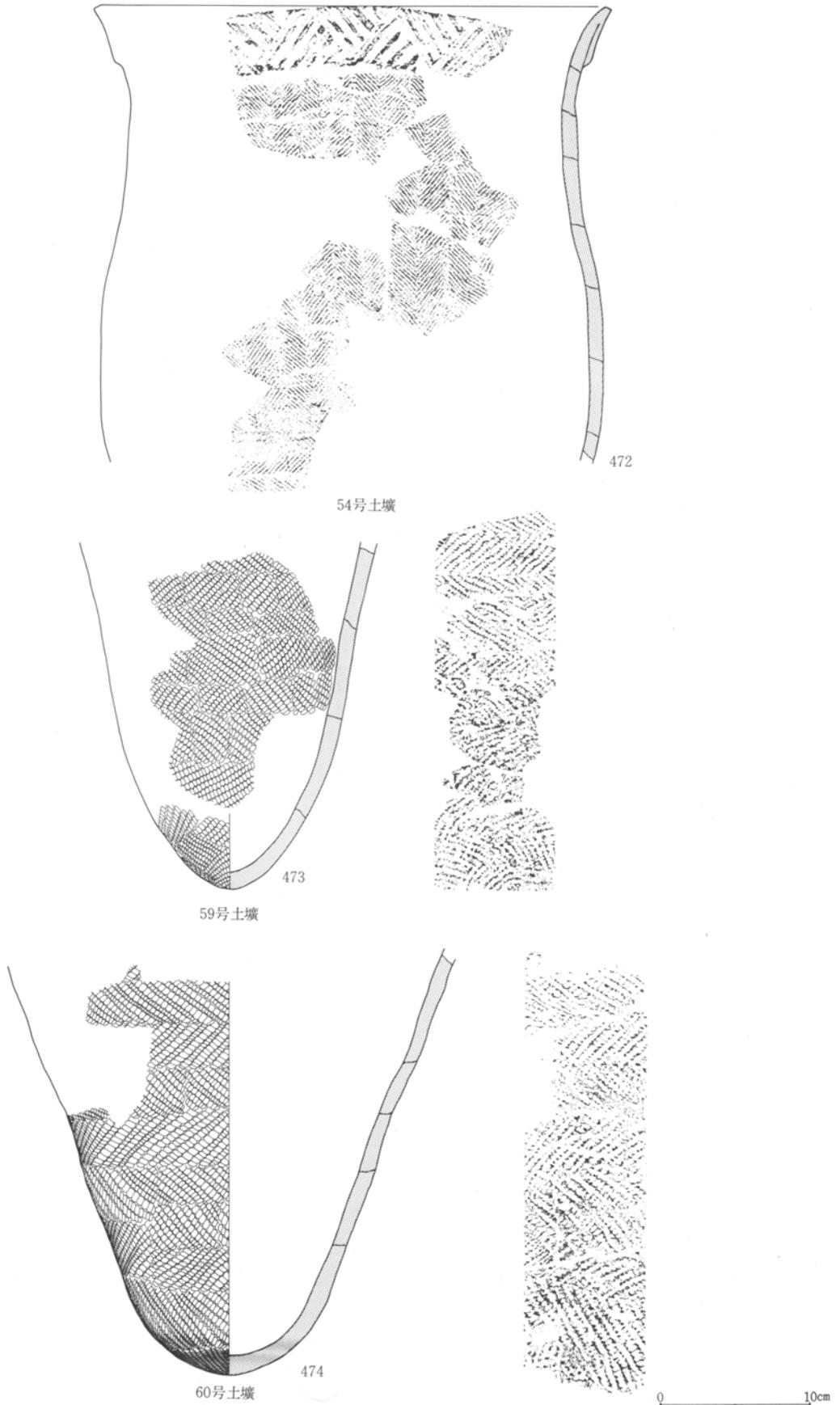
刺突をもつ隆帯を巡らせ、胴部にはRL (0段多条) の縄文を施したもの。

4号土壙 (第80図, 495・496)

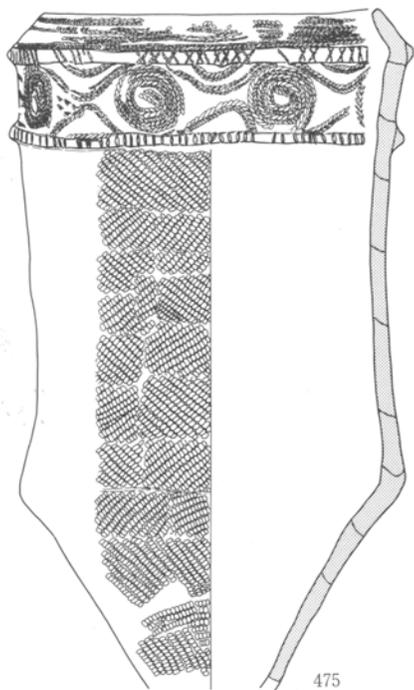
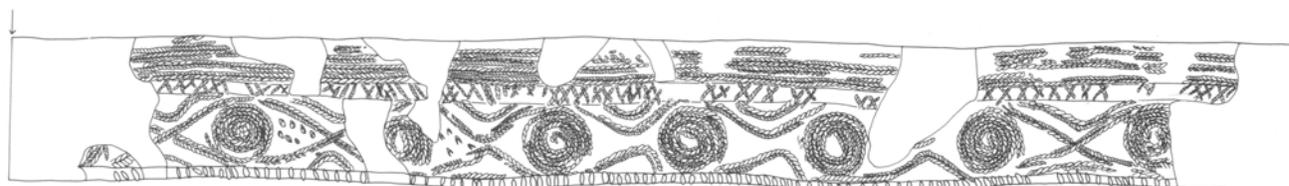
495は胎土に繊維を含まないもので、器面に半截竹管による平行及び鋸歯状の沈線を描いたもの。496は胎土に繊維を含むもので、胴部にLR (0段多条) の縄文を施したもの。

5号土壙 (第77図, 469・第80図, 497~500)

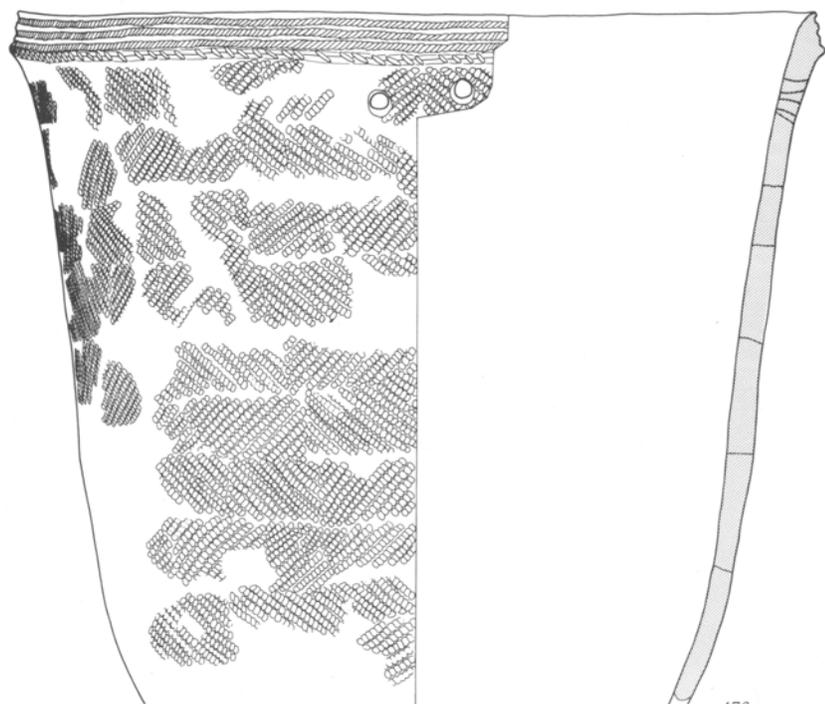
469・497・498は胎土に繊維を含まないもので、469は平縁となる口縁が外反し、頸部がやや膨らみ、胴部が円筒形となる深鉢形を呈し、口縁部にはRLの縄文を、頸部には半截竹管による太い沈線で平行・縦位及び波状に文様を描き、胴部にはLR・RLの結束による羽状縄文を施したもの。498は口縁部に半截竹管に



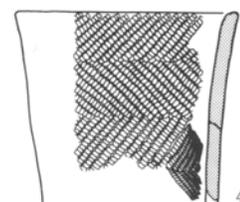
第78図 土坑出土土器 (2)



67号土城



101号土城



109号土城



136号土城



0 10cm

よる平行及び波状に沈線を施したものの。499・500は胎土に繊維を含むもので、499はL R・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。500は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。

6号土壙（第80図，501～504）

501～504は胎土に繊維を含むもので、501は胴部にL R・R Lによる羽状縄文を施したものの。502は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。503は胴部にR L（0段多条）の縄文を施したものの。504は胴部にR L + R L（2本附加）の縄文を施したものの。

8号土壙（第80図，505～507）

505～507は胎土に繊維を含むもので、505は口縁部以下にR Lの縄文を施したものの。506は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。507は胴部にL R・R Lによる羽状縄文を施したものの。

9号土壙（第80図，508～511）

508～511は胎土に繊維を含むもので、508・511は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。509・510は胴部にL R（0段多条）の縄文を施したものの。

10号土壙（第80図，512・513）

512・513は胎土に繊維を含むもので、512は胴部にRの回転絡条体圧痕を施したものの。513は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。

12号土壙（第80図，514～521）

514～521は胎土に繊維を含まないもので、514は口縁部に幅広の隆帯をもちL Rの縄文を施したものの。515は口縁部に半截竹管による平行沈線を巡らせ、地文にL Rの縄文を施したものの。516は波状口縁となる口縁部に結節をもつ縄文を施したものの。517は口縁部の隆帯上に半截竹管による連続刺突を施したものの。518は口縁部にL Rの縄文を施したものの。519は胴部に連歯状工具により全面に連続刺突を施したものの。520は胴部にL R・R Lの結束による羽状縄文を施したものの。521は無文となる底部である。

13号土壙（第80図，522～524）

522～524は胎土に繊維を含むもので、522・524は胴部にL R・R Lによる羽状縄文を施したものの。523は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。

14号土壙（第81図，525～528）

525～528は胎土に繊維を含むもので、525は口縁部以下に縄文を施したものの。526は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。527・528は胴部にL R（0段多条）ないしはR L（0段多条）の縄文を施したものの。

16号土壙（第81図，529）

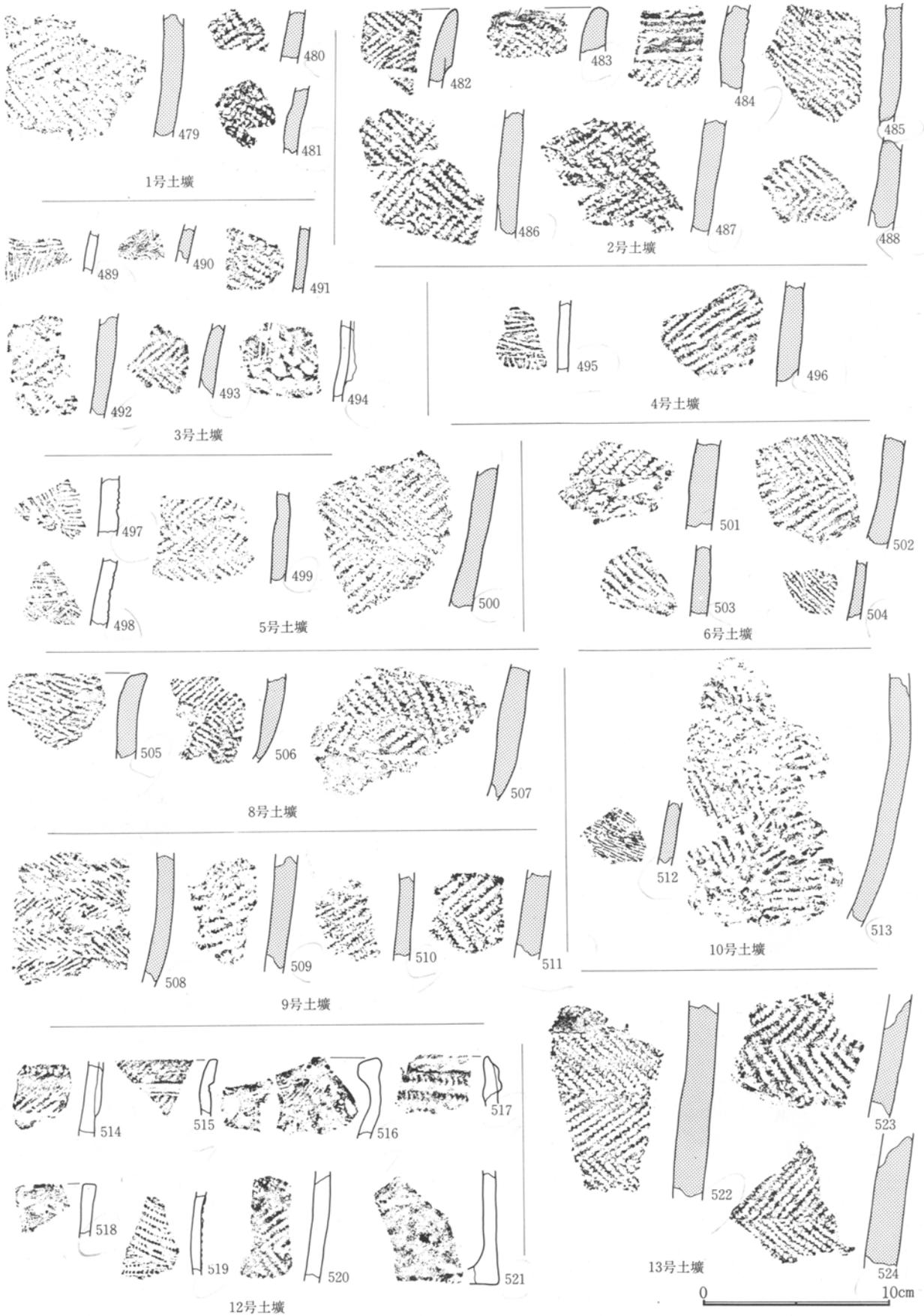
529は胎土に繊維を含まないもので、波状口縁となる口縁部に半截竹管による沈線で文様を描くもの。

17号土壙（第81図，530～535）

530～535は胎土に繊維を含むもので、530は口縁部に刻み目をもつ隆帯、撚糸側面圧痕による山形文及び刺突を施し、胴部には縄文を施したものの。531は口縁部以下にR Lの縄文を施したものの。532・533・535は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。534は胴部にL R（0段多条）の縄文を施したものの。

20号土壙（第81図，536）

第I章 三原田城遺跡



第80図 土層出土土器(4)

536は胎土に繊維を含むもので、胴部にR L（0段多条）の縄文を施したものの。

21号土壙（第81図，537・538）

537・538は胎土に繊維を含むもので、537は口縁部に半截竹管による沈線で波状文を描いたもの。538は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。

22号土壙（第81図，539～541）・23号土壙（第81図，542～544）

539・540・542・543は胎土に繊維を含むもので、539は口縁部に撚糸側面圧痕による文様を施したものの。542は口縁部以下にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。540・543は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。541・544は胎土に繊維を含まないもので、器面に半截竹管による沈線で文様を描くもの。

24号土壙（第81図，545～548）

545～548は胎土に繊維を含むもので、545は無文となるもの。546は口縁部に撚糸側面圧痕による文様を描き、文様区画に隆帯をもち、胴部にはL R（0段多条）の縄文を施したものの。547は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。548は胴部にL R（0段多条）の縄文を施したものの。

25号土壙（第81図，549～551）

549～551は胎土に繊維を含むもので、549・550は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。551は胴部にR L（0段多条）の縄文を施したものの。

26号土壙（第81図，552・553）

552・553は胎土に繊維を含むもので、胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。

27号土壙（第77図，471・第81図，554～559）

471・554～559は胎土に繊維を含むもので、554は折り返し口縁となる口縁部以下にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。555は口縁部以下にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。557は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。556・558は胴部にR L（0段多条）の縄文を施したものの。559は平底となる底部で、胴部に縄文を施したものの。471は口縁が平縁となり、底部が尖底となる深鉢形を呈する。口縁部以下にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施すが、頸部には隆帯により文様区画をおこない、区画内には撚糸側面圧痕による文様が施されている。

29号土壙（第82図，560～570）

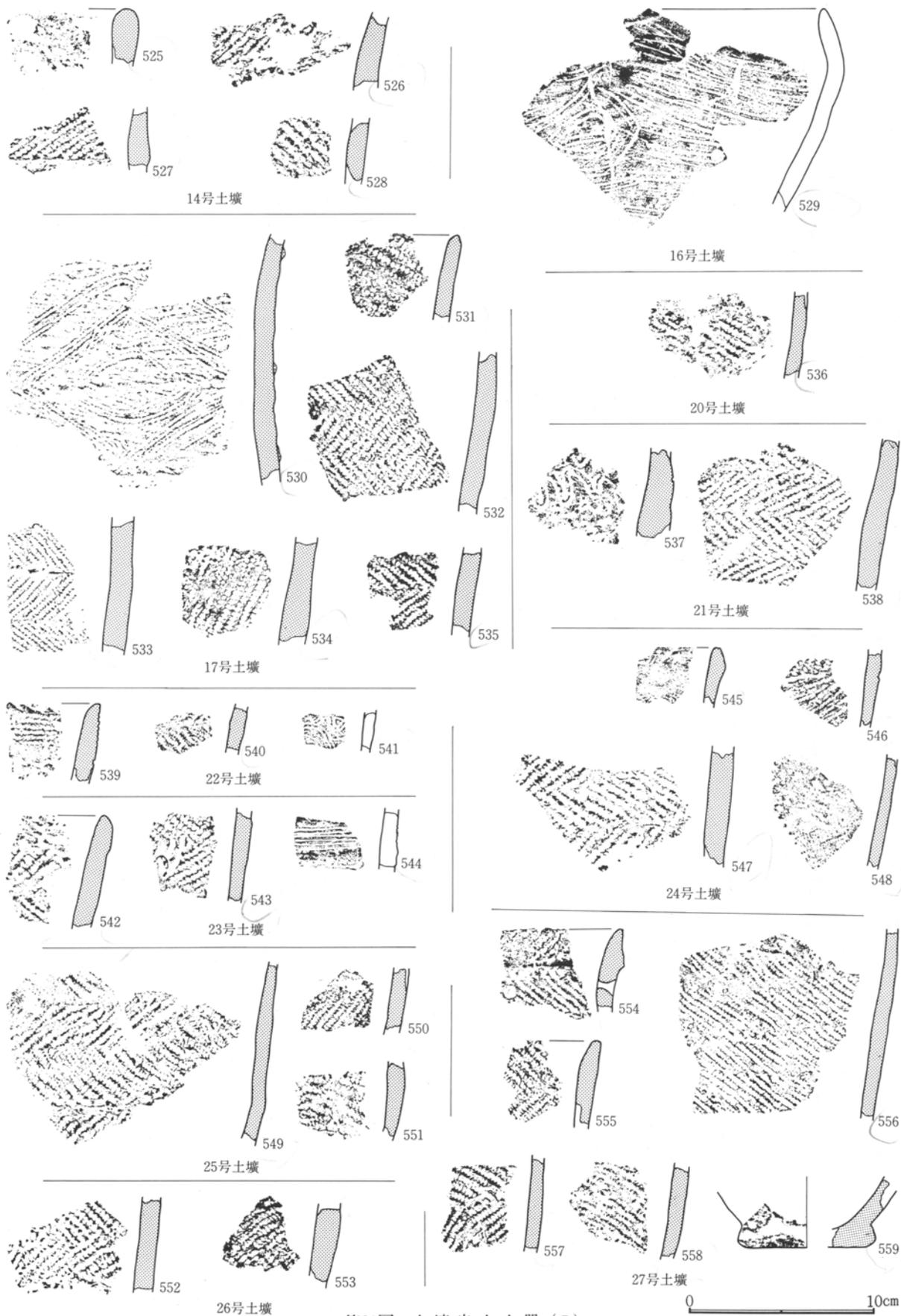
560～570は胎土に繊維を含むもので、560・561は同一個体で折り返し口縁となる口縁部に撚糸側面圧痕による文様を描き、胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。562は口縁部以下にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。563は口縁部以下にR Lの縄文を施したものの。564～569は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。570はやや上げ底となる底部で、胴部及び底面にL R（0段多条）の縄文を施したものの。

30号土壙（第82図，571～573）

571～573は胎土に繊維を含むもので、571は波状口縁となる口縁部に刻み目をもつ隆帯により突起をもつもの。572は口縁部に沈線及び撚糸側面圧痕による渦巻き等の文様を描き、胴部にR L（0段多条）の縄文を施したものの。573は胴部にL・Rによる羽状縄文を施したものの。

32号土壙（第82図，574～576）

第I章 三原田城遺跡



第81図 土壌出土土器(5)

574～576は胎土に繊維を含むもので、574は折り返し口縁となる口縁部に刻み目状の沈線を羽状に描き、胴部にL R（0段多条）の縄文を施したもの。575は口縁部以下にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。576は胴部にL R（0段多条）の縄文を施したもの。

33号土壙（第82図，577～581）

577～581は胎土に繊維を含むもので、577は文様区画に隆帯を、胴部にL R（0段多条）の縄文を施したもの。578は無文となるもの。579は口縁部以下にR L（0段多条）の縄文を施したもの。580は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。581は口縁部に格子目状に回転絡条体圧痕による文様を施したもの。

37号土壙（第77図，470・第82図，582～585）

470は胎土に繊維を含まないもので、口縁部が外反する深鉢形を呈し、口縁部及び胴部に刻み目をもつ細かい隆帯により文様を描き、地文にはL Rの縄文を施したもの。582～585は胎土に繊維を含むもので、582は口縁部以下にL・Rによる羽状縄文を施したもの。583は口縁部以下にR Lの縄文を施したもの。584は胴部に格子目状に回転絡条体圧痕による文様を施したもの。585は胴部にR L（0段多条）の縄文を施したもの。

41号土壙（第82図，586～589）

586～589は胎土に繊維を含むもので、胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。

43号土壙（第82図，590～594）

590～594は胎土に繊維を含むもので、590は口縁部に撚糸側面圧痕による渦巻き等の文様を描くもの。591は波状口縁となる口縁部に刻み目をもつ隆帯及び撚糸側面圧痕による文様を描くもの。592～594は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。

51号土壙（第82図，595～604）

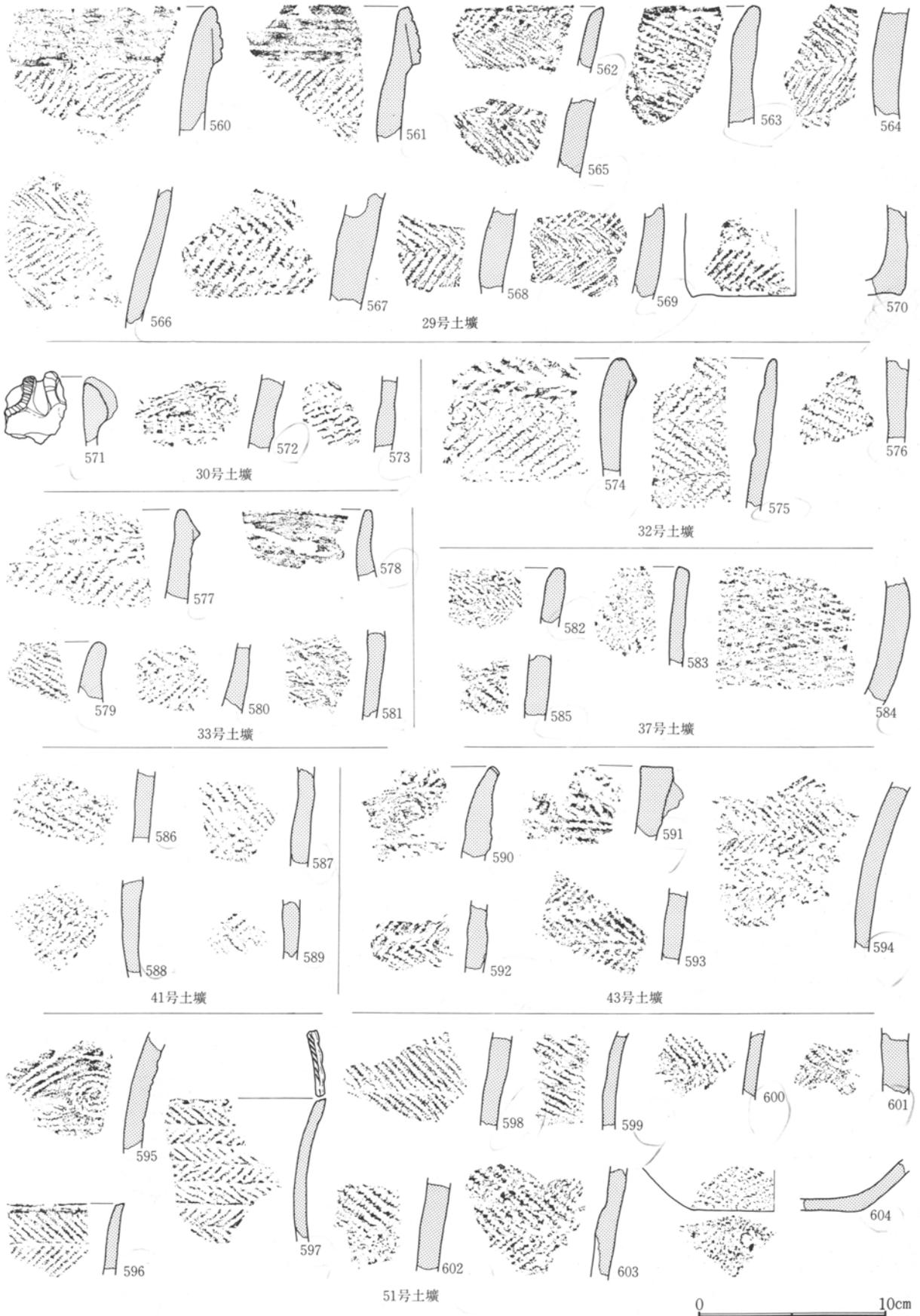
595～604は胎土に繊維を含むもので、595は口縁部に撚糸側面圧痕による渦巻き等の文様を描くもの。596は口縁部以下にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。597は平縁となる口縁の口舌部に刻み目を有し、口縁部以下にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。598・599・602は胴部にR L（0段多条）の縄文を施したもの。600・601・603は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。604は平底となる底部で、胴部及び底面にL R（0段多条）の縄文を施したもの。

54号土壙（第78図，472・第83図，605～608）

472・605～608は胎土に繊維を含むもので、472は平縁の折り返し口縁となる口縁部が外反し、胴部が緩やかに膨らむ深鉢形を呈する。口縁部には太い沈線による鋸歯状に山形文が描かれ、胴部には縦位方向にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。605は口縁部に撚糸側面圧痕による文様を描くもの。606～608は胴部にR L（0段多条）の縄文を施したもの。

55号土壙（第83図，609～617）

609～617は縦に繊維を含むもので、609は折り返し口縁となる口縁部に刺突をもつ隆帯を垂下させ、半截竹管による波状沈線を描き、胴部にはR L（0段多条）の縄文を施したもの。610は口縁部に格子目状に半截竹管による沈線を施したもの。611は口縁部以下にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。612は口縁部に孔を有し、口舌部及び口縁部以下にR L（0段多条）の縄文を施したもの。613～615は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。616・617は胴部にR



第82図 土壌出土土器(6)

L（0段多条）の縄文を施したもの。

56号土壙（第83図，618・619）

618・619は胎土に繊維を含むもので、胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。

57号土壙（第83図，620～626）

620～626は胎土に繊維を含むもので、620は口縁部に捺糸側面圧痕及び刺突による文様を描き、文様区画に隆帯をもち、胴部にはL R（0段多条）の縄文を施したもの。621～626は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。

58号土壙（第83図，627～631）

627～631は胎土に繊維を含むもので、627～631は胴部にL R・R Lによる羽状縄文を施したもの。628は胴部にR L（0段多条）の縄文を施したもの。629は胴部にL R（0段多条）の縄文を施したもの。630は尖底となる底部で、胴部にL R（0段多条）の縄文を施したもの。

59号土壙（第78図，473 第83図，632～634）

473・632～634は胎土中に繊維を含むもので、473は尖底となる深鉢形を呈する土器で、胴部にはL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもので口縁部を欠いている、比較的厚手の土器である。632は胴部に連続する刺突文を多段に施したもの。633は胴部にL R（0段多条）による羽状縄文を施したもの。634は胴部にR L（0段多条）による縄文を施したもの。

60号土壙（第78図，474・第83図，635～649）

475・635～649は胎土に繊維を含むもので、635・636・638・639・642・643は口縁部以下にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。637・640は口縁部以下にR L（0段多条）の縄文を施したもの。641は口縁部にL R（0段多条）の縄文を施したもの。644～647は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもので、645～646は胴部が屈曲するもの。648は胴部に縄文を施したもの。649は胴部に格子目状の回転絡条体圧痕による文様を施したもの。475は尖底となる底部で、胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。

61号土壙（第84図，650～653）

650～653は胎土に繊維を含むもので、650は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。651～653は胴部にL R（0段多条）の縄文を施したもの。

63号土壙（第84図，654～656）

654～656は胎土に繊維を含むもので、654は胴部にR L（0段多条）の縄文を施したもの。655は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。656はやや上げ底となる底部で、胴部及び底面にR L（0段多条）の縄文を施したもの。

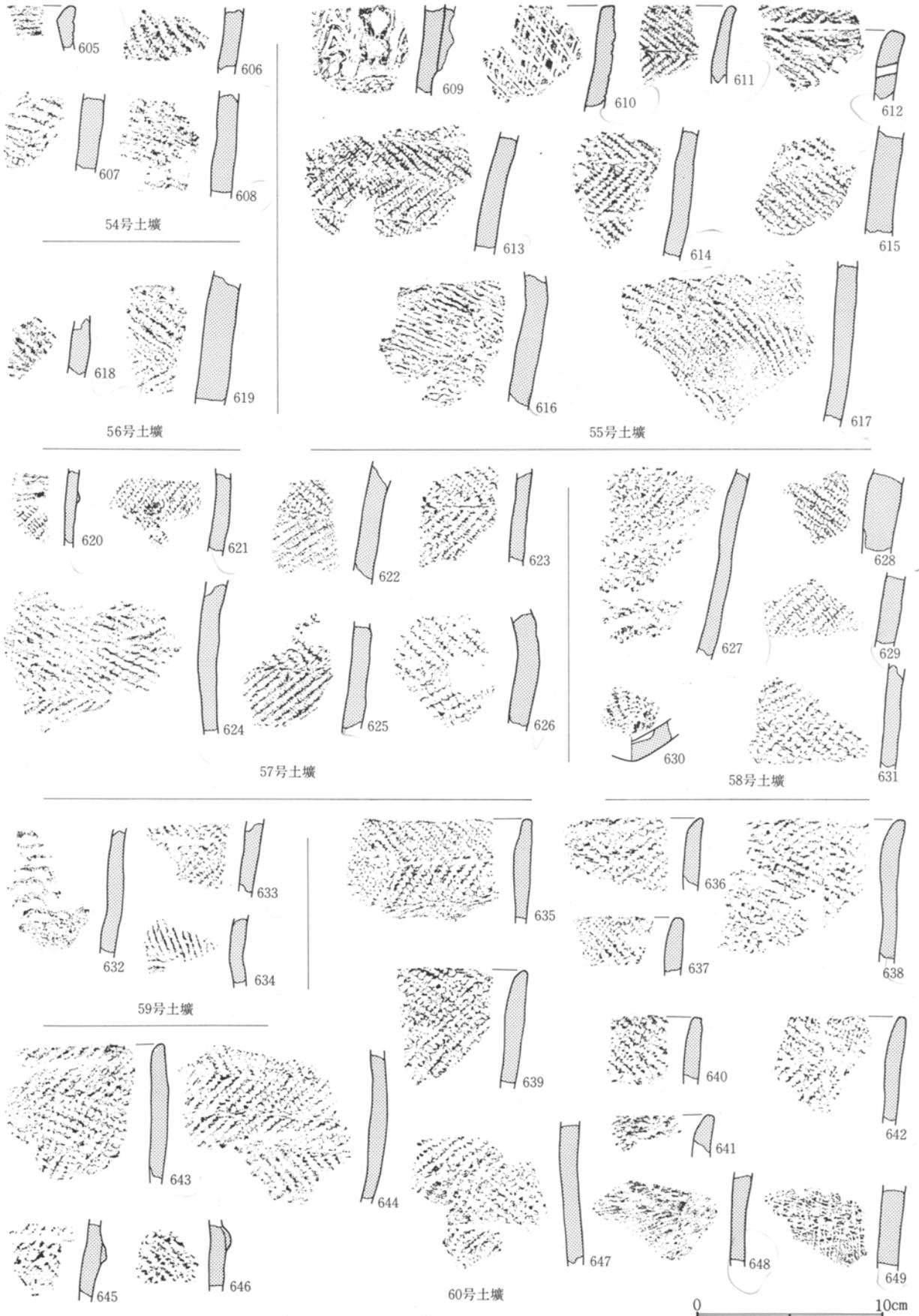
64号土壙（第84図，657～659）

659は胎土に繊維を含むもので、胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。657・658は胎土に繊維を含まないもので、657は口縁部に半截竹管による連続刺突を施したもの。658は胴部にL Rの縄文を施したもの。

66号土壙（第84図，660～677）

660～677は胎土に繊維を含むもので、660は口縁部に隆帯及び捺糸側面圧痕による文様を描くもの。661・662は口縁部以下にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。663は折り返し口縁

第I章 三原田城遺跡



第83図 土壌出土土器(7)

となる口縁部に刺突をもち、口縁部以下にLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施したものの。664～666・668～677は胴部にLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施したものの。667は胴部にRL（0段多条）の縄文を施したものの。

67号土壙（第79図，475・第84図，678・679）

475・678・679は胎土に繊維を含むもので、475は平縁となる口縁が内反し、頸部から胴部にかけてややすぼまり、胴部下半で大きく屈曲する深鉢形を呈するが、底部形については不明である。口縁部に撚糸側面圧痕による平行、渦巻き及び波状に文様を描き、文様区画に刻み目をもつ隆帯を巡らせ、胴部にはLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施したものの。678・679は胴部にLR・RLによる羽状縄文を施したものの。

68号土壙（第84図，680～686）

680～686は胎土に繊維を含むもので、681・682・685は胴部にLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施したものの。684は胴部にLR・RLによる羽状縄文を施したものの。680・686は胴部にLR（0段多条）の縄文を施したものの。683は胴部にRL（0段多条）の縄文を施したものの。

70号土壙（第84図，687～689）

687～689は胎土に繊維を含むもので、687は胴部にLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施したものの。688は胴部にLR（0段多条）・RLによる羽状縄文を施したものの。689は胴部に孔を有し、LR・RL（0段多条）による羽状縄文を施したものの。

72号土壙（第84図，690・691）

690・691は胎土による繊維を含むもので、690は胴部にLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施したものの。691は胴部にLR（0段多条）の縄文を施したものの。

74号土壙（第84図，692・693）

692・693は胎土に繊維を含むもので、692は胴部にLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施したものの。693は胴部にLR・RLによる羽状縄文を施したものの。

75号土壙（第84図，694～699）

694～699は胎土に繊維を含むもので、694は口縁部以下にLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施したものの。695～699は胴部にLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施したものの。

76号土壙（第85図，700）

700は胎土に繊維を含まないもので、沈線と隆帯で文様を描くもの。

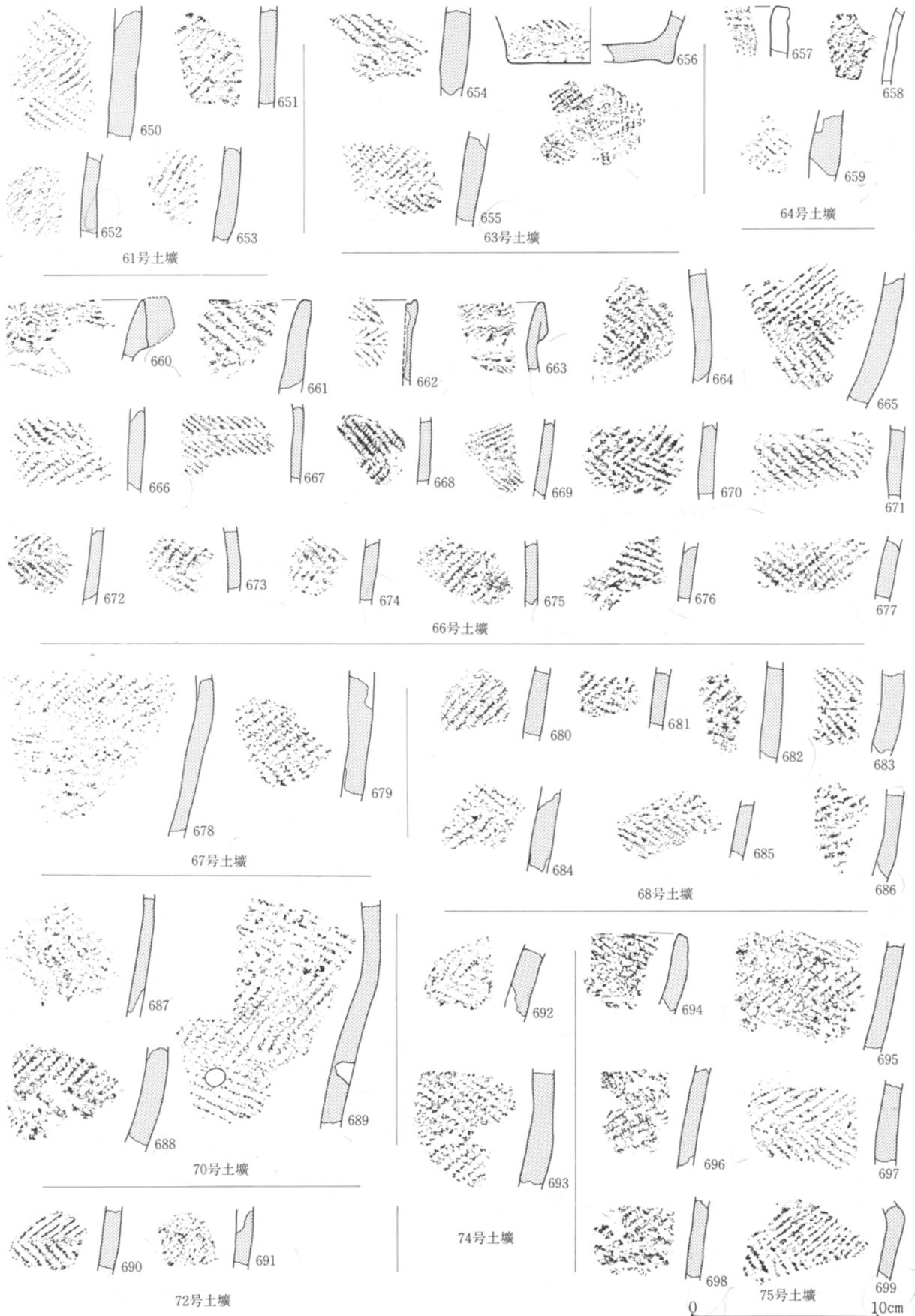
78号土壙（第85図，701～713）

701～713は胎土に繊維を含むもので、701は口縁部に刻み目をもつ隆帯と撚糸側面圧痕及び刺突により文様を描くもの。702～706は同一個体で、波状口縁となる口縁部に隆帯により有段口縁を作り出し、口縁部以下にLR・RLによる羽状縄文を施したものの。707・709は口縁部以下にLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施したものの。708は口縁部以下にRL（0段多条）の縄文を施したものの。710・713は胴部にLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施したものの。711・712は胴部にLR・RLによる羽状縄文を施したものの。

79号土壙（第85図，714～717）

714～717は胎土に繊維を含むもので、714・715は口縁部以下にLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施したものの。716・717は胴部にLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施したものの。

第I章 三原田城遺跡



第84図 土壘出土土器(8)

80号土壙 (第85図, 718)

718は胎土に繊維を含むもので、胴部にR L (0段多条)の縄文を施したもの。

81号土壙 (第85図, 719~722)

719~722は胎土に繊維を含むもので、719は口縁部以下にR L (0段多条)の縄文を施したもの。720・721は胴部にL R (0段多条)・R L (0段多条)による羽状縄文を施したもの。722は胴部にL R (0段多条)の縄文を施したもの。

89号土壙 (第85図, 723)

723は胎土に繊維を含むもので、胴部にL R (0段多条)・R L (0段多条)による羽状縄文を施したもの。

90号土壙 (第85図, 724~726)

724・725は胎土に繊維を含むもので、724は口縁部に撚糸側面圧痕による渦巻き等の文様を施したもの。725は胴部にL R (0段多条)・R L (0段多条)による羽状縄文を施したもの。726は胎土に繊維を含まない薄手のもので、表裏面に指頭圧痕が見られ、表面には刺突状の沈線が施されている。

92号土壙 (第85図, 727~735)

727~735は胎土に繊維を含むもので、727は口縁部に撚糸側面圧痕及び刺突により文様を描くもの。728は口縁部に隆帯及び撚糸側面圧痕により文様を描くもの。729は口縁部以下にL R (0段多条)・R L (0段多条)による羽状縄文を施したもの。730は口縁部に撚糸側面圧痕で文様を描き、文様区画に刻み目をもつ隆帯を巡らせ、胴部にはR L (0段多条)の縄文を施したもの。731~735は胴部にL R (0段多条)・R L (0段多条)による羽状縄文を施したもの。

93号土壙 (第85図, 736~740)

736~740は胎土に繊維を含むもので、736は口縁部に撚糸側面圧痕により平行及び渦巻き等の文様を描くもの。737は胴部にL R・R Lによる羽状縄文を施したもの。738・739は胴部にL R (0段多条)・R L (0段多条)による羽状縄文を施したもの。740は胴部にR L (0段多条)の縄文を施したもの。

94号土壙 (第86図, 741~749)

741~749は胎土に繊維を含むもの。741は胎土に繊維を微量含むのみで、むしろ砂粒を主とし、口縁部に半截竹管による鋸歯文を描くもの。742~746は胴部にL R (0段多条)・R L (0段多条)による羽状縄文を施したもの。747・748は同一個体で胴部にR L (0段多条)の縄文を施した尖底となるもの。749は胴部にR L (0段多条)の縄文を施したもの。

95号土壙 (第86図, 750・751)

750・751は胎土に繊維を含むもので、胴部にL R (0段多条)の縄文を施したもの。

97号土壙 (第86図, 752~755)

752~755は胎土に繊維を含むもので、752・753は胴部にR L (0段多条)の縄文を施したもの。754・755は胴部にL R (0段多条)・R L (0段多条)による羽状縄文を施したもの。

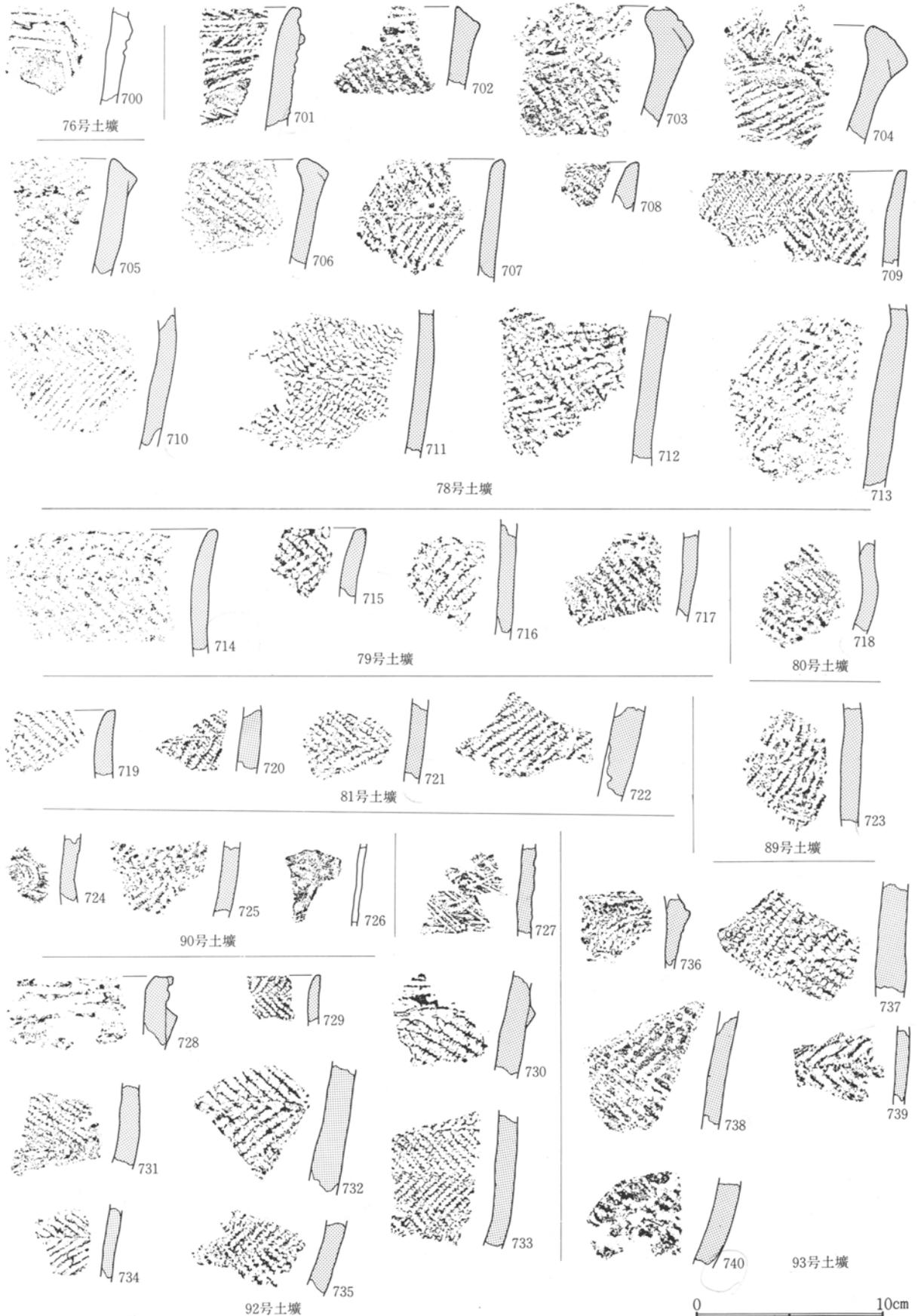
100号土壙 (第86図, 756・757)

756・757は胎土に繊維を含むもので、胴部にL R (0段多条)・R L (0段多条)による羽状縄文を施したもの。

101号土壙 (第79図, 476)

476は胎土に繊維を含むもので、平縁で折り返し口縁となる大形の深鉢形を呈する。口縁部に撚糸側面圧痕により文様を描き、胴部にはL R (0段多条)・R L (0段多条)による羽状縄文を施したもの。

第I章 三原田城遺跡



第85図 土塚出土土器(9)

105号土壙（第86図，758・759）

758・759は胎土に繊維を含むもので、758は文様区画に隆帯を巡らせ、胴部にR L（0段多条）の縄文を施したもの。759は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。

108号土壙（第86図，760～763）

760～763は胎土に繊維を含むもので、760は胴部に格子目状となる回転絡条体圧痕による文様を施したものの。761は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。762・763は胴部にL R・R Lによる羽状縄文を施したものの。

109号土壙（第79図，477・第86図，764～770）

477・764～477は胎土に繊維を含むもので、477は平縁となる小形の深鉢形を呈し、口縁以下にはL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。764は口縁部以下にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。765～769は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。770は尖底となる底部で、胴部にR L（0段多条）の縄文を施したものの。

110号土壙（第86図，771）

771は胎土に繊維を含むもので、胴部にR L（0段多条）の縄文を施したものの。

111号土壙（第86図，772～775）

772～775は胎土に繊維を含むもので、772は口縁部に隆帯と撚糸側面圧痕及び刺突により文様を描くものの。773は口縁部に撚糸側面圧痕により文様を描き、文様区画に刻み目をもつ隆帯を巡らせ、胴部にはL R（0段多条）の縄文を施したものの。774は口縁部以下にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。775は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。

112号土壙（第87図，776～778）

776～778は胎土に繊維を含むもので、776は胴部にR Lの縄文を施したものの。777は胴部にL Rの縄文を施したものの。778は胴部にL R・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。

115号土壙（第87図，779～781）

779～781は胎土に繊維を含むもので、779は口縁部以下にR L（0段多条）の縄文を施したものの。780は胴部にL R（0段多条）の縄文を施したものの。781は胴部にL R・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。

117号土壙（第87図，782～786）

782～786は胎土に繊維を含むもので、782は口縁部以下にR L（0段多条）の縄文を施したものの。785は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したものの。783は胴部にR Lの縄文を施したものの。786は胴部にR L（0段多条）の縄文を施したものの。784は胴部にR L及びL L（直前段反撚）の縄文を施したものの。

120号土壙（第87図，787・788）

787・788は胎土に繊維を含まないので、胴部が無文となるもの。

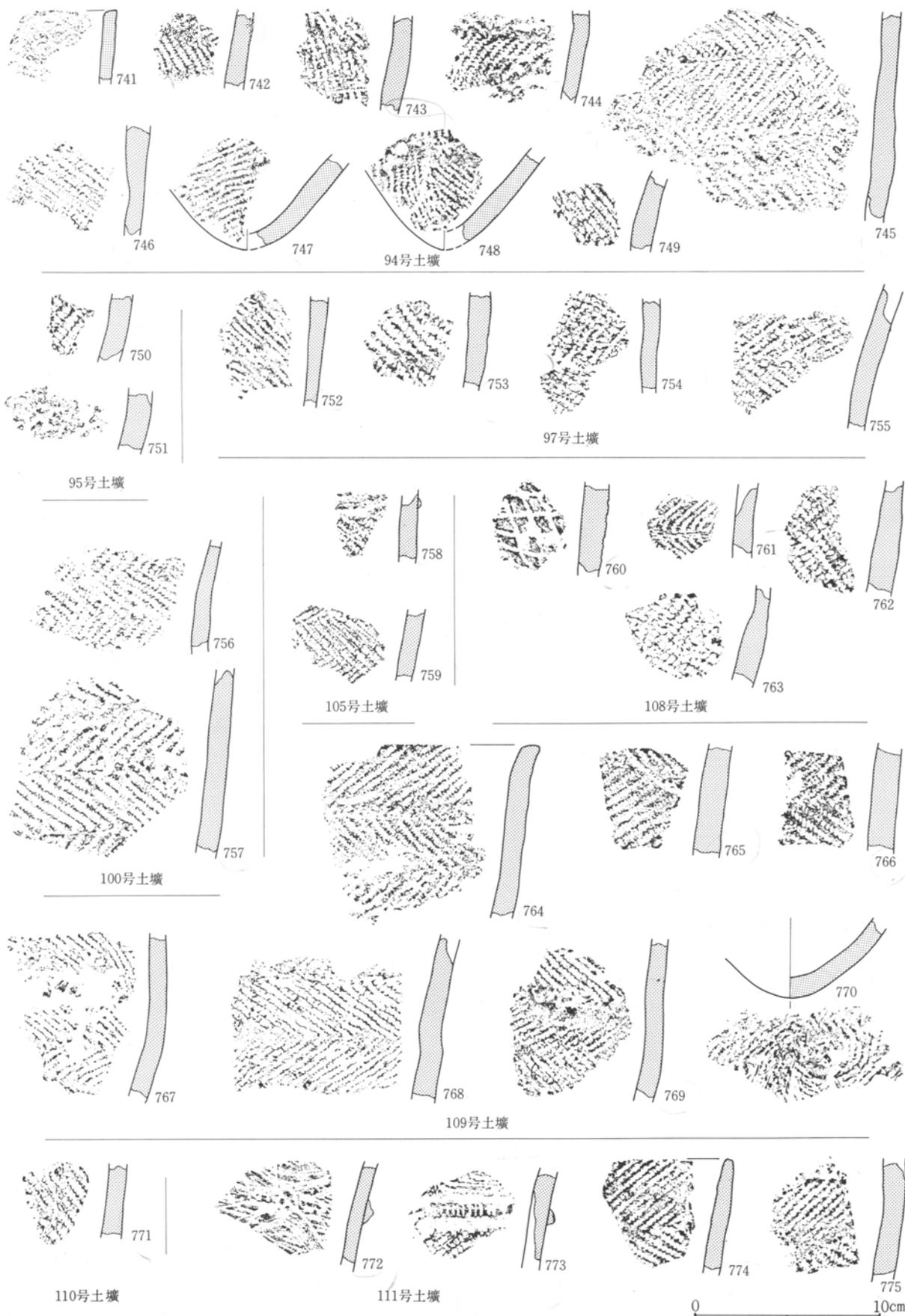
121号土壙（第87図，789）

789は胎土に繊維を含まず、砂粒と雲母を多量に含むもので、胴部が無文のもの。

122号土壙（第87図，790～795）

790～795は胎土に繊維を含むもので、790は口縁部に撚糸側面圧痕及び刺突により文様を描き、胴部にL R（0段多条）の縄文を施したものの。791は胴部に格子目状となる回転絡条体圧痕による文様を施したものの。

第I章 三原田城遺跡



第86図 土壘出土土器 (10)

792は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。793～795は平底となる底部で、胴部に羽状縄文等を施し、793・794は底面にまで文様を施している。また795はやや上げ底となる。

123号土壙（第87図，796・797）

796・797は繊維を含むもので、胴部にL R（0段多条）の縄文を施したもの。

125号土壙（第87図，798・799）

798・799は胎土に繊維を含むもので、胴部にL R（0段多条）等の縄文を施したもの。

126号土壙（第87図，800・801）

801は胎土に繊維を含むもので、胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。

800は胎土に繊維を含まないもので、胴部に沈線による文様を描くもの。

129号土壙（第87図，802）

802は胎土に繊維を含むもので、胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。

132号土壙（第87図，803）

803は胎土に繊維を含むもので、胴部にL R（0段多条）の縄文を施したもの。

133号土壙（第87図，804～807）

804～807は胎土に繊維を含むもので、804は口縁部以下にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。805は口縁部に捺糸側面圧痕及び刺突による文様を描くもの。806は口縁部に捺糸側面圧痕による文様を描くもの。807は胴部にL R・R Lによる羽状縄文を施したもの。

134号土壙（第87図，808～814）

808～810・812・813は胎土に繊維を含むもので、808は折り返し口縁となる口縁部に捺糸側面圧痕による文様を描くもの。809は折り返し口縁となる口縁部に捺糸側面圧痕及び刺突による文様を描くもの。810は口縁部以下にR L（0段多条）の縄文を施したもの。813は口縁部以下にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。812は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。811・814は胎土に繊維を含まないもので、無文となるもの。

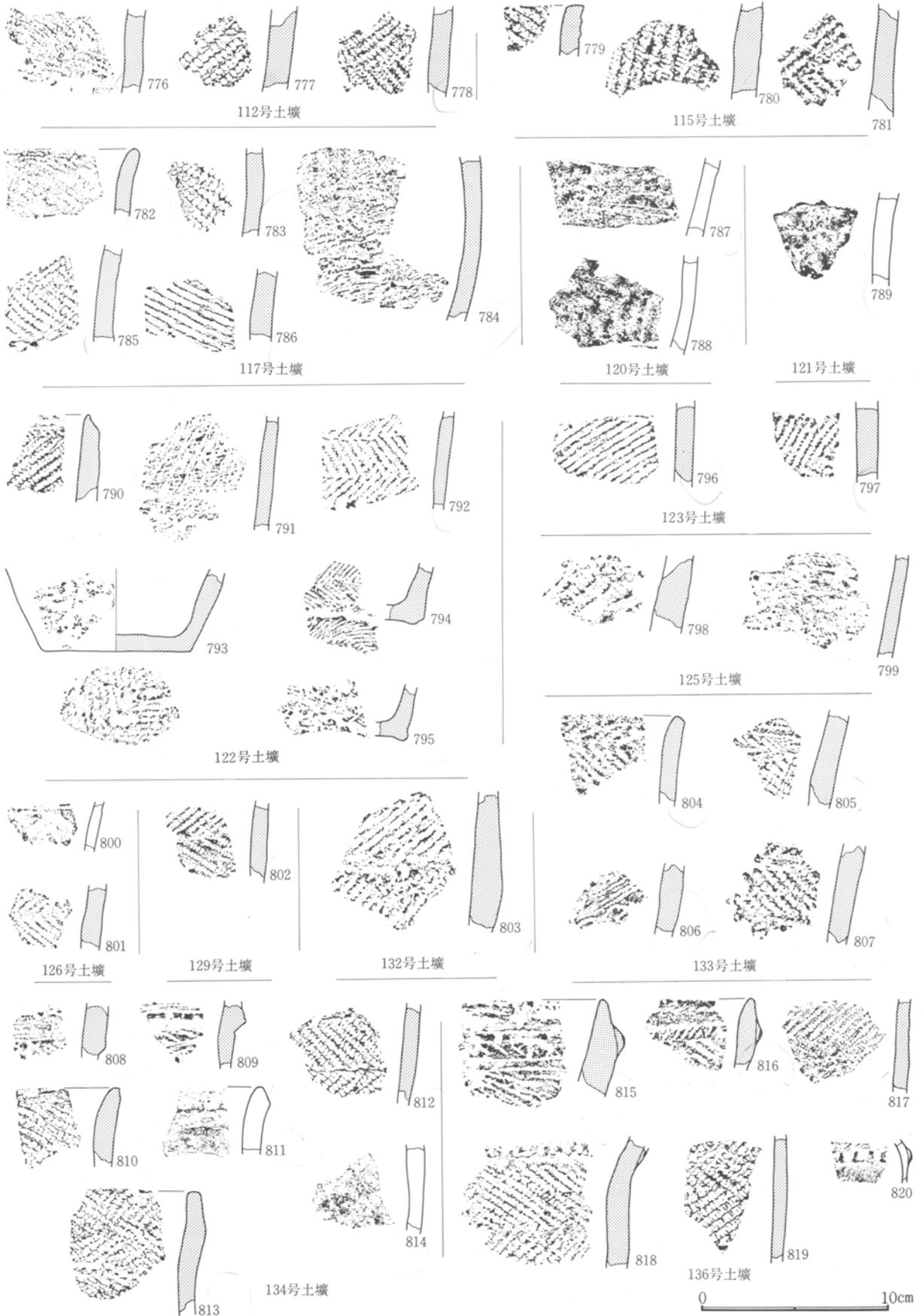
136号土壙（第79図，478・第87図，815～820）

815～819は胎土に繊維を含むもので、815は口縁部に刻み目をもつ隆帯及び捺糸側面圧痕による文様を描くもの。816口縁部に刻み目をもつ隆帯及び捺糸側面圧痕による文様を描き、胴部にR L（0段多条）の縄文を施したもの。818は文様区画に刻み目をもつ隆帯を巡らせ、胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。817・819は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。479・820は胎土に繊維を含まない薄手のもので、479は平縁となる口縁がやや外反し、頸部がくびれ、胴部が膨らむ深鉢形を呈する。口縁部には半截竹管による波状線及び有段部に刺突を、頸部には鋸歯状・横位に「ハ」の字状及び刺突を、胴部には連続刺突及び波状沈線を施したもの。820は表面に突起及び条痕が施され、裏面には指頭圧痕がみられるもの。

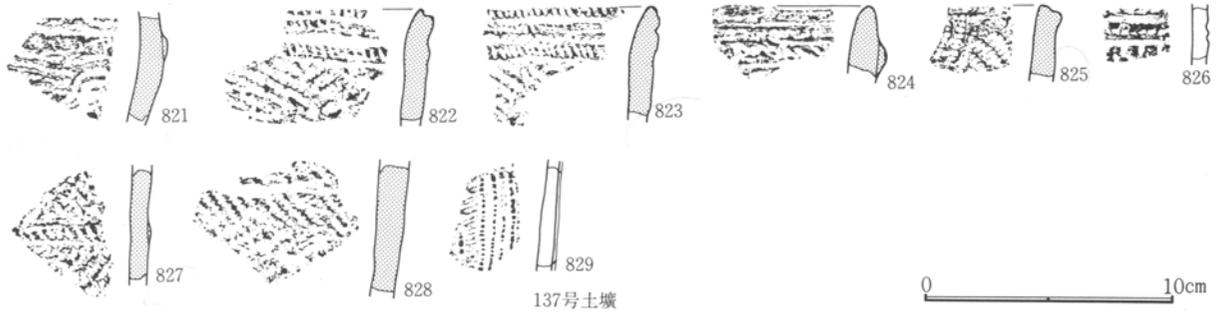
137号土壙（第88図，821～829）

821～825・827・828は胎土に繊維を含むもので、821～824は口縁部に刻み目をもつ隆帯及び捺糸側面圧痕による文様を描き、823は口舌部に刻み目を、胴部にはR L（0段多条）の縄文を施したもの。825は口舌部及び口縁部以下にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。827は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施し、刻み目をもつ隆帯を巡らせたもの。828は胴部にL R（0段多条）・R L（0段多条）による羽状縄文を施したもの。826・829は胎土に繊維を含まないもので、826

第I章 三原田城遺跡



第87図 土壌出土土器(11)

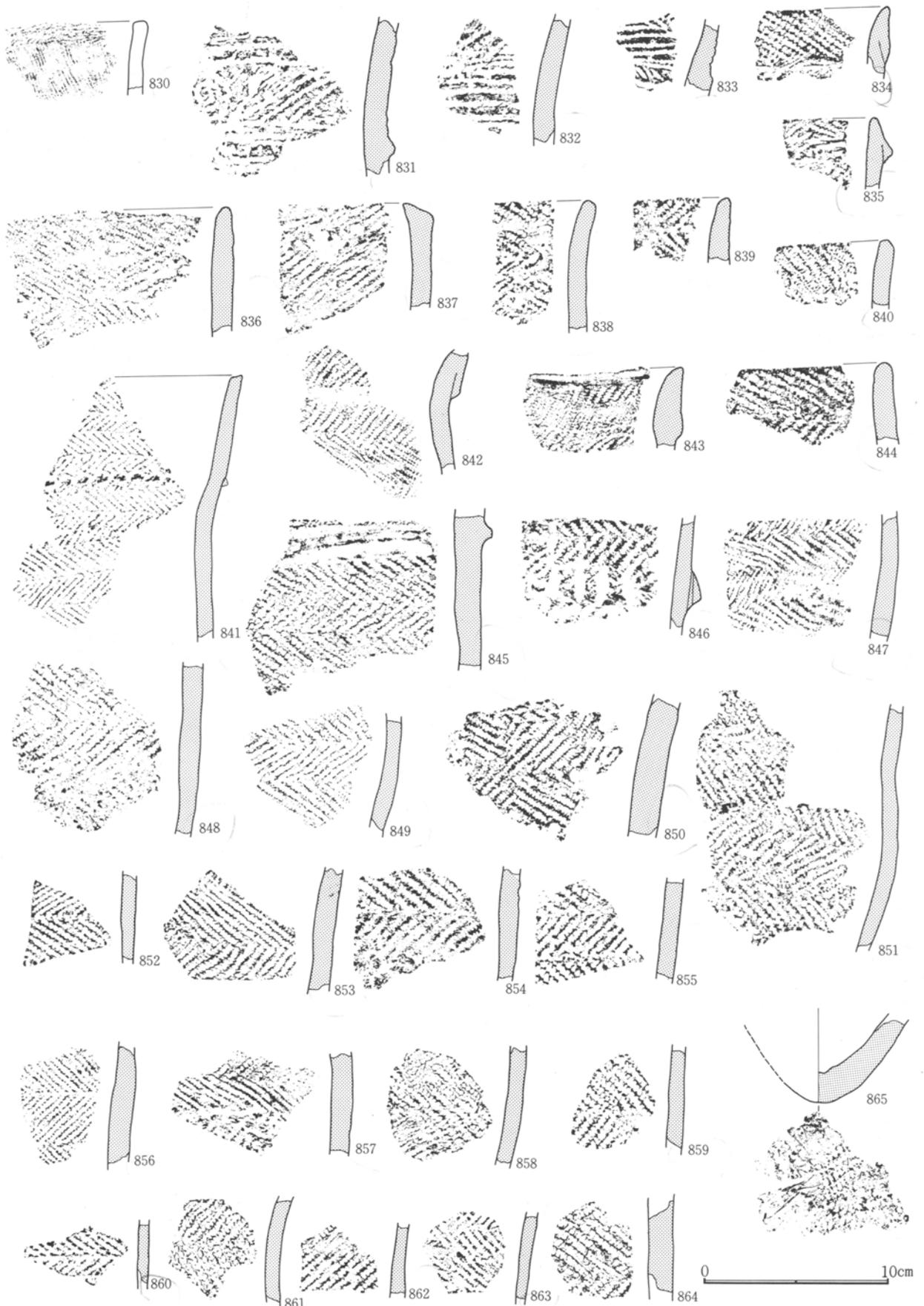


第88図 土壙出土土器 (12)

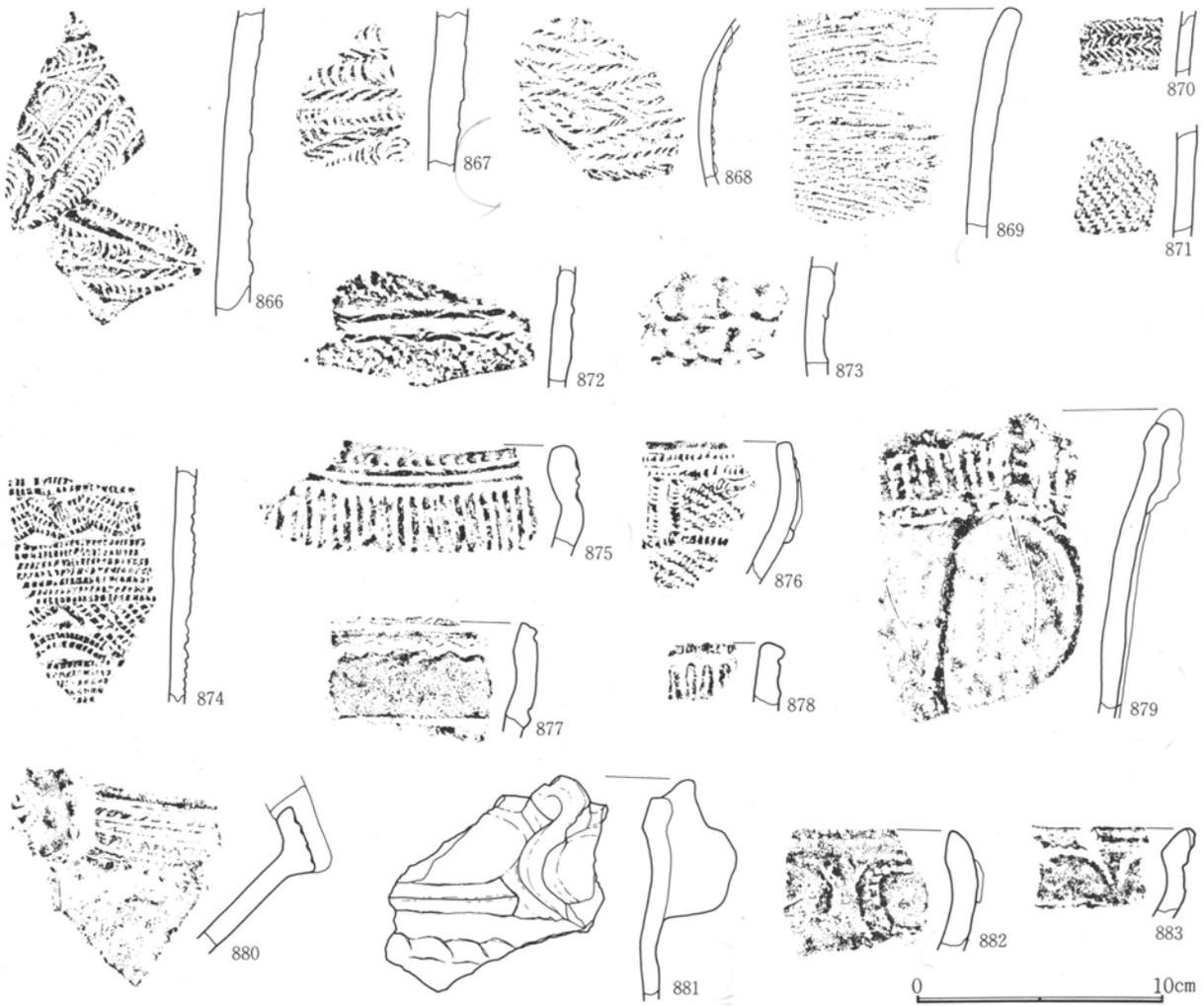
は半截竹管による連続刺突等の文様を描くもの。829は地文に半截竹管による沈線を施し、細い隆帯上に半截竹管による連続刺突を施したものの。

遺構外出土遺物 (第89図・第90図)

830は胎土に繊維を含まないもので、口舌部及び口縁部以下に絡条体による条痕を施したものの。831～865は胎土に繊維を含むもので、831は口縁部に撚糸側面圧痕による渦巻き等及び刺突で文様を描き、さらに刻み目をもつ隆帯を巡らせたもの。832は口縁部に撚糸側面圧痕による文様を描くもの。833は口縁部に撚糸側面圧痕及び刻み目をもつ隆帯で文様を描くもの。834・835・842は折り返し口縁となる口縁部以下にLR (0段多条)・RL (0段多条)による羽状縄文を施したものの。836・838・839・841・844は口縁部以下にLR (0段多条)・RL (0段多条)による羽状縄文を施したもので、841は口縁部に刺突により突起を作り出すもの。837・843は口縁部以下にLR (0段多条)の縄文を施したものの。840は口縁部以下にRL (0段多条)の縄文を施したものの。845は文様区画に隆帯を巡らせ、胴部にLR (0段多条)・RL (0段多条)による羽状縄文を施したものの。846は胴部にLR (0段多条)・RL (0段多条)による羽状縄文を施し、刻み目をもつ隆帯を巡らせたもの。847～860・863・964は胴部にLR (0段多条)・RL (0段多条)による羽状縄文を施したものの。861は胴部にLR (0段多条)・RLによる羽状縄文を施したものの。862は胴部にLR (0段多条)の縄文を施したものの。865は尖底となる底部で、胴部にRL (0段多条)の縄文を施したものの。866～880は胎土に砂粒を主に含むもので、866は半截竹管による連続爪形刺突と円形刺突により文様を描くもの。867は半截竹管による連続爪形刺突と刻み目をもつ隆帯により文様を描くもの。868は刻み目をもつ隆帯と円形刺突により文様を描くもの。869は口縁部以下に半截竹管による平行沈線を施したものの。870は沈線と刻み目状の連続刺突により文様を描くもの。871はRLの縄文を施したものの。872は地文にRLの縄文を施し、刻み目をもつ隆帯をもつもの。873は輪積み痕の部分に連続した指頭圧痕を施したものの。874は連歯状工具により全面に刺突し、三角・柳葉形に陰刻を施したものの。875は口縁が内反し、口縁部に半截竹管による刺突及び縦・横位の沈線を施したものの。876は口縁が内反し、口縁部に半截竹管による連続刺突をもつ隆帯で文様を描き、地文にRLの縄文を施したものの。877は口縁がやや内反し、口縁部に波状沈線・平行沈線を施したものの。878は口縁部に刻み目及び縦位の沈線を施したものの。879は平縁の口縁で、口縁部に刻み目をもつ隆帯を垂下させ、半截竹管による連続刺突等により文様を描き、胴部には隆帯を「U」状に貼り付けたもの。880は口縁部に隆帯及び沈線・刺突で文様を描くもの。881～883は胎土に砂粒と雲母を含むもので、881は口縁部に隆帯で文様を描くもの。882・883は口縁部に隆帯と連続刺突により文様を描くもの。



第89図 遺構外出土土器(1)



第90図 遺構外出土土器 (2)

(4) 出土石器・石製品

本遺跡で出土した石器の総点数は857点である。出土遺構別に見ると下表のようである。

表5 遺構別出土石器数

	1号住	2号住	3号住	4号住	6号住	7号住	8号住	9号住	10号住	土 壙	グリッド
石器	36	28	31	20	97	15	32	32	33	202	358
(石片数)	307	116	230	46	362	26	126	122	192	557	1006

これらの石器の帰属時期は、本遺跡における遺構の主体をなす時期である前期花積下層式期に比定されるものが大部分を占めている。また遺跡中央に走る堀の中からも多くの摩滅した石器が出土した。これらについては一部図に表して記載したが、No.688以降は一覧表および写真図版で記載した。

石器の出土状況は、各住居址から出土した石器の数量についてみると、遺構の遺存状態の良否を反映した部分もあり、6号住居址における点数が多いのは遺構の確認された面が、かなり上層であったことにもよる。

住居址内における出土状態は一様ではないが、多くは覆土中からのもので床面に接して出土しているものは少ない。その中で磨石類は床に近い状態で、しかもほぼ全住居址において出土していることは注目される。

石器の組成を見てみると、各住居における出土点数の違いはあるものの、基本的には一致していることが窺われる。種類は石鏃、石匙、石錐、スクレイパー、打製石斧、磨製石斧、磨石、石皿等で、稀に装身具も含まれる。石材は石匙、打製石斧、スクレイパー類は黒色頁岩が圧倒的に多く、次いで磨石、石皿等の輝石安山岩である。

以下各種類、遺構別に、出土した石器について説明を加えて行きたい。

石 鏃

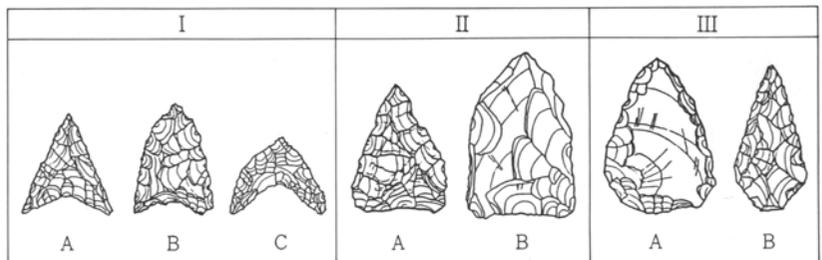
総点数144点が出土している。住居址より77点、土壙より16点、溝より6点、遺構外45点である。

形は無茎凹基のものが全点の9割以上を占めており、無茎平基、無茎凸基の順で数を減じて行く。有茎のものは僅か2点である。

大きさは、最大4.0cm、最小1.1cmで、2.0cmを中心としている。重量は最小0.2g、最大8.2gで、平均2.0gである。石材は黒耀石、チャート、黒色頁岩、黒色安山岩が用いられている。

形態により下図のような分類を行った。凹基（Ⅰ）としたものは明らかに抉部の作り出しを意識しているものである。平基（Ⅱ）としたものの中にはやや凹基に属するようなものもあるが、抉部の作り出しが意識されていないものは平基とした。凸

基（Ⅲ）としたものは、いわゆる円基も含め、また茎状のものを持つものも含めている。また尖頭器状のもので断面は丸みを持つものがあり、石錐と分類不可能なものもある。



第91図 石鏃分類図

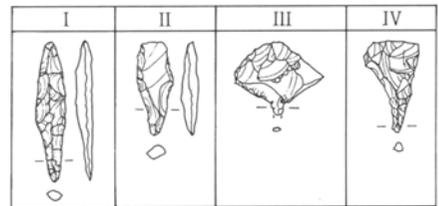
石 槍

3点と出土しているが数は少ない。小形のものと、やや大形で黒色頁岩製のものに分けられる。小形のものについては、石鏃としての機能を考えたほうが妥当とされるかも知れない。大形製品については極めて少

なく、僅か1点に過ぎない。前代に盛行のピークを迎えてしまった器種の1つとして、この時期においては客体的な器種としてのみ存在していたのであろうか。作りかた、形も雑で左右の均整がとれていないものが多い。特に基部については石匙のつまみ部と見紛うものも見られる。

石 錐

出土点数22点と余り多くはない。形態はつまみ部を有すものと、棒状のものがある。錐部の欠損しているものも多く、全体の長さが判明するものは少ないが、おおよそ0.5～2cmと思われる。錐部の断面形が四角形に近いものと、やや扁平なものがある。右のような4形態に分類できる。



第92図 石錐分類図

石 匙

総数67点が出土している。住居址、土壙および遺構外からもかなり目立って出土しており、該期の石器組成を特徴付けるものの一つである。4号住居址を除く総ての住居址から出土している。

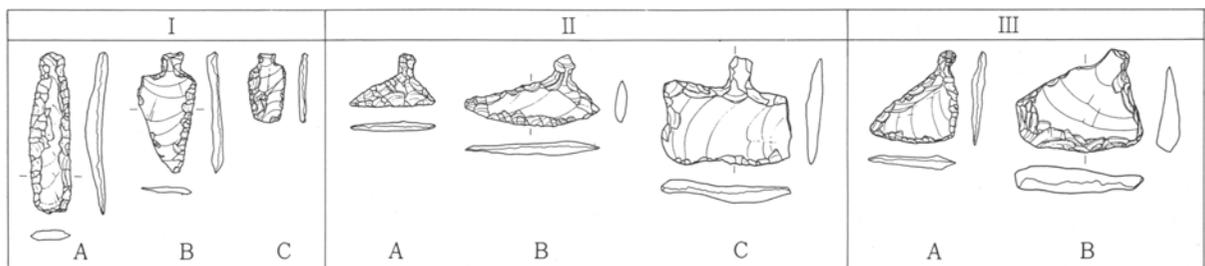
形態は、大きく縦型と横型とに分けられ、その比率は1：4.4で横型が多い。またそれぞれの中でさらに、形状、つまみ部の位置で以下のように分類することができる。

Iはいわゆる縦型で、両長辺または片縁に刃部を持つ。

IIは横型とされるもので、つまみ部を中央、または中央よりに持ち、三角形、扇状、木の葉状、台形状のものに分けられる。

IIIは形が一定せずつまみ部が斜めに付くものである。

石匙はその用途が確定できない石器であるということが、逆に言えば切る、削るという万能利器としての位置を与えざるを得ないのかも知れない。つまみ部を持つという極めと特徴的な部分がありながら、それが直接使用時の機能を果たしていないことが1つの特色とも言える。本遺跡においても多くの出土を見たが、他の遺跡の例に違わず様々な形態を示しており、大小の比較でも、最小重量2.9gのものから、最大68.7gのものまでかなりの差を示している。石材については黒耀石、チャートから黒色頁岩製のものがあり、黒耀石、チャート製のものはII類、しかも小形で精緻な作りのものが多い。



第93図 石匙分類図

スクレイパー

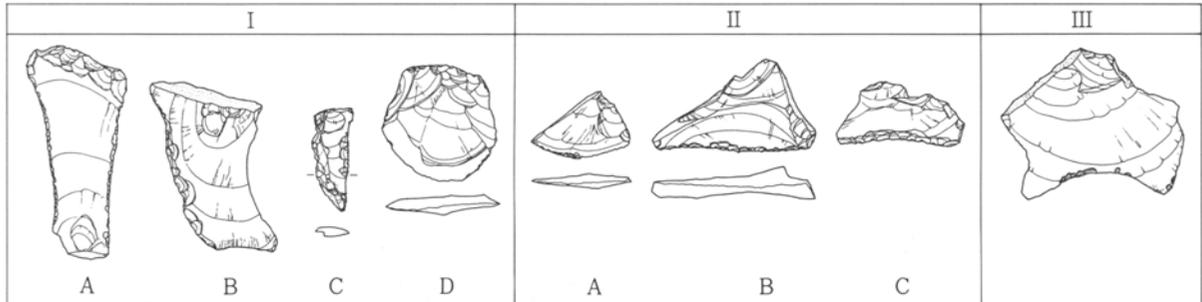
出土点数は288点と最も多い。本来であるならば、削器、搔器、刃器と区別して記述すべきものも含まれているであろうが、本書では敢えてこれらをスクレイパーの総称で扱っている。(このことについては後章で触れて行きたい) ここでは、以下のように形態、刃部の形状で分類を行った。

Iは縦長の剥片を素材にしたものである。Aは両側縁に刃部を作る。Bは一側縁に刃部を作る。Cは両側縁に刃部を持ち、先端が尖る。Dは刃部が丸く凸状となる。

第I章 三原田城遺跡

IIは横長の剥片を素材にしたものである。Aはほぼ三角形を呈し、1辺または2辺に直線的な刃部を作る。Bは扇状を呈し、下辺に凸状の刃部を作る。Cは形は一定しないが一辺に凹刃を作る。

IIIは不定形で一部に刃部、または使用痕のあるもの。



第94図 スクレイパー分類図

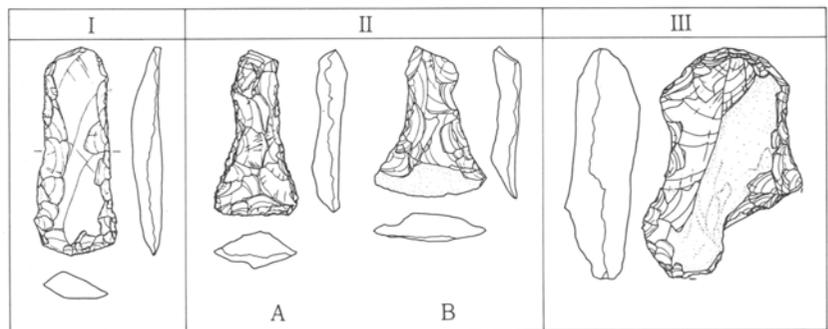
打製石斧

出土総数135点である。いわゆるI短冊形・II撓形・III分銅形に分類できるが、分銅形と言えるものは極僅かである。撓形として捉られるものが半数以上を占める。

Iは短冊形とされるものである。原則的に基部、刃部の幅がほぼ等しいものを抽出した。

IIは撓形とされるものであるが、形態的に撓形との区別が困難なものもある。Aは刃部が直線的になるもの。Bは刃部が凸状になるもの。

IIIは分銅形とされるものであるが、中・後期に見られるような定形的なものは見られない。

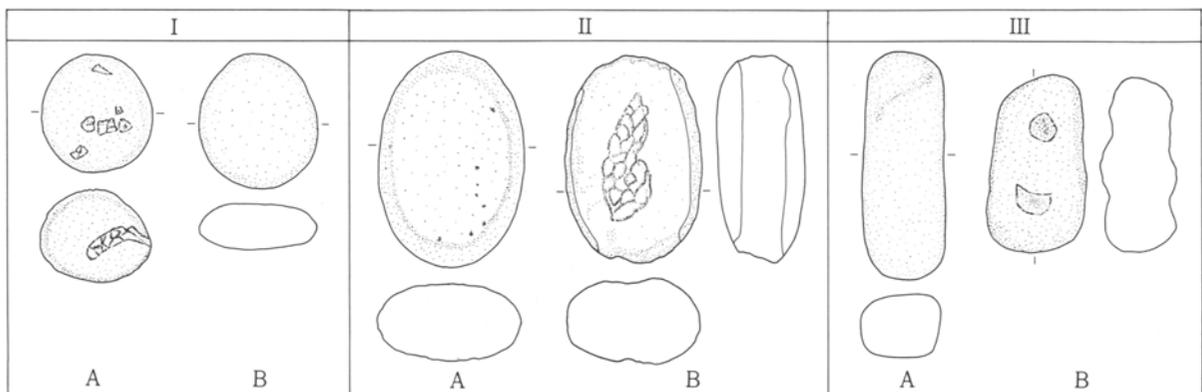


第95図 打製石斧分類図

磨製石斧

乳棒状のものと、小形定角式のものが出土しているが点数は少なく7点である。完形品はそれぞれ1点ずつで他は欠損品である。

磨石・凹石



第96図 磨石・凹石分類図

この両者を厳密に区別して扱うことは難しく、多くは両方の機能を合わせ持ったものが多い。出土したものはいずれも自然礫をそのまま素材にしており、形態、使用痕の在りかたから以上のように分類した。

Iは平面形が円形のもので、Aは球状、Bは扁平なもの。

IIは平面形が楕円のもので、Aは断面形がやや扁平で両面に若干の磨痕が観察されるもの。Bは両面、側縁に使用痕が顕著に見られるもの。凹穴を持つものもある。

IIIは細長い礫を用いている。Aは端部にのみ使用痕が見られるもの。Bは側面に使用痕が顕著なもの。

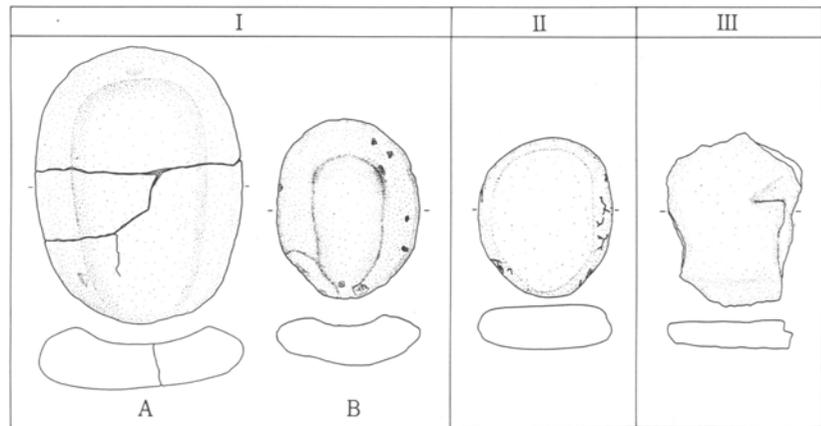
石 皿

出土した総点数は31点である。遺構に伴ったものが多いが完形品は少ない。土壙から完形品の出土が目立ち、調理具として主体をなす石器でありその在り方は注目される。形態から以下のように分類される。

Iは扁平な石の一面を磨り減らし使用面としている。Aは大形品。Bはやや小形のもの。

IIは扁平な石の両面を使用面とするが、面が平坦をなす。

IIIは平面形が不定形をなすもので、いわゆる台石とされるものも含む。



第97図 石皿分類図

装身具

7点が出土している。内訳は、玦状耳飾り4点、菅玉2点、玉篋1点である。玦状耳飾り、玉篋は土壙より出土している。玦状耳飾りは円形のもの（未製品）と逆「U」字状のものがある。玉篋は土壙から出土したもので、擦切り技法により製作されている。縄文前期初頭としては県内での初例と思われる。

その他の石器

上述したいずれの器種にも類さないものである。使用痕のある剝片（剝片石器）としたものについては、他の器種の破損品も含まれていると思われる。また利器としての機能を考えることが出来ないもの（祭祀的な用途を持つ道具としての可能性があるもの）も見られる。

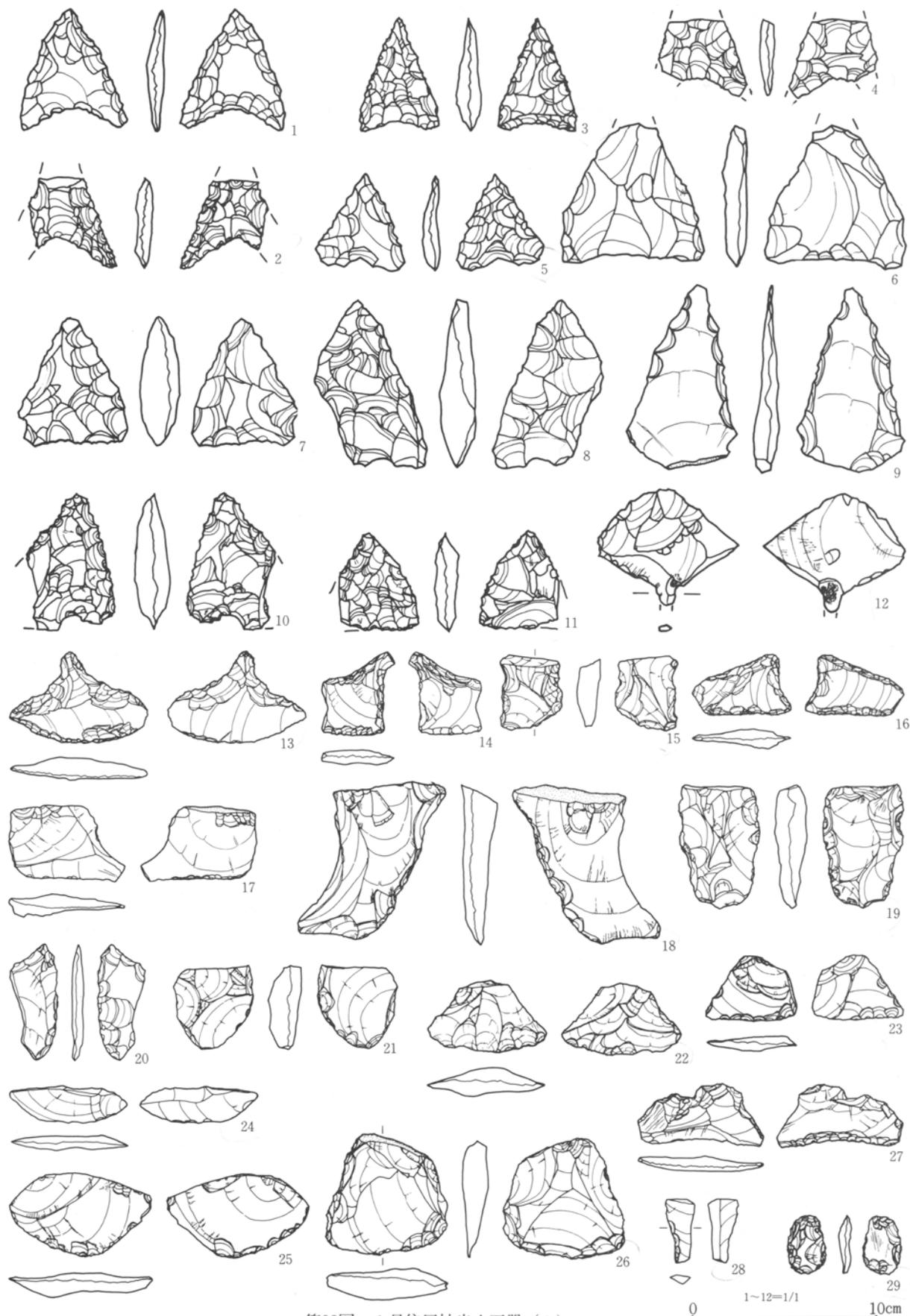
住居址出土石器

1号住居址出土石器（第98・99図 1～36）

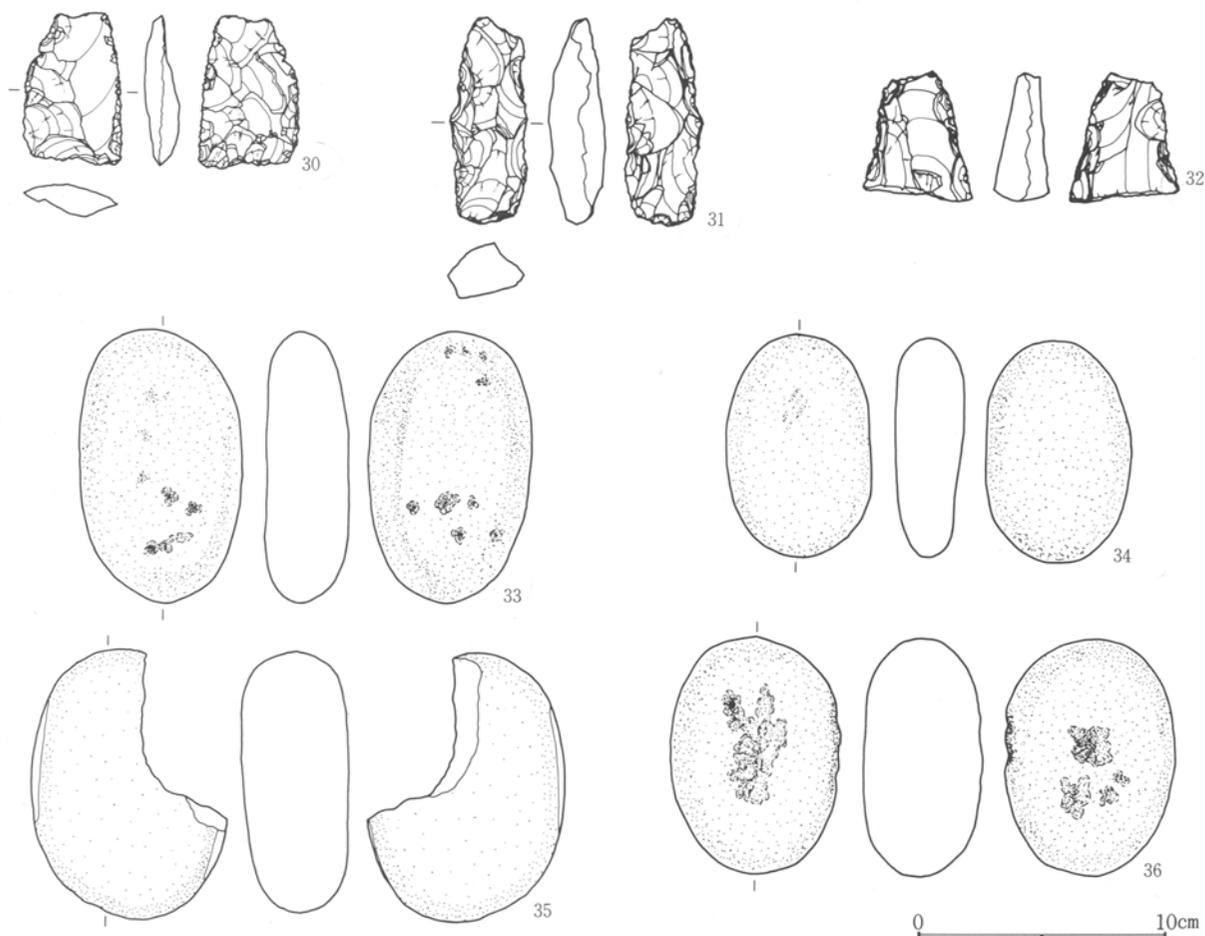
1～11は石鏃である、1は三角形を呈し基部に抉りを持ち、両脚端部が尖る。2は三角形の抉りを持ち、かなり長脚となる、先端部と片脚を欠く。3は2等辺三角形で基部に抉りを持つ、端正な作りである。4は凹基鏃である、先端部と片脚を欠いている。5はやや小型である、基部に小さく抉りを持つ。6は正三角形を呈すやや扁平な感じがする、先端部を欠く。7は厚みがある平基鏃。8はかなり大形で二等辺三角形を呈すと思われる。9は頁岩製で基部に自然面、打点を残す。10は厚みがあり基部に小さく抉りを持つ、片側縁が未調整で未製品かと思われる。11は平基鏃である、下辺の端を欠く。

12は菱形のつまみ部を持つ石錐である、錐部は短く先を欠く。13は横型の石匙である、ほぼ中央に傾きを

第I章 三原田城遺跡

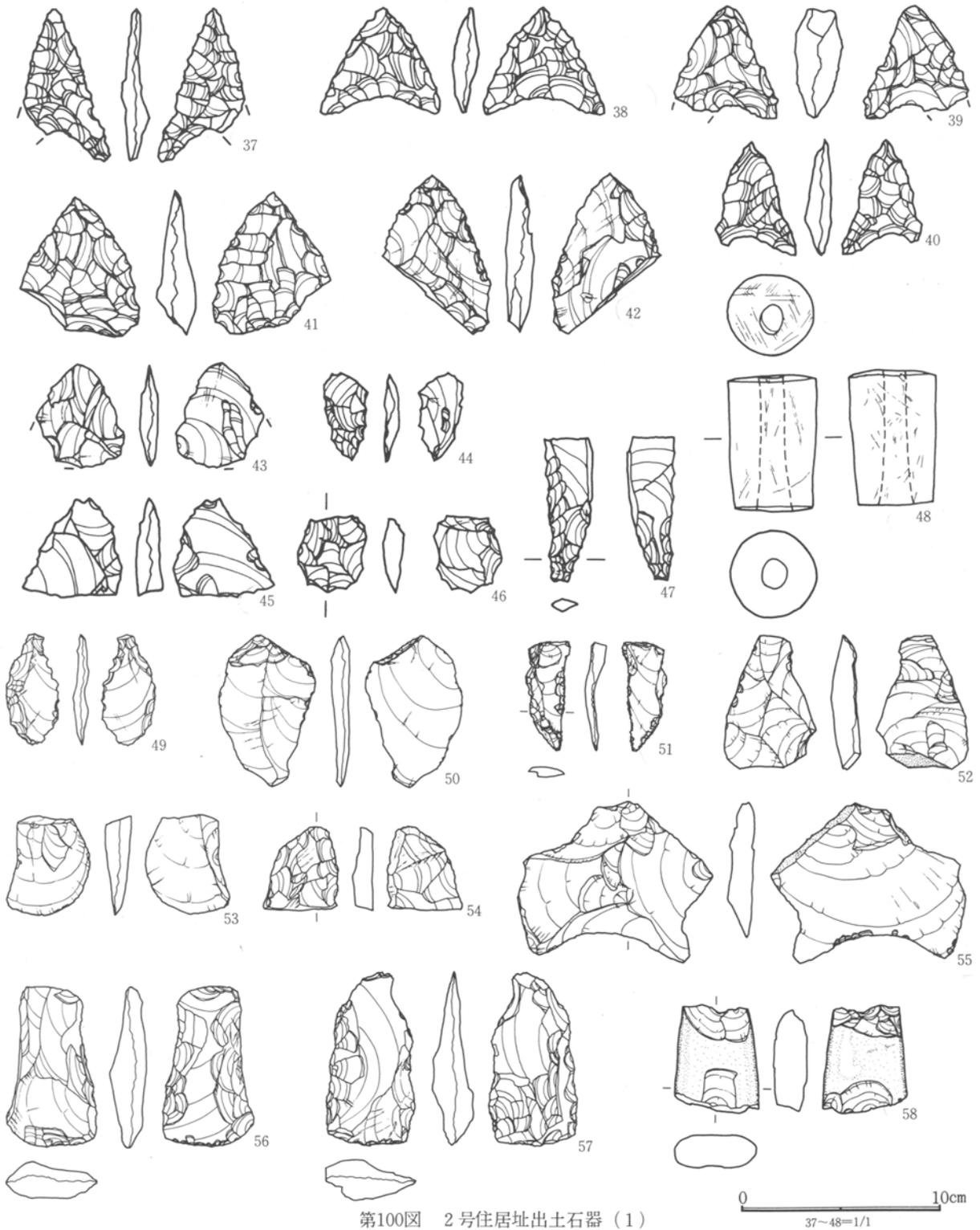


第98図 1号住居址出土石器(1)



第99図 1号住居址出土石器(2)

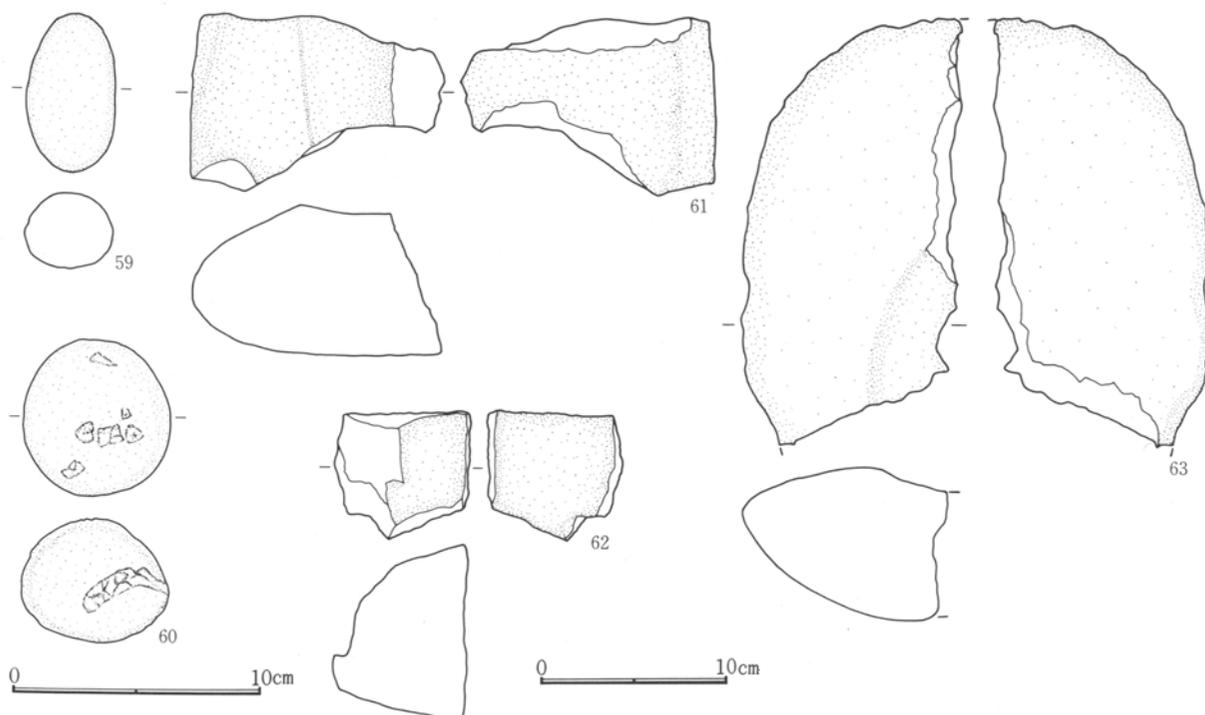
持つつまみが付く、下辺の刃部は凹刃で両面よりかなり丁寧な剥離が行われている。14はやはり横型石匙の欠損品である、つまみは端に寄って付き直下の角はほぼ直角である。下辺の刃は両面からの丁寧な剥離がなされている。15は打製石斧の基部片であろう、いくぶん反りが見られる。16は一見先端部を欠いた石鏃、または石匙の破片のようであるが、一辺の端が極めて厚手であるためスクレイパーとした。17は四角い破片で一端がつまみ部のように突出している。刃部は自然面を残す打面と対になった辺に作り出されている。18・19・20は縦型のスクレイパーである。18は打面に自然面を持つ不定形な大形剥片を利用している、弧状となった右側縁に刃部を作り出す。19は上端に打面を持つ、両側縁は粗く調整された刃部を持つ。20は薄手で両端がやや尖る、刃の作りは粗い。21・22は厚手のスクレイパーである、やや弧状となる縁辺に両面からの粗い剥離で刃部を作る。23は不定台形を呈し、やや尖った部分の両辺に刃部を作り出す。24・25は木の葉状のスクレイパーである、刃部は突刃。25は剥片の片縁に刃部を作り出す。26は台形を呈すスクレイパー、1縁に自然面を残し対辺に刃部を作る。27は横長で不定形な剥片の下辺に凹刃が作り出される。28は小形の剥片を利用、断面三角形で一縁に剥離が見られる。29は黒耀石製の小形スクレイパー一端に打瘤を持ち、ほぼ全周に両面剥離による刃部を作り出している。30・31・32は打製石斧である、30は薄手でスクレイパーの可能性もある。31は柱状の石材を用い厚手である、身幅は狭くかなり端正に作られている。32は打製石斧の基部片である。33～36は磨石である。35は3分の1程を欠いている、楕円形を呈し両面、側縁に使用痕が観察される。36は楕円形で厚みがある、両面、側縁に打痕が見られる。



第100図 2号住居址出土石器(1)

2号住居址出土石器(第100・101図 37~63)

37~45は石鏃である。37・38は凹基鏃、37は二等辺三角形を呈し片脚を欠く、38は完形品共に丁寧な作りである。39は未製品か、先端部が厚くなる。40は脚が開く凹基鏃、先端部尖り片脚を欠く。41は平基鏃、一見脚部を欠くように見えるが当初から無かったものであろう。42は基部を斜めに欠いている。43・44は石鏃



第101図 2号住居址出土石器(2)

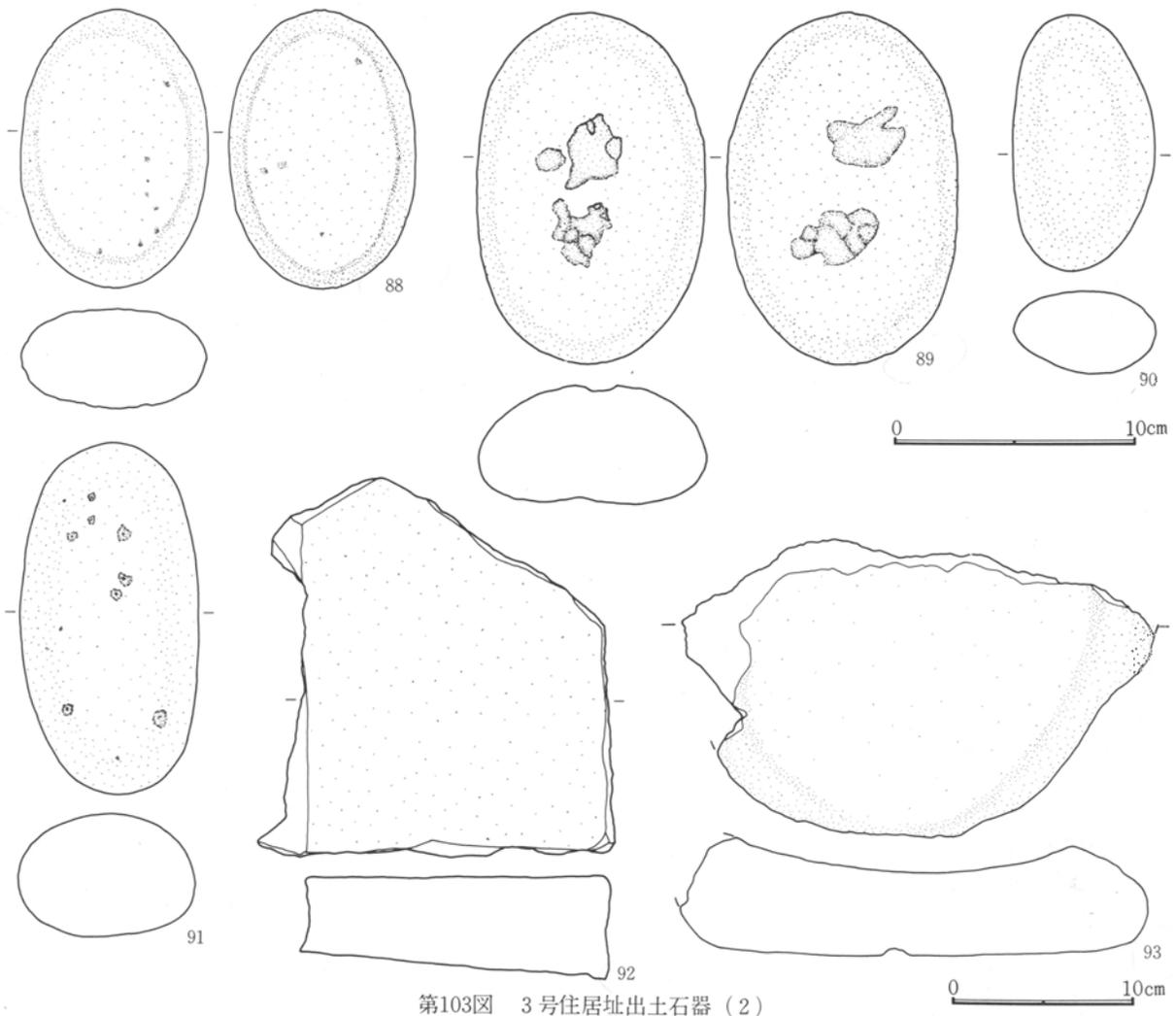
としたが調整痕があまり見られないことや形状から不確定な面もある。45は先端部片である。46・47は石錐である。つまみ部の断面四角形で長さ1cm程の錐部が付き丁寧な調整が見られる。48は管玉である。住居址の壁際で出土している、一端の径がやや小さくなる。中央に開けられた穴は逆に径の小さいほうが大きく径の大きいほうへ向かって小さくなる。両端面は製作時の痕が多方向に認められ、表面は平滑に磨かれている。貫通している穴の内面には多くの擦痕が見られる、滑石製である。49は石匙である。木の葉状の一端につまみを持ち刃部は粗い作りである。50～55はスクレイパーである。50は一辺に自然面を持つ弧状の刃部を持つ。51は縦長の剥片で尖頭器状である、基部に自然面を残し全体に湾曲している。52は不定形で1側縁に僅かに刃部を持つ。53は円弧状の刃を持つ。54は側縁に粗く刃部を作るが、打製石斧の基部の可能性もある。55は大形で不定形、1辺に自然面を持ち他の3辺を刃部としている。凹刃部は丁寧な調整が観察される。56・57は撓形打製石斧である。56は片側に厚みを持ち刃部は丸くなる。57は基部が薄く貧弱である。58は磨製石斧。基部、刃部を欠く。59・60は磨石である。59は卵形を呈し、両端に使用痕が見られる。60は丸みを持ち端部に打痕が見られる。発泡性の石材である。61～63は石皿である。61は側縁部、62は台石か。63は先端部に近い使用面は浅く稜も緩やか。

3号住居址出土石器(第102・103図 64～93)

64～69は石鏃である。64は基部に抉りをもつ、片脚を欠く。刃部は両面から丁寧な剥離がなされる。65は凹基鏃であるが抉りは弱い、側縁はカーブをもち先端が尖る。66～68は平基鏃である。66はかた面に盛り上がりを持ち厚手。67は正三角形で側縁部は大きく割れた後に再調整を加えた再生品か。68は小形で片脚の端部を欠く。69は不定形で1端に自然面が見られる、刃部の作りは粗い。70～74は横形石匙である。70はチャート製で両端が尖りつまみ部は中央からややずれて付く、非常に端正な作りである。71はやや大形である、中央からずれておおぶりのつまみが付く、刃部は直線的で細かな刃が作り出される。72は下辺が平らで上辺が膨らみ端につまみ部が付く。73は平行四辺形を呈す、つまみ部は小さく全体に反りを持つ。74は欠損品、つ



第102图 3号住居址出土石器(1)



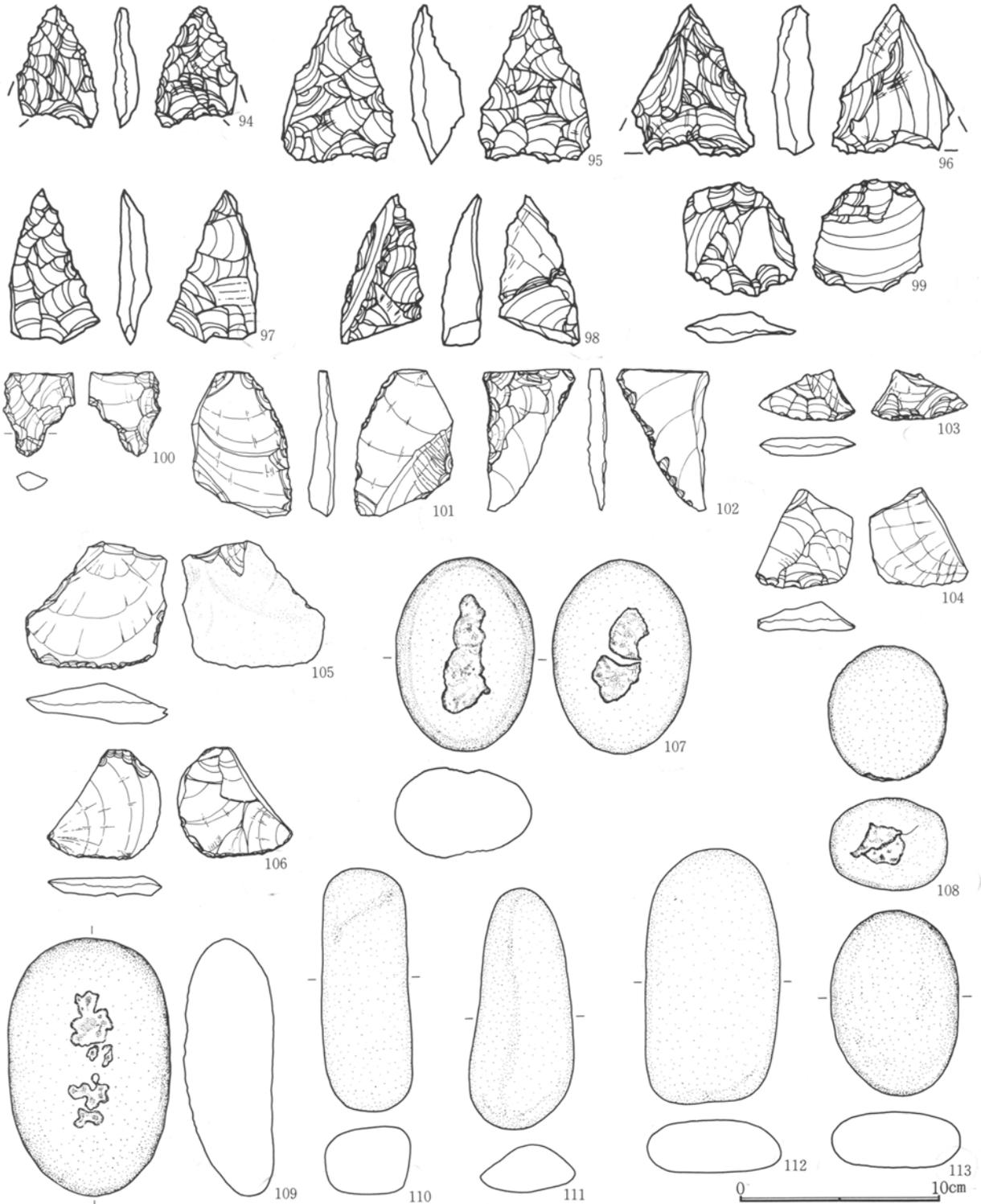
第103図 3号住居址出土石器(2)

まみ部を境に折れている。75は石匙の先端部片である。76は縦型の石匙である、片側縁に自然面が残り先端部を欠く。刃は片縁のみに作られている、つまみ部のくびれは弱い。

77は小形の打製石斧とも見られるが周辺の調整の様子からなすび状のスクレイパーとした。78～81はスクレイパーである、78は不定形で弧状の粗い刃部を持つ。79は三角形で一端が厚く、打痕を残す。対辺に刃部を持ち先端が尖る。80は一側縁に刃部を作り出す。81は上端に丸く自然面を残す、刃部はやや凸状で両面からの剥離によって作り出される。82・83は打製石斧。82は刃部が丸く、基部を欠いている。83は直刃で側縁に両面からの剥離が加えられる。84は半折された川原石を用いた磨石である、表面は平滑に磨かれている。85は磨石である、長円形で端部に打痕がある。86は長円形の凹石である、片面中央に1、裏面に2カ所の浅い穴を持つ。かなり軟らかい石質である。87は小形で球形の磨石である。表面一カ所に集中して打痕が見られる。88～91は磨石である。88・89は扁平な石を利用している、表面に使用痕が見られる、89は表裏に数カ所の凹穴が見られる。88は炉址に使われていた。90は細長い石を利用、端部に打痕が観察される。91は長円形の磨石である。表面にタール状の付着物が見られる。92は台石。表面は極めて平坦である。炉址材として床に据えられていた。93は石皿の破片である。使用面は平滑で、裏面も使用されている。92と同様炉址に使われていた。

4号住居址出土石器(第104図 94~113)

94~97は石鏃。94はやや小形の凹基鏃である、片脚を欠く。95は作りは粗く分厚い、側縁に自然面が残る。96はかなり雑な作りである。97は欠損品で約半分を欠く。98・99は小形のスクレイパーである。共に一辺に刃部を持つ。100は石錐。不定形なつまみ部に太く短い錐部が付く。101・102は縦形のスクレイパーである。101は長辺にやや凸状の刃部を作り出す。102は三角形を呈し、短辺に自然面を残す、刃部は長辺に両面から



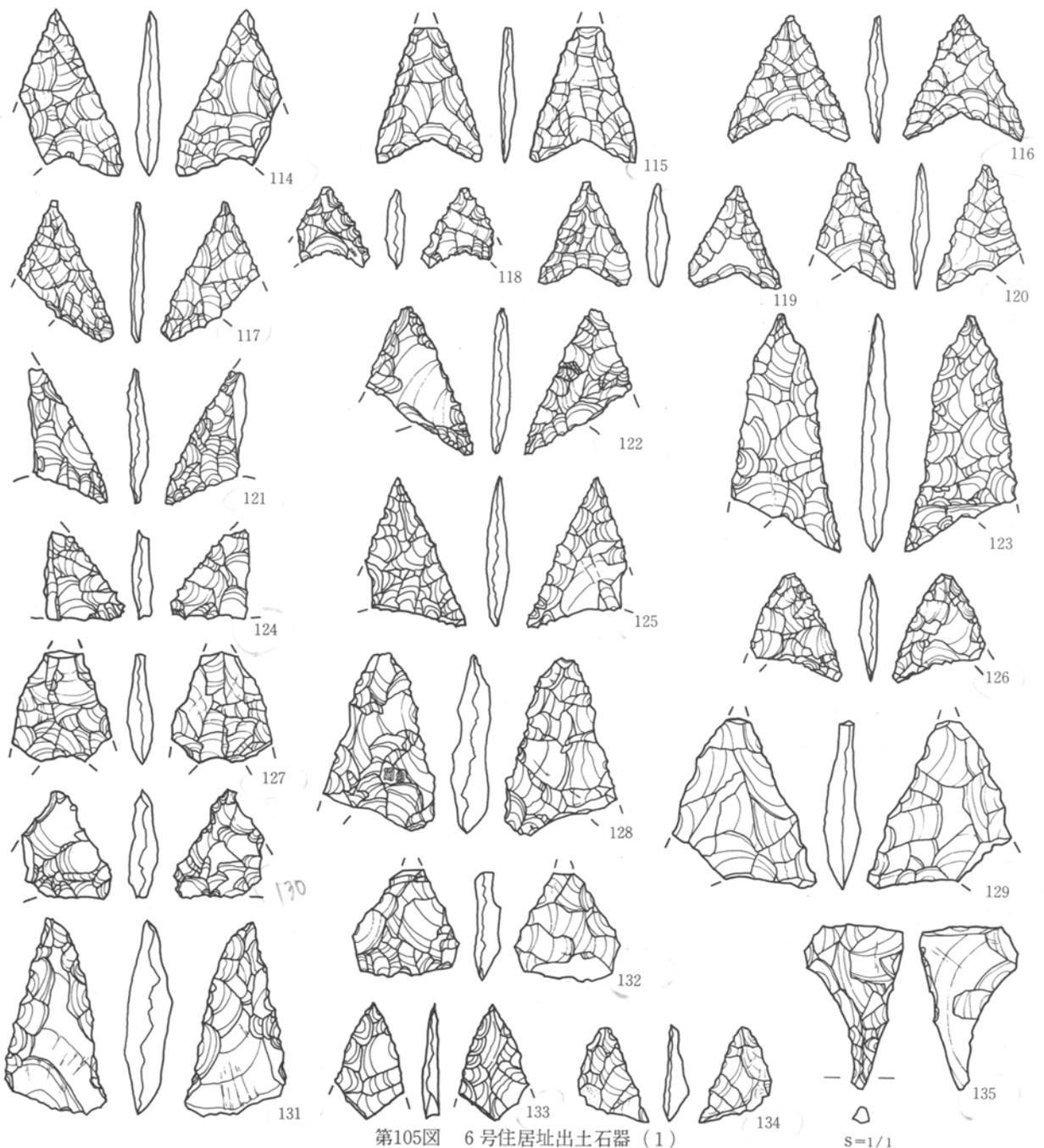
第104図 4号住居址出土石器

94~99=1/1

の押圧剥離によって作り出されている。103は粗い刃部を持つが、他器種の欠損品の可能性がある。104は不定台形を呈し一辺に平らな破断面を持つやや肉厚で粗い刃部を持つ。105は裏面に自然面を持つ一次剥片である、刃部は片面からの剥離で作出されている。106は半円状のスクレイパーである。刃部は円弧の一部に作られている。107は凹石である、楕円形の石の両面に浅い小穴を持つ。108・109は磨石である。108は球形で両端に打痕を持つ。109は片面に丸みを持ち、打痕が見られる。110～113は礫器である。細長い礫を利用したものと扁平で長円形のものがある、端部に使用痕が見られるものもある。

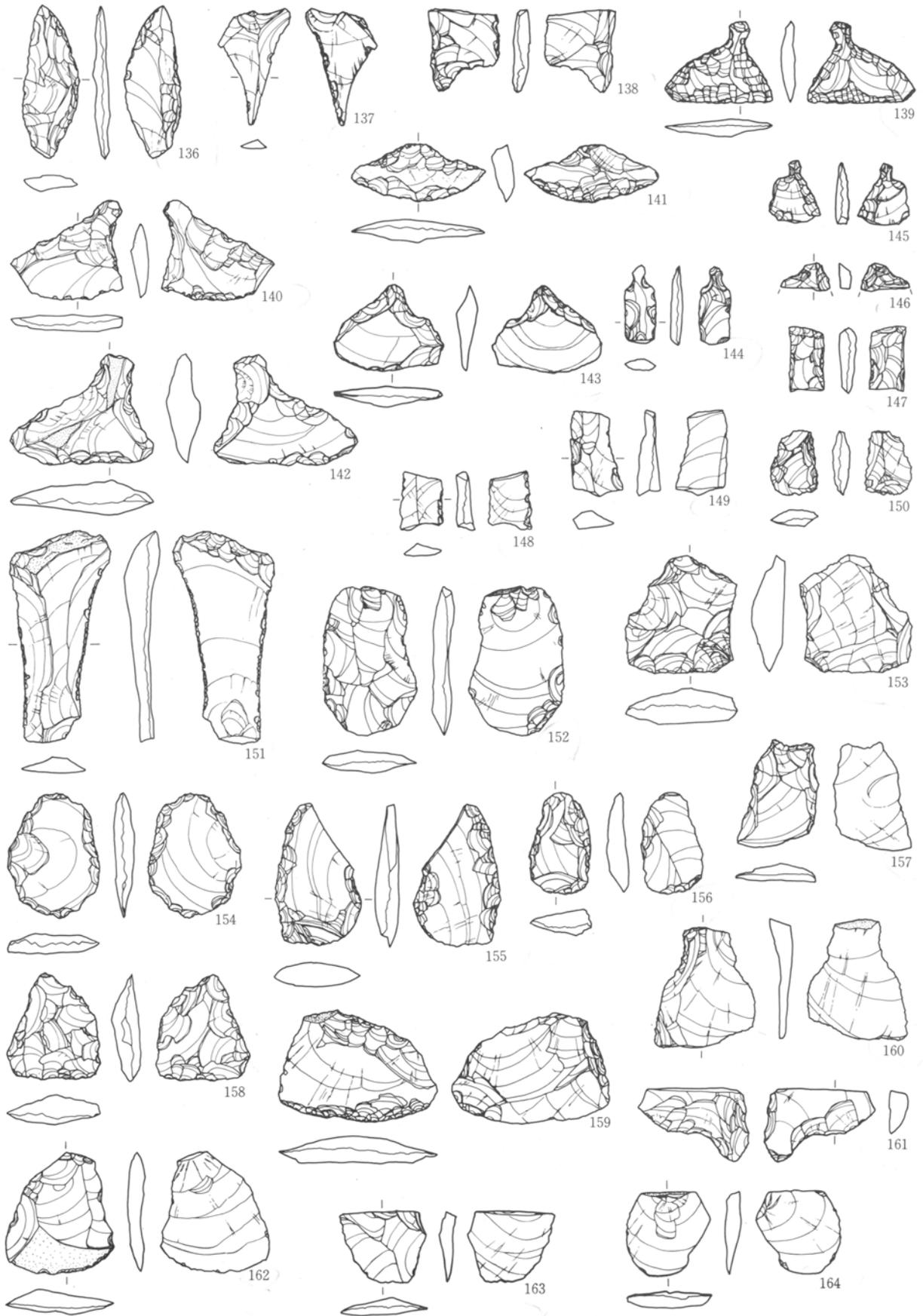
6号住居址出土石器 (第105～110図 114～210)

114～134は石鏃である。114～129は凹基鏃である、114～126は特に作りが丁寧で基部の挟りがはっきりしている。114・117・120～126は片脚を欠く、118～120は小形である。123はやや大形で細長く中央になだら



第105図 6号住居址出土石器 (1)

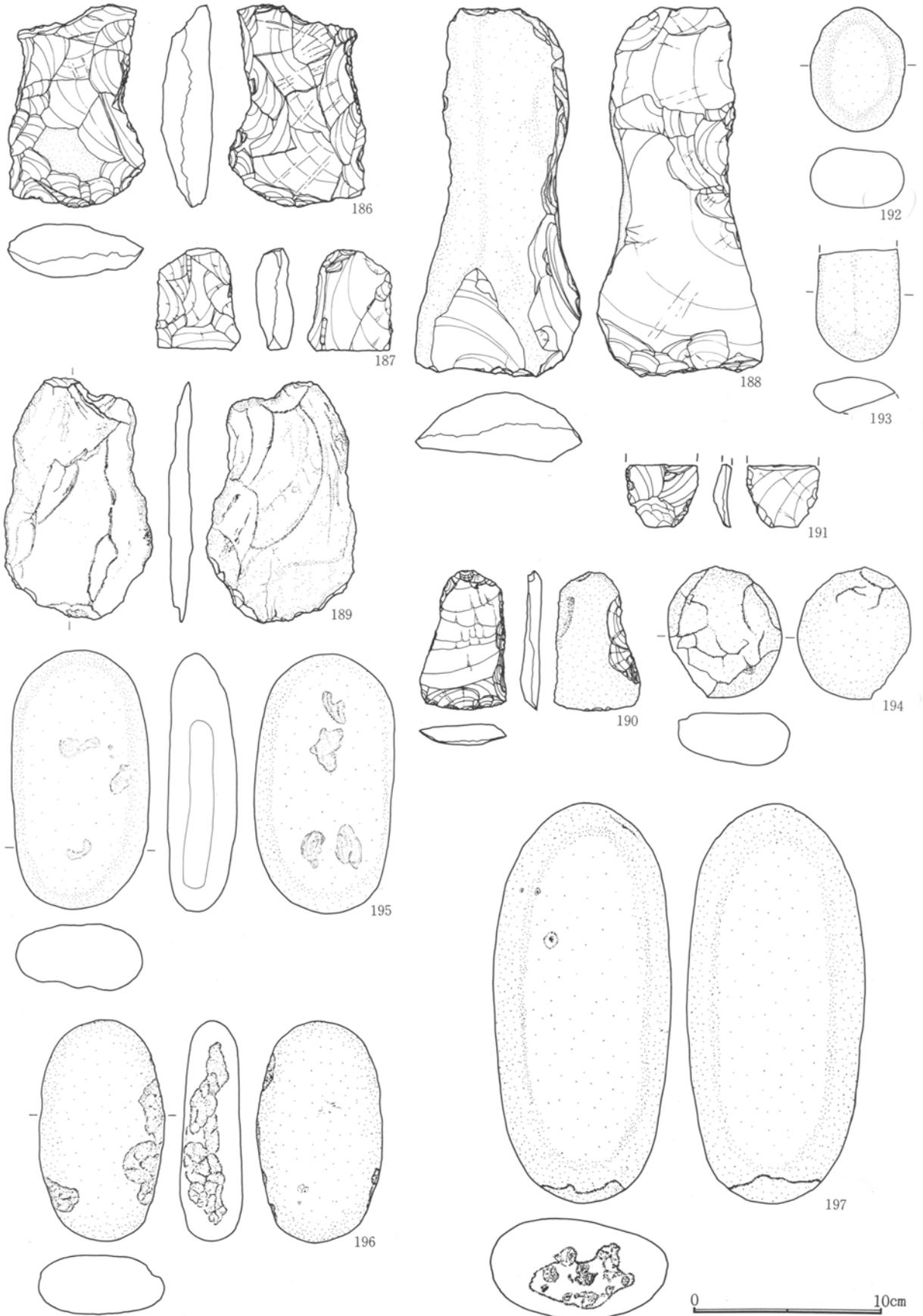
第I章 三原田城遺跡



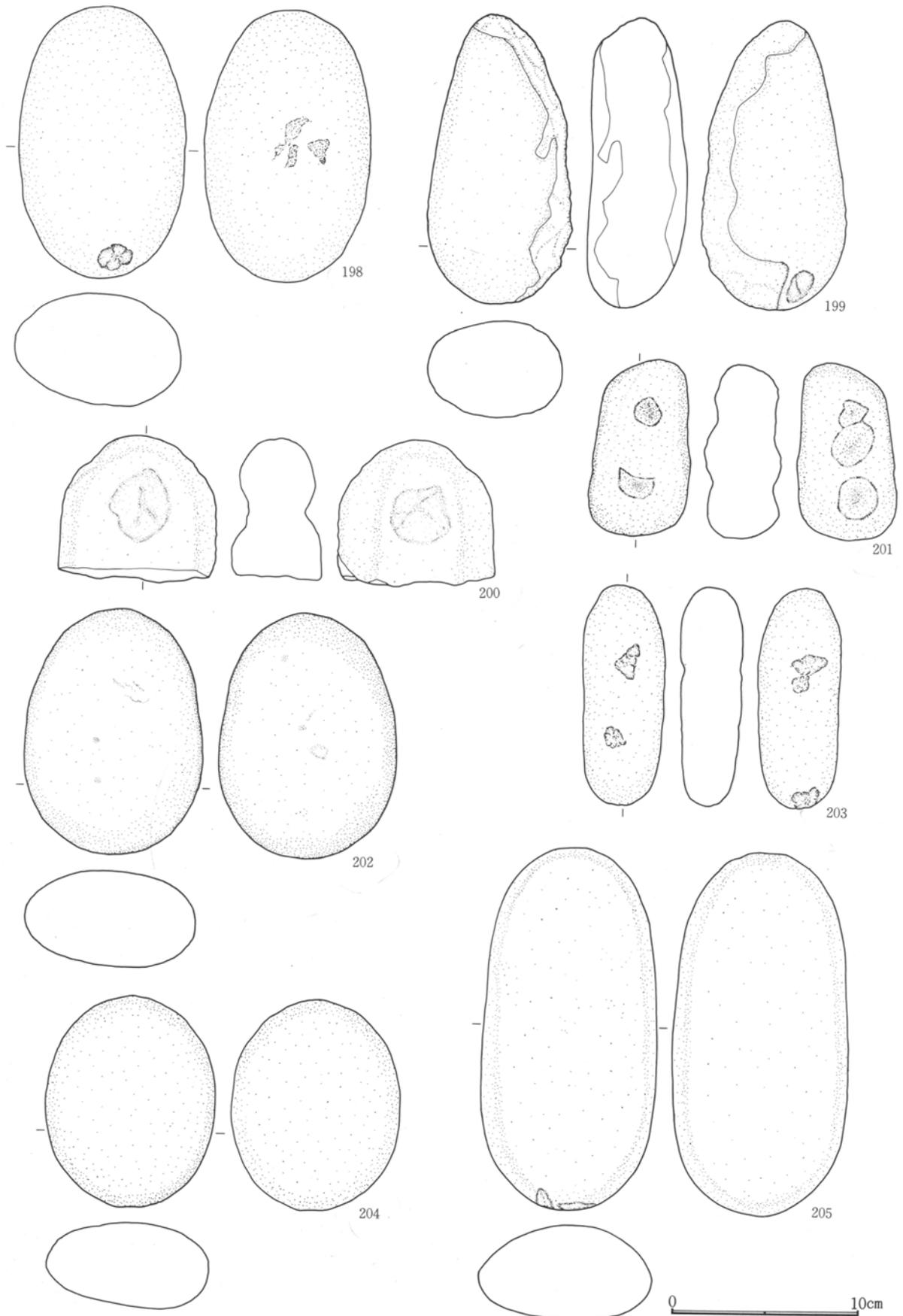
第106图 6号住居址出土石器(2)



第107图 6号住居址出土石器(3)



第108図 6号住居址出土石器(4)

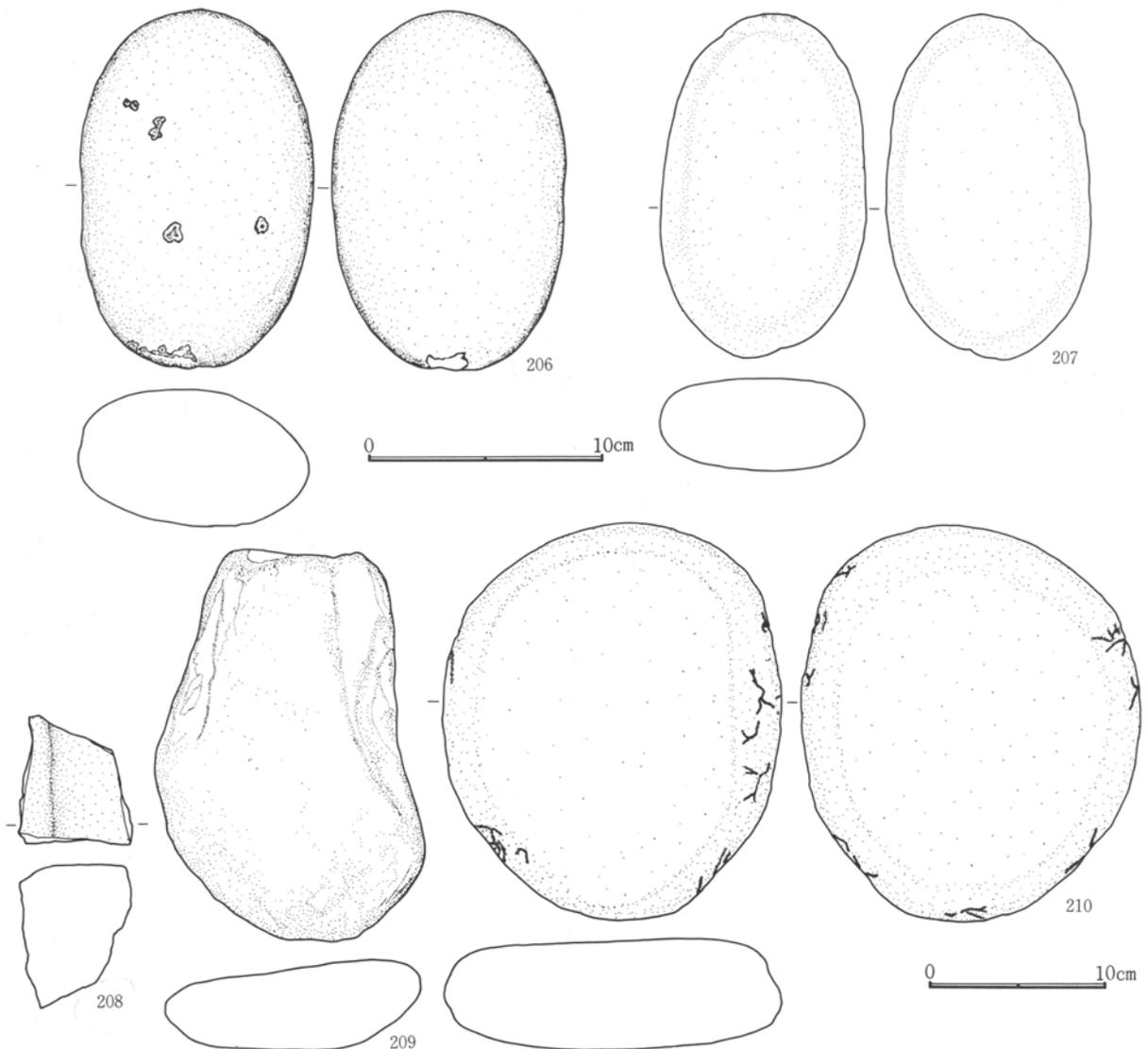


第109図 6号住居址出土石器(5)

第I章 三原田城遺跡

かな稜を持つ。側縁部は先端部近くで曲がり先端部は尖る。脚は開く。127・128・129は作りが粗く、鋭さが無い。130・132は平基鏃であるやや小さく三角形を呈す、余り作りは良くない。131・133・134は基部を欠いている。131は断面、丸みを持ち先端部が曲がる。133は薄く鋭利な仕上がりである。135は石錐である。角錐状を呈し、錐部の長さ1cm程である。

136は尖頭器である。木の葉状を呈し、側縁部は細かな剝離調整がなされている、薄手の作りである。137は石錐である。三角形を呈し、細長く延びる錐部を持つ断面三角形で側縁に細かな調整を加える。138は太い錐部を持つ石錐である、つまみ部は四角形である。139～143は横形石匙である。139は三角形を呈し、一端につまみを持つ、縁部は細かく両面から剝離がなされる。140は不正方形を呈し、端部につまみが斜めに付く、先端部を除いて剝離調整が施されている。141は両端が鋭く尖る。つまみ部を欠失しており一見尖頭器様に見える。142は厚手で作りが荒い、つまみはやや偏って付く、つまみが付く側の調整が細かい。143はつまみが中央につき下辺の刃部は薄手である。144～146は縦形石匙である。144は小形で長方形を呈し短辺につまみを付す、刃部を両側縁に持つがかなり風化している。145は下半を欠いている。つまみは小振りで偏って付くつまみ部側の調整が細かい。146は欠損品。石匙つまみ部付け根部分と思われる。147～150は小形の

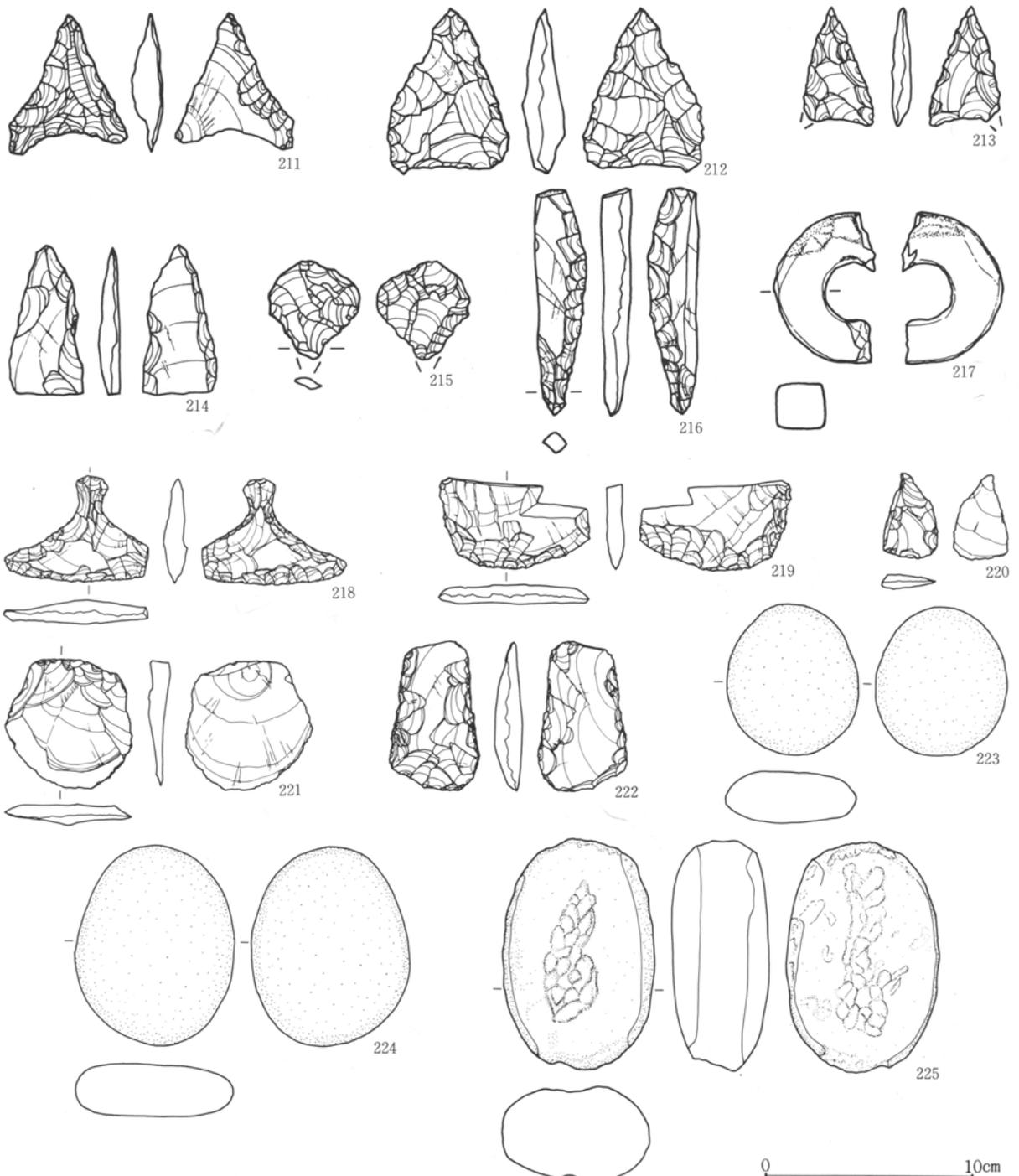


第110図 6号住居址出土石器(6)

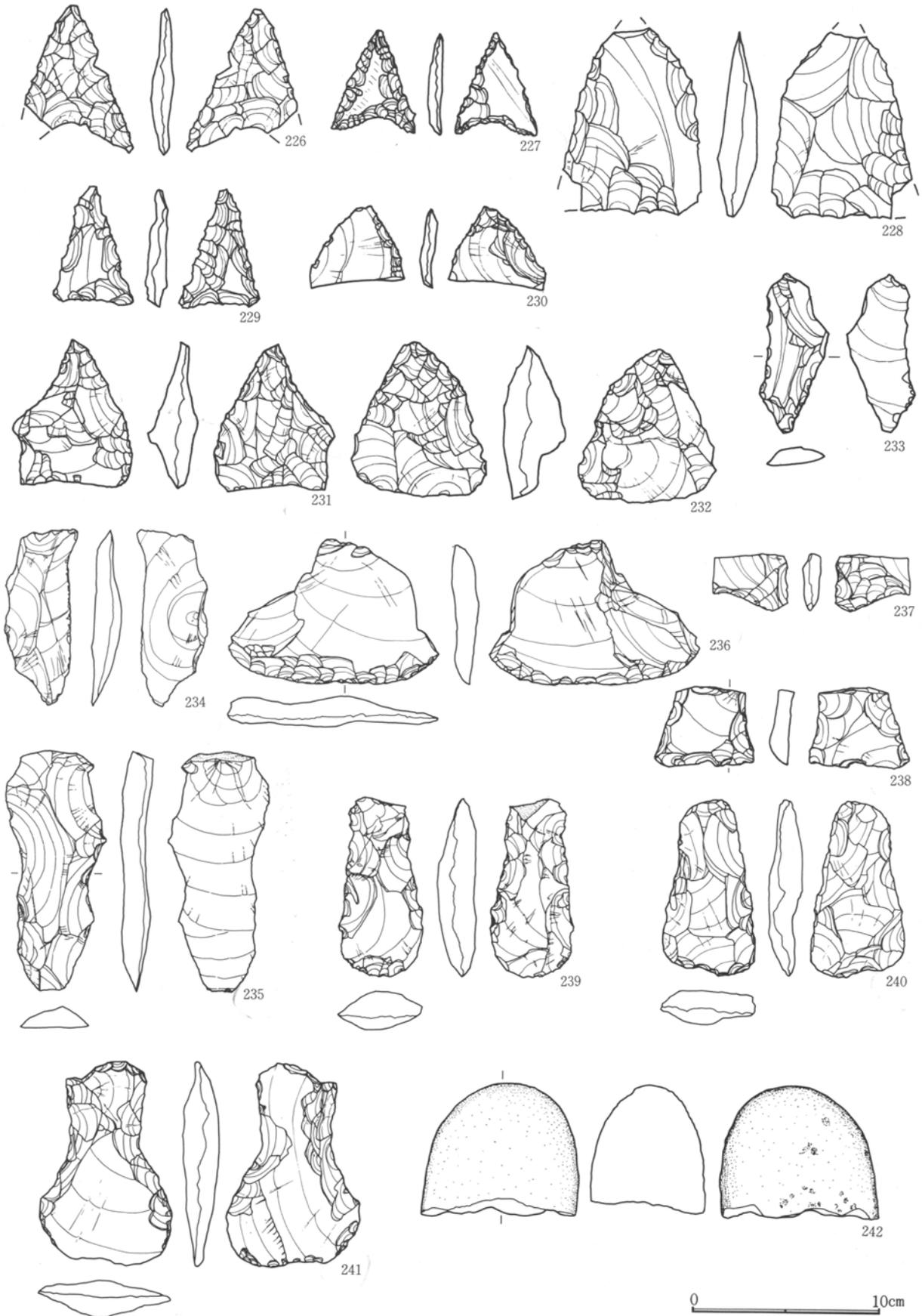
スクレイパーである。縦長の剥片を利用、側縁に刃部を作り出している。150はピエスエスキューであろうか。151～174はスクレイパーである。151は荒割りされた縦長の剥片を利用、上端に打面でもある自然面を残し、刃部は薄くなった両側縁を利用して細かな剥離調整で作り出している。152は縦長で丸みを持った剥片を利用している。薄手で側縁の調整が細かい。153は不定形で厚手で粗雑な作りである。154は円形を呈し、全体に粗い調整が施されているが下辺部分については念入りに作られている。155は側縁、刃部が薄手で調整が丁寧である。156は厚手で作りは粗い。157は不定形で下辺の端部が尖る。158は三角形を呈し各辺に粗く刃を作り出す。159は大形で一端がやや尖る。長辺に刃部を持つ。160は片縁が若干くびれつまみ状を呈す。刃部は側縁部分にのみ簡単に作り出されている。161はL字状を呈し、内縁部に粗く刃部を作る。162は蛤状で刃部は薄く凸刃となる、刃部裏面に自然面を持つ。163は薄く剥いだ剥片の片縁に簡単な刃部を作る。164は上端に平坦な自然面を持ち刃は丸くなる。165は三角形を呈し一辺に自然面を持つ。長辺部の中央に刃部調整がなされる。166はやや大形で三角形を呈す。長辺部分に刃部を作る、他の2辺は厚く平坦で一部自然面が見られる。167は不定三角形で一端が尖る、刃は長辺部分に粗雑に作られている。168は扇状を呈す、弧状の刃部を持つ。169は細長く端部が尖る。側縁に自然面を持ち刃は薄くなった縁辺にやや雑に作られる。170は三角形を呈し長辺部分に弧上の刃を持つ。171は細長く端部が丸くなる、周辺部はほぼ全周に剥離調整が施されている。石匙のつまみ部欠損品の可能性もある。172・173は厚手で刃部の作りは雑である。174は三角形を呈し短辺に自然面を残す、長辺部分に直刃となる刃を持つ。剥離調整は丁寧である。175～191は打製石斧である。175～185は撓形打製石斧である。175・176は直刃で側縁は直線的に刃部へ向かって開く。176は基部がやや細身で刃部で広がる。177は厚手で作りは粗い。178はやや寸詰まりで上端に自然面を残す。刃部は粗く作られる。刃部は欠損。179は刃部が大きく広がる。チャート製。180は基部下端に自然面を残す。刃部を欠く。181は両端が薄くなり、側縁に調整が見られる。182は刃部がやや広がる基部端部に自然面を持つ。183は細身で短冊形に近い、長めで側縁がほぼ平行する。刃部は凸状となる。184は刃部広がり凸刃となる。刃部の作りは粗い。185は不定形で、側縁に打面を持ち作りは粗い。186は分銅形打製石斧であるが挟りは弱い。厚手で雑な作りである、片面の一部に自然面を持つ。187は刃部欠損品である。188は大形の粗製打製石斧である。縦長の一次剥片を利用、刃部および側縁に若干の調整を加えている。189は打製石斧としたが、石材にやや軟質の変岩を用いており異質である。偏平で幅広の破片を用い縁辺、刃部に若干の調整を加えているが、かなり摩滅している。190は裏面に自然面を持つ、刃部は片刃に近く摩滅している。191は半円状を呈し薄手で反りを持つ。刃部片か。192は偏平な円礫を素材とした磨石である。193は棒状の変岩片である。194は円礫で火熱を受けており脆弱である。195～199は磨石である。いずれも長円形の川原石を用いている。表面は使用によって平滑である、195は側縁に磨痕、196・197・198・199は側縁、端部に打痕が見られる。200・201は凹石である。200は凹石の半截されたものである、両面に凹穴を持ち端部両側にも凹みを持つ。欠損面は打面としても利用されている。201は不定形である。表に2、裏面に3ヵ所の凹穴を持つ。202は磨石、やや長円形。203は棒状を呈し表面、端部に打痕が見られる。204は偏平で表面は平滑である。205～207は長円形で205の端部に打痕が見られるだけで、他には余り顕著な使用痕は見られない。208は石皿の破損品。209は平らな川原石を利用した台石である。210は石皿である。表面は平らで使用により平滑となっている。

7号住居址出土石器 (第111図 211~225)

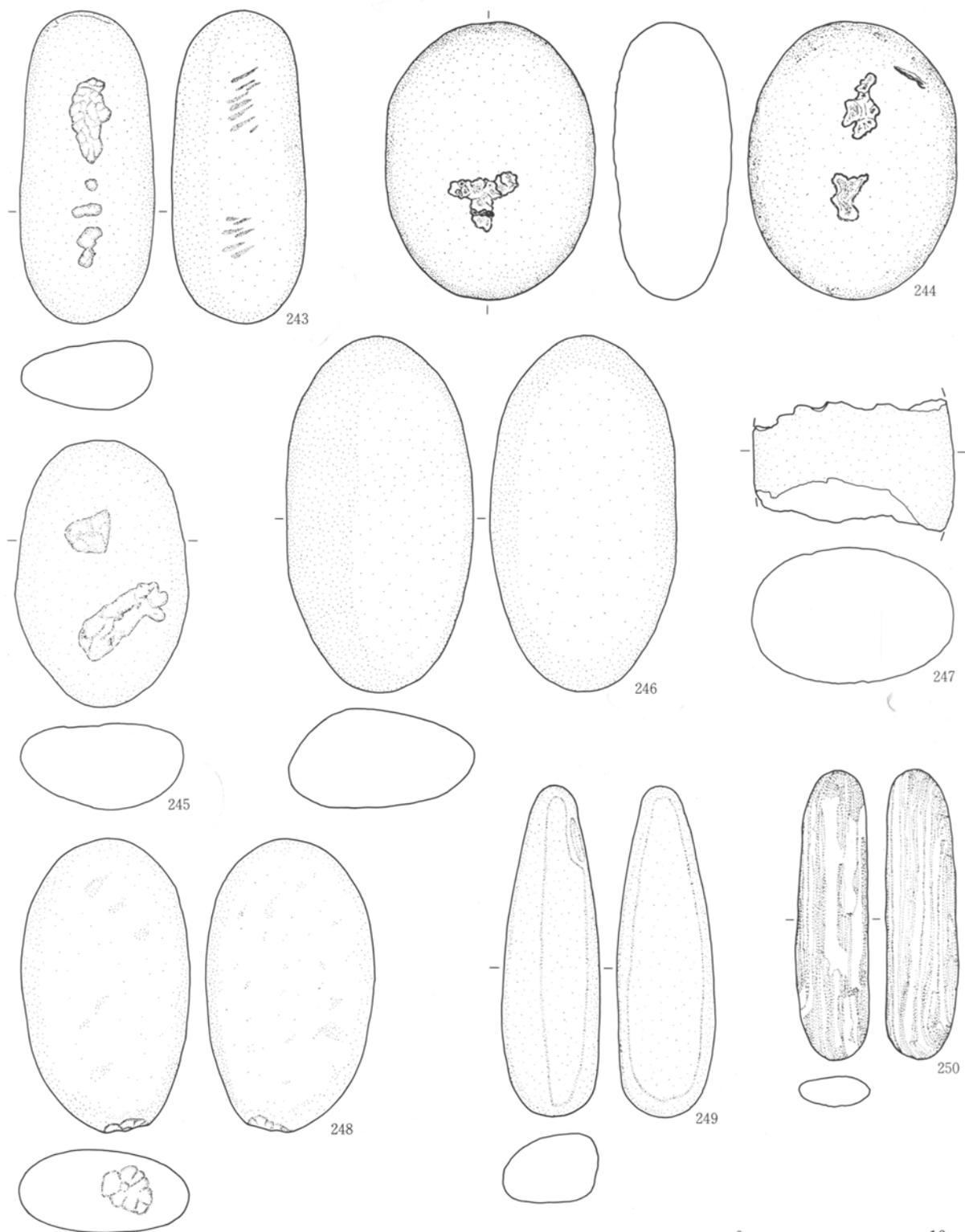
211~214は石鏃である。211はほぼ正三角形を呈す凹基鏃である。表面に稜を持ち、中央が高まる。裏面は平坦な剥離面をそのまま残す。212は平基鏃である。やや厚みを持つが側縁は薄く仕上げられている。213は小形で細身の二等辺三角形を呈す。やや凹基で片脚を欠く。214は細長い鏃の先端部分であろう。偏平で側縁の刃は鋭利さが無い。215は石錐のつまみ部である。円形を呈し一端に欠損した錐の部分が残る。216は棒状の石錐である。錐部の片縁に細かな剥離調整がなされ、先端部は細くなる。217は円形の玦状耳飾りである。乳白色の滑石製で半分を欠失している。断面方形で表面は平滑に磨かれている。石材中に不純鉱物を



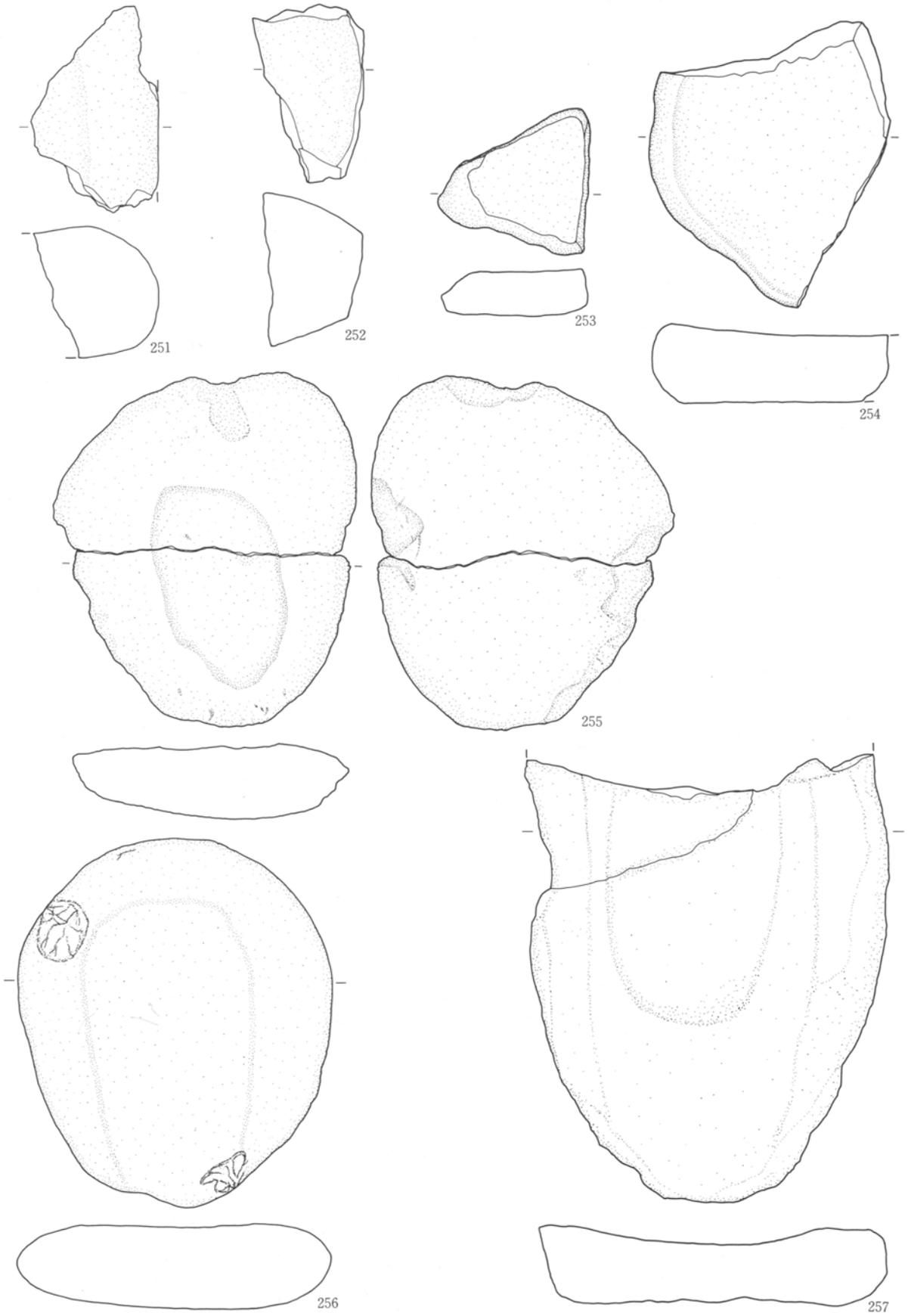
第111図 7号住居址出土石器



第112図 8号住居址出土石器(1)

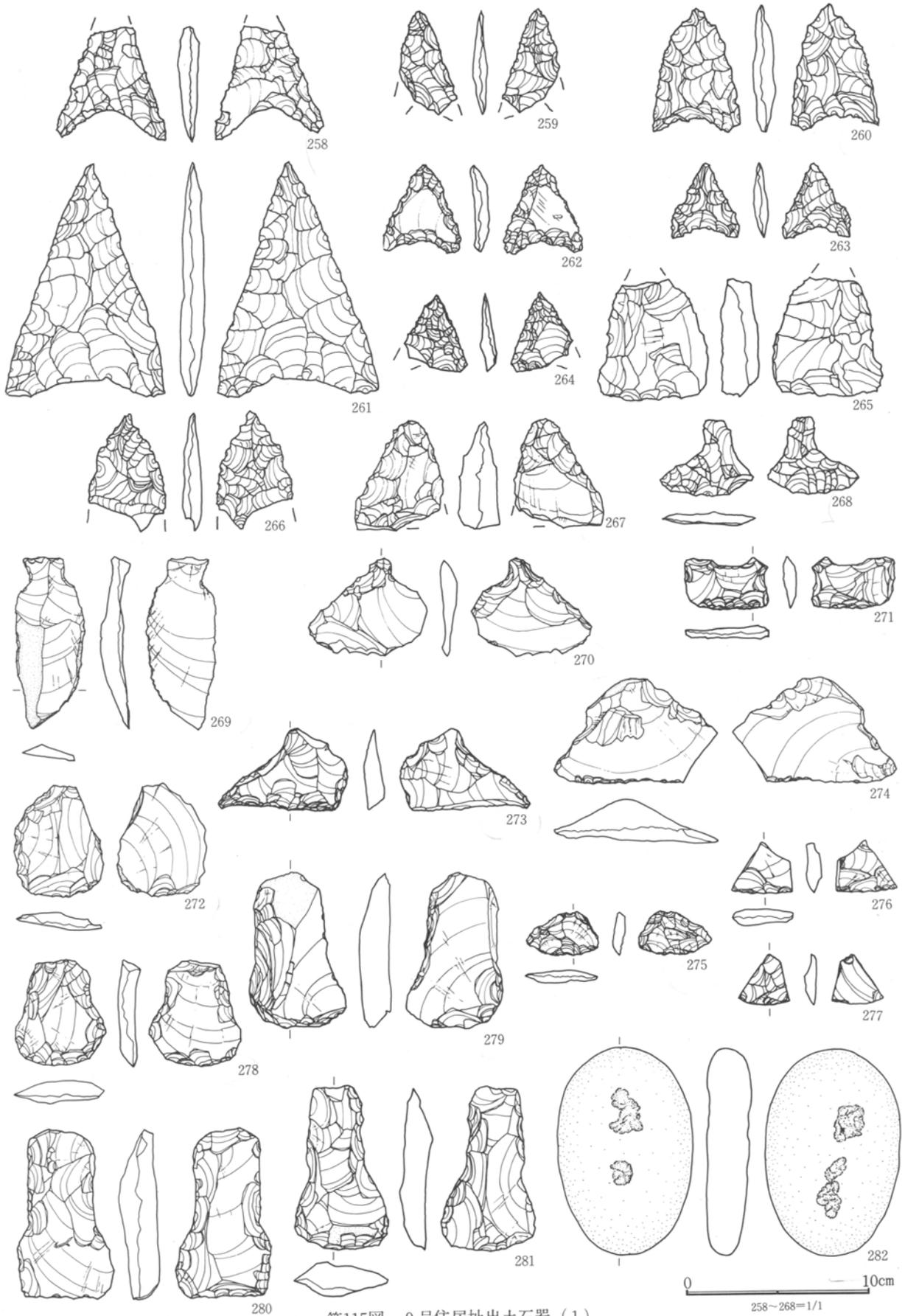


第113図 8号住居址出土石器(2)



第114図 8号住居址出土石器(3)

0 10cm



第115図 9号住居址出土石器(1)

を含む。218は横形石匙である。両端が尖りつまみ部はほぼ中央に付き端部が膨らむ。縁辺の調整は手際良く行われており、端正な作りである。219は半月状のスクレイパーである。刃部は凸刃となり、剥離は両面から行われている。220は扇状を呈す小形の石匙である。上端に小さなつまみが付く、半分を欠損している可能性もあるが、風化が著しい。221は丸みを持つスクレイパーである。上部に平坦な自然面を残す。薄刃で簡単な調整が加えられている。222は撓形打製石斧である。やや小形で刃部は薄くなり、内側へ緩く曲がる。223～225は磨石である。表面はかなり摩滅している。225は両面に浅い凹穴が見られる。

8号住居址出土石器 (第112～114図 226～257)

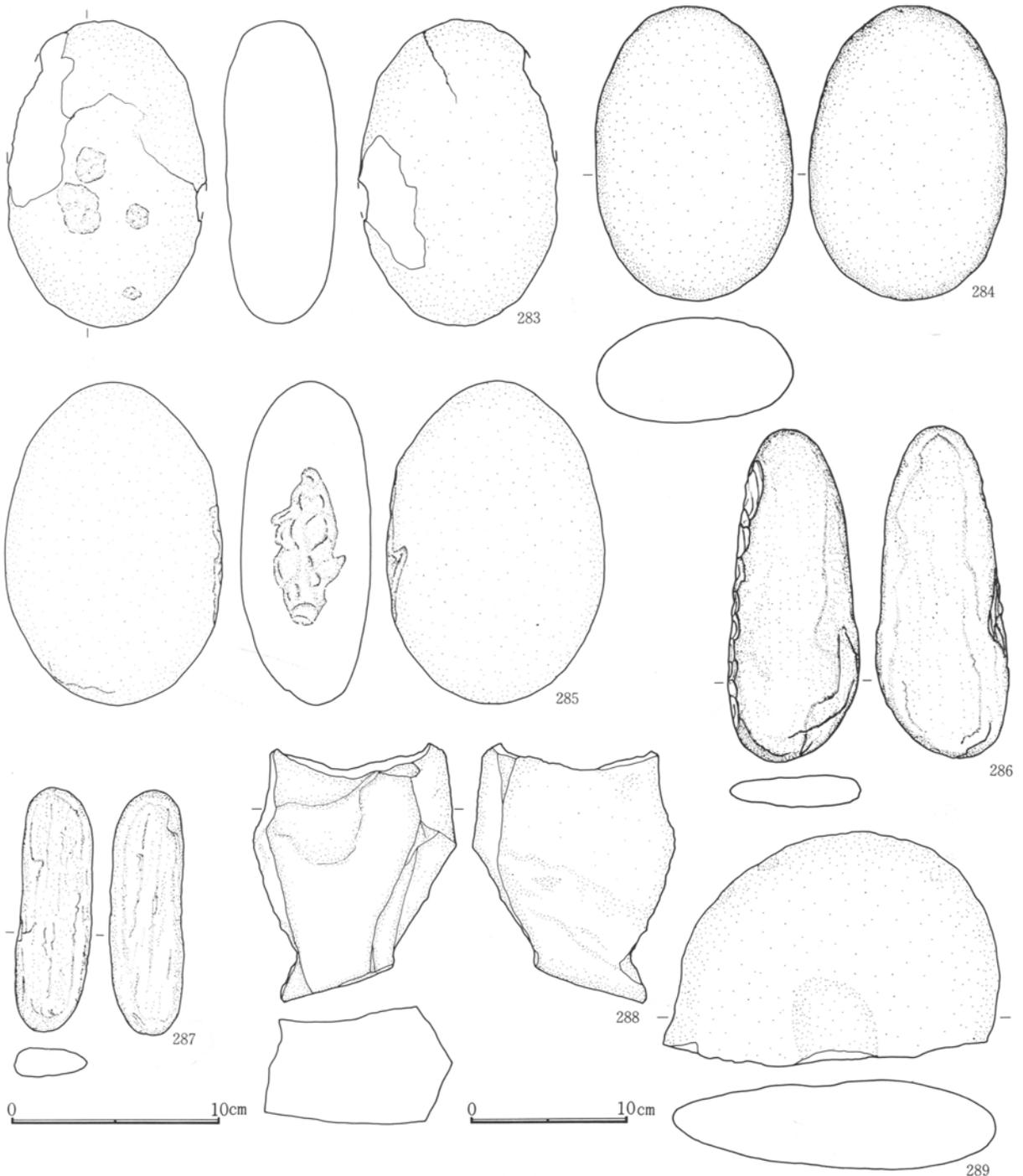
226・227は凹基鏃である。226は二等辺三角形で挟り込みは鋭く、脚端部も尖る。両側縁は直線的で端正な作りである。227はやや小形で先端部、脚端部が尖る。228は平基鏃である。中央が厚く縁辺が薄くなる。先端を欠く。229は平基鏃である。三角形を呈し片面に主剥離面を残す。230は先端部片である、薄手の剥片の縁辺部のみを調整したもので、簡単な作りである。231は三角形を呈す平基鏃であるが、側縁部に瘤状の高まりを持っており、未製品と思われる。232は石鏃としたが、片面が高く盛り上がり、実用的ではない。233は不定形であるが縦長のつまみを持つ石錐である。錐部は細く尖る。234・235は縦形のスクレイパーである。共に側縁に打面を持ち、対辺に刃部を持つ。236は大形の横形スクレイパーである。長辺部にやや弧状の刃部を作り出す。237・238は小形のスクレイパーである。237は一端がつまみ状になる。238は両面が平坦で側縁に粗い調整がなされている。打製石斧の刃部片の可能性もある。239～241は撓形打製石斧である。239はやや反りを持ち刃部は丸くなる。基部上端に自然面を持つ。240も上端に一部自然面を残す、両縁は直に刃部に向かって開き、やや凸状の刃を持つ。241は刃部が大きく開き、基部に比べ肉薄となる。両縁は挟れる。242は磨石の破損品である。半分を欠く、表面は使用により摩滅が顕著である。243は細長い川原石を利用した磨石である。表面に打痕が見られる。244～246は長円形の石を利用した磨石である。いずれも表面に打痕、磨痕が観察される。247は磨石であるが両端を欠く。表面は摩滅している。248は長円形で端部に打痕が見られる。249は乳棒状の礫器である。両端に若干の打痕が認められる。250は偏平で棒状を呈す。片岩製である。特に物理的な使用の痕は見られない。251・252は石皿の破片である。253は三角形を呈す小形の台石であろう。254～257は石皿である。254は平坦な使用面を呈す。255はほぼ中央で割れている。中央の使用面は若干の凹みを持つ。256はやや長円形の石を利用、使用面は凹をほとんど持たないが、かなり平滑である。257は大形で偏平な石を利用している。使用面は中央に向かって緩く凹む。端部を欠損する。254・255・257は炉址に用いられていた。

9号住居址出土石器 (第115・116図 258～289)

258～264は凹基鏃である。258は挟りが深く側縁は直線的である。先端部を欠く。259は先端部片、比較的しっかりとした作りである。260は側縁がやや丸みを持つ。石材は珪質頁岩で石鏃に用いられているのは本点のみである。261は二等辺三角形を呈す大形の石鏃である。両側縁は直線的で先端は尖る。大きさの割に薄く仕上げられており、作り、形ともに端正である。262・263・264は小形の鏃である。264は先端部片の可能性もある。265は雑であるが石鏃であろう先端部を欠く。266・267は基部を欠いている。267は厚手で片面は平坦である。268は非常に小形であるが石匙である。一部を欠損しているようであるが作りは丁寧。269は縦形石匙である。先端が細く尖り、表面中央に稜を持ち自然面が残る。両側縁に裏面からの押圧剥離による刃部を作り出している。270は横型石匙である。中央からやはずれて短いつまみが付く。271は小形で長方形を呈す石匙である。一角に斜めにつまみが付き下辺に刃部が作り出される。272～277はスクレイパーである。272は薄手の剥片の側縁に凸刃を作り出している。上端部には打面自然面を持つ、刃の作りは粗い。273は端

第I章 三原田城遺跡

部が尖る、石錐の可能性もある。274は上端部が厚く自然面が残る、刃は下辺に作られ直線的である。275は小形の製品で周辺に調整がなされる。つまみ部を欠く石匙の可能性もある。276・277は一辺に刃部を持つ。276は両面からの剥離で作られ出される。277は片刃である。278～281は撓形打製石斧である。278は刃部が丸みを持つ片刃状となる。基部を欠く。279は基部に自然面を残し、刃部の一部を欠く。280は基部側縁が平行で刃部がやや広がる。刃は鈍角で鋭利さが無い。281は刃部は凸刃となり一部に自然面が残る。282～285は磨石である。282は偏平で表面に浅い凹穴が見られる。283は火熱を受けており表面が剥落している。285は表面に磨痕、側面に打痕が見られる。286・287は棒状の礫器である。288は角礫を利用した石皿または台石

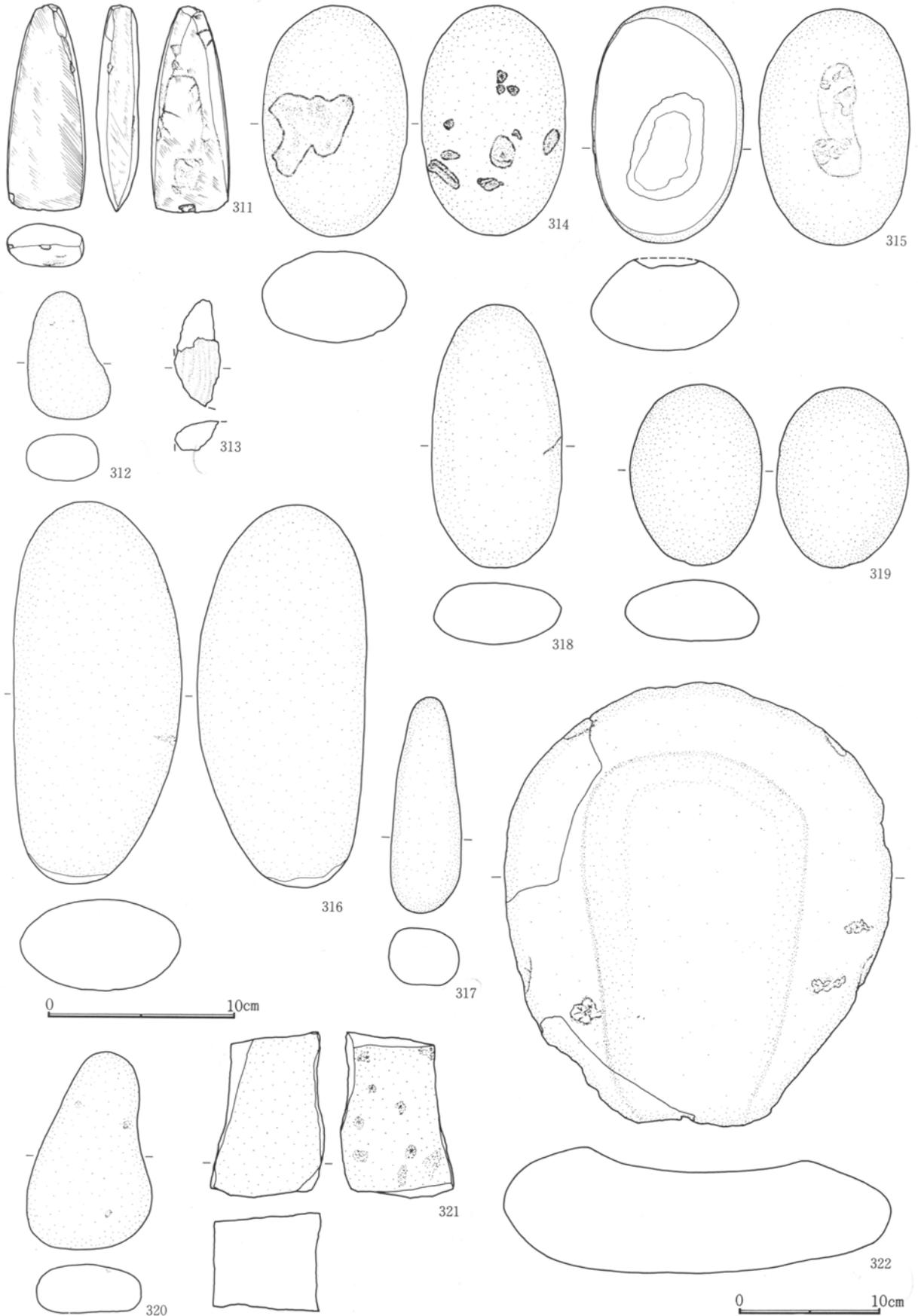


第116図 9号住居址出土石器(2)



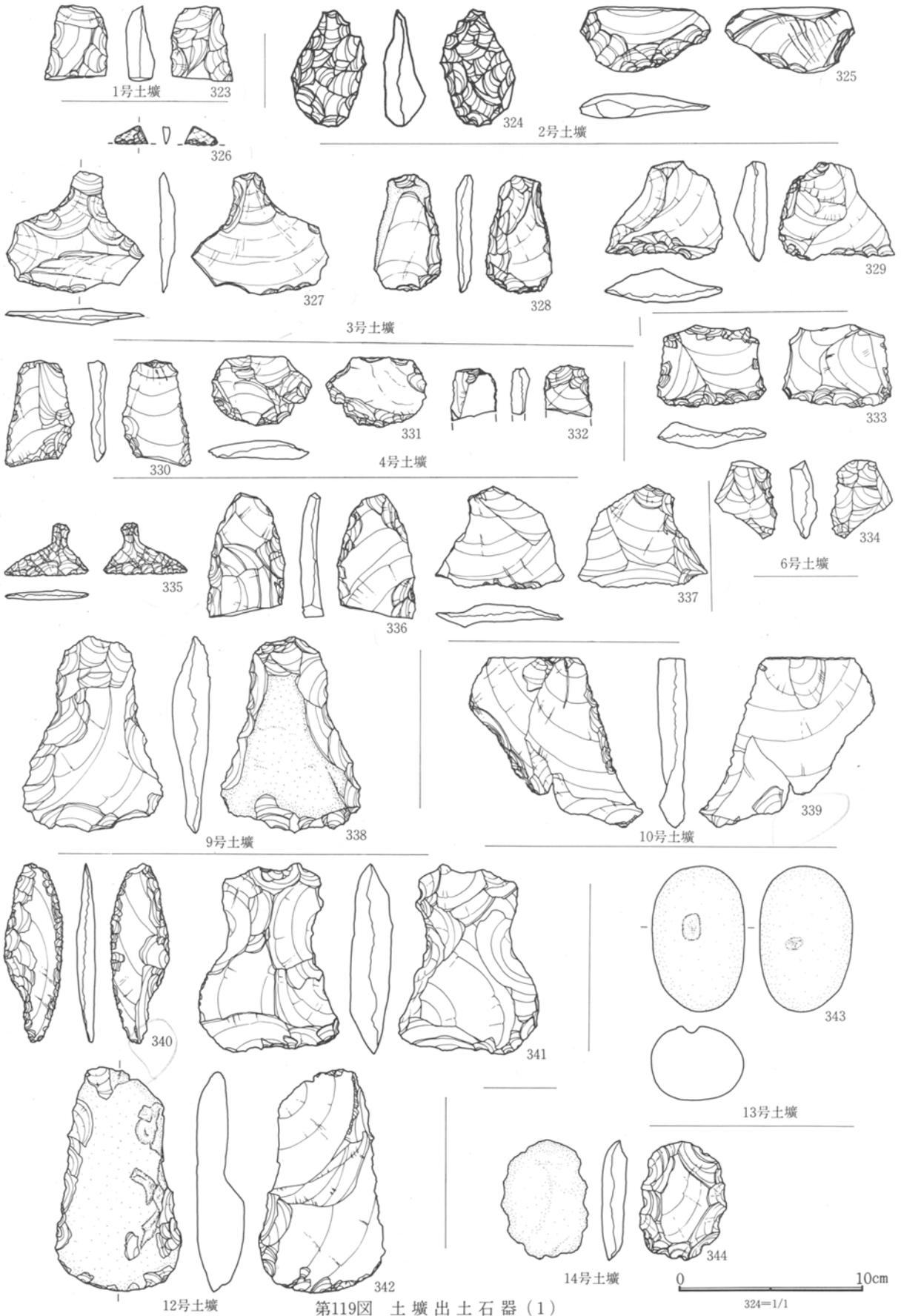
第117図 10号住居址出土石器(1)

第I章 三原田城遺跡



第118図 10号住居址出土石器(2)

第4節 遺構と遺物



第119図 土壙出土石器(1)

第I章 三原田城遺跡

と思われる。289は石皿である。約半分を欠いており、表面に若干の使用痕が認められる。

10号住居址出土石器（第117・118図 290～322）

290～293は凹基鏃である。290はやや幅広、291は脚は短く折断面を持つ。292は側縁がやや膨らむ。293は小形で抉りが深く側縁の調整は細かい。294は平基鏃で基部は厚く、裏面は平坦である。鋭利さは無い。295は不定形を呈すが両縁に剝離調整痕が見られることから、石鏃の未製品と思われる。296は棒状の石匙である。錐部に向かって細くなる。先端部の摩滅が著しい。297は径4cm程の環状製品である。ドーナツ状を呈し中央の穴は両側から穿孔されている。表面は擦って成形している。軟らかいが石材は不明である。298は横形石匙である。両端部が尖ると思われるが、1端を欠損している。つまみ部は三角形の頂点部分に付く。刃部の作り出しは丁寧である。299は細長い木の葉状を呈す。両端が尖り側縁に突出部を持つ、石匙のつまみ部を欠いたものか。300はなすび状を呈す小形のスクレイパーである。やや肉厚で片面が膨らみを持つ。301は縦形スクレイパーである。両端に折断面を持つ。裏面は平らである、片縁に粗い刃部を作る。302は不定形なスクレイパーである。凹刃を持つ。303は三ヶ月状のスクレイパーである。側縁に凹刃を作り出す。304は大形のスクレイパーである。側縁に自然面を残し、つまみ状に延びた部分を境に凹刃と直刃を持つ。305は下辺に直線的な刃部を持つスクレイパーと思われるが、打製石斧の刃部片とも見られる。306は縦形の石匙状を呈すが、器種的にはスクレイパーに分類される。下端は肥厚しており、断面は三角形となる。刃は片側縁に若干の調整が見られる。307は横形のスクレイパーである。裏面に自然面を持ち、下辺に刃部を作り出す。両面より剝離調整が細かく施される。308は縦長のスクレイパー。側縁に打点を持ち、端部に自然面が見られる。刃部はやや凹刃となり細かな剝離調整が施される。309は長方形に近い形を呈し両端に刃部を持つ。長辺部分については折断面、自然面が見られ、いわゆる楔状を呈す。310は小形の撓形打製石斧である。刃は直刃となり両端が丸みを持つ。311は稜は明瞭ではないが完形の定格式磨製石斧である。基部は細くなり刃部は幾分凸状となる。表面には無数の製作痕が観察される。312・317・320は下端が膨らむ川原石を利用した礫器であるがいずれも顕著な使用痕は認められないが端部に僅かな打痕が観察される。313は片岩製の礫器片である。314・315・316・318・319は磨石である。315は両端に打痕、表面に摩滅痕が見られる。316は細長い川原石を利用、片面がかなり擦られており平滑である。321剝離石皿の破片である。表面は使用されており滑らかである。322は大形の円礫を用いた石皿である。使用面は稜を持ち若干凹む。

土壙出土石器（第119～134図 323～523）

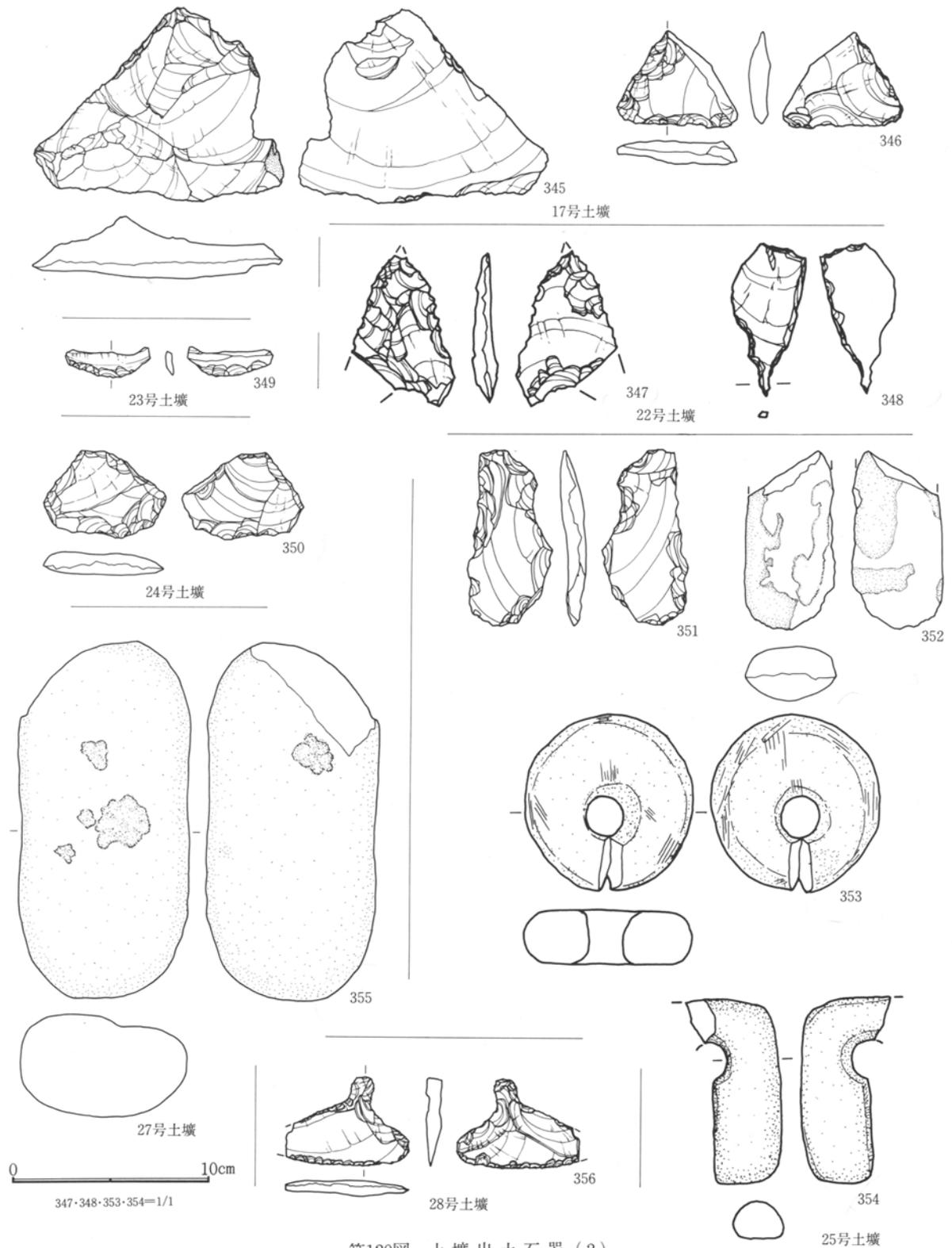
1号土壙 323は打製石斧の基部片である。縁辺は両面より粗い剝離が施される。

2号土壙 324は石鏃と思われるが作りが雑である。基部は極端に肥厚し先が薄くなる。小形スクレイパーの可能性もある。325はスクレイパーである。舟形の剝片を利用している、刃部のつくりは粗い。

3号土壙 326は石鏃または石匙の欠損品と思われる。板状を呈し両面からの剝離が見られる。327は石匙であるが作りが雑である。大形で薄手である。328は小形の撓形打製石斧である。上端、および側縁の一部に自然面を持つ、裏面に平らな剝離面を持ち刃部はやや凸状となる。329は不定形のスクレイパーである。中央部で肥厚し薄くなった縁辺に刃を持つ。

4号土壙 330は縦形のスクレイパーである。上端に打面を持ち、両側縁に刃部を作り出しているが左側縁の方が調整が細かい。331は不定形のスクレイパーである。ほぼ全周に雑な刃部を作る。332は縦形スクレイパーであるが、下部を欠損している。中央に稜を持ち縁辺に丁寧に作られた刃を持つ。

6号土壙 333は台形を呈すスクレイパーである。下辺に直線的な刃部を持つ。334は小形スクレイパー。

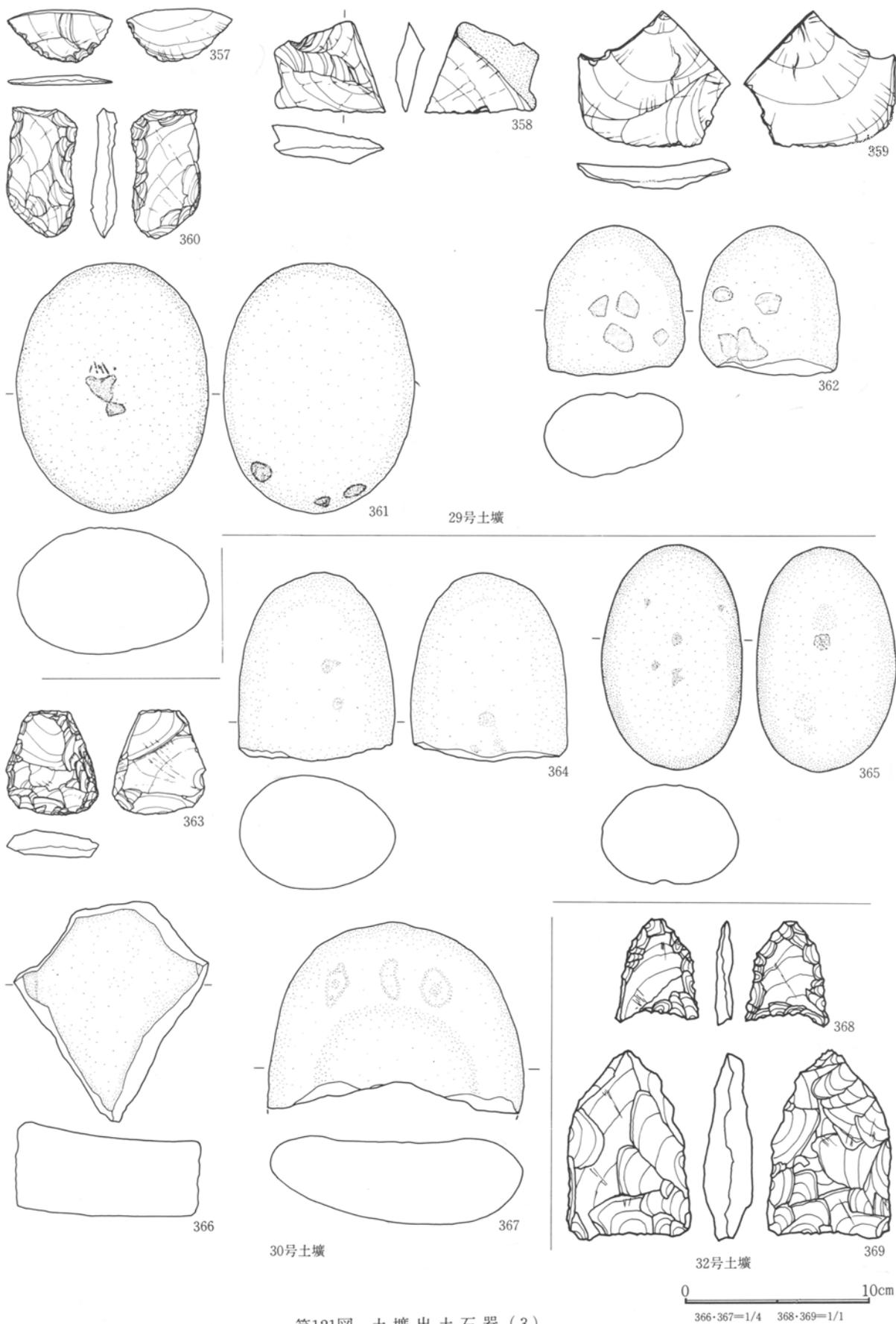


第120図 土壌出土石器(2)

厚手で刃部を除いた縁辺は平坦をなし、一部自然面を持つ。

9号土壌 335は石匙である。身の部分は細身で両端が尖る、下辺の刃部は直線的である。つまみは中央ややずれて付され、短部の膨らみは弱い。336は縦形のスクレイパーと思われるが、両側縁の作りは粗く打

第I章 三原田城遺跡



第121图 土壙出土石器(3)

製石斧の基部片の可能性もある。337は不定形のスクレイパーである。一辺に刃を持ち、対になる辺には自然面を持つ。338は撓形打製石斧である。刃部が広がり一面に大きく自然面を持つ。基部が厚く、刃部に向かって薄くなる。

10号土壙 339は不定形のスクレイパーである。上端が平らで古い打面が残っている。刃部を両側縁に持ち下端は細くなる。

12号土壙 340は石槍である。細長い木の葉状で薄手に作られている。基部が細くなるがやや偏っている。側縁部中央片側が肥厚している。刃部は両面よりの押圧剝離を施す。先端部を欠く。341は撓形打製石斧である。形はやや分銅形に近い、側縁の折り部の作りは粗く、刃部も細かな調整は見られない。342は撓形打製石斧である。片面に自然面を持ち、片面は中位以下で肥厚する。側縁は簡単な調整がなされ、刃部は丸く凸状となる。

13号土壙 343は俵状の凹石である。表面对になるところに回転工具による凹穴が開けられている。また表面は磨痕が見られる。

14号土壙 344は一次剥片を利用したスクレイパーである。一面は自然面で、周囲から片面加工による粗い調整が施されている。

17号土壙 345は大形スクレイパーである。中央が稜を持って盛り上がる。各縁辺に部分的に刃部を作る。346は三角形を呈す。粗い刃を持つ。

22号土壙 347は石鏃である。表面に縦に走る稜を持ち、裏面は平らである。基部は欠損しているために不明であるが凹基鏃と思われる。348は石錐。半円状のつまみ部に断面三角形の細く鋭い錐部が付く。

23号土壙 349は小形の鋭い小刀状を呈し、弧状の刃を持つ。

24号土壙 350は三角形を呈すスクレイパーである。角は丸みを持ち各縁に付く刃部は粗い作りである。

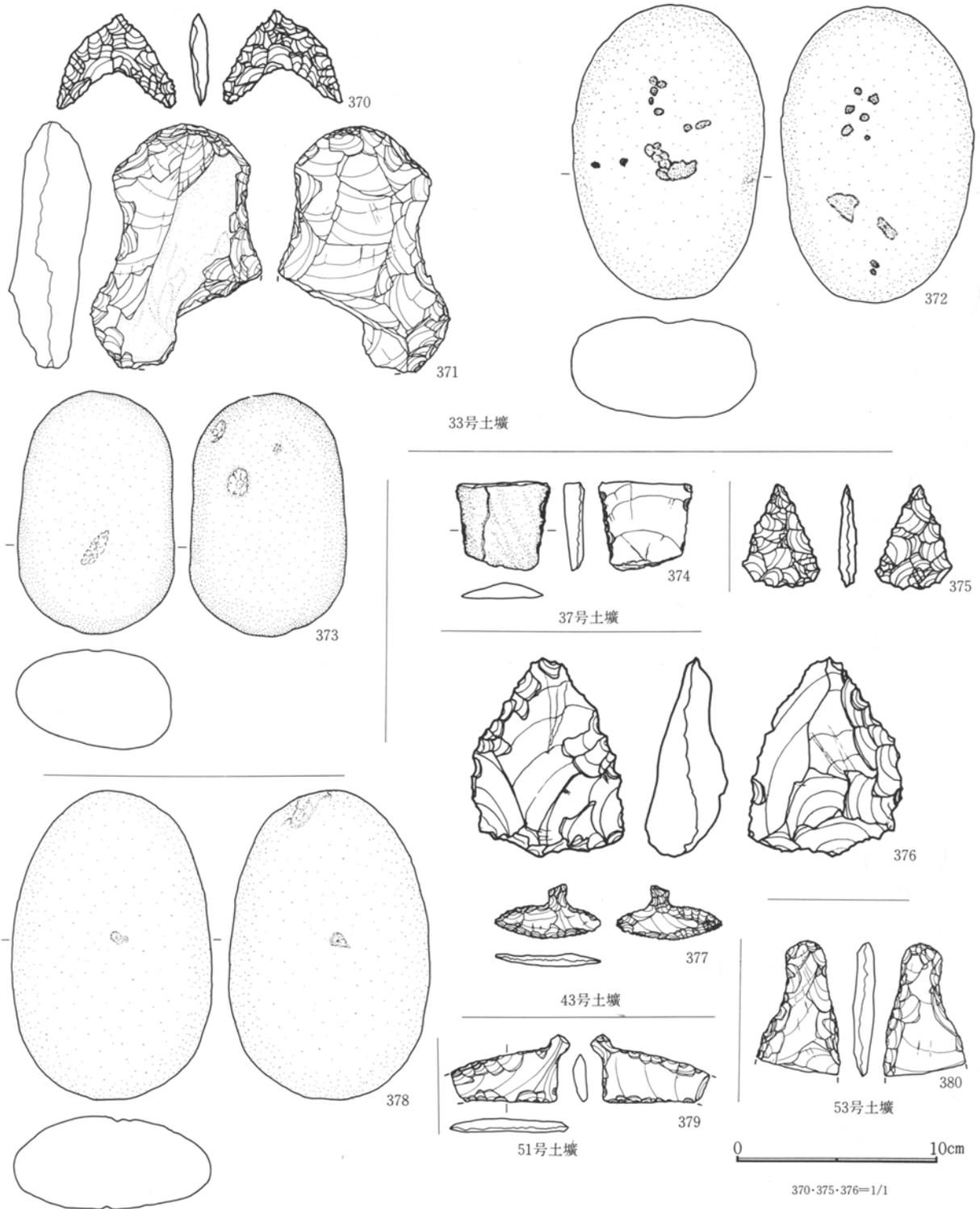
25号土壙 351は打製石斧である。不定形で作りは雑。352は磨製石斧である。基部を欠いている、平行の側縁から刃部は丸くなる。表面に平坦な面も見られるが、風化が進んでおり剥落がひどい。353は円形の玦状耳飾りである。玦部が結合しており、未製品である。鋭利な工具で両面より切断を試みている。蛇文岩製である。354は逆「U」字状の玦状耳飾りである。裏面が平らで断面蒲鉾状を呈す。約半分を欠く、滑石製である。

27号土壙 355は長円形の川原石を利用した磨石である。片面がやや丸みを持ち、両面に若干の凹穴が認められる。顕著な使用痕は見られないが、両端に打痕が認められる。

28号土壙 356は横形石匙である。やや偏ってつまみが付き、身の両端が細くなり一端を欠損している。下辺の刃部は直線的で両面からの丁寧な押圧剝離が施される。

29号土壙 357は半円状を呈すスクレイパーである。弧状になった部分に簡単な刃部が作られている。358・359は不定形スクレイパーである。358は礫面に対して斜めに剥ぎ取った剥片を利用。一辺に直線的な刃部を作る。359は上端に平坦な自然面を持つ。刃は弧状になった縁辺部分に簡単に作り出されている。360はスクレイパーである。側縁に自然面を持ち、粗い刃を作り出している。361は長円形の川原石を利用した磨石である。片面がやや丸く盛り上がっており、使用痕が観察される。362は凹石である。長円形の石を用いており両面に極浅い凹穴が2～3ヵ所見られる。全体の3分の1程を欠く。

30号土壙 363は小形撓形打製石斧である。刃部は広がり凸刃となる。364・365は俵状の磨石である。ともに厚みがあり表面に使用による摩滅が認められる。364は半分を欠く。366は石皿の破片である。使用面は僅かにへこむ。367は石皿の破片である。丸く扁平で使用面はやや凹み周辺に3ヶ所の凹穴がある。

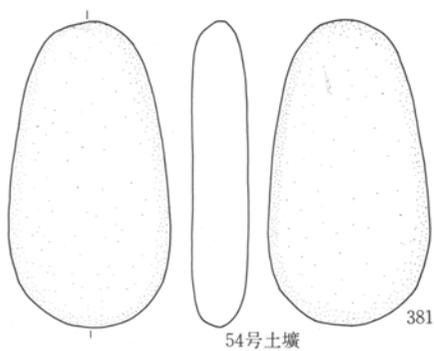


第122図 土壌出土石器(4)

32号土壌 368は石鏃。やや凹基で五角形を呈す、周辺部に細かく剝離調整を施し全体に反りを持つ。369は石鏃である。平基のいわゆる五角形鏃、黒色頁岩製で作りは粗い。

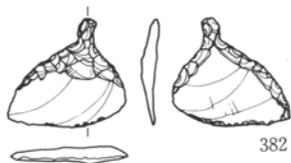
33号土壌 370は横広の凹基鏃である。抉りは大きく脚は丸みをもって開く、側縁も丸みを呈す。剝離調整は丁寧である。371は分銅形の打製石斧である。厚手で片面に大きく自然面を残す。下辺の刃部を大きく

第4節 遺構と遺物

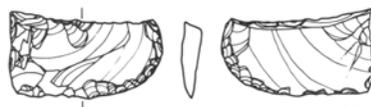


54号土壙

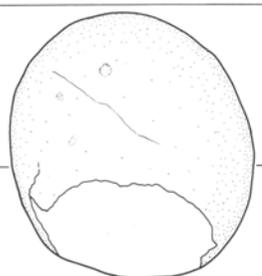
381



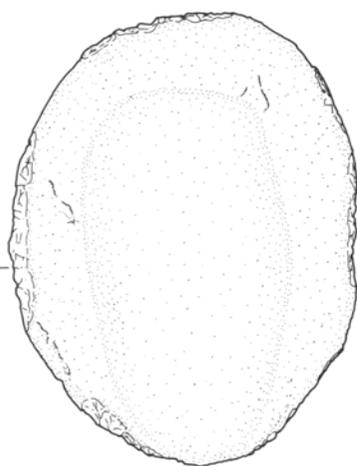
382



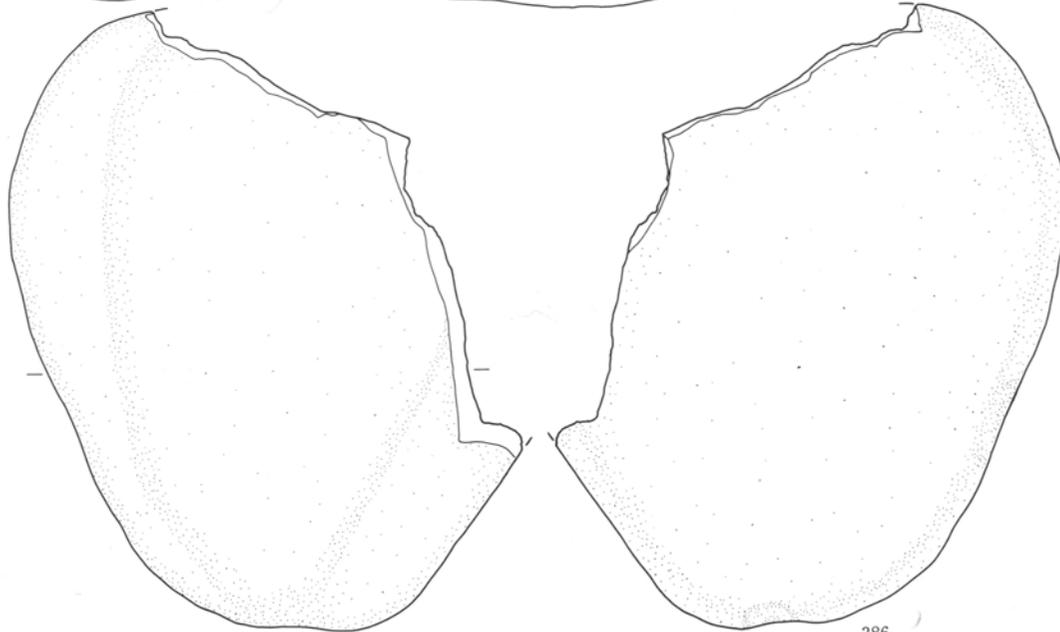
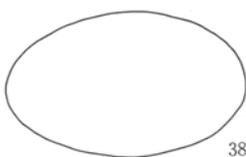
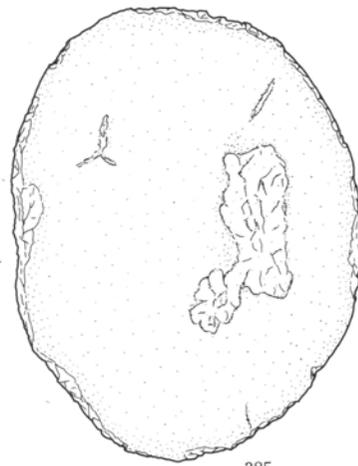
383



384



385



386



55号土壙

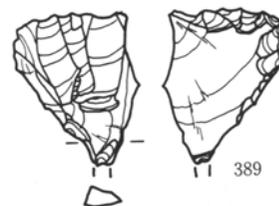


387



388

57号土壙

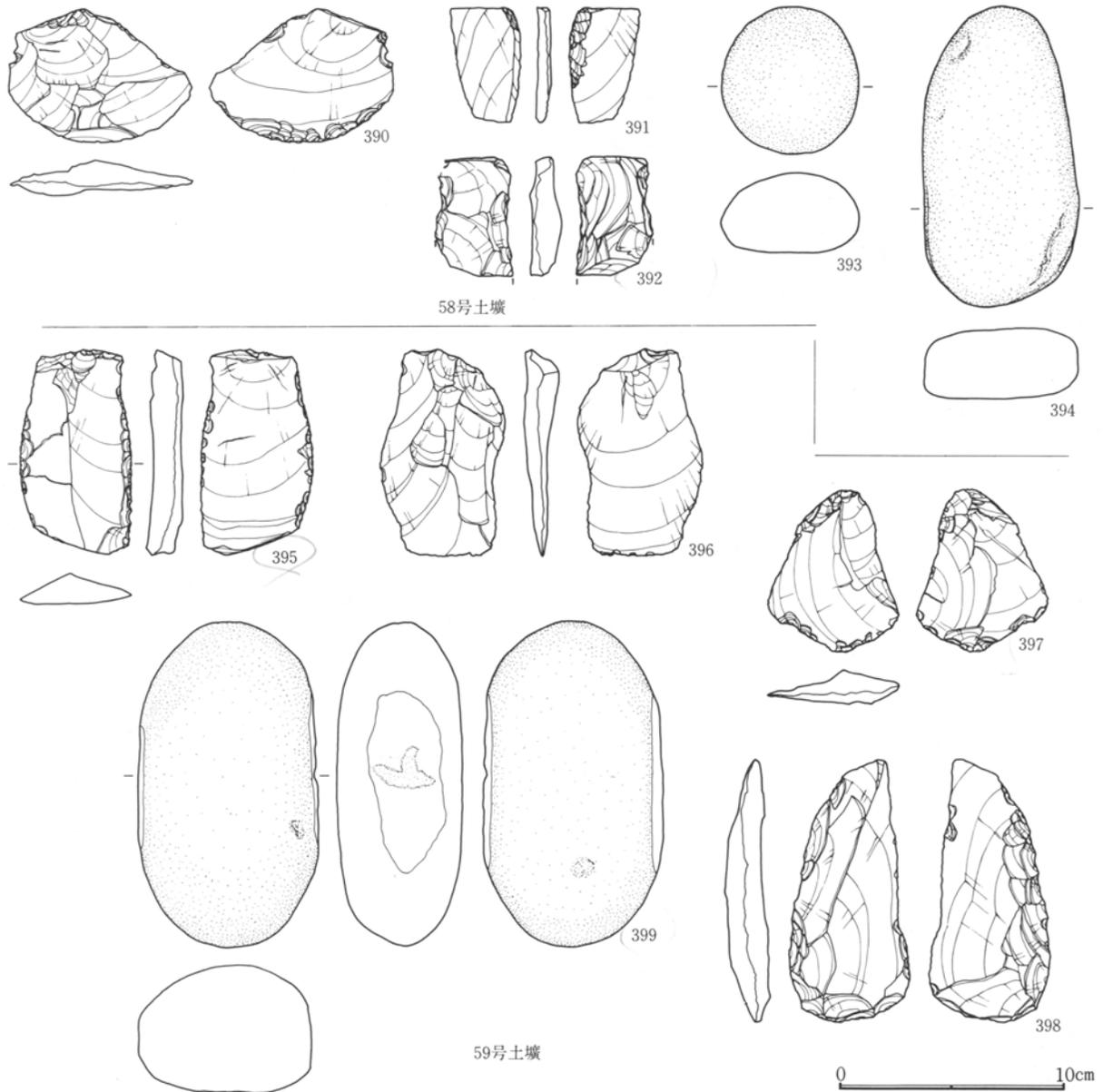


389

0 10cm

385・386=1/4 389=1/1

第123図 土壙出土石器(5)



第124図 土層出土石器(6)

欠いている、側縁の抉りは敲打によって作られる。372・373は小判状の磨石である。磨痕、打痕が観察される。

37号土層 374は片面に自然面を持つスクレイパー。台形を呈し上端は平坦で側縁に刃部を作り出す。

43号土層 375・376は石鏃である。375は小形の平基鏃で、全縁に両面からの押圧剥離を施す。376は厚手で基部に打点を持つ。雑な作りである。377は横形石匙である。小形で両端が尖る、つまみは中央やや右寄りに身に対して垂直に作る。刃部調整は細かい。378は長円形の石を用いた磨石である。余り顕著な使用痕は見られない。

51号土層 379は横形石匙である。不正長方形を呈し先端部を欠いている。つまみ部を端部に持つ、刃部は直線的で両面よりの押圧剥離で作り出す。

53号土層 380は撓形打製石斧の刃部欠損品である。基部は細身で刃部は外へ開く。

54号土壙 381は偏平な川原石を用いた磨石である。

55号土壙 382は石匙である。各辺が丸みを持つ三角形を呈し、その頂点部につまみを持つ。周辺部は細かな剥離調整が認められる。383はスクレイパーである。端部に打面である自然面を残す。刃部は両面から剥離が施され弧状となる。384は円礫を用いた磨石である。一部打撃によるものか剥落が見られる。385は小形の石皿である。やや長円形の石で使用面は稜を持って凹む。386は偏平な石皿である。使用面の凹みは浅く、一部欠損している。

57号土壙 387は横形スクレイパーである。長方形を呈し、下辺に直線的な刃部を作り出す。388は二等辺三角形を呈し1側縁に両面からの剥離による刃部を作る。389は三角形を呈す石錐である。錐部を欠く。

58号土壙 390は凸刃のスクレイパーである。上端に打面である自然面を残し、刃は片面からの押圧剥離による。391は縦形スクレイパーである。薄くなった縁辺に細かな刃を作り出す。392は打製石斧の基部片である。端部に自然面を残す。393は円形の磨石である。394は長円形の磨石。やや偏平である。

59号土壙 395は縦剥ぎの剥片を利用したスクレイパーである。上端に自然面、表面中央に稜を持つ。刃は両側縁に作られ両面から細かな剥離がなされている。396は縦長のスクレイパーである。薄くなった周辺部の下辺を中心に簡単な刃を作る。397は不定形のスクレイパーである。作りは雑。398は打製石斧である。片縁が薄くなっており、丸みを持つ凸刃である。399は磨石である。表面、側縁が使用により平坦となっている。

60号土壙 400は石槍である。401は石錐。細長い剥片の一端を尖らし錐部を作る、先端部摩滅している。402・403・406は打製石斧である。402は刃部を欠いている。403は一側縁に自然面を残す。406は基部に比べて刃部が広がり表面に自然面を持つ。404は縦長剥片を用いたスクレイパーである。反りを持った片縁に簡単な刃部を作る。405は小形スクレイパーである。一端が稜を持って肥厚し、下辺に刃が作られている。407・408は凹石である。407はやや反りを持つ偏平な石の両面に一つづつ穴を持つ。408は厚みのある長円形の川原石の一面に細長い凹穴を持つ、また磨石としても使用されている。

62号土壙 409は偏平な自然礫を用いた磨石である。表面に摩滅痕が観察される。

66号土壙 410はやや小形の縦形スクレイパーである。上端に自然面を残し、刃部は短い。411は上端に平坦な自然面を持つ、僅かに膨らむ側縁に刃部を作り出している。412・413はスクレイパーである。412は厚手で上端に自然面を持つ。刃部の作りは粗い。413は大形で三角形を呈すスクレイパーである。下辺以外は平らな自然面を有し、刃は直刃となる。414は川原石を用いた凹石。両面に3～4ヵ所の不定形な凹穴が見られる。表面、側縁は使用により平坦になっている。

68号土壙 415は小形の縦形石匙である。両側縁に刃部を作り出し、上端中央につまみ部を持つ。

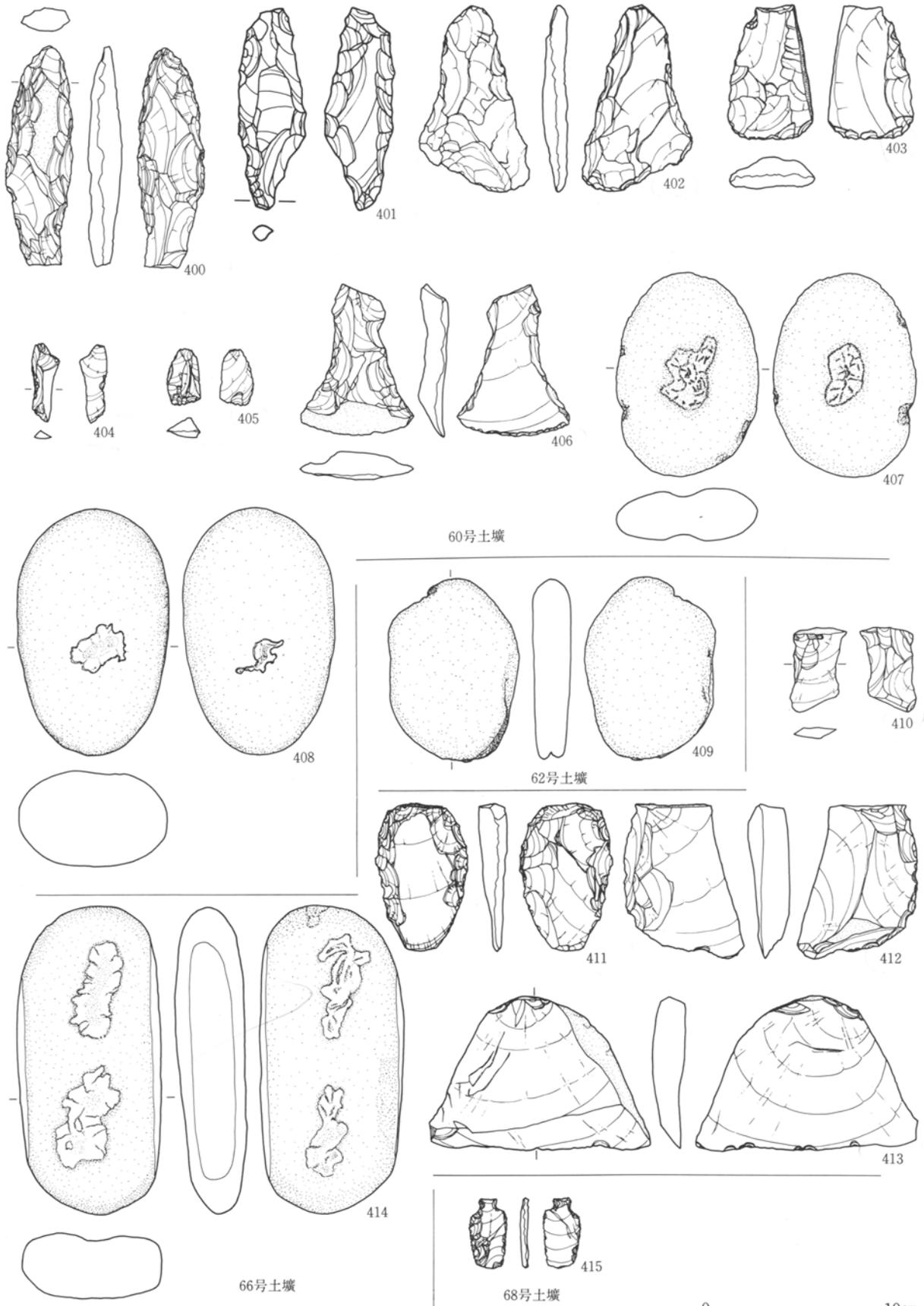
69号土壙 416は半円状の小形スクレイパーである。弧状の縁辺の一部に粗い刃を作る。417は不定形スクレイパーである。刃部の作り出しは粗い。418・419は棒状の川原石を用いた磨石である。418は両端に打痕が認められる。

70号土壙 420は滑石製の管玉である。一端がやや細くなり両面に製作時の磨痕が見られる。

71号土壙 421は扇状を呈す板状のスクレイパーである。刃は凸刃で両面からの押圧剥離によって作り出されている。

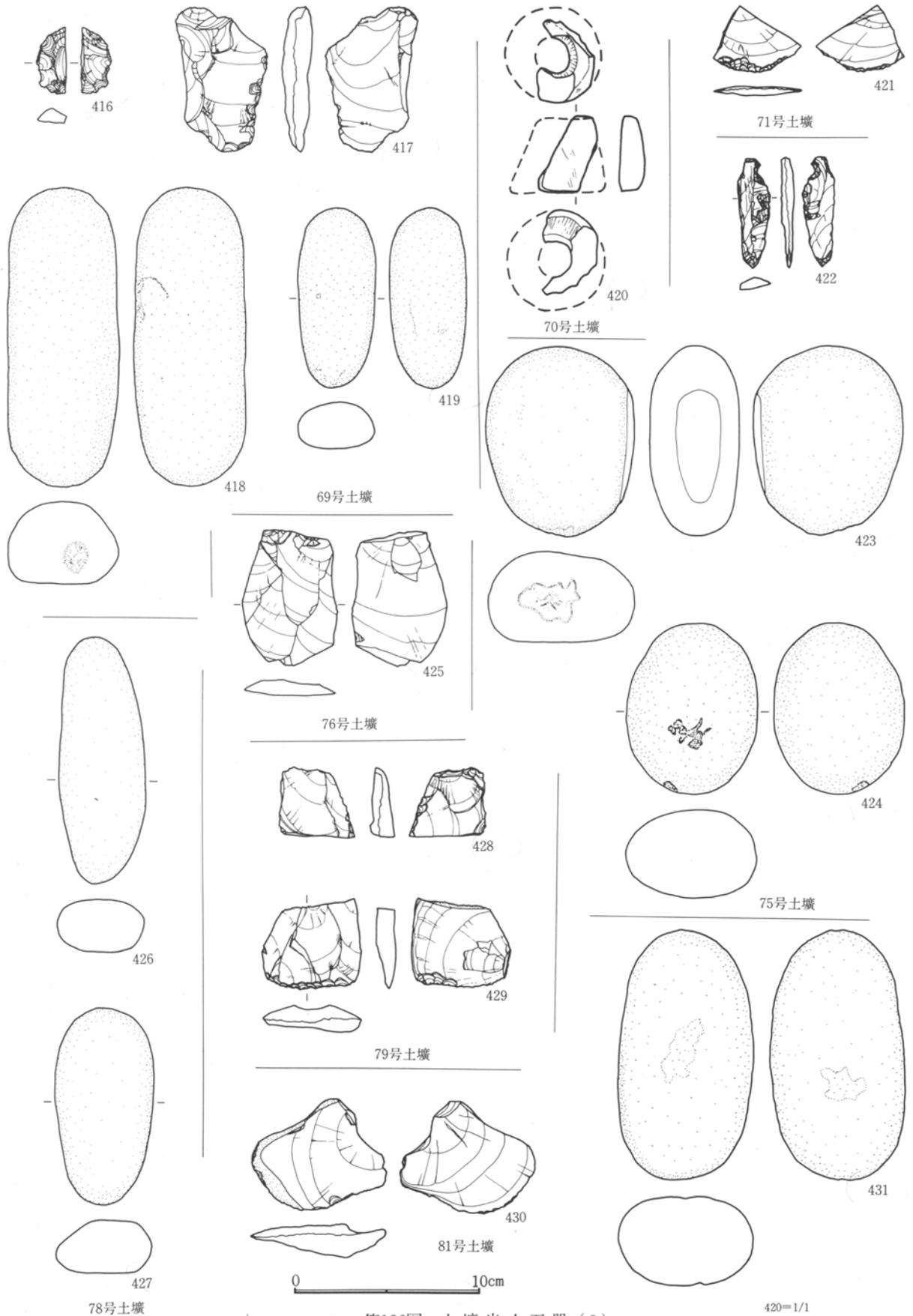
75号土壙 422は黒耀石製の縦形石匙である。板状に剥がれた剥片を利用、つまみ部は片側より挟りが入る。側縁と先端部に調整が見られる。未製品か。423は長円形を呈す磨石である。側面に顕著な磨面、端部に打痕が見られる。424は磨石である。

第I章 三原田城遺跡

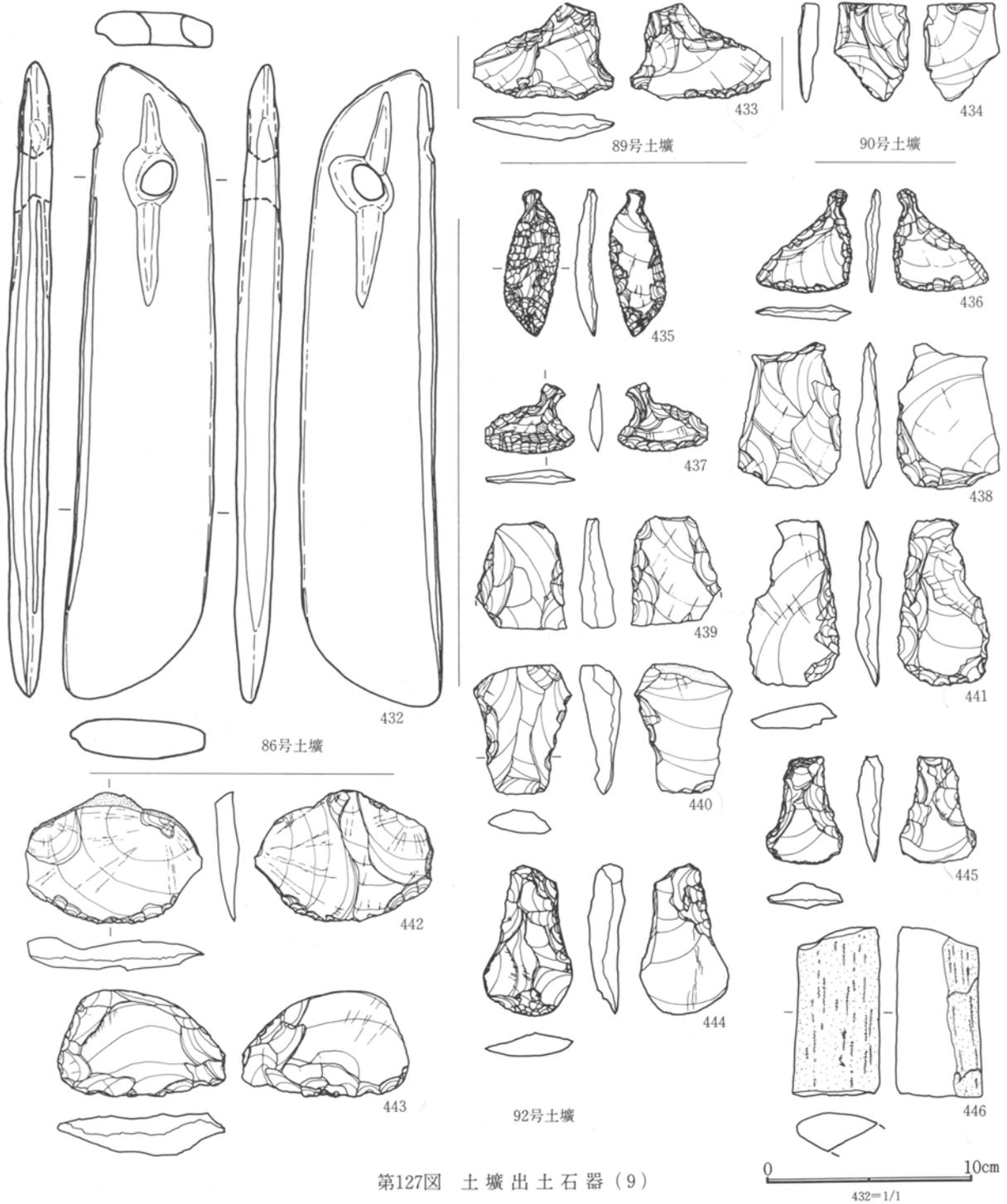


第125図 土壌出土石器(7)

第4節 遺構と遺物

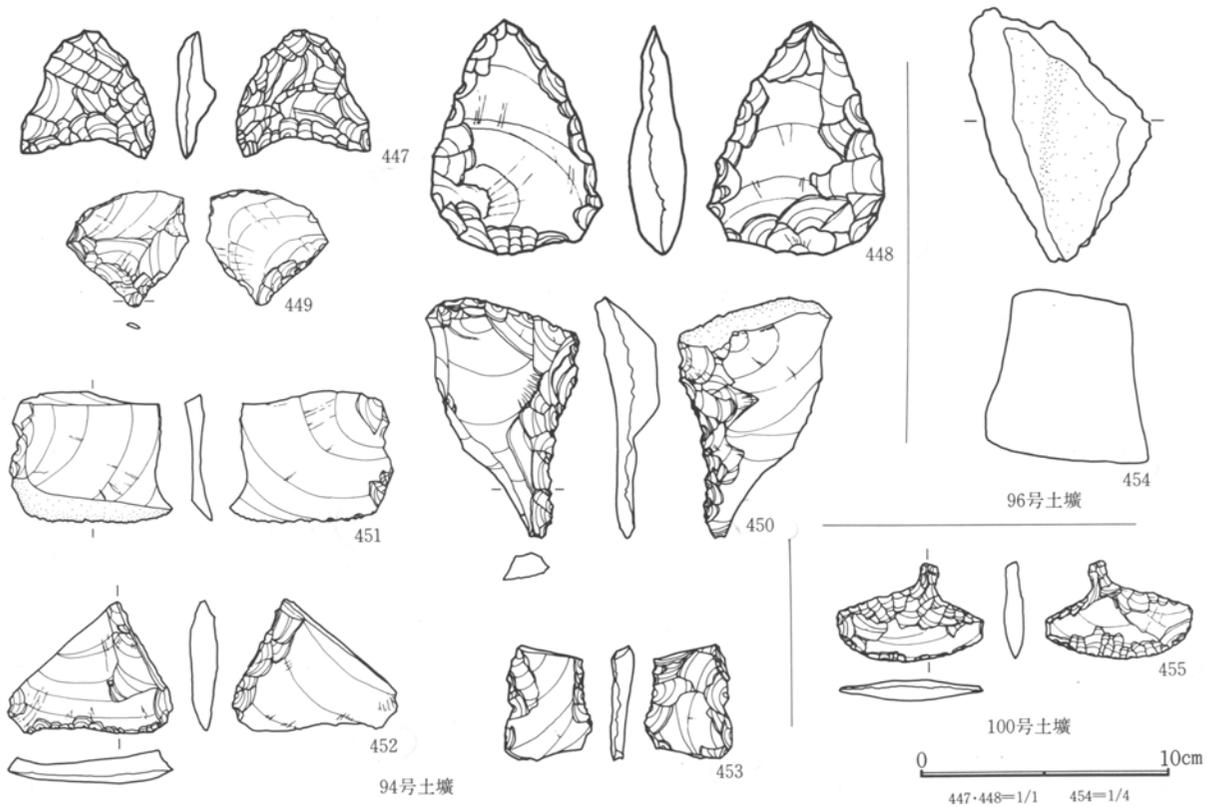


第126図 土壌出土石器(8)



第127図 土壙出土石器(9)

- 76号土壙 425は幅広の縦形スクレイパーである。上端に自然面を持ち両側縁に細かな刃部を作り出す。
- 78号土壙 426・427は棒状の磨石である。表面は平滑。
- 79号土壙 428・429はスクレイパーである。ともに台形を呈し、428は一辺に簡単な刃部を作る。429は上端に平らな自然面を持ち、打点を側縁に残し下辺に直線的に刃部を作る。
- 81号土壙 430は不定形スクレイパーである。側縁約半分自然面を持ち、刃部をその薄くなった部分を作る。431は長円形の川原石を用いた磨石である。両面、両端に打痕が見られる。



第128図 土壌出土石器 (10)

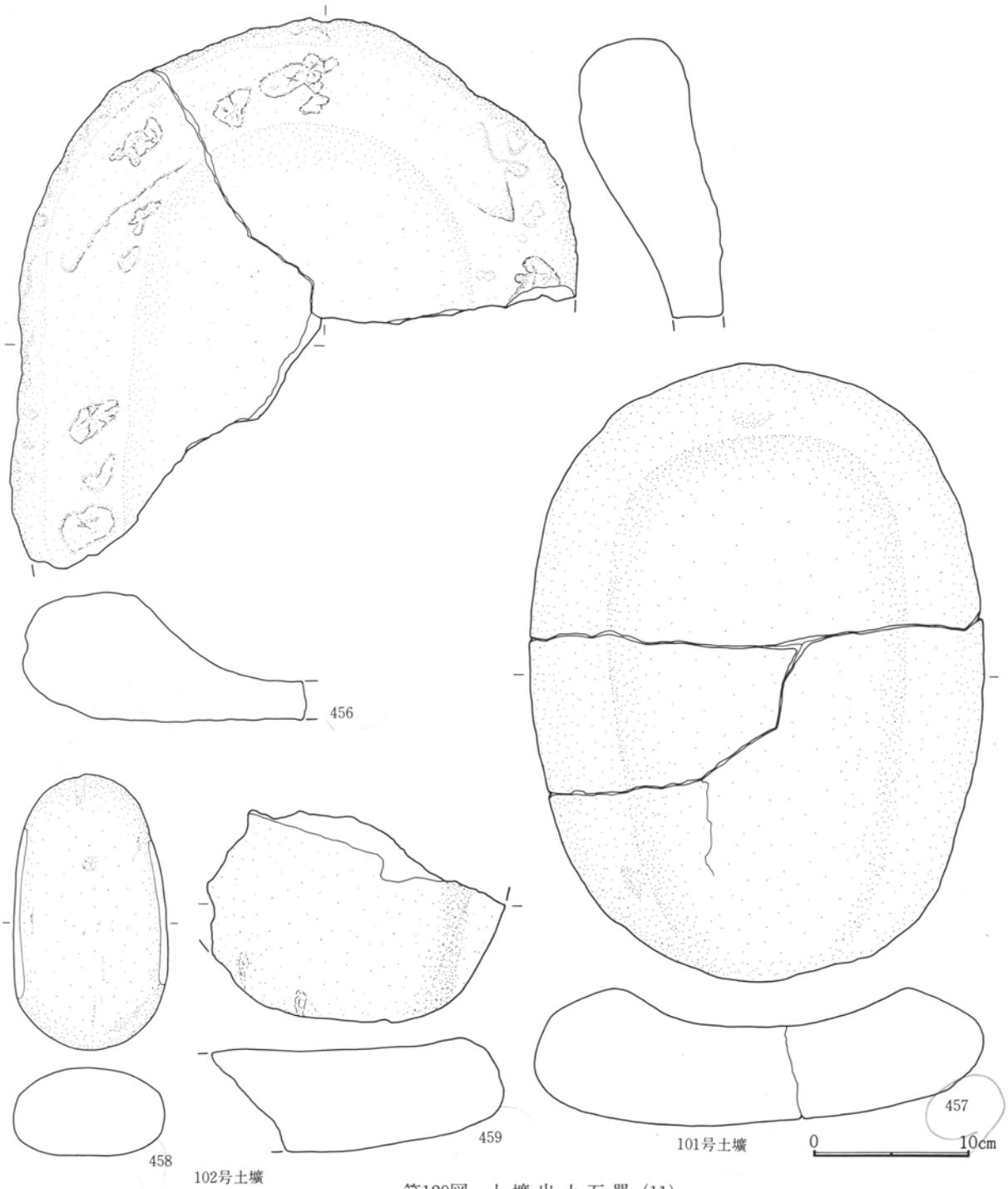
86号土壌 432は蛇文岩製の玉篋である。長さ10cmの篋状を呈し両端がきっさき状となりやや薄くなる。1端に両面から穿孔された径0.5cmの穴がやや斜めに開けられている、またその穴を横切るように溝状のへこみが両面に見られる。側縁は1方が平坦であるが、片方は擦切技法により切断した際にできたと思われる溝が両面に走る。表面は非常に念入りに研磨されている。

89号土壌 433は横形石匙である。両端がやや尖り、つまみ部大きく中央からややずれて付く、端部に自然面が残る。下辺に刃部が作り出される。

90号土壌 434は一端が尖る不定形スクレイパーである。上端に平坦な自然面が残る。一辺に細かく調整剥離された刃部を持つ。

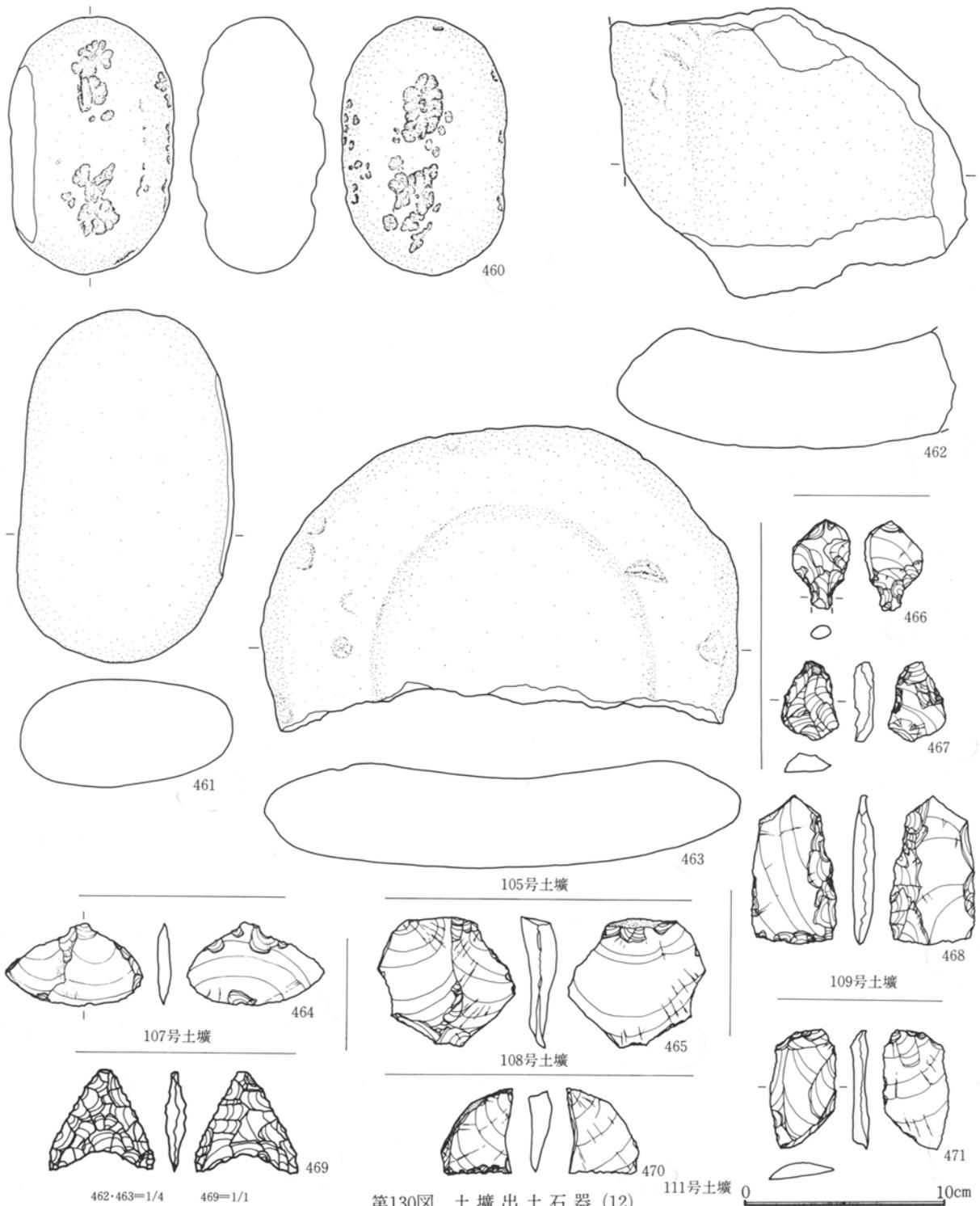
92号土壌 435は縦形石匙である。上端につまみを持ち、片面が丸く肥厚する。先端部尖り全縁に細かく両面より押圧剥離調整された刃部を作る。端正な仕上げである。436は三角形を呈す石匙である。端部の膨らむつまみを持つ。各辺に両面からの押圧剥離調整の施された刃部を持つ。437は小形の横形石匙である。中央やや右よりに抉りを持つつまみが付く。刃部の作りは丁寧である。438はスクレイパーである。薄く剥いだ剝片を利用している。打製石斧の欠損部分の可能性もある。439は打製石斧の基部片であろう。440は上端が肥厚するスクレイパーである。441はスクレイパーである。側縁の一部に自然面を残す横長の剝片を利用している。刃部はやや丸みを持つ。442は楕円形を呈すスクレイパーである。側縁約半分自然面を残す。刃は凸刃で両面より押圧剥離されている。443は半円状の厚手スクレイパーである。刃部は直線的で粗く作られている。444・445は撓形打製石斧である。444は刃部が丸くなり裏面からの剥離が施される。445は小形で刃部が広がり両端が丸くなる。446は片岩製の棒状礫器である。両端が切断され、裏面の一部が欠損する。

94号土壌 447は凹基鏃である。表面の中央部が盛り上がり、脚が開く。側縁はやや丸みを持つ。448は僅



第129図 土壌出土石器 (11)

かに基部が膨らむ凸基鏃である。下辺の両端は丸みを持つ。裏面に主剝離面を残し、側縁は両面より剝離調整されている。449は扇形の石匙である。頂点部につまみ状の突起が見られる。下辺の刃部は凸刃で細かな剝離を施す。450はスクレイパーである。三角形を呈すが一端が細長く尖る。一部に自然面を持ち、1側縁に粗い刃を持つ。451・452はスクレイパーである。451は四角形を呈し片縁に自然面を残し、そこに浅い剝離の刃部を作る。452は三角形を呈し、下辺に直線的な刃部を持つ。453はやや縦長のスクレイパーである。両側縁に簡単な刃を持つ。



第130図 土壌出土石器 (12)

96号土壌 454はかなり厚手の石皿片である。表面に使用面の稜が見られる。

100号土壌 455は石匙である。木の葉状を呈し、つまみはやや小振りである。縁辺は両面からの押圧剝離が施される。

101号土壌 456・457は大形の石皿である。456は約半分を欠失している。摺面はくぼみかなり使い込んだ状況を示す、両縁が直線的で端が角頭状となる。457は長円形を呈し、使用面は稜を持ってくぼむ。割れて

第I章 三原田城遺跡

はいるが完全な形で残る。

102号土壙 458は磨石である。側縁に顕著な使用痕が見られる。459は石皿の破片である。使用面は平坦である。

105号土壙 460は凹石である。厚みのある俵状の川原石を利用する。両面に2～4ヵ所の凹穴が縦に穿たれている。また両側縁部は打撃による使用痕が顕著である。461は長円形で偏平な磨石である。表面には磨痕、側縁に若干の使用痕が観察される。462・463は石皿である。ともに破損品、462はやや大形品であろう。463は半円状で使用面は浅い。

107号土壙 464は石匙である。一端が尖り上部部につまみを持つ、刃部には余り明確な剥離は見られない。

108号土壙 465は不定形スクレイパーである。上端に平坦な自然面を持つ。刃部は下辺の一部に極簡単に作られる。

109号土壙 466は石錐である。つまみ部は膨らみ周囲に調整がなされた錐部が付く。467は上端に打点である自然面を僅かに残す。不定形な小形スクレイパーである。両側縁に若干の剥離痕が見られる。468は打製石斧である。薄手で横剥ぎされた剥片を利用、片側縁の調整が目立つ。刃部は直刃である。

111号土壙 469は石鏃である。470・471はスクレイパーである。470は扇形で弧状に自然面を残す。刃部は直刃である。471は縦形で片縁に簡単な刃を作る。

112号土壙 472は凹基鏃である。二等辺三角形を呈す、脚の先端は尖り全縁に細かな剥離調整が施される。非常に端正な作りである。473は石錐である。菱形を呈し一端が鋭く尖る。錐部を挟む辺に剥離が加えられる。474は礫器である。一面に大きく自然面を持ち偏平な石を利用する。下辺に粗い刃を作る。

113号土壙 475は石匙のつまみ基部片であろう。

114号土壙 476はやや偏平な川原石を利用する磨石である。顕著な使用痕は見られない。

115号土壙 477は大きな礫から剥ぎ取られた一次剥片を利用したスクレイパーである。片側縁に両面からの押圧剥離によって刃部を作り出す。

116号土壙 478は小形の凹基鏃である。挟り部は丸く深い、表面はかなり風化しているが、端正な作り。

117号土壙 479は両端に折断面を持つスクレイパーである。裏面は主剥離面をそのまま残し、表面に僅かに自然面を残す。480は凹石である。長円形を呈し両面に数ヵ所の浅い凹穴を持つ。481は円礫を用いた磨石であるが、L字形に平坦面が作られており、敲打具としての利用も考えられる。482は石皿の破片である。使用面は浅く凹み平滑である。483・484は台石の破片である。

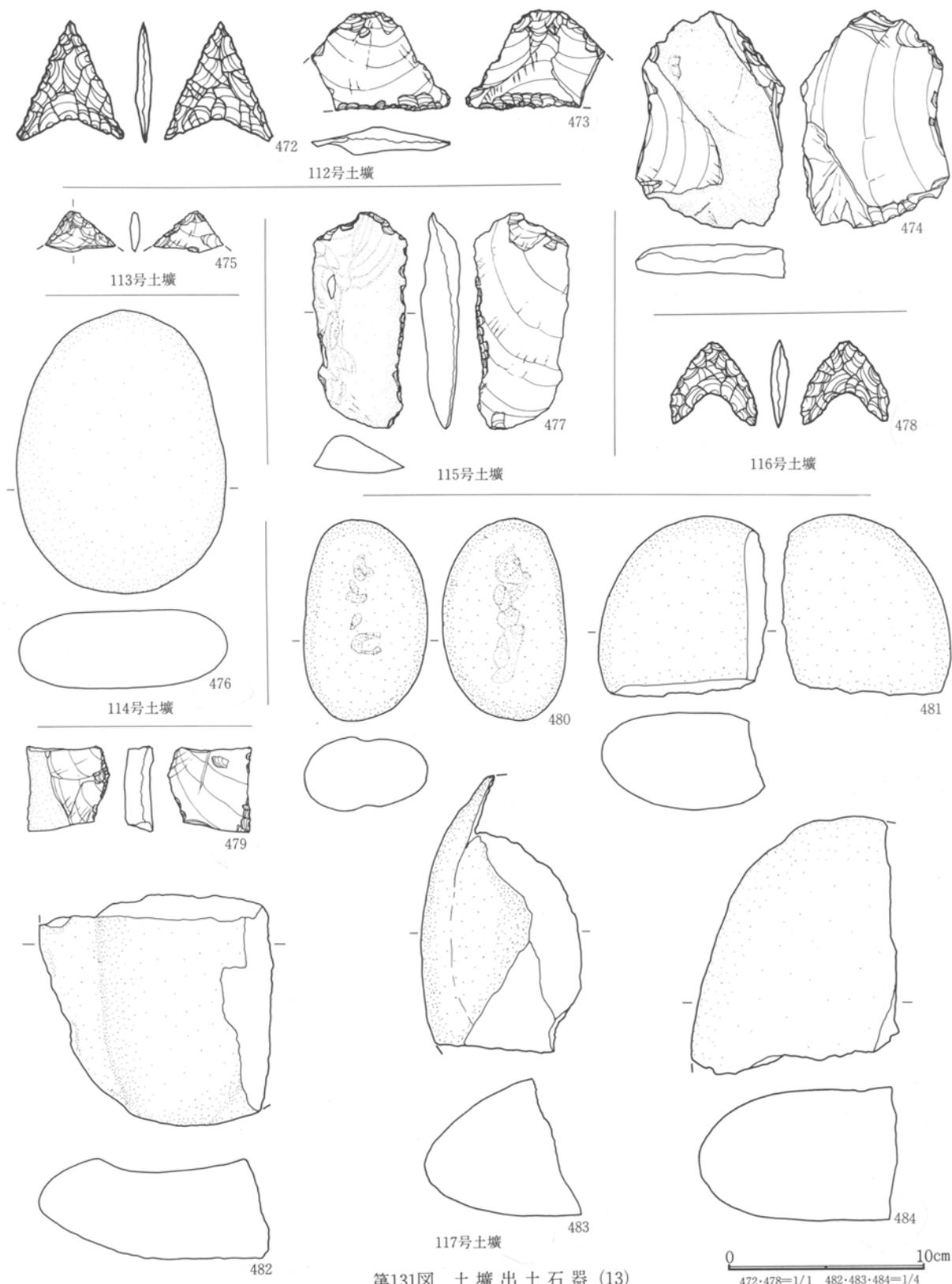
121号土壙 485はスクレイパーであるが、一部に突出部を持ち石匙の破損品の可能性もある。刃部は両面からの押圧剥離がなされる。

122号土壙 486はやや大形の平基鏃である。三角形を呈し粗く作られている。チャート製。487は不定形のスクレイパーである。J字状の剥片を利用し、外側縁部に刃を作り出している。上部部に自然面を残す。

125号土壙 488は尖頭器である。細長い剥片の両端を整え先端部は薄く尖る。基部に自然面を持つ。489は石匙であろう。490は三角形を呈すスクレイパーである。一縁に片面剥離による刃部を作る。491は小形の円礫を用いた磨石である。

126号土壙 492は五角形を呈すスクレイパーである。一端に平坦な自然面を持ち、刃部は二辺に設けているがやや鈍角のほうが作りが丁寧である。

129号土壙 493は横形の大型スクレイパーである。上面側縁に自然面を持ち、下辺に直線的な刃部を有す。494は敲石である。両端部顕著に打痕が認められる。

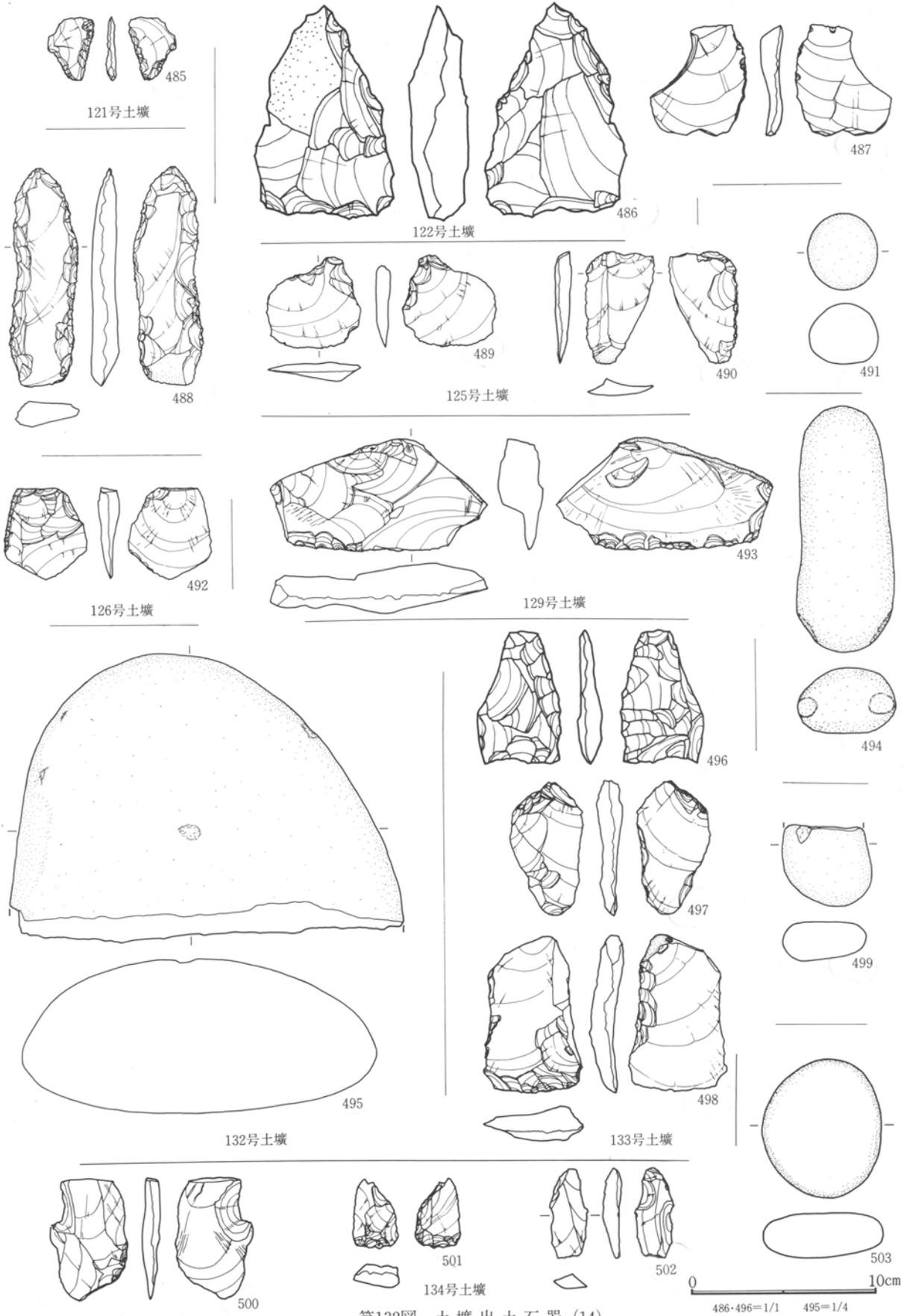


第131図 土壌出土石器 (13)

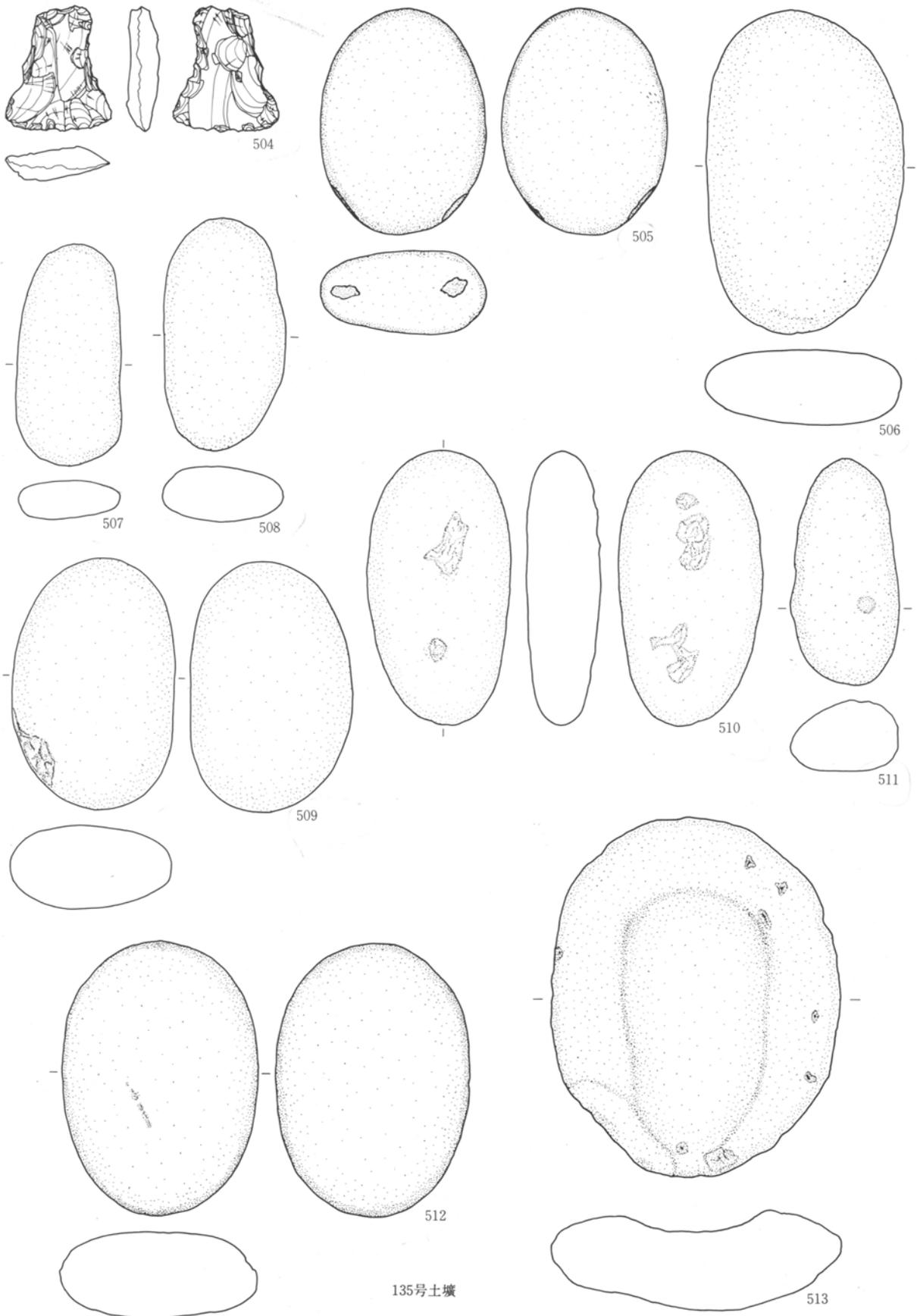
132号土壌 495は半円状の台石である。両面がやや膨らみ中央に小さな凹穴が見られる。

133号土壌 496は石鏃の未製品と思われる。平基鏃であろうか。側縁は未調整である。また片面に摩擦痕

第I章 三原田城遺跡



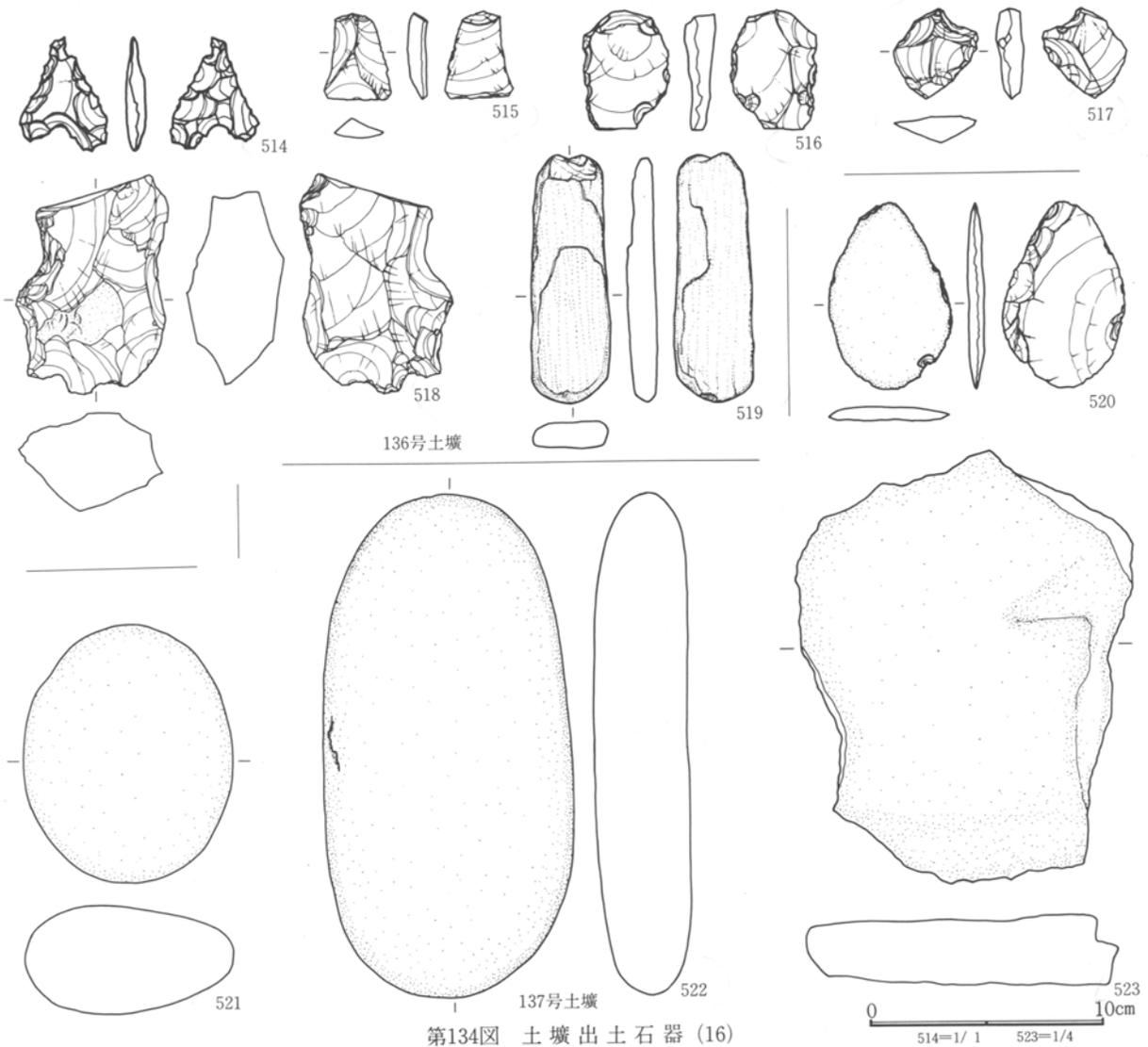
第132図 土層出土石器 (14)



135号土城

第133図 土城出土石器 (15)

513=1/4 0 10cm



第134図 土層出土石器 (16)

が観察される。497は一端が細くなるスクレイパーである。上端に自然面を持つ、他側縁は剥離によって調整がなされる。498は打製石斧である。刃部が幅広い撓形を呈す。片側縁上部に自然面を残す。他側縁は剥離によって調整されている。下辺の刃部は直刃で反りを持つ。499は両面が平らな磨石の破損品である。

134号土層 500は不定形な薄い剥片を用いたスクレイパーである。上端に自然面を持ち、側縁の一部に刃部を持つ。501は厚手の剥片で、下辺に打撃によると思われる剥離が見られる。ピエスキューの破損品か。502は不定形な縦長剥片を用いたスクレイパーである。片側縁に剥離が見られる。503は丸く偏平な磨石である。両面平滑で、薄くカーボンの付着が見られる。

135号土層 504は撓形打製石斧である。刃部が広がり直刃である。505～512は磨石である。いずれも表面、端部に磨痕、打痕が観察される。510は両面に凹穴が見られる。513は完形の石皿である。使用面はやや凹み、裏面は丸みを持つ。

136号土層 514は小形の凹基鏃である。形は左右非対称。515が下辺が広がる台形を呈すスクレイパーである。薄くなった片側縁に細かな刃部を作る。516は不定形でやや縦長のスクレイパーである。上端に打面を持ち両側縁に簡単な刃を作る。517は不定形スクレイパーであるが作りは粗雑。518は厚手の打製石斧である。

両側縁に抉り部を作り刃部は荒割りされている。519は偏平な棒状礫器である。片岩製で一方の端が僅かに欠ける。

137号土壙 520は薄い楕円形の剥片を利用したスクレイパーである。ほぼ全縁に細かな剥離を施す。521は円形の磨石である。522は偏平で楕円形を呈す台石である。523は不定形な台石である。

溝出土の石器（第135・136図 524～557）

本遺跡で検出された1～6号の溝は覆土、出土遺物から明らかに古墳時代以降のものであり、出土した石器類は直接には溝との関連は無いが、ここでは遺構外出土として扱わずに出土位置が具体的に示されていることから溝出土石器として記載し説明を行う。

1号溝 524はほぼ三角形を呈す石錐である。錐部はかなり摩滅している。525・526は横形のスクレイパーである。525は上端に自然面を残すとともにやや凸刃で両面からの剥離を施す。526は端部に自然面を残す。527は打製石斧の刃部片で刃は丸くなる。528は打製石斧で側縁は平行し歯潰しがなされる。刃部を欠いている。529は石皿の破片である。使用面は平坦で縁が丸く盛り上がる。

2号溝 530は不定形の縦形スクレイパーである。下辺が尖り、両側縁に粗く刃部を作り出す。531・532はスクレイパーである。三角形を呈し側縁に粗い刃部を作る。533は撓形打製石斧である。側縁部に緩く抉りを持つ。534・535はスクレイパーである。不定形な剥片の側縁に刃を作る。536・537は四辺形を呈すスクレイパーである。536はごく部分的な刃部である。537は厚手で上端に打点を持ち、側縁に粗く刃部を作る。538は撓形打製石斧である。刃部は広がり直刃となる。539は撓形打製石斧の基部片である。

3号溝 540は凹基鏃である。脚は短く開く、両面基部の一部を磨いた局部磨製鏃である。541は平基鏃の欠損品である。542は凹基鏃と思われるが、未製品である。先端部は未調整。543は厚手の打製石斧である。側縁部にわずかに抉りを持つ、基部を欠いている。544は打製石斧の刃部片である。一面に自然面を持ち側縁部がかなり摩滅している。545は定格式磨製石斧である。刃部に向かってやや開き刃は僅かに凸状となる。全面に製作時の擦痕が見られ、刃部には使用痕も観察される。

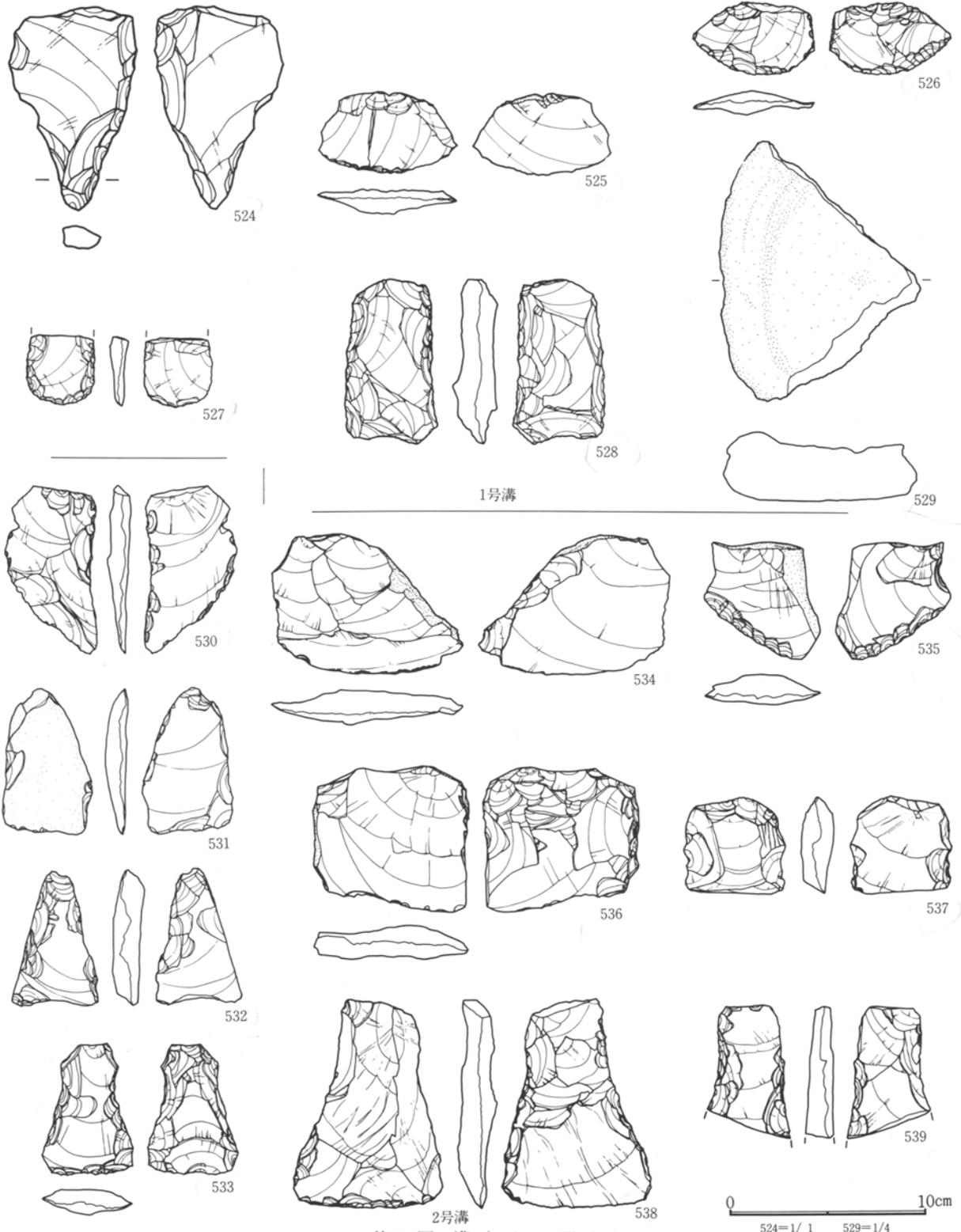
4号溝 546は扇形を呈すスクレイパーである。上端に打点を持ち下辺および側縁に刃部をもつ。

5号溝 547・548は凹基鏃である。547は二等辺三角形を呈し抉りは深い、片脚を欠く。548は大形で先端部を欠損している。黒耀石製で中にセメント状の不純物を含む。549～552は縦形のスクレイパーである。549・550は上端に打面を持ち側縁に刃部を持つ。551は下半を斜めに欠損している。側縁を粗く調整している。552は側縁ほぼ平行で片側に簡単な刃を作り出す。553・554は横形スクレイパーである。ともに刃部の作りは粗い。555は短冊形打製石斧である。両端の刃部はやや斜めになる。556は撓形打製石斧である。刃部は片刃状となる。基部を欠く。

6号溝 557は脚先端が尖る凹基鏃である。先端部および片側半分を欠き、側縁は外に膨らみを持ち、薄く鋭利に仕上げられている。

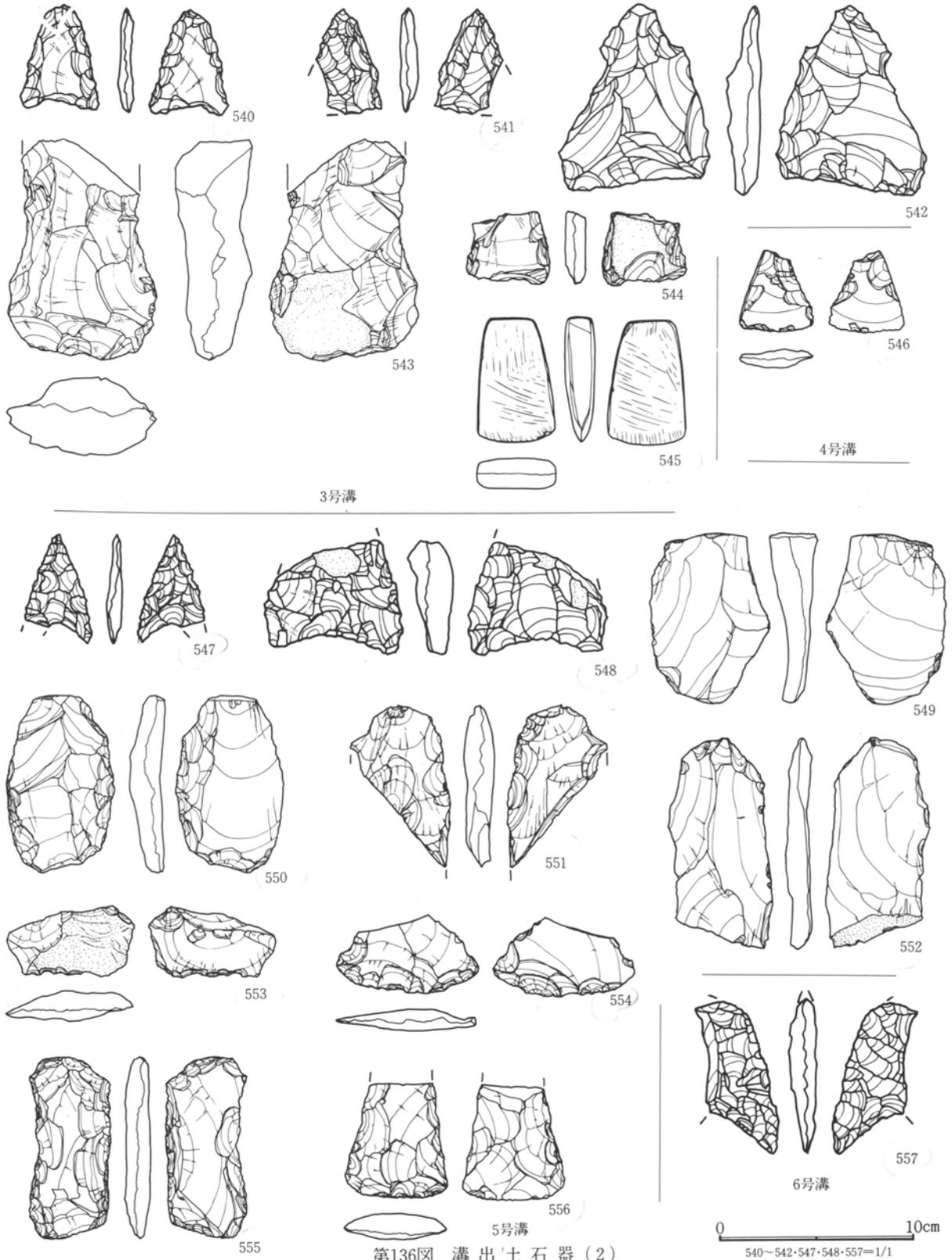
遺構外出土の石器

本遺跡において出土した石器は、前述した住居址、土壙等の遺構に伴って出土したもの以外にも数多くの点数が検出されている。これらの多くは表土の除去や、遺構の検出時に出土したもの、さらには調査区中央を南北に走る上幅20m深さ4mの三原田城址の外堀中より出土している。これらの石器の内特に外堀内より出土したものは堀を埋める土の中より数多く出土している。これらの石器の出土状況は特に層序的な偏り無



第135図 溝出土石器(1)

いが下層になるほど出土数が多い傾向が見られた。なお堀の最下層より出土したものは小礫や土器片が多く伴い、水流による摩滅がひどかった。このため剝離調整の観察が不可能なものが多いことや、紙面の都合上から図示できなかったものが打製石斧、スクレイパーなどを中心に約200点ある。そうしたものについては



第136図 溝出土石器(2)

写真図版で掲載した。

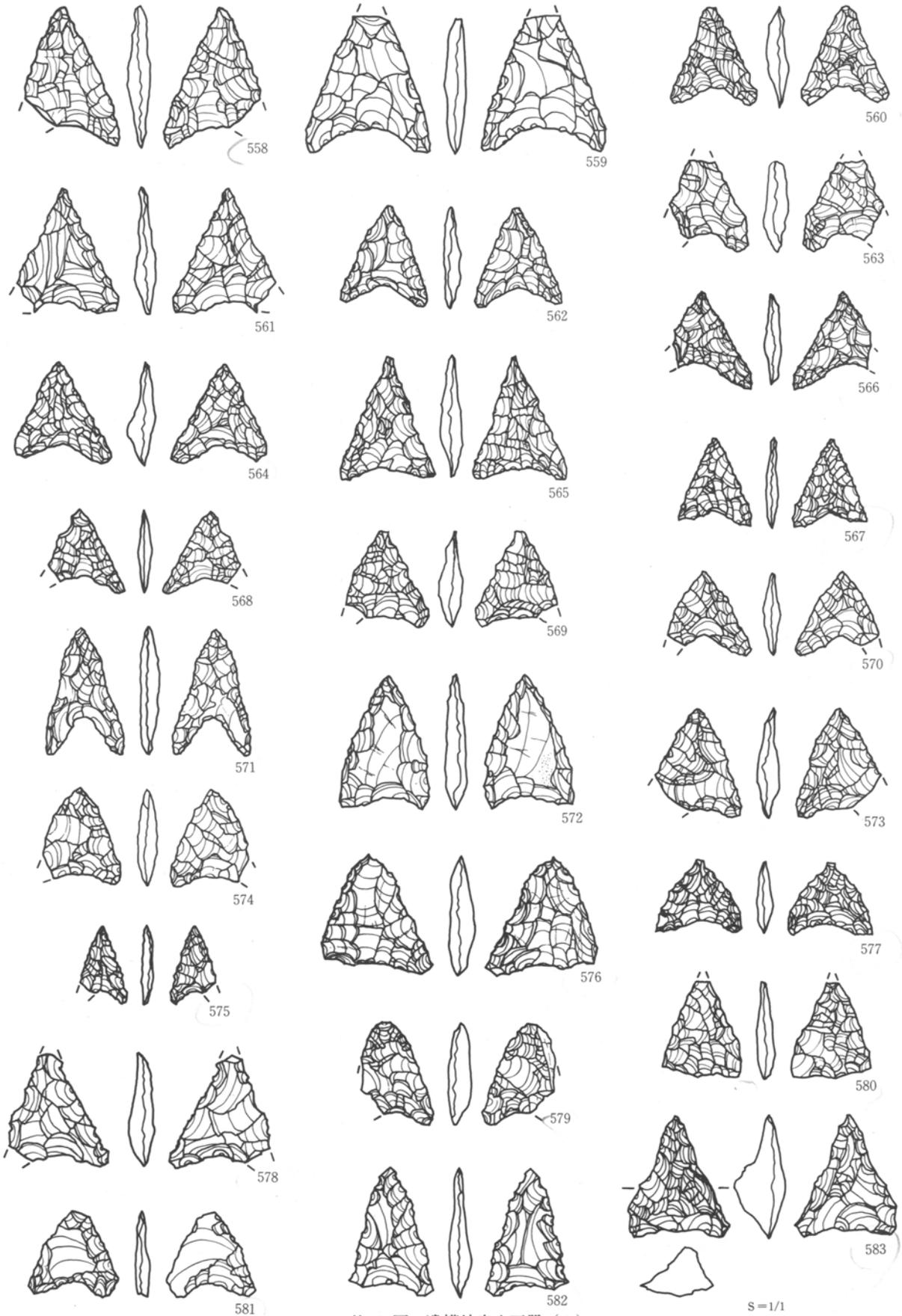
以下、説明を加える石器は上述したように遺跡内において検出されたものの、遺構には直接伴わないもの

であるがこれらの帰属時期は、遺構の分布状況などからしてその多くが前期初頭として大過なからう。

遺構外出土石器 (第137～143図 558～687)

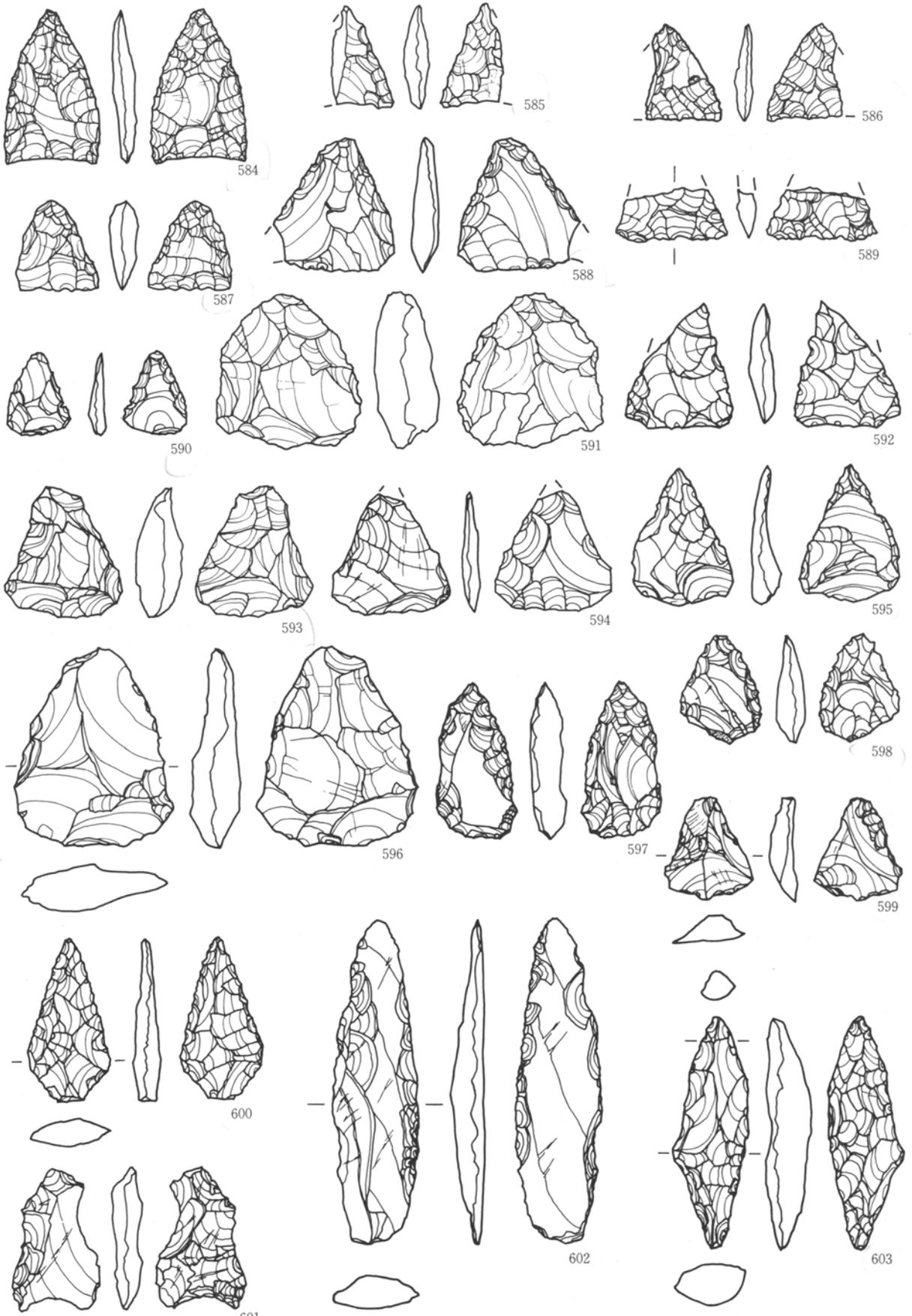
558～582は凹基鏃である。558・562・565のように三角形を呈し、側縁が直線的なものと、570・577のようにやや寸詰まりで側縁が膨らみを持つものとの分類されるが、571のように側縁部が僅かに凹むものもある。583は平基鏃に近い。基部が瘤状に盛り上がっている。584～592は平基鏃である。584・585は基部がやや内側へ入る。590～599は一応凸基鏃としたが突出度は弱く、円基鏃の名称がふさわしいかも知れない。平基鏃との分類基準も明確ではないが、これらは概して作りの雑なものが多い。600は凸基鏃である。側縁が直線的で、基部は茎状に突出している。601は凹基鏃に分類されるが、形状が不定で未製品であろう。602・603は尖頭器であろう。602は柳葉形を呈し、裏面が平坦である。603・606は両端が尖り端部の断面はやや丸みを持つ。606は側縁部に張り出し部を持つ。604・605は尖頭器である。両者ともに側縁は両面からの剥離による調整を施す。606は石錐としての機能も有していたものと考えられる。607・608は石錐である。いづれもつまみ部が幅広で錐部の断面が方形になる。609・610はピエスエスキューである。両端より打撃が加えられている。611は使用痕のある小剥片である。613は大形の石錐である。三角形のつまみ部を持ち、錐部はやや偏平になる。614～616は縦形石匙である。614は縦長の剥片の一端に大きめのつまみを持つが両側縁からの抉りは弱い、ほぼ全縁に両面からの押圧剥離による調整が連続的に施されている。全体的にやや反りを持つ。615は魚形を呈し、片側縁が直線的になっている全体的に作りは粗い。616は縦長の三角形を呈し、その短辺部中央につまみを持ち、端部に自然面を持つ。一側縁に細かに作られた刃部を持つ。617～635は横形石匙である。617・621・622はやや小形で似た形である。617・622は両面から、621は片面からの剥離がなされる。618～620は一端が尖り、下縁の刃部がやや凸状となる618・620と619のように直線的になるものがある。625・626はつまみ部端部の膨らみが無く、かなり摩滅していることから、錐としての機能も考えられる。いづれも身の端部を欠損している。627・631・632・634・635はかなり大形で台形を呈す。つまみ部は端に偏って付く。628は端部を欠くが、大形の製品である。つまみ部は端部が膨らみしっかりと作られている。いづれも頁岩製で刃部の作りは粗い。629は上半部分の破損品であろうか、かなり摩滅している。630・633は不定形で破損品も含まれている。形状から石匙としたが疑問も残る。636～638・640・642は縦形のスクレイパーである。636は縦長の一次剥片を利用している、片側縁に簡単な刃部を作り出している。他は上端に平坦な打面を持つ。639は不定形。641は円形のスクレイパーで、片面に自然面を持つ。643は礫器である。644・646は共に折断面を持ち側縁に刃部を持つ。645・647・648は横形のスクレイパーである。いづれも下辺に刃を作り、647は凹刃である。649は石匙の破損品か。刃部は厚手である。650～662は打製石斧である。650～653は短冊形に近く、両側縁は平行に近くなっている。刃部はやや凸刃となっている。654は基部、刃部を655は刃部を欠損している。656～661は撓形を呈す。両側縁が刃部に向かって広くなり直刃となる。片刃状となるものが多い。662はなすび状を呈し、刃部は粗い調整。663は大形のスクレイパーである。片面に自然面を残し、下辺に粗い刃を作り出している。664・665は磨製石斧である。両者ともに断面は隅丸長方形を呈す。664は刃部を欠く、側縁の稜が比較的明瞭で定角式である。665は基部を欠損している。666～685は磨石、敲石類をまとめたがいづれも顕著な使用痕は認められない。671・672のように小形のものについては実際利器に供されたものかどうか疑わしい。679・680は棒状を呈し端部に打痕が観察され、敲石としての機能が考えられる。682～685は表面に凹穴や磨痕がかなり明瞭に観察される。682は表面中央に小さな凹穴が見られる。683は両面が比較的平坦で、打痕、磨痕が観察される。684は丸みを持ち厚みがある。685は片側を欠損して

第4節 遺構と遺物



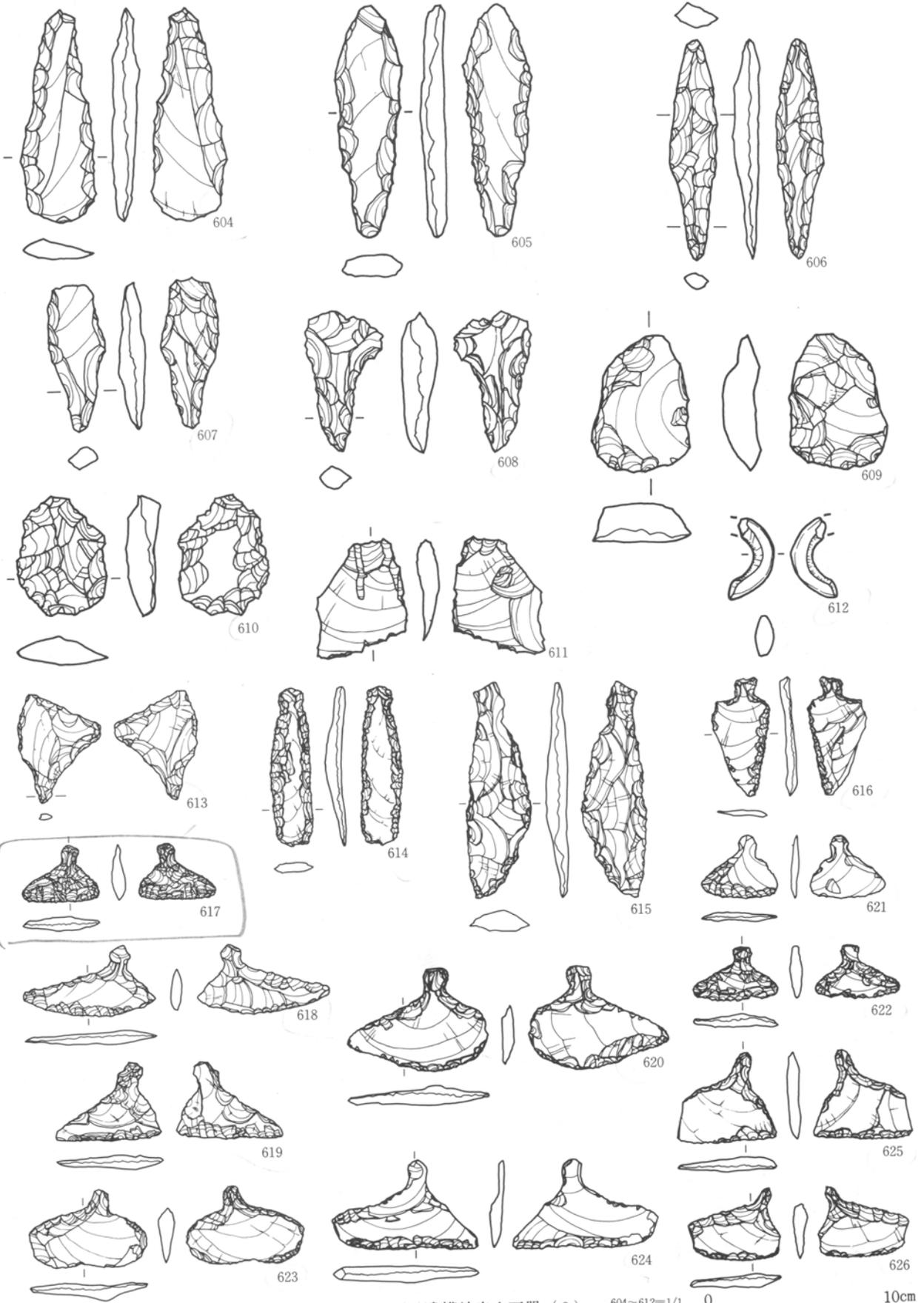
第137図 遺構外出土石器(1)

第I章 三原田城遺跡

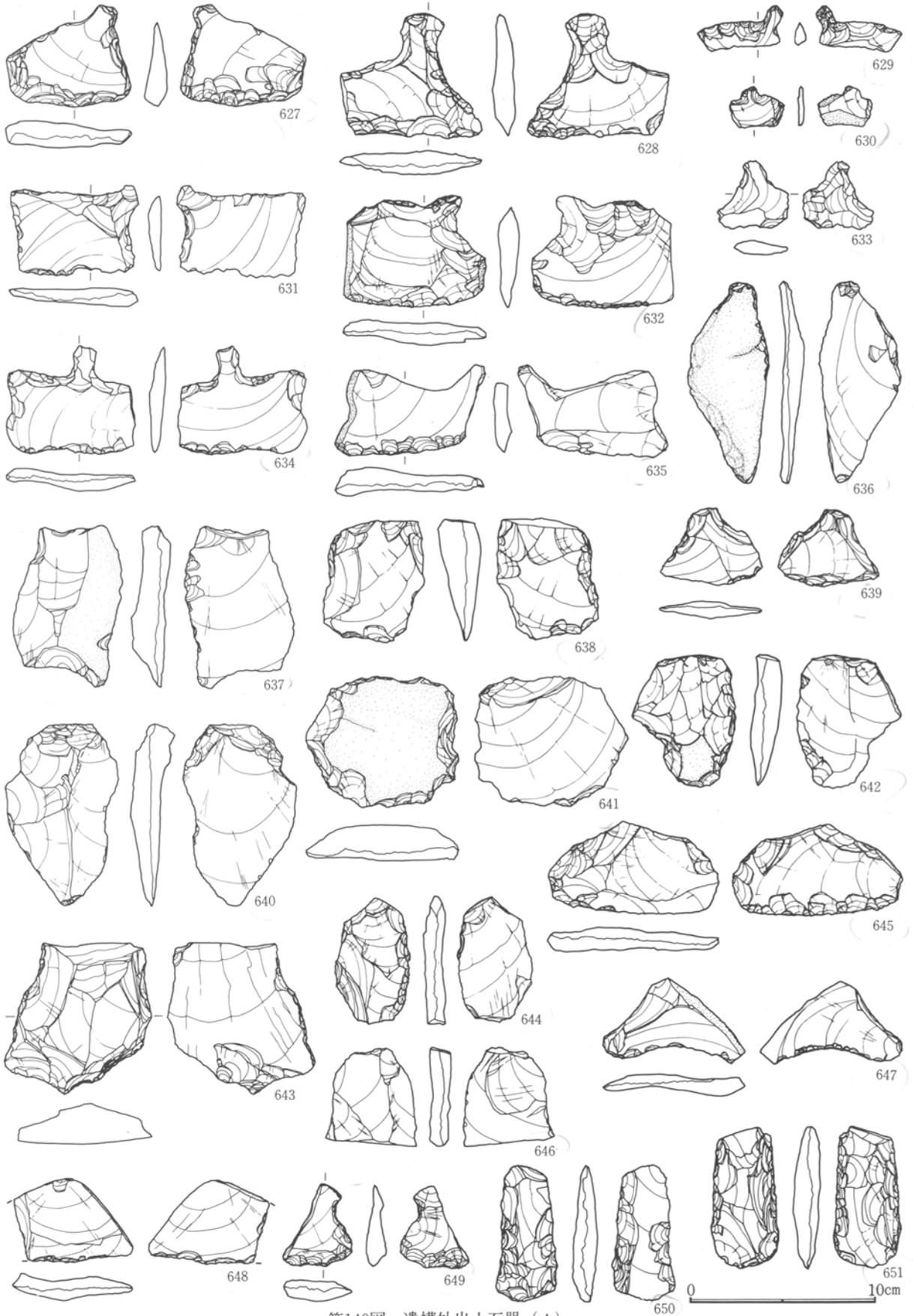


第138図 遺構外出土石器(2)

S=1/1



第139図 遺構外出土石器(3) 604~612=1/1

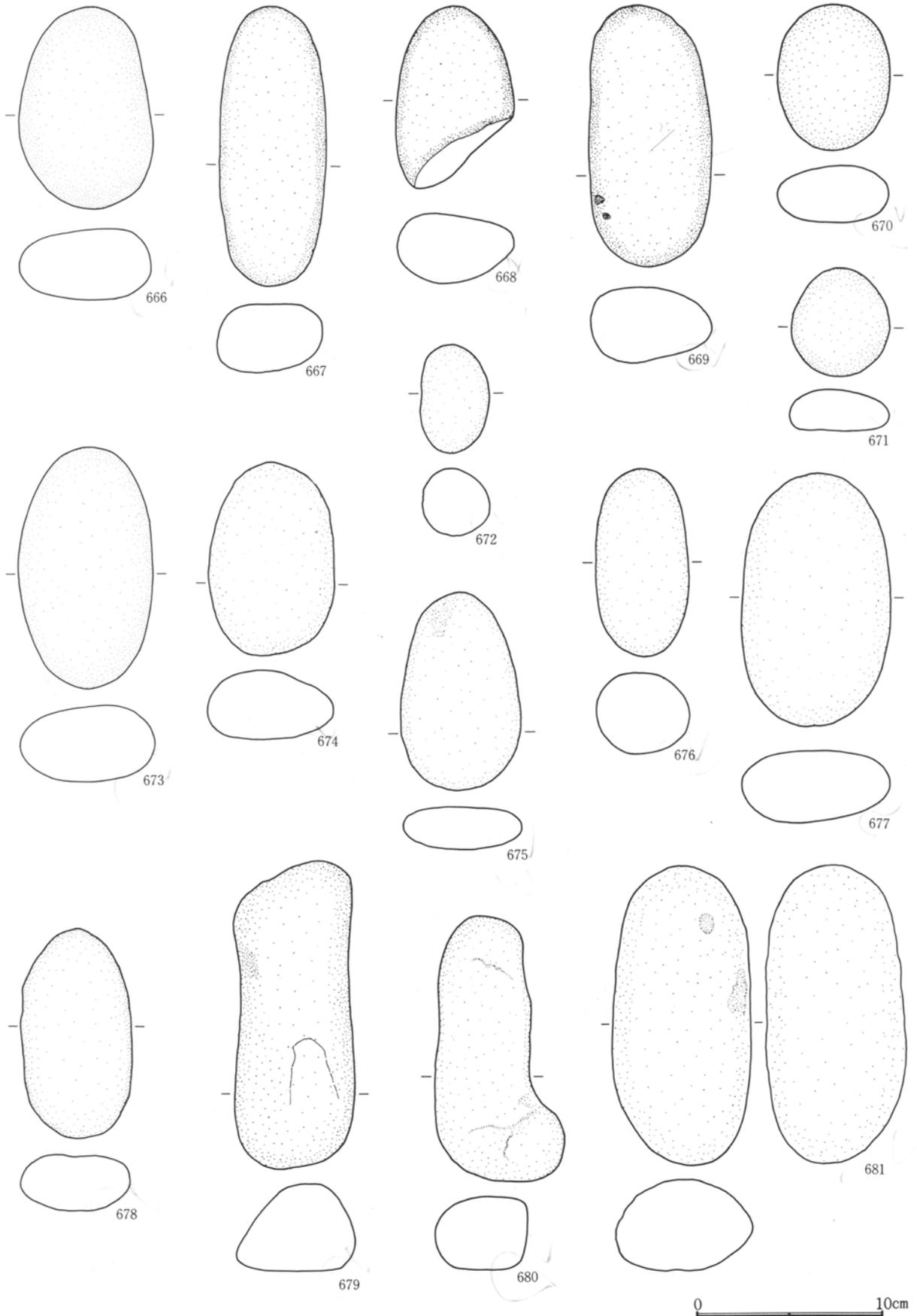


第140図 遺構外出土石器(4)

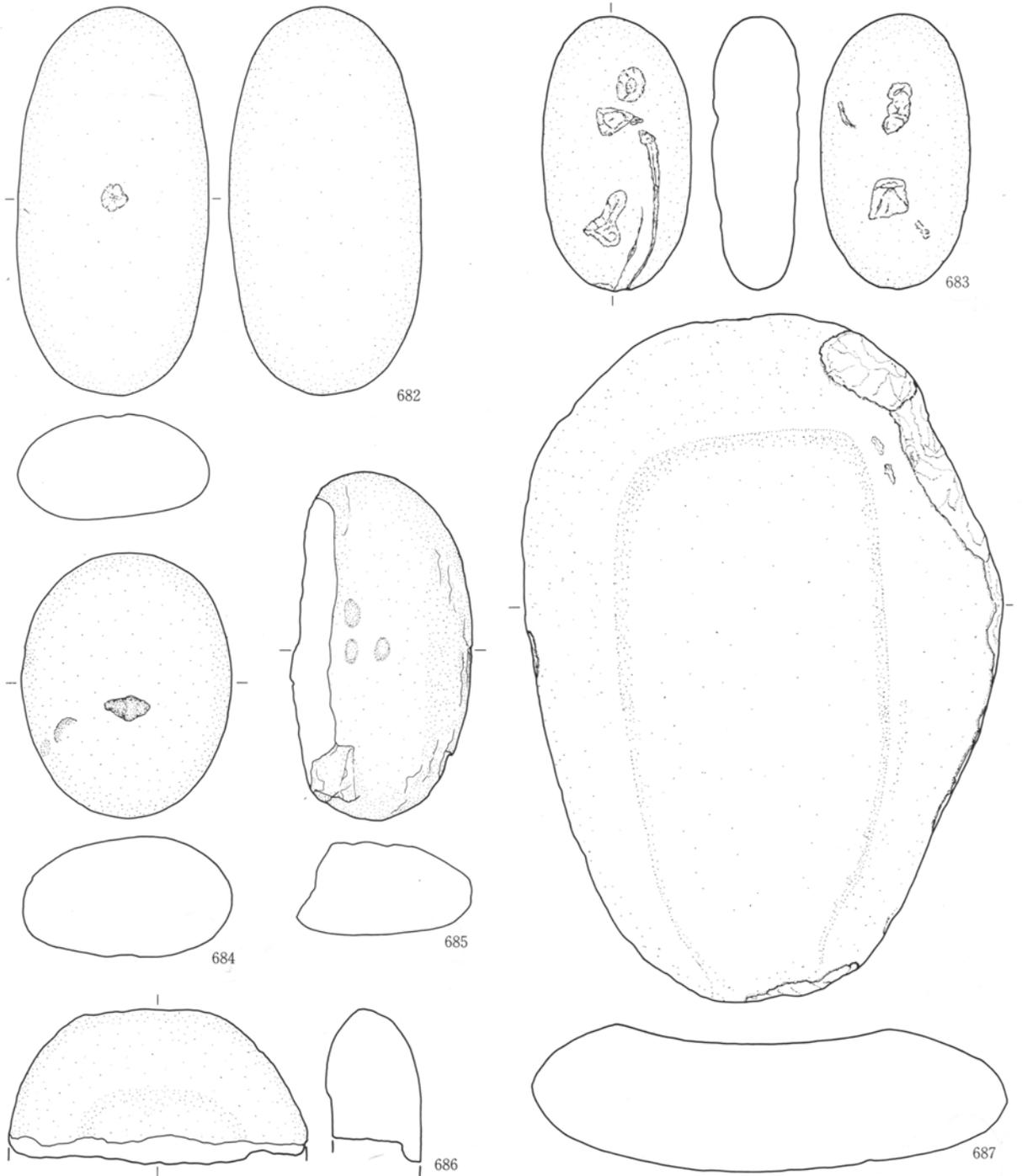


第141図 遺構外出土石器(5)

おり、表面がかなり風化している。686は石皿の上端部片である。687は大形の石皿で完形品である。使用面は僅かに凹み平坦をなす。



第142図 遺構外出土石器(6)



第143図 遺構外出土石器 (7)

0 10cm

686・687=1/4

第I章 三原田城遺跡

表6 石器一覽表

番号	出土位置	種類	分類	計測値(cm・g)	石材	番号	出土位置	種類	分類	計測値(cm・g)	石材
1	1号住居	石	鏃	I-A 2.1×1.9×0.3	1.0 珪質頁岩	86	3号住居	凹磨	石	II-B 13.3×8.3×5.4	633.7 溶結凝灰岩
2	〃	〃	〃	I-A 1.6×1.5×0.3	0.5 黒燧石	87	〃	〃	〃	I-A 4.4×4.4×4.1	111.2 輝石安山岩
3	〃	〃	〃	I-A 2.0×1.4×0.4	0.7 黒燧石	88	〃	〃	〃	II-A 11.4×7.8×4.1	521.2 輝石安山岩
4	〃	〃	〃	I-A 1.3×1.5×0.3	0.5 黒燧石	89	〃	〃	〃	II-B 14.4×9.6×4.9	914.2 輝石安山岩
5	〃	〃	〃	I-A 1.7×1.6×0.3	0.6 黒燧石	90	〃	磨	石	III 10.3×5.8×3.3	285.4 輝石安山岩
6	〃	〃	〃	II-A 2.5×2.6×0.5	2.8 チャート	91	〃	〃	〃	II-A 14.3×7.3×4.9	789.6 輝石安山岩
7	〃	〃	〃	II-A 2.2×2.0×0.7	2.5 チャート	92	〃	台石	石	III 20.6×19.6×5.2	3520.0 輝石安山岩
8	〃	〃	〃	II-A 2.9×2.0×0.7	3.1 チャート	93	〃	〃	〃	I-A 16.1×26.2×6.3	3070.0 輝石安山岩
9	〃	〃	〃	III-B 3.3×1.9×0.4	2.2 黒色頁岩	94	4号住居	石	鏃	I-B 1.9×1.4×0.5	0.9 黒燧石
10	〃	〃	〃	I-B 2.4×1.5×0.6	1.6 黒燧石	95	〃	〃	〃	II-A 2.6×1.4×0.5	0.9 赤色珪質岩
11	〃	〃	〃	II-A 1.8×1.4×0.4	0.7 黒燧石	96	〃	〃	〃	II-A 2.4×2.0×0.7	2.5 黒燧石
12	〃	石	鏃	III 2.1×2.5×0.5	1.5 黒燧石	97	〃	〃	〃	III-A 2.5×1.5×0.5	1.4 珪質頁岩
13	〃	〃	〃	II-B 7.4×4.8×1.2	29.7 黒色頁岩	98	〃	スクレイパー	〃	II-A 2.4×1.2×0.7	1.7 黒燧石
14	〃	〃	〃	III-B 4.0×4.5×0.8	13.1 黒色頁岩	99	〃	〃	〃	一 1.9×1.8×0.5	1.3 黒燧石
15	〃	打製石斧	一	4.0×3.6×1.2	19.3 黒色頁岩	100	〃	石	鏃	IV 4.2×3.6×1.1	16.5 黒色頁岩
16	〃	スクレイパー	II-B	5.3×3.2×1.0	13.4 黒色頁岩	101	〃	スクレイパー	〃	I-B 7.4×5.0×1.1	39.6 黒色頁岩
17	〃	〃	〃	6.2×4.0×1.2	17.2 黒色頁岩	102	〃	〃	〃	I-B 7.0×4.6×0.8	24.3 黒色頁岩
18	〃	〃	〃	I-B 8.8×7.9×1.7	18.5 黒色頁岩	103	〃	〃	〃	II-A 4.8×2.6×0.9	9.8 黒色頁岩
19	〃	〃	〃	I-C 6.6×4.4×1.6	46.7 黒色頁岩	104	〃	〃	〃	II-A 4.8×4.9×1.4	32.3 黒色頁岩
20	〃	〃	〃	I-C 6.2×2.5×0.6	10.9 黒色頁岩	105	〃	〃	〃	II-B 7.8×6.2×2.1	70.6 黒色頁岩
21	〃	〃	〃	I-C 4.3×4.3×1.6	34.5 黒色頁岩	106	〃	〃	〃	II-A 5.5×5.4×1.0	27.6 黒色頁岩
22	〃	〃	〃	II-A 6.4×3.8×1.6	28.4 黒色頁岩	107	〃	凹磨	石	II-B 9.6×6.9×4.5	376.0 輝石安山岩
23	〃	〃	〃	II-B 4.9×3.5×0.9	13.0 黒色頁岩	108	〃	〃	〃	I-A 6.7×6.0×4.5	247.8 輝石安山岩
24	〃	〃	〃	II-A 6.3×2.0×0.8	9.4 黒色頁岩	109	〃	〃	〃	II-B 12.8×8.2×4.3	575.9 輝石安山岩
25	〃	〃	〃	II-A 7.6×4.4×1.1	36.6 黒色頁岩	110	〃	磔	器	III-A 12.1×4.5×3.6	305.0 ひん岩
26	〃	〃	〃	I-D 6.4×6.4×1.9	71.3 黒色頁岩	111	〃	〃	〃	III-A 11.9×5.2×2.4	209.1 砂岩
27	〃	〃	〃	II-C 6.8×3.4×0.9	16.4 輝石安山岩	112	〃	〃	〃	III-A 12.6×6.7×2.7	393.6 閃緑岩
28	〃	〃	〃	一 3.5×1.6×0.5	2.4 黒色頁岩	113	〃	〃	〃	I-B 9.2×6.5×2.8	242.0 輝石安山岩
29	〃	〃	〃	一 3.1×2.1×0.6	3.4 黒燧石	114	6号住居	石	鏃	I-A 2.6×1.5×0.4	0.9 黒燧石
30	〃	打製石斧	II-A	6.0×4.0×1.3	29.6 黒色頁岩	115	〃	〃	〃	I-A 2.1×1.6×0.3	0.8 チャート
31	〃	〃	I	8.3×3.0×2.5	60.3 黒色頁岩	116	〃	〃	〃	I-A 2.0×2.0×0.4	0.7 チャート
32	〃	〃	一	5.2×4.3×2.2	37.8 黒色頁岩	117	〃	〃	〃	I-A 2.1×1.5×0.3	0.5 黒燧石
33	〃	磨	石	II-A 10.8×6.6×3.7	370.3 輝石安山岩	118	〃	〃	〃	I-A 1.2×1.1×0.2	0.2 黒燧石
34	〃	〃	〃	II-A 8.8×5.9×2.8	227.6 輝石安山岩	119	〃	〃	〃	I-A 1.6×1.5×0.3	0.4 黒燧石
35	〃	〃	〃	II-A 10.8×7.6×4.4	420.3 輝石安山岩	120	〃	〃	〃	I-A 1.9×1.3×0.3	0.4 黒燧石
36	〃	〃	〃	II-A 9.5×7.0×4.8	398.8 輝石安山岩	121	〃	〃	〃	I-A 2.0×1.2×0.4	0.5 黒燧石
37	2号住居	石	鏃	I-A 2.5×1.4×0.4	0.7 黒燧石	122	〃	〃	〃	I-A 2.3×1.7×0.3	0.6 黒燧石
38	〃	〃	〃	I-A 1.7×2.0×0.4	0.8 珪質頁岩	123	〃	〃	〃	I-A 3.7×1.7×0.4	1.6 黒色頁岩
39	〃	〃	〃	I-A 1.9×1.7×0.8	1.8 黒燧石	124	〃	〃	〃	I-A 1.5×1.2×0.3	0.4 黒燧石
40	〃	〃	〃	I-B 1.8×1.3×0.4	0.7 黒燧石	125	〃	〃	〃	I-B 2.4×1.5×0.4	0.8 チャート
41	〃	〃	〃	II-A 2.2×1.8×0.7	2.0 チャート	126	〃	〃	〃	I-A 1.6×1.4×0.3	0.4 黒燧石
42	〃	〃	〃	II-A 2.5×1.7×0.5	1.5 黒燧石	127	〃	〃	〃	I-B 1.7×1.6×0.4	0.8 黒燧石
43	〃	〃	〃	III-A 1.7×1.5×0.3	0.5 黒燧石	128	〃	〃	〃	I-B 2.7×1.8×0.6	1.9 黒燧石
44	〃	〃	〃	一 1.4×0.8×0.3	0.2 黒燧石	129	〃	〃	〃	I-B 2.5×2.1×0.5	2.2 黒色安山岩
45	〃	〃	〃	一 1.6×1.6×0.4	0.8 黒燧石	130	〃	〃	〃	II-A 1.7×1.4×0.4	0.8 黒燧石
46	〃	石	鏃	一 1.2×1.2×0.3	0.4 黒燧石	131	〃	〃	〃	一 3.1×1.6×0.7	2.8 黒色頁岩
47	〃	石	鏃	II 2.4×0.8×0.5	1.1 チャート	132	〃	〃	〃	II-A 1.7×1.6×0.5	1.0 黒燧石
48	〃	石	鏃	2.2×1.4×1.4	8.3 滑石	133	〃	〃	〃	一 1.8×1.1×2.9	0.4 チャート
49	〃	石	鏃	I-C 5.5×2.7×0.6	9.7 黒色頁岩	134	〃	〃	〃	一 1.5×1.1×0.4	0.3 黒燧石
50	〃	スクレイパー	I-B	7.5×4.9×0.9	26.1 黒色頁岩	135	〃	〃	〃	IV 2.6×1.5×1.0	2.6 チャート
51	〃	〃	I-C	5.4×2.2×0.7	7.4 黒色頁岩	136	〃	〃	〃	一 8.1×3.1×0.8	19.0 黒色頁岩
52	〃	〃	I-B	6.6×4.7×1.2	35.0 黒色頁岩	137	〃	〃	〃	IV 6.3×3.8×0.9	10.7 黒色頁岩
53	〃	〃	I-B	5.0×4.3×1.3	22.0 黒色頁岩	138	〃	〃	〃	IV 4.4×3.8×1.0	15.9 黒色頁岩
54	〃	〃	一	4.1×3.7×1.3	22.9 黒色頁岩	139	〃	〃	〃	II-A 5.7×4.3×0.9	14.2 チャート
55	〃	〃	III	9.7×7.9×1.4	81.9 黒色頁岩	140	〃	〃	〃	III-B 6.0×5.2×0.9	22.5 黒色頁岩
56	〃	打製石斧	II-A	8.0×4.6×1.8	60.6 黒色頁岩	141	〃	〃	〃	II-B 7.0×3.0×1.2	18.5 黒色頁岩
57	〃	〃	II-A	8.6×4.6×2.1	62.8 黒色頁岩	142	〃	〃	〃	III-A 7.7×5.8×1.8	57.6 黒色頁岩
58	〃	磨製石斧	一	5.3×4.2×1.7	58.9 黒色頁岩	143	〃	〃	〃	II-B 5.8×4.6×1.2	19.0 黒色頁岩
59	〃	磨	石	II-A 6.3×3.7×3.1	99.7 花崗岩	144	〃	〃	〃	I-C 4.2×1.7×0.7	4.7 黒色頁岩
60	〃	〃	I-A	6.4×5.9×4.9	225.8 輝石安山岩	145	〃	〃	〃	I-C 3.3×2.7×0.7	5.1 黒燧石
61	〃	石	皿	I-A 9.3×13.6×8.1	1178.6 輝石安山岩	146	〃	〃	〃	一 2.6×1.6×0.7	2.3 チャート
62	〃	〃	〃	一 6.8×7.3×6.7	600.5 石英閃緑岩	147	〃	〃	〃	I-A 3.4×1.9×0.9	8.1 黒色頁岩
63	〃	〃	〃	I-A 22.5×11.6×8.7	2500.0 輝石安山岩	148	〃	スクレイパー	〃	I-A 3.1×2.3×0.9	6.3 黒色頁岩
64	3号住居	石	鏃	I-A 3.0×1.6×0.5	1.5 黒燧石	149	〃	〃	〃	I-A 4.6×2.7×1.3	13.6 黒色頁岩
65	〃	〃	〃	II-A 1.8×1.7×0.4	0.9 チャート	150	〃	〃	〃	I-A 3.4×2.5×0.9	7.6 黒色安山岩
66	〃	〃	〃	II-A 1.9×1.8×0.6	1.3 黒燧石	151	〃	〃	〃	I-A 11.3×5.2×1.7	69.0 黒色頁岩
66	〃	〃	〃	II-A 2.1×2.0×0.6	1.7 黒燧石	152	〃	〃	〃	I-B 7.8×5.0×1.0	45.0 黒色頁岩
67	〃	〃	〃	II-A 1.5×1.3×0.3	0.4 黒燧石	153	〃	〃	〃	III 5.9×6.2×1.9	70.2 黒色頁岩
69	〃	〃	〃	III-A 3.2×2.6×0.7	5.4 チャート	154	〃	〃	〃	I-D 6.5×4.9×1.0	36.2 黒色頁岩
70	〃	〃	〃	II-B 6.7×3.8×1.0	14.4 チャート	155	〃	〃	〃	I-B 7.5×4.5×1.3	44.8 黒色頁岩
71	〃	〃	〃	II-A 10.0×5.4×1.2	43.8 黒色頁岩	156	〃	〃	〃	I-C 5.3×3.2×1.4	23.2 黒色頁岩
72	〃	〃	〃	III-B 5.6×2.8×0.6	10.6 黒色頁岩	157	〃	〃	〃	I-B 4.2×5.7×0.9	18.7 黒色頁岩
73	〃	〃	〃	II-B 4.8×3.2×0.5	5.9 黒色頁岩	158	〃	〃	〃	I-B 5.6×5.0×1.4	37.8 黒色頁岩
74	〃	〃	〃	II-B 3.1×4.7×0.9	12.2 黒色頁岩	159	〃	〃	〃	II-A 8.4×5.7×1.3	68.7 黒色頁岩
75	〃	石	鏃	2.3×2.4×0.7	3.2 チャート	160	〃	〃	〃	I-B 5.4×6.4×1.2	30.1 黒色頁岩
76	〃	〃	〃	I-B 7.2×3.4×1.1	24.7 黒色安山岩	161	〃	〃	〃	III 5.8×3.9×1.0	21.9 黒色頁岩
77	〃	スクレイパー	I-C	4.3×3.4×0.8	10.1 黒色頁岩	162	〃	〃	〃	I-C 5.8×6.4×1.1	37.8 黒色頁岩
78	〃	〃	一	4.6×2.4×0.6	7.0 珪質頁岩	163	〃	〃	〃	I-C 4.7×3.8×0.8	14.4 黒色頁岩
79	〃	〃	II-B	3.5×3.0×1.1	8.8 黒色頁岩	164	〃	〃	〃	I-C 4.4×4.4×0.8	18.3 黒色頁岩
80	〃	〃	II-A	5.5×3.4×0.7	13.5 黒色頁岩	165	〃	〃	〃	II-A 9.6×5.0×1.6	56.1 黒色頁岩
81	〃	〃	II-A	8.5×4.8×1.6	55.1 黒色頁岩	166	〃	〃	〃	II-A 9.8×5.8×1.5	64.4 黒色頁岩
82	〃	打製石斧	一	8.9×6.1×1.7	98.4 黒色頁岩	167	〃	〃	〃	II-B 6.4×4.3×1.2	22.7 黒色頁岩
83	〃	〃	II-A	5.0×4.3×1.3	27.8 黒色頁岩	168	〃	〃	〃	II-A 5.3×3.4×0.7	10.6 黒色頁岩
84	〃	磨	石	一 7.3×5.9×2.8	205.0 石英閃緑岩	169	〃	〃	〃	I-C 6.7×3.1×1.1	23.4 黒色頁岩
85	〃	〃	II-A	12.0×6.2×3.5	430.8 輝石安山岩	170	〃	〃	〃	II-B 6.9×4.3×0.9	22.3 黒色頁岩

第4節 遺構と遺物

番号	出土位置	種類	分類	計測値(cm・g)	石材	番号	出土位置	種類	分類	計測値(cm・g)	石材
171	6号住居	スクレイパー	II-A	7.5×3.7×0.8	21.7 黒色頁岩	256	8号住居	石 皿	II	26.0×22.1×6.1	4320.0 輝石安山岩
172	〃	〃	I-B	3.5×3.9×1.4	19.2 黒色頁岩	257	〃	〃	I-A	31.6×25.6×6.0	5370.0 輝石安山岩
173	〃	〃	I-B	5.8×4.4×1.3	32.4 黒色頁岩	258	9号住居	石 鏃	I-A	2.0×2.0×0.4	1.1 チャート
174	〃	〃	II-B	8.7×4.8×1.5	35.6 黒色頁岩	259	〃	〃	I-A	1.8×1.1×0.3	0.4 黒燻石
175	〃	打製石斧	II-A	7.6×5.3×1.7	67.2 黒色頁岩	260	〃	〃	I-A	2.2×1.6×0.5	1.3 珪質変質岩
176	〃	〃	II-A	8.7×4.5×1.6	52.3 黒色頁岩	261	〃	〃	I-A	4.1×2.8×0.4	3.7 黒色頁岩
177	〃	〃	II-A	7.3×4.8×1.7	60.5 黒色頁岩	262	〃	〃	I-A	1.6×1.4×0.3	0.5 チャート
178	〃	〃	II-B	6.6×5.1×1.8	55.5 珪質頁岩	263	〃	〃	I-A	1.3×1.2×0.3	0.3 チャート
179	〃	〃	II-B	7.5×5.8×1.6	61.3 黒色頁岩	264	〃	〃	I-A	1.3×1.1×0.3	0.3 黒燻石
180	〃	〃	—	6.9×4.6×1.3	45.1 黒色頁岩	265	〃	〃	II-A	2.1×2.0×0.7	3.2 チャート
181	〃	〃	II-B	10.6×5.8×1.6	95.8 黒色頁岩	266	〃	〃	—	2.0×1.4×0.4	0.8 黒燻石
182	〃	〃	II-A	8.6×5.4×1.4	60.7 黒色頁岩	267	〃	〃	—	2.0×1.6×0.7	1.8 黒燻石
183	〃	〃	I	11.0×4.4×1.6	71.6 黒色頁岩	268	〃	石 匙	II-B	1.6×1.3×0.2	0.3 黒燻石
184	〃	〃	II-B	7.9×5.2×1.3	64.3 黒色頁岩	269	〃	〃	I-B	9.3×3.8×1.2	34.1 黒色頁岩
185	〃	〃	II-B	8.9×4.4×1.4	59.3 黒色頁岩	270	〃	〃	III-A	6.4×5.2×0.9	93.7 黒色頁岩
186	〃	〃	III	10.8×7.3×2.8	261.7 黒色頁岩	271	〃	〃	III-B	4.6×2.8×0.7	9.9 黒色頁岩
187	〃	〃	—	5.3×4.5×1.8	51.6 黒色頁岩	272	〃	スクレイパー	I-D	4.8×6.1×1.1	34.6 黒色頁岩
188	〃	〃	II-A	19.3×8.7×3.4	578.8 黒色頁岩	273	〃	〃	II-B	7.1×4.4×1.2	30.2 黒色頁岩
189	〃	〃	—	12.8×7.9×1.3	160.5 点紋緑色片岩	274	〃	〃	II-B	8.9×5.8×2.3	73.3 黒色頁岩
190	〃	〃	II-B	7.3×4.7×1.0	37.3 黒色頁岩	275	〃	〃	II-A	3.9×2.4×0.7	5.8 チャート
191	〃	〃	—	3.3×3.8×0.9	10.9 黒色頁岩	276	〃	〃	II-B	3.3×2.8×0.9	8.3 黒色頁岩
192	〃	磨 石	I-B	6.5×5.0×3.1	144.5 変質安山岩	277	〃	〃	II-A	2.7×2.7×0.7	4.8 黒色頁岩
193	〃	〃	—	5.9×4.3×1.8	66.4 紅糜片岩	278	〃	打製石斧	II-B	5.2×5.0×1.1	35.9 黒色頁岩
194	〃	〃	I-B	6.8×5.8×2.9	154.4 石英閃緑岩	279	〃	〃	II-A	8.4×5.3×1.6	80.1 黒色頁岩
195	〃	〃	II-B	13.5×7.4×3.7	524.4 輝石安山岩	280	〃	〃	II-A	9.2×5.3×2.2	93.3 黒色頁岩
196	〃	〃	II-B	11.7×6.7×3.3	358.6 輝石安山岩	281	〃	〃	II-B	8.8×5.1×1.6	66.6 黒色頁岩
197	〃	〃	II-A	21.0×9.5×5.2	1553.3 溶結凝灰岩	282	〃	磨 石	II-A	11.2×7.3×2.5	310.7 輝石安山岩
198	〃	〃	II-A	14.5×9.0×5.8	1119.4 輝石安山岩	283	〃	〃	II-B	14.6×9.5×5.2	807.2 輝石安山岩
199	〃	〃	II-B	15.4×7.9×5.3	944.0 石英閃緑岩	284	〃	〃	II-A	14.0×9.5×4.9	839.3 輝石安山岩
200	〃	凹 石	III-B	7.5×8.3×5.0	399.4 輝石安山岩	285	〃	〃	II-B	15.4×10.4×6.2	1343.7 輝石安山岩
201	〃	〃	III-B	9.4×5.5×4.2	268.2 輝石安山岩	286	〃	礫 器	—	15.8×6.4×1.6	229.7 点紋黒色片岩
202	〃	磨 石	III-A	13.1×9.7×5.1	976.6 輝石安山岩	287	〃	〃	III-A	11.6×3.6×1.5	103.3 雲母石英片岩
203	〃	〃	II-A	11.7×4.4×3.3	276.5 石英閃緑岩	288	〃	石 皿	II	16.3×13.0×7.5	1773.7 輝石安山岩
204	〃	磨 石	I-B	11.3×9.0×4.6	638.8 輝石安山岩	289	〃	〃	II	15.0×21.4×6.0	2500.0 輝石安山岩
205	〃	〃	II-A	19.1×9.3×5.3	1653.5 輝石安山岩	290	10号住居	石 鏃	I-A	2.2×1.9×0.4	0.9 黒燻石
206	〃	〃	II-A	15.1×9.9×5.5	1306.9 輝石安山岩	291	〃	〃	I-A	2.0×1.1×0.3	0.8 黒色頁岩
207	〃	〃	II-A	14.5×8.7×3.9	760.9 変質安山岩	292	〃	〃	I-A	2.0×1.4×0.3	0.6 チャート
208	〃	石台石皿	I-A	7.2×6.5×8.0	454.2 輝石安山岩	293	〃	〃	I-A	1.5×1.3×0.2	0.2 黒燻石
209	〃	〃	II	16.5×11.5×3.9	1145.9 黒色頁岩	294	〃	〃	II-A	1.7×1.2×0.5	1.0 黒燻石
210	〃	7号住居	II	22.3×19.1×6.4	4380.0 輝石安山岩	295	〃	〃	—	2.3×1.8×0.5	1.2 黒燻石
211	〃	石 鏃	I-A	2.2×1.9×0.5	1.1 黒燻石	296	〃	石 匙	I	5.2×1.5×0.8	5.4 黒色頁岩
212	〃	〃	II-A	2.6×2.0×0.6	2.6 赤色珪質岩	297	〃	飾 品	—	4.2×3.7×1.6	18.8 不明
213	〃	石 鏃	I-B	1.9×1.1×0.4	0.9 黒色安山岩	298	〃	〃	II-A	5.0×3.9×0.7	11.5 黒色安山岩
214	〃	石 鏃	II-A	2.3×1.2×0.4	1.1 黒色頁岩	299	〃	〃	I-C	6.9×2.6×0.6	11.2 黒色頁岩
215	〃	石 鏃	III	1.6×1.5×0.4	0.7 黒燻石	300	〃	スクレイパー	—	4.1×3.2×1.1	12.1 チャート
216	〃	石 鏃	I	3.5×0.8×0.5	1.4 黒色頁岩	301	〃	〃	I-B	7.3×4.0×1.4	43.5 黒色頁岩
217	〃	石 鏃	—	2.4×1.1×0.8	3.8 滑石	302	〃	〃	III	5.5×5.0×0.9	21.9 黒色頁岩
218	〃	石 鏃	II-A	6.9×5.0×1.2	24.3 黒色安山岩	303	〃	〃	II-C	7.0×4.5×0.7	20.9 黒色頁岩
219	〃	スクレイパー	I-D	7.3×4.2×0.9	32.1 黒色頁岩	304	〃	〃	III	7.6×8.5×1.3	65.7 黒色頁岩
220	〃	石 鏃	I-C	2.6×4.1×0.7	6.1 黒色頁岩	305	〃	〃	II-B	5.2×6.2×1.2	32.2 黒色頁岩
221	〃	スクレイパー	I-D	6.1×6.1×1.0	29.1 黒色頁岩	306	〃	〃	I-A	4.7×10.1×2.2	72.3 黒色頁岩
222	〃	打製石斧	I	7.1×4.3×1.4	43.5 黒色頁岩	307	〃	スクレイパー	II-A	7.3×4.4×1.2	33.7 黒色頁岩
223	〃	〃	I-B	7.0×6.2×2.5	169.1 石英閃緑岩	308	〃	〃	I-B	11.3×4.5×1.6	69.3 黒色頁岩
224	〃	〃	I-B	9.6×7.6×2.6	297.5 石英閃緑岩	309	〃	〃	I-A	7.9×4.6×1.5	68.5 黒色頁岩
225	〃	〃	II-B	10.8×7.2×4.7	483.5 輝石安山岩	310	〃	打製石斧	I-A	7.6×4.8×1.3	53.0 黒燻石
226	〃	8号住居	I-A	2.6×1.9×0.4	1.1 黒燻石	311	〃	磨 石	—	10.9×4.1×2.3	113.5 変質蛇紋岩
227	〃	〃	I-A	1.8×1.5×0.3	0.3 黒燻石	312	〃	礫 器	I-B	6.8×4.6×2.5	106.6 石英閃緑岩
228	〃	〃	II-B	3.2×2.4×0.7	5.0 珪質頁岩	313	〃	〃	—	5.6×2.5×1.4	16.5 黒色片岩
229	〃	〃	II-A	2.0×1.4×0.4	0.8 黒燻石	314	〃	磨 石	II-B	12.2×7.7×4.8	653.4 輝石安山岩
230	〃	〃	—	1.4×1.6×0.2	0.4 黒燻石	315	〃	磨 石	II-B	12.5×8.1×5.0	719.9 輝石安山岩
231	〃	〃	II-A	2.6×2.1×0.9	3.2 チャート	316	〃	〃	II-A	20.2×9.0×4.8	1390.5 輝石安山岩
232	〃	〃	III-A	2.7×2.4×1.1	5.0 黒燻石	317	〃	礫 器	II-A	11.4×3.3×3.0	208.3 ひん岩
233	〃	石 鏃	II	2.7×1.1×0.3	1.0 珪質変質岩	318	〃	磨 石	II-A	14.0×6.9×3.2	521.8 ひん岩
234	〃	スクレイパー	I-C	9.2×3.8×1.4	39.7 黒色頁岩	319	〃	磨 石	I-B	9.6×7.0×3.2	283.0 輝石安山岩
235	〃	〃	I-B	12.7×5.4×1.5	97.7 黒色頁岩	320	〃	礫 器	I-B	10.5×6.8×3.0	282.6 石英閃緑岩
236	〃	〃	II-A	11.1×7.6×1.7	116.1 黒色頁岩	321	〃	石 皿	III	8.8×6.1×5.2	395.2 輝石安山岩
237	〃	〃	I-B	3.0×4.0×1.0	11.2 黒色頁岩	322	〃	石 皿	I-B	31.4×27.3×8.9	8900.0 輝石安山岩
238	〃	〃	I-A	4.3×5.3×1.2	33.4 黒色頁岩	323	1号土壙	打製石斧	—	4.1×3.4×1.5	22.9 黒色頁岩
239	〃	打製石斧	I	9.4×4.5×2.0	82.3 黒色頁岩	324	2号土壙	石 鏃	III-A	2.1×1.3×0.8	1.6 黒燻石
240	〃	〃	II-A	9.2×5.0×1.8	79.3 黒色頁岩	325	〃	スクレイパー	II-A	7.0×3.5×1.3	37.4 黒色頁岩
241	〃	〃	II-B	10.8×7.1×2.0	113.5 黒色頁岩	326	3号土壙	石 鏃	—	1.8×1.0×0.4	0.6 チャート
242	〃	磨 石	II-A	7.0×8.4×6.0	460.7 輝石安山岩	327	〃	石 匙	II-C	7.5×6.4×0.8	32.1 黒色頁岩
243	〃	〃	III-A	15.5×6.7×3.5	556.8 輝石安山岩	328	〃	打製石斧	II-B	6.3×3.6×0.9	22.5 黒色頁岩
244	〃	〃	III-A	13.8×10.5×5.7	1165.3 輝石安山岩	329	〃	スクレイパー	III	5.3×6.3×1.8	42.4 黒色頁岩
245	〃	〃	II-B	13.2×8.7×4.3	606.3 輝石安山岩	330	4号土壙	〃	I-A	5.7×3.8×0.8	18.8 黒色頁岩
246	〃	〃	II-A	17.7×9.4×5.0	1013.3 輝石安山岩	331	〃	〃	I-C	5.5×3.8×1.0	18.5 黒色頁岩
247	〃	〃	II-A	6.4×10.1×6.9	545.7 輝石安山岩	332	〃	〃	I-A	2.7×2.5×9.4	7.3 チャート
248	〃	蔽礫磨石	II-A	14.6×8.6×4.2	801.1 輝石安山岩	333	6号土壙	〃	I-B	4.5×5.8×1.3	36.3 黒色頁岩
249	〃	〃	III-A	16.4×5.2×3.3	425.5 輝石安山岩	334	〃	〃	I-B	4.2×3.3×1.3	17.7 黒色頁岩
250	〃	〃	—	14.3×3.7×1.7	126.4 雲母石英片岩	335	9号土壙	石 匙	II-A	4.5×2.8×0.6	4.3 チャート
251	〃	〃	II	14.6×9.0×9.3	1029.2 輝石安山岩	336	〃	スクレイパー	I-A	6.6×4.2×1.2	37.1 黒色頁岩
252	〃	〃	—	9.5×6.0×8.0	395.5 輝石安山岩	337	〃	〃	II-B	5.5×7.0×0.9	35.4 黒色頁岩
253	〃	台 石	—	10.2×10.3×3.3	508.0 輝石安山岩	338	〃	打製石斧	II-B	10.6×7.6×2.2	155.7 黒色頁岩
254	〃	〃	—	20.1×17.0×5.7	2410.0 輝石安山岩	339	10号土壙	スクレイパー	I-B	9.2×9.5×1.6	90.2 黒色頁岩
255	〃	〃	II	24.8×21.3×5.4	3550.6 輝石安山岩	340	12号土壙	石 銃	—	9.7×3.2×1.0	28.8 黒色頁岩

第I章 三原田城遺跡

番号	出土位置	種類	分類	計測値(cm・g)	石材	番号	出土位置	種類	分類	計測値(cm・g)	石材		
341	12号土壇	打製石斧	Ⅲ—B	12.0×7.6×2.2	148.7	黒色頁岩	426	78号土壇	磨石	Ⅲ—A	13.1×4.7×3.0	287.3	輝石安山岩
342	〃	〃	Ⅰ—B	12.0×6.9×2.6	188.7	黒色頁岩	427	〃	〃	Ⅲ—A	10.5×5.3×3.1	240.7	ひん岩
343	13号土壇	凹	Ⅱ—B	7.8×5.0×4.0	248.1	輝石安山岩	428	79号土壇	スクレイパー	—	4.1×3.7×1.3	20.3	黒色頁岩
344	14号土壇	スクレイパー	Ⅰ—D	6.4×4.7×1.3	44.5	黒色頁岩	429	〃	〃	Ⅱ—B	5.3×4.8×1.5	36.2	黒色頁岩
345	17号土壇	スクレイパー	Ⅱ—B	9.6×12.7×3.0	205.8	黒色頁岩	430	81号土壇	〃	Ⅰ—A	7.3×6.0×1.9	52.9	黒色頁岩
346	〃	〃	Ⅱ—B	6.1×4.9×1.2	31.4	黒色頁岩	431	〃	磨石	Ⅱ—A	13.3×7.3×4.8	770.8	閃緑岩
347	22号土壇	石	Ⅰ—A	2.5×1.7×0.4	1.1	黒燧石	432	86号土壇	玉	—	10.2×2.4×0.7	26.8	変質蛇紋岩
348	〃	鉄錐	—	2.6×1.2×0.5	0.9	黒燧石	433	89号土壇	匙	Ⅲ—A	6.9×4.7×1.4	31.7	黒色頁岩
349	23号土壇	スクレイパー	—	4.4×1.3×0.4	2.4	黒色頁岩	434	90号土壇	スクレイパー	Ⅱ—C	4.8×3.7×1.0	12.1	黒色頁岩
350	24号土壇	〃	Ⅱ—A	6.2×4.4×1.2	32.9	黒色頁岩	435	92号土壇	石	Ⅰ—A	7.0×2.7×0.8	14.5	珪質頁岩
351	25号土壇	打製石斧	Ⅰ	8.8×4.3×1.1	45.3	黒色頁岩	436	〃	〃	Ⅲ—A	4.9×4.5×0.7	10.4	黒色頁岩
352	〃	磨	—	8.9×4.6×2.8	169.0	変輝緑岩	437	〃	〃	Ⅱ—B	4.3×2.3×0.7	7.2	黒色頁岩
353	〃	状	—	3.0×2.9×0.9	11.6	蛇紋岩	438	〃	スクレイパー	Ⅰ—B	6.9×4.9×1.1	38.2	黒色頁岩
354	〃	〃	—	3.1×1.6×0.7	4.4	滑石	439	〃	打製石斧	—	5.2×4.3×1.7	41.6	黒色頁岩
355	27号土壇	磨石	Ⅲ—B	17.9×8.8×5.2	1132.7	輝石安山岩	440	〃	スクレイパー	Ⅰ—A	6.2×4.8×2.0	50.5	黒色頁岩
356	28号土壇	石	Ⅱ—B	6.2×4.5×0.8	17.3	黒色頁岩	441	〃	〃	Ⅰ—B	7.9×4.4×1.2	38.8	黒色頁岩
357	29号土壇	スクレイパー	Ⅱ—A	5.7×2.8×0.5	8.3	黒色頁岩	442	〃	〃	Ⅰ—A	8.6×6.2×1.5	68.4	黒色頁岩
358	〃	〃	Ⅱ—B	4.9×6.0×1.6	37.6	黒色頁岩	443	〃	〃	Ⅰ—B	8.0×5.1×1.9	75.8	黒色頁岩
359	〃	〃	Ⅰ—C	8.2×7.3×0.9	54.7	黒色頁岩	444	〃	打製石斧	Ⅱ—B	7.2×4.2×1.8	43.5	黒色頁岩
360	〃	〃	Ⅰ	6.9×3.8×1.4	45.1	黒色頁岩	445	〃	〃	Ⅱ—B	5.1×3.7×1.3	18.9	黒色頁岩
361	〃	磨	Ⅱ—A	13.4×10.4×6.8	1394.7	輝石安山岩	446	〃	礫器	—	8.1×4.2×1.8	88.9	紅礫片岩
362	〃	凹	Ⅱ—B	8.0×7.5×4.8	318.2	輝石安山岩	447	94号土壇	石	Ⅰ—C	1.7×1.8×0.5	1.2	チャート
363	30号土壇	打製石斧	—	5.6×5.0×1.4	36.6	黒色頁岩	448	〃	〃	Ⅲ—A	3.2×2.4×0.8	5.1	黒色頁岩
364	〃	磨	Ⅱ—A	10.1×8.4×6.2	701.2	輝石安山岩	449	〃	石	Ⅲ	4.7×4.9×0.8	14.0	黒色頁岩
365	〃	〃	Ⅱ—A	12.0×7.6×5.5	660.3	輝石安山岩	450	〃	スクレイパー	Ⅳ	9.4×6.2×2.1	97.9	黒色頁岩
366	〃	石	Ⅲ	15.6×14.0×6.2	1392.4	輝石安山岩	451	〃	〃	Ⅰ—B	10.1×11.4×9.5	35.3	黒色頁岩
367	〃	〃	Ⅱ	10.4×18.5×5.9	1720.0	輝石安山岩	452	〃	〃	Ⅱ—B	6.1×5.2×1.1	36.6	黒色頁岩
368	32号土壇	石	Ⅱ—B	1.9×1.5×0.3	0.9	チャート	453	〃	〃	Ⅰ—A	4.6×3.5×0.7	14.4	黒色頁岩
369	〃	〃	Ⅱ—B	3.4×2.3×0.8	5.8	黒色頁岩	454	96号土壇	石	Ⅲ	13.5×9.6×9.3	1098.8	輝石安山岩
370	33号土壇	〃	Ⅰ—C	1.6×2.0×0.3	0.5	黒燧石	455	100号土壇	石	Ⅱ—B	5.9×4.0×8.5	13.4	チャート
371	〃	打製石斧	Ⅲ	1.2×8.5×3.5	352.6	黒色頁岩	456	101号土壇	石	Ⅲ	34.9×36.1×9.3	9710.0	輝石安山岩
372	〃	磨	Ⅱ—B	14.6×9.6×5.0	992.1	輝石安山岩	457	〃	〃	Ⅰ—A	39.4×29.0×8.7	12.7kg	輝石安山岩
373	〃	〃	Ⅱ—A	12.0×7.8×4.8	732.3	輝石安山岩	458	102号土壇	磨石	Ⅱ—B	13.2×7.4×4.3	599.7	輝石安山岩
374	37号土壇	スクレイパー	Ⅰ—A	4.4×4.7×0.9	23.8	黒色頁岩	459	〃	石	Ⅲ	13.5×19.0×6.5	1949.9	輝石安山岩
375	43号土壇	石	Ⅲ	1.7×1.3×0.3	0.4	黒燧石	460	105号土壇	石	Ⅱ—B	12.6×8.3×6.7	843.6	輝石安山岩
376	〃	〃	Ⅲ—A	3.3×2.5×1.2	8.2	赤色珪質岩	461	〃	磨	Ⅱ—B	17.3×10.7×5.6	1560.9	輝石安山岩
377	〃	石	Ⅱ—B	5.3×2.7×0.6	5.0	黒燧石	462	〃	石	Ⅰ—A	19.0×24.0×7.8	4220.0	輝石安山岩
378	〃	磨	Ⅱ—A	15.2×10.0×4.7	1008.6	ひん岩	463	〃	〃	Ⅰ—A	20.0×32.6×7.1	5840.0	輝石安山岩
379	51号土壇	打製石斧	Ⅰ	5.8×3.4×0.7	12.3	黒色頁岩	464	107号土壇	石	Ⅱ—B	6.9×4.1×0.8	18.0	黒色頁岩
380	53号土壇	磨	—	6.5×4.1×1.0	28.6	黒色頁岩	465	108号土壇	スクレイパー	Ⅰ—D	6.4×6.8×1.5	56.2	黒色頁岩
381	54号土壇	打製石斧	Ⅰ—B	12.1×6.4×2.3	296.9	輝石安山岩	466	109号土壇	石	Ⅲ	4.5×2.9×1.1	15.0	黒色頁岩
382	55号土壇	石	Ⅱ—B	4.1×4.2×0.7	8.1	黒色頁岩	467	〃	スクレイパー	—	3.8×2.8×1.0	3.8	珪質頁岩
383	〃	スクレイパー	Ⅰ—B	6.2×3.0×0.7	22.7	黒色頁岩	468	〃	打製石斧	Ⅰ	7.4×4.3×1.2	41.8	黒色頁岩
384	〃	磨	Ⅰ—B	10.9×9.7×5.8	832.3	輝石安山岩	469	111号土壇	石	Ⅰ—A	1.7×1.7×0.3	0.6	チャート
385	〃	石	Ⅱ—B	24.1×18.8×5.2	7660.0	輝石安山岩	470	〃	スクレイパー	Ⅱ—B	3.5×4.2×1.1	16.7	黒色頁岩
386	〃	石	Ⅲ	33.1×27.2×6.2	297.1	輝石安山岩	471	〃	〃	Ⅰ—B	5.8×3.2×0.8	19.3	黒色頁岩
387	57号土壇	スクレイパー	Ⅰ—B	3.7×6.8×1.1	33.9	黒色頁岩	472	112号土壇	石	Ⅰ—A	2.0×1.9×0.3	0.5	黒燧石
388	〃	〃	Ⅱ—A	4.8×2.0×0.3	7.5	黒色安山岩	473	〃	鉄錐	Ⅱ—B	5.0×7.0×1.3	36.5	黒色頁岩
389	〃	石	Ⅲ	2.0×1.7×0.4	1.4	黒燧石	474	〃	礫器	Ⅲ	7.5×11.0×1.4	161.4	黒色頁岩
390	58号土壇	スクレイパー	Ⅱ—A	8.2×5.4×1.3	46.0	黒色頁岩	475	113号土壇	磨	—	3.6×2.0×0.6	3.6	黒色頁岩
391	〃	〃	Ⅰ—B	5.5×3.2×0.6	11.7	黒色頁岩	476	114号土壇	磨	Ⅱ—A	14.2×10.7×4.1	996.3	石英閃緑岩
392	〃	打製石斧	—	5.2×3.4×1.2	27.0	黒色頁岩	477	115号土壇	スクレイパー	Ⅰ—B	10.9×4.8×2.0	97.9	黒色頁岩
393	〃	磨	Ⅰ—B	6.5×6.0×3.4	161.0	輝石安山岩	478	116号土壇	石	Ⅰ—C	1.4×1.5×0.3	0.4	黒燧石
394	〃	磨	Ⅲ	13.2×6.9×2.9	426.8	輝石安山岩	479	117号土壇	スクレイパー	Ⅰ—B	4.4×4.2×1.5	30.8	黒色頁岩
395	59号土壇	スクレイパー	Ⅰ—A	10.0×4.9×1.4	68.8	チャート	480	〃	石	Ⅱ—B	10.2×6.3×3.6	314.4	輝石安山岩
396	〃	〃	Ⅰ—A	9.1×5.5×1.4	60.2	黒色頁岩	481	〃	磨	Ⅱ—A	9.1×8.6×4.8	606.3	輝石安山岩
397	〃	〃	Ⅰ—C	5.8×7.2×1.4	37.2	黒色頁岩	482	〃	石	Ⅰ—A	15.6×15.9×6.8	2090.0	輝石安山岩
398	〃	打製石斧	Ⅰ—A	11.5×5.4×1.7	96.0	黒色頁岩	483	〃	石	Ⅲ	18.7×10.9×9.3	1648.8	輝石安山岩
399	〃	磨	Ⅱ—B	14.3×8.0×5.5	905.7	輝石安山岩	484	〃	〃	Ⅲ	16.3×13.3×9.0	2340.0	輝石安山岩
400	60号土壇	石	—	11.6×3.6×1.9	75.2	黒色頁岩	485	121号土壇	スクレイパー	Ⅱ—A	3.4×2.5×0.6	3.8	珪質凝灰岩
401	〃	〃	Ⅱ	1.2×3.5×0.6	2.1	珪質変質岩	486	122号土壇	石	Ⅱ—A	3.8×2.5×1.1	8.1	チャート
402	〃	打製石斧	Ⅱ—A	9.8×5.9×1.3	55.9	黒色頁岩	487	〃	スクレイパー	Ⅰ—B	6.0×5.2×1.3	23.9	黒色頁岩
403	〃	〃	Ⅱ—A	7.5×4.6×1.7	47.7	黒色頁岩	488	125号土壇	尖頭器	Ⅰ—A	11.6×3.7×1.5	74.9	珪質頁岩
404	〃	スクレイパー	Ⅰ—C	4.1×1.4×0.5	2.2	黒燧石	489	〃	石	Ⅲ—A	5.0×4.8×1.0	19.5	黒色頁岩
405	〃	〃	—	2.9×1.7×0.9	3.9	黒燧石	490	〃	スクレイパー	Ⅰ—B	5.9×3.7×1.0	15.6	黒色頁岩
406	〃	打製石斧	Ⅱ—B	7.9×6.0×8.1	41.8	黒色頁岩	491	〃	磨	Ⅰ—A	5.0×4.8×1.0	19.5	黒色頁岩
407	〃	凹	Ⅱ—B	10.7×7.5×3.1	326.9	輝石安山岩	492	126号土壇	スクレイパー	Ⅰ—C	4.9×4.5×1.1	20.2	黒色頁岩
408	〃	凹	Ⅱ—B	12.9×8.1×5.1	835.8	輝石安山岩	493	129号土壇	〃	Ⅱ—B	11.7×6.0×2.4	158.5	黒色頁岩
409	62号土壇	磨	Ⅰ—B	9.6×6.9×2.3	216.7	ひん岩	494	〃	石	Ⅲ—A	13.1×5.2×3.5	356.2	石英閃緑岩
410	66号土壇	スクレイパー	Ⅰ—C	4.2×3.0×0.9	8.7	黒色頁岩	495	132号土壇	台	—	28.3×20.2×11.0	9000.0	輝石安山岩
411	〃	〃	Ⅰ—A	7.8×4.9×1.4	57.3	黒色頁岩	496	133号土壇	石	Ⅱ	2.3×1.5×0.4	1.6	黒色頁岩
412	〃	〃	Ⅰ—B	8.1×6.4×2.3	107.0	黒色頁岩	497	〃	スクレイパー	Ⅰ—C	7.1×3.9×1.3	33.0	黒色頁岩
413	〃	〃	Ⅱ—B	11.7×8.1×1.8	167.8	黒色頁岩	498	〃	打製石斧	Ⅱ—A	8.3×5.3×1.4	65.0	黒色頁岩
414	〃	凹	Ⅱ—B	16.2×7.7×3.7	682.6	輝石安山岩	499	〃	磨	Ⅰ—B	4.3×4.8×2.2	72.5	石英閃緑岩
415	68号土壇	石	Ⅰ—C	3.7×2.0×0.4	2.9	黒色頁岩	500	134号土壇	スクレイパー	Ⅰ—C	6.5×4.2×0.9	21.4	黒色頁岩
416	69号土壇	スクレイパー	Ⅱ—A	3.6×1.7×0.9	4.2	黒燧石	501	〃	エ	—	3.8×2.5×1.3	9.3	チャート
417	〃	〃	Ⅰ—B	7.7×4.9×1.4	46.7	黒色頁岩	502	〃	〃	Ⅰ—C	4.8×2.1×0.8	7.7	黒色頁岩
418	〃	磨	Ⅲ—A	15.9×6.0×4.1	735.4	溶結凝灰岩	503	〃	磨	Ⅰ—B	7.5×6.5×2.4	172.6	石英閃緑岩
419	〃	磨	Ⅲ—A	9.6×4.0×2.6	153.2	輝石安山岩	504	135号土壇	打製石斧	Ⅱ—A	6.6×5.6×1.5	53.3	黒色頁岩
420	70号土壇	管	—	1.3×0.8	1.3	滑石	505	〃	磨	Ⅱ—A	11.8×8.8×4.5	630.8	輝石安山岩
421	71号土壇	スクレイパー	Ⅱ—A	3.5×4.7×0.5	6.6	黒色頁岩	506	〃	〃	Ⅱ—A	16.9×10.5×4.0	1042.3	溶結凝灰岩
422	75号土壇	石	Ⅰ—B	5.8×1.7×0.6	5.8	黒燧石	507	〃	〃	Ⅲ—A	10.6×5.5×2.1	236.0	輝石安山岩
423	〃	磨	Ⅱ—B	10.1×8.0×4.8	556.7	輝石安山岩	508	〃	〃	Ⅲ—A	12.1×6.5×2.9	371.0	ひん岩
424	〃	〃	Ⅱ—A	9.0×6.9×4.1	400.5	輝石安山岩	509	〃	〃	Ⅱ—A	13.1×8.6×4.4	777.3	輝石安山岩
425	76号土壇	スクレイパー	Ⅰ—B	7.1×5.1×1.3	44.9	黒色頁岩	510	〃	〃	Ⅱ—B	14.4×7.6×4.0	618.7	輝石安山岩

第4節 遺構と遺物

番号	出土位置	種類	分類	計測値(cm・g)	石 材	番号	出土位置	種類	分類	計測値(cm・g)	石 材		
511	135号土城	磨石	Ⅲ-A	11.9×5.8×3.8	341.8	溶結凝灰岩	596	遺構外	石	Ⅲ-A	3.5×2.8×0.9	8.2	珪質頁岩
512	〃	〃	Ⅱ-A	14.4×10.4×4.5	958.5	輝石安山岩	597	〃	〃	Ⅲ-A	2.7×1.4×0.6	2.3	黒燻石
513	〃	石皿	Ⅰ-B	25.2×20.4×7.5	4430.0	輝石安山岩	598	〃	〃	Ⅲ-A	1.9×1.4×0.5	1.2	チャート
514	136号土城	石皿	Ⅰ-A	1.6×1.2×0.3	0.5	チャート	599	〃	〃	Ⅲ-A	1.9×1.6×0.5	1.0	黒燻石
515	〃	スクレイパー	Ⅰ-A	3.7×2.9×0.8	7.4	チャート	600	〃	〃	Ⅲ-B	3.0×1.5×0.5	1.8	黒燻石
516	〃	〃	Ⅰ-B	5.0×3.7×1.4	23.3	黒色頁岩	601	〃	〃	—	2.5×1.6×0.5	1.7	チャート
517	〃	〃	Ⅲ	3.8×3.6×1.2	12.4	黒色頁岩	602	〃	尖頭器	—	8.1×2.2×0.9	14.0	黒色頁岩
518	〃	打製石斧	—	9.2×6.4×4.3	239.0	黒色頁岩	603	〃	〃	—	4.1×1.3×0.8	4.2	黒色頁岩
519	〃	礫	—	10.5×3.7×1.2	71.0	雲母石英片岩	604	〃	〃	—	3.9×1.3×0.4	2.4	黒色頁岩
520	137号土城	スクレイパー	Ⅱ-A	7.9×5.2×0.7	30.7	点紋頁岩	605	〃	〃	—	4.3×1.3×0.5	2.7	黒色頁岩
521	〃	磨石	Ⅰ-B	20.8×10.7×4.1	641.9	ひん岩	606	〃	〃	—	4.0×0.9×0.5	1.7	黒色頁岩
522	〃	石	Ⅰ-B	11.0×8.9×4.6	1571.0	玄武岩	607	〃	〃	—	2.7×1.0×0.4	1.2	黒色頁岩
523	〃	石	Ⅲ	24.0×17.4×3.9	2830.0	輝石安山岩	608	〃	〃	—	2.5×1.4×0.7	1.9	黒色頁岩
524	1号溝	石皿	Ⅳ	3.4×2.1×0.6	5.2	変質岩	609	〃	石	Ⅳ	3.4×2.5×0.8	8.4	チャート
525	〃	スクレイパー	Ⅱ-A	7.1×4.1×1.2	32.1	黒色頁岩	610	〃	〃	—	2.1×1.6×0.6	1.7	黒燻石
526	〃	〃	Ⅱ-A	6.1×3.7×1.2	22.0	黒色頁岩	611	〃	剥片状石	—	2.1×1.6×0.4	1.0	黒燻石
527	〃	打製石斧	Ⅰ	3.5×3.5×0.8	12.3	黒色頁岩	612	〃	器	—	1.4×0.8×0.4	0.8	蛇紋岩
528	〃	〃	Ⅰ	8.3×4.7×2.1	51.9	黒色頁岩	613	〃	〃	Ⅳ	5.9×4.5×1.1	19.1	珪質頁岩
529	〃	石皿	Ⅰ-B	17.3×13.0×4.4	960.9	輝石安山岩	614	〃	〃	Ⅰ-A	8.5×1.2×0.8	16.8	黒色頁岩
530	2号溝	スクレイパー	Ⅰ-B	8.4×4.7×1.1	37.4	黒色頁岩	615	〃	〃	Ⅰ-A	1.6×3.6×1.2	42.0	黒色頁岩
531	〃	〃	Ⅰ-B	7.3×4.5×1.1	45.3	黒色頁岩	616	〃	〃	Ⅰ-B	6.4×3.1×0.6	8.8	珪質頁岩
532	〃	〃	Ⅰ-B	6.8×4.3×1.5	46.3	黒色頁岩	617	〃	〃	Ⅱ-A	4.2×3.1×0.8	5.8	黒燻石
533	〃	打製石斧	Ⅱ-A	6.5×4.6×1.2	37.5	黒色頁岩	618	〃	〃	Ⅱ-B	7.2×3.8×0.7	14.0	黒色頁岩
534	〃	スクレイパー	Ⅱ-A	9.7×6.9×1.6	103.2	黒色頁岩	619	〃	〃	Ⅱ-A	5.8×4.2×0.8	13.7	黒色頁岩
535	〃	〃	Ⅱ-B	5.9×5.8×1.4	39.5	黒色頁岩	620	〃	〃	Ⅱ-B	7.7×5.6×0.8	26.7	黒色頁岩
536	〃	〃	Ⅲ	7.2×7.8×1.7	115.7	黒色頁岩	621	〃	〃	Ⅱ-B	4.0×3.4×4.5	5.5	黒色頁岩
537	〃	〃	Ⅰ-A	4.9×5.1×1.6	51.9	黒色頁岩	622	〃	〃	Ⅱ-A	4.6×2.9×0.7	6.1	珪質頁岩
538	〃	打製石斧	Ⅱ-A	10.5×7.5×1.8	142.2	黒色頁岩	623	〃	〃	Ⅱ-C	6.3×4.3×0.8	17.8	黒色頁岩
539	〃	打製石斧	—	6.6×4.2×1.4	43.9	黒色頁岩	624	〃	〃	Ⅱ-A	7.9×4.8×0.8	22.4	黒色頁岩
540	3号溝	石皿	Ⅰ-B	1.8×1.3×0.3	0.7	黒色安山岩	625	〃	〃	Ⅱ-B	5.4×4.8×0.8	15.9	黒色頁岩
541	〃	〃	Ⅱ-A	1.8×1.3×0.3	0.6	黒燻石	626	〃	〃	Ⅲ-B	5.0×3.7×0.8	10.4	黒色頁岩
542	〃	〃	Ⅱ-A	3.2×2.5×0.6	4.3	黒色頁岩	627	〃	石	Ⅲ-B	6.7×5.4×1.5	44.0	黒色頁岩
543	〃	打製石斧	Ⅲ	11.2×7.7×3.9	334.9	黒色頁岩	628	〃	〃	Ⅲ-A	6.4×7.6×1.3	56.9	黒色頁岩
544	〃	〃	—	3.7×4.3×1.1	23.9	黒色頁岩	629	〃	〃	—	4.6×2.4×0.8	5.1	黒色頁岩
545	〃	磨製石斧	—	6.4×4.0×1.6	72.7	凝灰岩	630	〃	〃	—	3.0×2.2×0.5	2.9	チャート
546	4号溝	スクレイパー	Ⅱ-B	3.8×4.2×1.0	13.8	黒色頁岩	631	〃	〃	Ⅲ-B	6.9×4.8×0.8	28.5	黒色頁岩
547	5号溝	石皿	Ⅰ-A	1.9×1.2×0.3	0.3	黒燻石	632	〃	〃	Ⅲ-B	7.6×5.3×0.7	62.1	黒色頁岩
548	〃	〃	Ⅰ-B	2.0×2.4×0.8	2.8	黒燻石	633	〃	〃	—	3.6×3.8×0.8	8.8	黒色頁岩
549	〃	スクレイパー	Ⅰ-B	8.7×6.1×2.5	97.5	黒色頁岩	634	〃	〃	Ⅱ-C	6.9×5.7×0.9	34.5	黒色頁岩
550	〃	〃	Ⅰ-B	9.0×5.5×1.5	86.4	黒色頁岩	635	〃	〃	Ⅲ-B	8.0×4.9×1.5	43.9	黒色頁岩
551	〃	〃	Ⅰ-B	8.2×5.1×1.6	54.9	黒色頁岩	636	〃	スクレイパー	Ⅱ-A	10.8×4.5×1.1	51.3	黒色頁岩
552	〃	〃	Ⅰ-B	10.7×5.4×1.1	65.8	黒色頁岩	637	〃	〃	Ⅲ	8.6×5.9×1.8	85.2	黒色頁岩
553	〃	スクレイパー	Ⅰ-B	6.5×3.6×1.5	32.9	黒色頁岩	638	〃	スクレイパー	Ⅰ-B	6.5×5.4×2.1	76.1	黒色頁岩
554	〃	〃	Ⅰ-A	7.2×4.0×1.2	28.9	黒色頁岩	639	〃	スクレイパー	Ⅱ-A	5.4×4.1×9.4	18.5	黒色頁岩
555	〃	打製石斧	Ⅰ	9.3×4.2×1.3	67.4	黒色頁岩	640	〃	スクレイパー	Ⅰ-B	9.7×6.1×1.8	91.2	黒色頁岩
556	〃	打製石斧	Ⅱ-A	5.3×5.9×1.3	49.7	黒色頁岩	641	〃	〃	Ⅰ-C	8.2×7.0×1.9	138.9	黒色頁岩
557	6号溝	石皿	Ⅰ-A	2.6×1.4×0.5	1.1	黒燻石	642	〃	〃	Ⅰ-B	5.6×7.1×1.6	58.6	黒色頁岩
558	遺構外	石皿	Ⅰ-A	2.5×1.7×0.4	1.1	チャート	643	〃	〃	Ⅰ-B	7.9×8.0×2.2	146.2	黒色頁岩
559	〃	〃	Ⅰ-A	2.4×2.2×0.4	1.8	黒色安山岩	644	〃	スクレイパー	Ⅰ-B	6.8×4.0×1.1	32.7	黒色頁岩
560	〃	〃	Ⅰ-A	1.7×1.6×0.4	0.6	黒燻石	645	〃	〃	Ⅰ-B	9.1×4.9×1.2	64.7	黒色頁岩
561	〃	〃	Ⅰ-A	2.2×1.8×0.4	1.1	チャート	646	〃	〃	Ⅰ-B	5.3×4.9×1.2	34.2	黒色頁岩
562	〃	〃	Ⅰ-A	1.8×1.6×0.3	0.5	チャート	647	〃	〃	Ⅱ-C	7.6×3.7×8.6	20.3	黒色頁岩
563	〃	〃	Ⅰ-A	1.6×1.4×0.5	0.7	黒燻石	648	〃	〃	Ⅱ-B	6.5×4.4×1.1	37.7	黒色頁岩
564	〃	〃	Ⅰ-A	1.8×1.7×0.5	1.0	チャート	649	〃	石	Ⅲ	3.7×4.4×1.1	14.0	黒色頁岩
565	〃	〃	Ⅰ-A	2.1×1.7×0.4	0.9	チャート	650	〃	打製石斧	Ⅰ	7.2×3.4×1.2	33.3	黒色頁岩
566	〃	〃	Ⅰ-A	1.7×1.3×0.3	0.4	黒燻石	651	〃	〃	Ⅰ	7.5×3.6×1.5	42.6	黒色頁岩
567	〃	〃	Ⅰ-A	1.6×1.3×0.2	0.3	黒燻石	652	〃	〃	Ⅰ	1.2×5.2×1.6	136.3	黒色頁岩
568	〃	〃	Ⅰ-A	1.5×1.4×0.3	0.3	黒燻石	653	〃	打製石斧	Ⅰ	8.3×3.6×1.3	44.1	黒色頁岩
569	〃	〃	Ⅰ-A	1.7×1.5×0.5	0.6	黒燻石	654	〃	〃	Ⅰ	5.6×4.3×13.5	40.1	黒色頁岩
570	〃	〃	Ⅰ-A	1.5×1.5×0.3	0.4	チャート	655	〃	〃	—	3.2×3.0×0.7	7.6	黒色頁岩
571	〃	〃	Ⅰ-A	2.3×1.4×0.3	0.7	珪質頁岩	656	〃	〃	Ⅱ-B	8.3×5.8×1.8	79.1	黒色頁岩
572	〃	〃	Ⅰ-B	2.5×1.6×0.4	1.5	黒色安山岩	657	〃	〃	Ⅱ-B	7.0×6.1×1.6	63.6	黒色頁岩
573	〃	〃	Ⅰ-A	1.9×1.5×0.4	0.8	黒燻石	658	〃	〃	Ⅱ-B	7.7×5.6×1.8	71.9	黒色頁岩
574	〃	〃	Ⅰ-B	1.8×1.4×0.4	0.6	黒燻石	659	〃	〃	Ⅱ-B	6.4×5.6×1.5	46.3	黒色頁岩
575	〃	〃	Ⅰ-A	1.4×0.9×0.2	0.2	黒燻石	660	〃	〃	Ⅱ-A	9.3×7.6×2.1	116.5	黒色頁岩
576	〃	〃	Ⅰ-B	2.1×2.0×0.4	1.4	チャート	661	〃	〃	Ⅱ-A	8.7×6.2×1.9	72.3	黒色頁岩
577	〃	〃	Ⅰ-C	1.3×1.6×0.3	0.4	黒燻石	662	〃	打製石斧	Ⅱ-B	14.5×7.9×2.2	254.7	黒色頁岩
578	〃	〃	Ⅰ-B	2.1×1.9×0.5	1.2	黒色安山岩	663	〃	スクレイパー	—	10.6×11.9×2.1	299.2	黒色頁岩
579	〃	〃	Ⅰ-A	1.9×1.3×0.4	0.8	黒燻石	664	〃	磨製石斧	—	6.3×4.9×2.7	120.5	珪質頁岩
580	〃	〃	Ⅰ-B	1.9×1.4×0.4	0.7	黒燻石	665	〃	磨製石斧	—	6.9×3.8×2.3	99.4	閃緑岩
581	〃	〃	Ⅰ-C	1.6×1.6×0.3	0.4	チャート	666	〃	磨製石斧	Ⅰ-B	10.6×6.9×3.9	4.6	石英閃緑岩
582	〃	〃	Ⅰ-B	2.3×1.6×0.4	0.9	黒色安山岩	667	〃	磨製石斧	Ⅲ-A	14.8×5.8×3.9	597.9	ひん岩
583	〃	〃	Ⅰ-B	2.2×1.8×0.9	1.6	チャート	668	〃	磨製石斧	Ⅲ-A	9.7×6.3×4.1	296.3	輝石安山岩
584	〃	〃	Ⅰ-B	2.7×1.7×0.4	1.9	チャート	669	〃	〃	Ⅲ-A	13.9×1.7×3.9	578.5	石英閃緑岩
585	〃	〃	Ⅰ-A	1.8×1.1×0.5	0.7	チャート	670	〃	〃	Ⅰ-B	7.7×6.0×3.3	232.5	輝石安山岩
586	〃	〃	Ⅱ-A	1.8×1.3×0.4	0.5	黒燻石	671	〃	磨石	Ⅰ-B	5.8×5.3×2.2	101.3	輝石安山岩
587	〃	〃	Ⅱ-A	1.6×1.5×0.5	1.0	黒燻石	672	〃	〃	Ⅰ-A	5.7×3.7×3.6	104.9	花崗岩
588	〃	〃	Ⅱ-A	2.6×2.2×0.5	2.3	黒色頁岩	673	〃	〃	Ⅱ-A	12.7×7.2×4.1	583.5	石英閃緑岩
589	〃	〃	Ⅱ-A	15.8×7.5×5.0	881.8	輝石安山岩	674	〃	〃	Ⅱ-A	10.2×6.8×3.7	363.0	石英閃緑岩
590	〃	〃	Ⅱ-A	1.5×1.2×0.3	0.4	チャート	675	〃	〃	Ⅱ-A	10.5×6.5×2.3	237.1	輝石安山岩
591	〃	〃	Ⅱ-A	2.8×2.6×1.1	7.7	赤色珪質岩	676	〃	〃	Ⅲ-A	9.9×4.9×4.4	307.7	花崗岩
592	〃	〃	Ⅱ-A	2.2×1.9×0.5	1.7	チャート	677	〃	〃	Ⅱ-A	13.4×8.0×4.0	657.2	輝石安山

第I章 三原田城遺跡

番号	出土位置	種類	分類	計測値(cm・g)	石材	番号	出土位置	種類	分類	計測値(cm・g)	石材
681	遺構外	磨石	Ⅲ-A	15.8×7.5×5.0	輝石安山岩	766	遺構外	スクレイパー	Ⅱ-B	8.0×6.7×1.4	85.1 黒色頁岩
682	〃	〃	Ⅱ-A	18.4×9.1×5.1	輝石安山岩	767	〃	打製石斧	Ⅱ-B	11.4×6.3×2.0	51.2 黒色頁岩
683	〃	〃	Ⅱ-B	13.0×7.2×4.3	輝石安山岩	768	〃	スクレイパー	Ⅱ-B	6.7×4.7×1.3	39.8 黒色頁岩
684	〃	〃	Ⅱ-A	12.6×10.0×5.8	輝石安山岩	769	〃	〃	Ⅰ-A	8.3×6.3×1.3	74.2 黒色頁岩
685	〃	磨石	Ⅱ-B	16.4×8.6×4.5	輝石安山岩	770	〃	打製石斧	Ⅰ	10.0×5.3×1.6	114.5 黒色頁岩
686	〃	〃	Ⅰ-B	19.1×9.7×6.3	輝石安山岩	771	〃	〃	Ⅱ-B	10.0×6.5×1.9	130.3 黒色頁岩
687	〃	〃	Ⅰ-A	43.3×30.2×8.0	輝石安山岩	772	〃	〃	Ⅱ-B	10.0×5.6×1.5	95.8 黒色頁岩
688	〃	打製石斧	Ⅲ	14.6×6.5×3.6	黒色頁岩	773	〃	スクレイパー	Ⅱ-A	9.5×8.2×2.0	146.6 黒色頁岩
689	〃	〃	Ⅱ-B	8.1×5.5×1.2	黒色頁岩	774	〃	打製石斧	Ⅱ-A	5.2×5.6×1.4	43.3 黒色頁岩
690	〃	スクレイパー	Ⅰ-B	10.0×4.8×2.1	黒色頁岩	775	〃	スクレイパー	Ⅱ-A	6.2×4.7×1.5	44.0 黒色頁岩
691	〃	打製石斧	Ⅲ	13.0×8.1×2.0	黒色頁岩	776	〃	打製石斧	Ⅲ	13.0×7.6×2.4	301.0 黒色頁岩
692	〃	〃	Ⅲ	8.3×6.2×1.9	黒色頁岩	777	〃	〃	Ⅱ-A	6.9×4.9×1.6	49.2 黒色頁岩
693	〃	礫	—	11.4×5.2×1.4	黒色頁岩	778	〃	スクレイパー	Ⅱ-B	7.8×5.7×1.4	53.0 黒色頁岩
694	〃	磨製石器	—	7.0×4.2×1.2	黒色頁岩	779	〃	打製石斧	Ⅰ-B	6.5×7.8×1.7	84.2 黒色頁岩
695	〃	スクレイパー	Ⅰ-C	10.3×6.2×2.0	黒色頁岩	780	〃	打製石斧	Ⅰ	9.8×4.3×1.6	76.0 黒色頁岩
696	〃	〃	Ⅰ-D	4.3×3.7×1.0	黒色頁岩	781	〃	スクレイパー	Ⅱ-A	11.1×5.6×1.7	85.1 黒色頁岩
697	〃	〃	Ⅰ-B	8.7×4.4×1.3	黒色頁岩	782	〃	〃	Ⅲ	5.4×5.6×1.0	22.9 黒色頁岩
698	〃	〃	Ⅰ-B	8.3×6.0×2.1	黒色頁岩	783	〃	〃	Ⅰ-C	9.5×4.7×1.4	59.3 黒色頁岩
699	〃	〃	Ⅰ-B	7.7×5.4×1.8	黒色頁岩	784	〃	〃	Ⅰ-B	6.6×5.2×1.4	48.2 黒色頁岩
700	〃	〃	Ⅱ-B	6.6×5.7×1.6	黒色頁岩	785	〃	〃	Ⅰ-D	5.8×4.4×1.2	29.9 黒色頁岩
701	〃	〃	Ⅰ-A	5.4×4.5×1.1	黒色頁岩	786	〃	〃	Ⅲ	7.5×6.8×1.8	58.6 黒色頁岩
702	〃	〃	Ⅱ-B	7.9×5.9×1.9	黒色頁岩	787	〃	打製石斧	Ⅱ-A	9.0×4.8×1.2	55.2 黒色頁岩
703	〃	〃	Ⅰ-B	11.3×4.9×2.3	黒色頁岩	788	〃	〃	Ⅱ-A	6.4×4.5×1.2	37.7 黒色頁岩
704	〃	〃	Ⅰ-D	5.6×5.3×1.2	黒色頁岩	789	〃	〃	Ⅱ-B	8.0×6.4×1.7	78.4 黒色頁岩
705	〃	〃	Ⅰ-B	6.8×4.6×1.5	黒色頁岩	790	〃	〃	Ⅱ-B	8.4×5.0×1.4	60.0 黒色頁岩
706	〃	〃	Ⅰ-C	6.6×3.9×1.0	黒色頁岩	791	〃	スクレイパー	Ⅲ	7.9×6.0×1.4	58.1 黒色頁岩
707	〃	〃	Ⅰ-B	9.8×5.3×1.6	黒色頁岩	792	〃	〃	Ⅲ	8.2×4.1×1.1	37.7 黒色頁岩
708	〃	〃	Ⅰ-B	8.0×4.4×1.3	黒色頁岩	793	〃	打製石斧	Ⅰ	10.8×5.0×1.6	94.5 黒色頁岩
709	〃	〃	Ⅰ-B	5.9×4.4×1.5	黒色頁岩	794	〃	〃	Ⅱ-B	5.7×6.3×1.8	112.5 黒色頁岩
710	〃	打製石斧	Ⅰ-B	6.0×4.5×2.0	黒色頁岩	795	〃	打製石斧	Ⅱ-B	9.6×5.3×2.1	92.9 黒色頁岩
711	〃	スクレイパー	Ⅰ-B	7.0×5.7×1.7	黒色頁岩	796	〃	〃	Ⅱ-B	9.6×5.4×2.3	101.2 黒色頁岩
712	〃	〃	Ⅰ-B	5.7×5.1×0.8	黒色頁岩	797	〃	〃	Ⅱ-A	8.0×5.9×1.8	90.4 黒色頁岩
713	〃	〃	Ⅰ-B	5.0×4.0×1.1	黒色頁岩	798	〃	〃	Ⅱ-B	6.9×5.2×1.6	73.1 黒色頁岩
714	〃	〃	Ⅰ-B	7.4×3.7×1.0	黒色頁岩	799	〃	〃	Ⅱ-B	9.3×5.8×1.8	91.2 黒色頁岩
715	〃	〃	Ⅰ-B	6.9×5.1×1.1	黒色頁岩	800	〃	〃	Ⅰ	8.3×4.3×1.7	62.4 黒色頁岩
716	〃	〃	Ⅰ-B	8.6×7.2×2.5	黒色頁岩	801	〃	石 匙	Ⅲ-A	4.2×4.5×1.0	12.2 黒色頁岩
717	〃	〃	Ⅰ-B	7.5×6.5×1.5	黒色頁岩	802	〃	スクレイパー	Ⅱ-A	9.0×5.7×1.4	64.4 黒色頁岩
718	〃	〃	Ⅰ-B	6.8×4.7×1.3	黒色頁岩	803	〃	打製石斧	Ⅱ-A	7.4×4.8×1.8	55.1 黒色頁岩
719	〃	〃	Ⅱ-A	10.1×5.9×1.0	黒色頁岩	804	〃	スクレイパー	Ⅲ	5.9×5.3×1.0	16.9 黒色頁岩
720	〃	〃	Ⅰ-C	8.4×3.3×1.8	黒色頁岩	805	〃	打製石斧	Ⅲ	8.5×7.2×3.2	215.6 黒色頁岩
721	〃	〃	Ⅰ-A	5.9×3.7×1.0	黒色頁岩	806	〃	スクレイパー	Ⅰ-C	4.3×2.7×1.3	13.7 黒色頁岩
722	〃	〃	Ⅱ-A	6.5×4.7×0.9	黒色頁岩	807	〃	〃	Ⅰ-D	5.9×6.7×1.4	62.1 黒色頁岩
723	〃	打製石斧	Ⅰ-B	7.5×5.1×1.9	黒色頁岩	808	〃	スクレイパー	Ⅰ-C	7.1×3.8×1.0	29.1 黒色頁岩
724	〃	スクレイパー	Ⅰ-B	6.9×3.1×1.3	黒色頁岩	809	〃	打製石斧	Ⅰ	14.5×5.0×1.6	125.4 黒色頁岩
725	〃	〃	Ⅰ-B	6.7×4.3×1.0	黒色頁岩	810	〃	礫	—	12.6×2.9×1.6	62.8 黒色頁岩
726	〃	〃	Ⅰ-D	4.9×4.7×0.7	黒色頁岩	811	〃	スクレイパー	Ⅰ-B	7.5×5.0×1.4	60.6 黒色頁岩
727	〃	〃	Ⅱ-A	6.8×3.3×1.3	黒色頁岩	812	〃	打製石斧	Ⅱ-A	7.8×7.0×1.5	47.5 黒色頁岩
728	〃	〃	Ⅰ-B	5.3×3.7×0.8	黒色頁岩	813	〃	〃	Ⅱ-A	8.6×5.6×1.9	86.9 黒色頁岩
729	〃	〃	Ⅰ-B	3.2×1.9×0.6	黒色頁岩	814	〃	〃	Ⅰ	11.0×4.2×1.5	92.9 黒色頁岩
730	〃	石 錐	Ⅲ	3.9×2.8×0.6	黒色頁岩	815	〃	〃	Ⅱ-B	10.9×6.1×2.0	107.8 黒色頁岩
731	〃	スクレイパー	Ⅱ-B	4.0×2.5×0.8	黒色頁岩	816	〃	石 匙	Ⅰ-C	6.2×3.9×0.6	16.4 黒色頁岩
732	〃	〃	Ⅰ-B	5.9×4.9×1.5	黒色頁岩	817	〃	打製石斧	Ⅱ-A	9.0×5.4×2.7	111.5 黒色頁岩
733	〃	〃	Ⅰ-B	6.4×5.1×2.2	黒色頁岩	818	〃	〃	—	10.0×5.8×1.8	97.4 黒色頁岩
734	〃	〃	Ⅰ-B	8.2×3.6×1.9	黒色頁岩	819	〃	打製石斧	Ⅱ-A	8.2×4.7×1.7	66.0 黒色頁岩
735	〃	〃	Ⅰ-B	10.0×7.3×2.5	黒色頁岩	820	〃	〃	Ⅰ	10.4×4.9×1.2	71.4 黒色頁岩
736	〃	〃	Ⅰ-B	7.8×4.6×1.0	黒色頁岩	821	〃	〃	Ⅱ-B	9.0×4.8×1.7	59.9 黒色頁岩
737	〃	〃	Ⅰ-A	6.1×5.6×1.3	黒色頁岩	822	〃	〃	Ⅱ-A	6.8×5.0×0.9	33.9 黒色頁岩
738	〃	〃	Ⅱ-A	8.1×4.8×1.6	黒色頁岩	823	〃	打製石斧	Ⅰ	7.5×4.2×1.4	54.0 黒色頁岩
739	〃	〃	Ⅱ-A	5.5×3.8×1.0	黒色頁岩	824	〃	〃	Ⅱ-A	8.1×4.9×1.6	45.4 黒色頁岩
740	〃	〃	Ⅱ-B	6.4×3.4×1.1	黒色頁岩	825	〃	〃	Ⅱ-A	6.8×4.2×1.8	42.4 黒色頁岩
741	〃	〃	Ⅰ-A	9.5×5.8×1.2	黒色頁岩	826	〃	〃	Ⅱ-A	6.9×4.4×1.3	42.0 黒色頁岩
742	〃	〃	Ⅱ-B	5.5×3.0×1.1	珪質燧石	827	〃	スクレイパー	Ⅰ-D	7.3×3.8×1.2	30.3 黒色頁岩
743	〃	〃	Ⅰ-B	5.3×3.9×1.3	黒色頁岩	828	〃	〃	Ⅰ-A	5.1×3.0×0.8	13.9 黒色頁岩
744	〃	〃	Ⅰ-B	7.7×4.6×1.7	黒色頁岩	829	〃	打製石斧	Ⅱ-A	7.6×3.4×1.5	43.7 黒色頁岩
745	〃	〃	Ⅰ-B	8.2×3.0×1.0	黒色頁岩	830	〃	石 錐	Ⅱ-A	3.1×2.0×1.0	3.8 珪質燧石
746	〃	〃	Ⅱ-C	8.3×4.1×1.7	黒色頁岩	831	〃	打製石斧	Ⅰ	9.1×4.6×1.6	69.7 黒色頁岩
747	〃	〃	—	6.5×2.2×1.1	黒色頁岩	832	〃	〃	Ⅰ	10.4×6.3×1.4	88.4 黒色頁岩
748	〃	〃	Ⅰ-D	3.9×3.3×1.2	黒色頁岩	833	〃	〃	Ⅰ	6.7×4.2×1.7	40.5 黒色頁岩
749	〃	〃	Ⅱ-B	7.2×4.6×1.3	黒色頁岩	834	〃	〃	Ⅰ	8.2×4.7×1.3	48.5 黒色頁岩
750	〃	〃	Ⅰ-B	6.6×3.6×1.2	黒色頁岩	835	〃	〃	Ⅰ	8.8×4.9×1.1	53.5 黒色頁岩
751	〃	〃	Ⅰ-A	4.6×4.5×0.8	黒色頁岩	836	〃	尖頭器	—	8.5×4.1×1.2	42.1 黒色頁岩
752	〃	〃	Ⅰ-B	6.8×4.5×1.6	黒色頁岩	837	〃	打製石斧	—	8.7×6.5×2.2	49.5 黒色頁岩
753	〃	〃	Ⅱ-C	9.7×5.5×2.3	黒色頁岩	838	〃	スクレイパー	Ⅱ-C	8.3×5.3×1.3	67.2 黒色頁岩
754	〃	打製石斧	Ⅰ	9.9×4.1×1.5	黒色頁岩	839	〃	〃	Ⅰ-B	9.3×4.4×1.7	56.7 黒色頁岩
755	〃	〃	Ⅰ	10.6×4.5×2.5	黒色頁岩	840	〃	打製石斧	Ⅱ-B	5.9×5.2×1.0	35.0 黒色頁岩
756	〃	〃	Ⅰ	10.0×3.7×2.0	黒色頁岩	841	〃	スクレイパー	Ⅲ	7.2×4.9×1.0	32.2 黒色頁岩
757	〃	〃	Ⅱ-A	6.6×4.8×1.1	黒色頁岩	842	〃	〃	Ⅰ-B	10.7×6.3×2.4	123.2 黒色頁岩
758	〃	〃	Ⅱ-A	6.9×4.8×1.3	黒色頁岩	843	〃	〃	Ⅰ-D	6.6×5.3×1.5	55.5 黒色頁岩
759	〃	スクレイパー	Ⅰ-A	6.7×4.6×1.3	黒色頁岩	844	〃	〃	Ⅰ-B	6.5×3.4×1.0	21.0 黒色頁岩
760	〃	〃	Ⅰ-A	7.9×3.8×1.5	黒色頁岩	845	〃	〃	Ⅰ-D	6.6×4.1×1.3	27.4 黒色頁岩
761	〃	打製石斧	Ⅰ	10.1×4.1×1.6	点紋頁岩	846	〃	〃	Ⅰ-D	5.1×4.2×1.2	35.9 黒色頁岩
762	〃	スクレイパー	Ⅰ-A	6.2×4.5×1.0	黒色頁岩	847	〃	〃	Ⅰ-D	5.9×4.9×1.3	39.8 黒色頁岩
763	〃	打製石斧	Ⅰ-A	5.6×3.5×1.0	黒色頁岩	848	〃	〃	Ⅰ-C	5.1×2.2×0.7	6.3 黒色頁岩
764	〃	スクレイパー	Ⅱ-B	7.9×4.2×1.3	黒色頁岩	849	〃	〃	Ⅰ-C	6.9×3.8×1.5	30.6 黒色頁岩
765	〃	〃	Ⅱ-A	5.6×4.6×1.4	黒色頁岩	850	〃	スクレイパー	Ⅰ-B	8.2×4.0×1.5	45.6 黒色頁岩

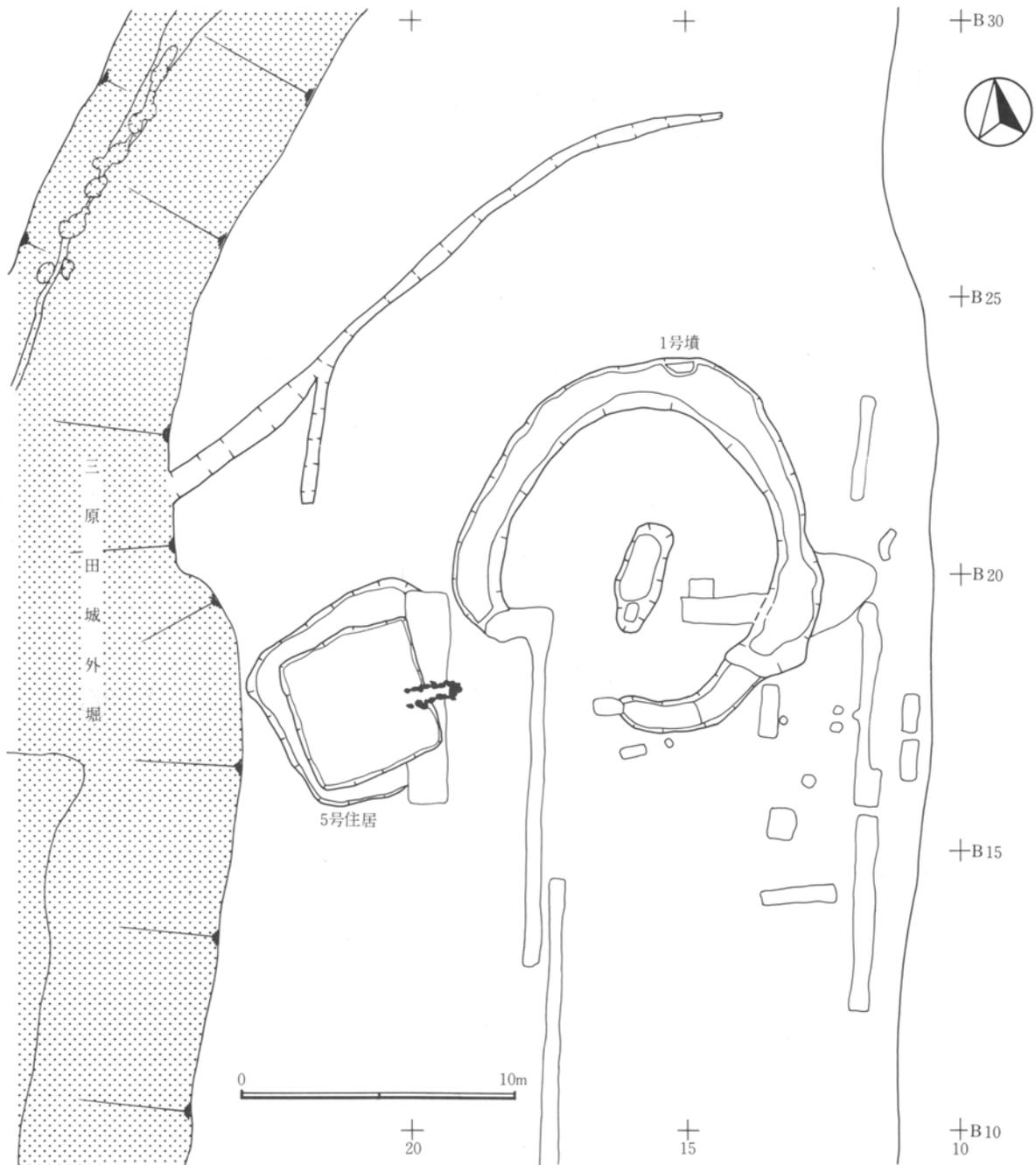
第4節 遺構と遺物

番号	出土位置	種類	分類	計測値(cm・g)		石材	番号	出土位置	種類	分類	計測値(cm・g)		石材
851	遺構外	スクレイパー	I-B	7.7×4.7×1.3	41.6	黒色頁岩	855	遺構外	スクレイパー	I-C	4.4×3.0×0.8	12.2	黒色頁岩
852	〃	〃	III	4.4×2.8×0.8	10.2	黒色頁岩	856	〃	〃	II-B	12.4×6.1×1.6	102.7	黒色頁岩
853	〃	〃	II-B	6.9×4.4×1.0	37.7	黒色頁岩	857	〃	打製石斧	—	7.9×8.0×2.2	146.2	黒色頁岩
854	〃	〃	II-B	7.4×4.3×1.1	28.9	黒色頁岩							

表7 出土石器器種別一覧表

器種	出土点数	器種	出土点数
石 鎌	144	凹 石	10
石 槍	3	敲 石	6
石 錐	22	石 皿	31
尖 頭 器	7	台 石	6
石 匙	67	ピエスエスキーユ	4
スクレイパー	288	管 玉	2
石 篋	1	块状耳飾	4
打製石斧	135	玉 篋	1
磨製石斧	7	礫 器	17
磨 石	100	剥片石器	1
垂飾品	1	合 計	857

4. 古墳時代



第144図 古墳時代の遺構

本遺跡内における古墳時代の遺構は住居址1軒（5号住居址）と古墳（1号墳）の周堀を1基検出した。両者は調査区の東よりに近接して位置しており、F P（二ツ岳降下軽石）の面を掘り込んで構築している。住居址、古墳共に覆土中には多量のF P 軽石を含んだ状況を示していた。5号住居址はかなり大形で、東側に石組の竈をもつ。古墳については円墳で、盛土部分は削られており東側部分は近世の耕作溝や墓坑によってかなり攪乱された状況を呈していた。主体部も残ってはいなかった。周堀のみ検出であったが、南側部分で須恵器の甕、長頸壺、蓋などが堀の最上層からまとまって出土している。また古墳平夷時に掘り込まれたと思われる土壌がほぼ中央に検出されており、中から古墳の副葬品であったと思われる直刀が石と共に投げ

込まれた状況で出土している。

以上の他には古墳時代の遺構は無く、遺物に関しても三原田城址の外堀中より若干の土器片が出土したのみで、他にはほとんど見られなかった。

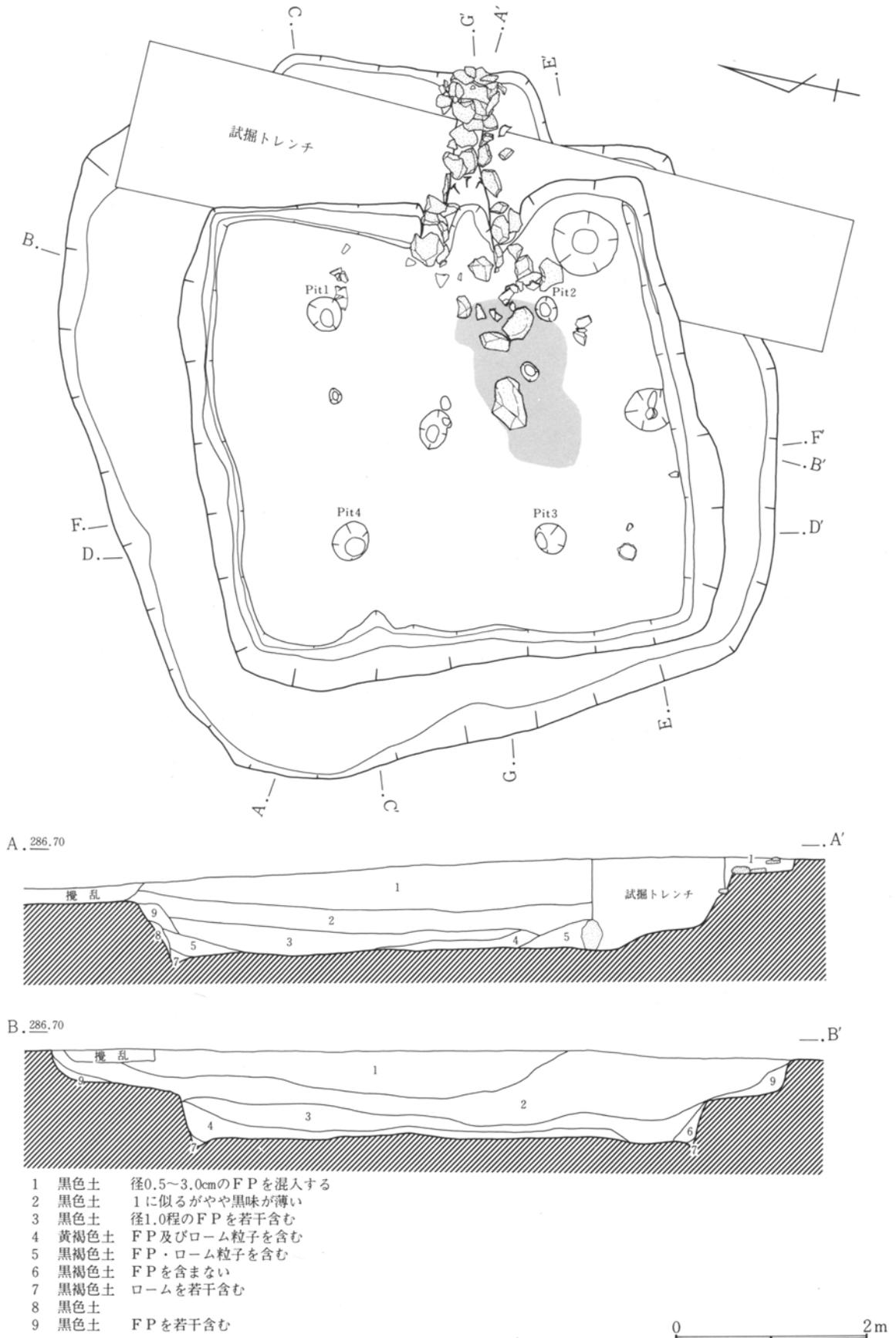


古墳時代の遺構

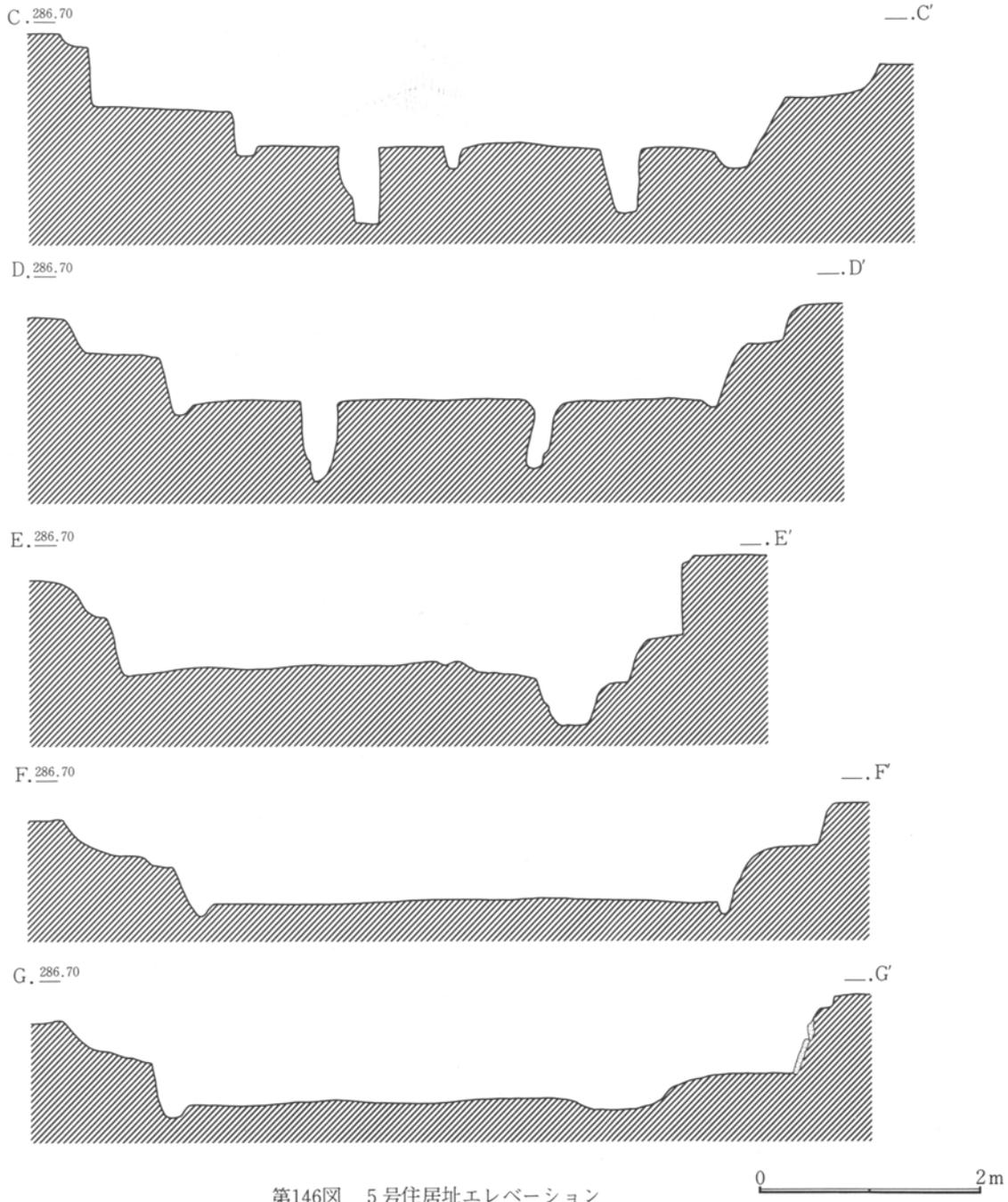
(1) 住居址

5号住居址 (第145図)

調査区中央やや東より、19～22-B16～19グリッドに位置する。東側約1m程離れて1号墳が在る。本住居址は、試掘調査時に竈部分を検出し、1部調査を行っている。住居址覆土の大部分はF Pの混入土で、上層程その量が多く含まれる状況を呈していた。住居址の平面形状はほぼ正方形を呈しており、規模は南北壁長5.2×東西壁長5.0mで深さは70cmである。住居の周囲には幅20～60cmのテラス状の中段面が巡り、その規模は7.0×7.0mである。最上段面から床面までの高さは1m程もある。各壁の立ち上がりはほぼ垂直で、壁下に沿って幅20cm、深さ10cmの浅い壁溝が1周する。主軸方向はN-73°-Eである。床面の状況はほとんど平坦を為し、かなり踏み締められているが中央部がややくぼんでいる。柱穴は住居の対角線上にPit 1～Pit 4の4本が検出されており、それぞれの規模はPit 1が径32cm、深さ18cm、Pit 2が径24cm、深さ71cm、Pit 3が径38cm、深さ56cm、Pit 4が径40cm、深さ71cmでいずれも口の部分が広く、底がやや細くなっている。また、南東隅には径34cm、深さ42cmの鍋底状の貯蔵穴が見られる。



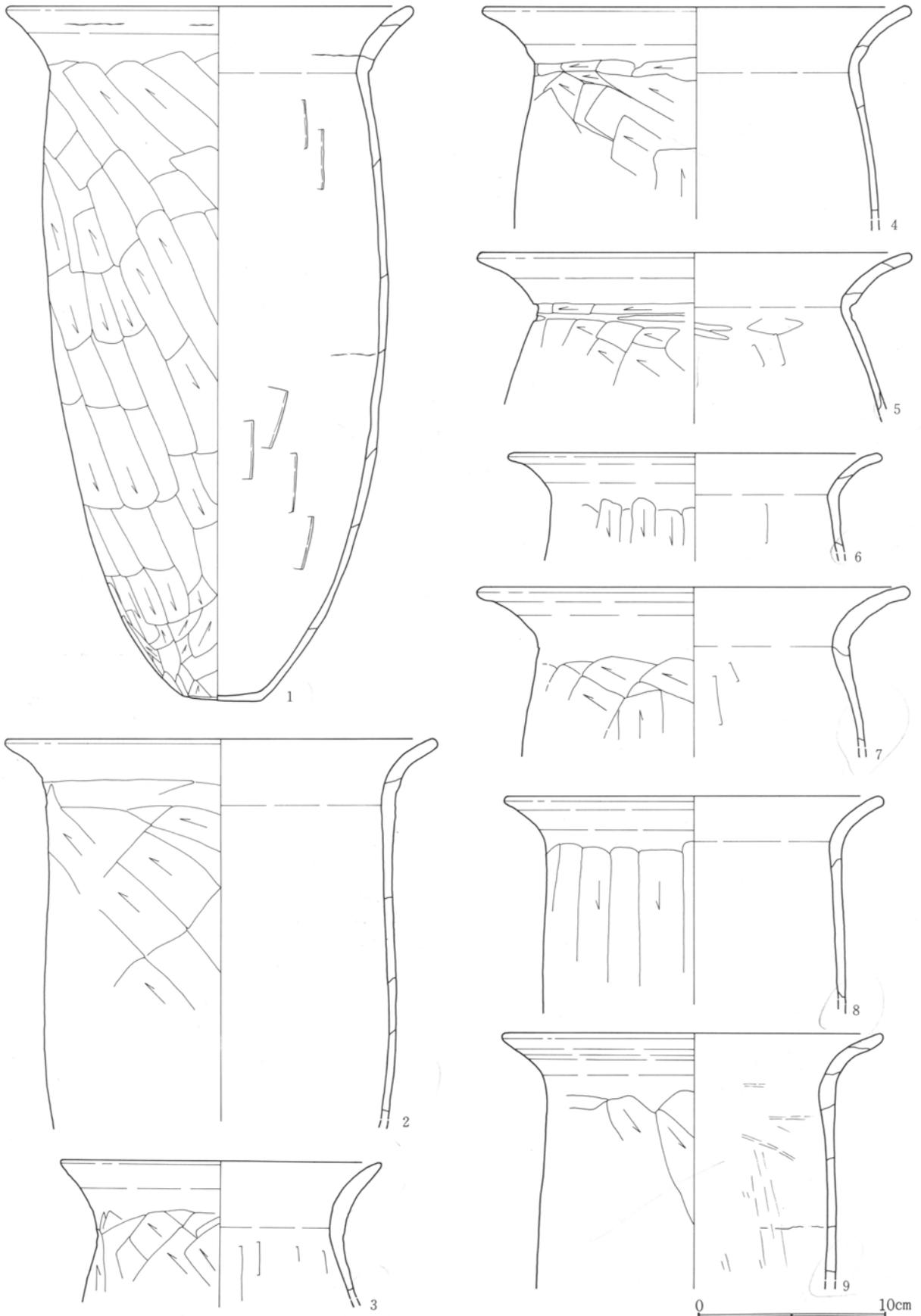
第145図 5号住居址



第146図 5号住居址エレベーション

竈は石組で東壁のほぼ中央に築かれている。焚き口幅62cm、全長190cmで、ローム地山を斜めに掘り込んで作っている。両袖、および煙道両側に板状の輝石安山岩を立てるように並び連ねている。先端の煙り出し部分には上から天井を作るような形で石が検出されている。竈前面部分に多量の焼土を検出しており、さらに袖部を作っていたと思われる石などが散乱した状態で、人為的に壊した可能性が窺える。竈の火床面、および側面には、焼土はほとんど認められず、極めて短期の使用であったと考えられる。

出土遺物（第147～149図）は完形品は少なく、竈内および前面より、長胴甕が壊れた状態で、また南壁下に小形壺が床面のやや凹んだ場所に、須恵器甕の底部破片が南西隅に置かれた状態で出土している。貯蔵穴内から遺物の出土は無かった。また覆土中からは土師器甕、および坏の破片が多く出土している。



第147図 5号住居址出土土器(1)